ること。

えんりょ[遠慮](名) ㊀遠いきさきのおもんばかり。深い考。㊁人に對して控目であること。㊂人に對して謹慎すること。㊃江戸時代に、身分ある者が微罪により、又は他人の罪に坐して謹慎の意を表し、門を閉ちて籠居したこと。—**なければ近憂あり**(句)(論語衛靈公篇の句)目前の安きに慣れて、遠き將來の事を考へなければ、必ず目前に迫る心配が生ずる。

えんりょう[炎涼](名) ㊀あつさと涼しさと。㊁勢力の榮えると衰へると。

えんりょうかん[延遼館](名) 東京濱離宮の北門にあつた御築建されたもの。

えんりん[園林](名) 園の林。「あひ。姻戚。

えんるい[縁類](名) 結婚・緣組によるつづき間の親戚。

えんるい[鹽類](名)【化】えん。—**せん**[鹽類泉](名)【地】食鹽・硫酸ナトリウム・硫酸マグネシウム等の鹽類を含んだ鑛泉。群馬縣の伊香保・箱根の塔ノ澤・静岡の熱海等の鑛泉は之に屬する。

えんれい[艶麗](名) なまめかしく美しいこと。

えんれい[延齡](名) 壽命を延ばすこと。—**そう**[延齡草](名)【植】百合科の多年生草本。溪根・壺は單一で直立し、葉は廣卵形で三葉輪生する。五月頃、帶紫色の花を開く。—**たん**[延齡丹](名)【醫】山城の

〔草齡延〕

えんれい[婉麗](名) しとやかで美しいこと。

えんろ[沿路](名) みちべり。沿道。「ま。

えんろ[圓顱](名) まるいあたま。坊主あた

えんろ[遠路](名) 遠い路。

えんろう[煙浪](名) えんぱ(煙波)。

えんわさい[燕窩菜](名) えんさ(燕巢)。

お (を)

お ㊀五十音圖「あ行」の第五位に位し、お段の韻となる。㊁「あ」と「う」の中間母音。「う」よりも脣を稍、廣く舌の後部を稍、低くして發する。㊂於の草體。

お[助詞] ㊀名詞に於いて他動詞の目的なあらはす語。「物ー買ふ。」㊁自動詞の動作の行はれる場所を表はす語。「家ー去る。」㊂事の意外なる意義をあらはす語。「白露の色は一つーいかにして秋の木の葉をちぢにそめらん。」㊃語調を整へる無意義の語。「八重垣作るその八重垣ー」「見つつ行かんー」

お[感] 驚いた時の發聲。「の意を表はす語。

お[御](接頭)(おほこの約)或語に冠して尊敬・鄭重

お[阿・於](接頭) 婦人の名に冠する語。

お[唯](感) 應答の聲。はい。

お[男](名) ㊀をとこ。男子。なのこ。

お[夫](名) ㊀をとこ。良人。㊁一人前の男。

お[牡・雄](名) ㊀動物では雄子を有するもの。植物では雄蕊のみを有するもの。㊁をとこ。(古語)

お[麻・苧](名)【植】あさ。からむし。㊁あさ。からむしの葉皮纖維からつくった絲。

お[緒](名) ㊀細長い線條物。絲又は紐など。㊁履物にすげて足にかける紐。㊂樂器に張ってかきならす絲。㊃物事の長く續くもの。

お[尾](名) ㊀動鳥獸・蟲魚等の後端から長く伸び出たもの。しっぽ。尻尾。㊁山の裾の延びた處。㊂後方に長く延びた部分。をはり。すゑ。「琵

お[峰・丘](名) ㊀山の高い所。㊁(おか)(岡)(古

お(感) 感歎の聲。やっ。よ。

お[小](接頭) ㊀細かく小さい意をあらはす語。

おあいを[汚埃](名) けがれたあくた。

おあいを[汚穢](名) 糞尿。けがれ。をわい。

おあいそう[御愛想](名) ㊀飲食店などで客に出す勘定書。㊁人をもてなすに情愛あること。

おあいにくさま[御生憎様](名)「あいにく」の鄭重語。おきのどくさま。

おあかし[御明](名) 燈火。ちふそく。(女房詞)

おあさを[雄麻](名)【植】麻の雄草で、果實を生ぜぬもの。

おあし[御足](名) ㊀足の敬稱。㊁錢の異稱。

オアシス(Oasis)(名) 沙漠中で水が湧き、樹木の商の休息所となる。沙漠中の豐饒な土地。沙漠樣斷の隊

おあずけにん[御預人](名) 大名・旗本などの罪があつて、他の諸大名などに預けられてゐるひと。

おあわせ[緒合](名)【音】琴・琵琶等絃樂器の

おいを[唯](感) ㊀(おい)(唯)。㊁呼びかけの聲。—

おい[感](同聲又は目下のものに對していふ語) ㊀呼び掛ける聲。㊁呼びかけられて答へる聲。㊂やや驚いた時に發する聲。

おい[老](名) ㊀おいること。年が寄ること。年積り老人の頑固で、思ふことをおし通さうとすること。

—の方人(句) 年老いた人を その道の無險者として貴ぶこと。又、その老人。**—の繰言**(句) 老人が同じ事を幾度も繰返していふこと。**—の坂**(句) 辛苦を重ねて老年に至るを、坂を越えるに譬へていふ。**—の波**(句) ㊀年老いて顔に皺の寄ることを波に譬へていふ。㊁年の寄るのを波の寄せるに譬へていふ。**—の寝覚**(句) 老人がよく夜中に目覺め物を見ること。**—の餞**(句) 老人のひがんだ目で餘生を送ること。**—を養ふ**(句) 老齢の生活を送る。又、老人を手厚く扱ふ。

おいおい[笈](名) 行脚僧・修驗者などが、佛具・衣服・食器などを入れて背に負ふ箱で、葛籠(つづら)に似、四隅に脚があつて開閉すべき戸を設けたもの。

〔笈〕

おいおい[追](名) ㊀追ふこと。㊁追錢(おひぜに)の略。

おいおい[負](名) ㊀背に負ふこと。㊁ひきうけること。㊂備金。

おいおい[朔](名) 己の兄弟・姉妹の生んだ男の子。

おいいず[生出ず](自動・ダ四下一)(すでにせいづる)(生出づ) ㊀生まれ出る。㊁生えて芽を出す。

おいいだす[追出す](他動・サ四)(おいだすて)(おいだせ)(おいだし) 追ひかけて追ひ出す。

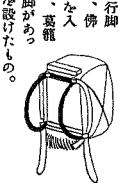
おいいれ[老入](名) 年老いたこと。又、其の境遇。

おいうぐいす[老鶯](名)【動】晩春から夏にかけて鳴く鶯。「つるげうき。

おいうち[追撃・追討](名) おひうつこと。

おいうつ[追撃・追討つ](他動・タ四) 逃げる敵を追ひかけて撃つ。

おいえ[御家](名) ㊀貴人の家又は他人の家の敬稱。㊁他人の妻の敬稱。奥様。—**きょうげん**[御家狂言](名) 御家騒動の狂言。—**そうどう**[御家騒動](名) 大名などの一家で、寵臣・愛妾などが起こす騒動。加賀騒動・黒田騒動などの類。—**ほおはい**[御家頬](名) 兜の面頬(ほほあて)の鐵のないやうに滑かにつくったもの。—**もの**[御家物](名) ㊀(文)御家騒動をしくんだ小說。㊁又は狂言。㊂俳優などの得意として演ずる藝。—**りゅう**[御家流](名) 戸時代の公文書は此の書體に限られた。和樣書體の一。豊岡法親王の筆法を傳へたもの。江



〔流家御〕

おいおい[追追](副) しだいしだい。だんだんに。順序を追つて。

おいおいし〔老老し〕(形シク)老人らしい。年老いたさまである。(古語)

おいおくる〔追後る〕(他動、ラ下二)追かけておくれる。

おいおとし〔追落〕(名)㊀追い落すこと。㊁(おいはき)。㊂園基で、自分の石が相手に追はれて、到底活路のない二石。

おいおとす〔追落す〕(他動、サ四)㊀追い拂ふ。㊁追ひかけて奪ひとる。路上で強奪する。㊂城兵を追ひはらって、其の城をうばひ取る。

おいかがまる〔老屈まる〕(自動、ラ四)老いて腰がかがむ。年老いて衰へる。

おいかく〔追掛く〕(他動、カ下二)あとから追ふ。追跡する。

おいかけ〔老懸・縋〕(名)昔、武官の冠の左右に著けた飾で、毛で作り、菊花を半切にした形のもの。ほほすげ。あげ。

〔懸　老〕

おいかけ〔追懸〕(名)客の意中を探る手段として、知らぬことを知ったやうに言って返事を聞き出す謀略。

おいかける〔追掛ける・追掛け懸る〕(他動、カ下一)(おいかく)の口語。

おいかさぬ〔負累ぬ〕(他動、ナ下二)借金を重ねる。負債を増す。

おいかぜ〔追風〕(名)㊀うしろから吹いて來る風。㊁舟を吹きおくる風。おひて。㊂著物の動くによって起こる風。

おいがね〔追金〕(名)(おいせん)(追銭)。追加の金。

おいがる〔老呼る〕(自動、ラ下二)年老いて聲が嗄れる。(古語)

おいがれ〔老嗄〕(名)年老いてしゃがれ聲となること。

おいかわ〔追川〕(名)【動】はえ(蝿)の雄。

おいき〔老木〕(名)古木。老木。老樹。年を積んで幹太く、枝の垂れさがった木。**—に花**(句)衰へたものが、再び榮えること。

おいぎ〔負木〕(名)擬寵のなかった慶長以前に、婦女が人に負はれる時に腰をかけた木。

おいきり〔追斬〕(名)追ひかけてうしろから斬ること。

おいくさ〔男軍〕(名)男子で編成する軍。なし。

おいくずるる〔老頽る〕(自動、ラ下二)年寄って元氣がなくなる。(古語)

おいくずす〔追崩す〕(他動、サ四)追ひ撃ってつきやぶる。おひかくしてやぶる。

おいくちる〔老朽ちる〕(自動、タ上二)(おいくつ)の日語。

おいくつ〔老朽つ〕(自動、タ上二)「しまる。おゆる。年とって役に立たなくなる。

おいぐむ〔老いぐむ〕(自動、マ四)と次に後、繰る。

おいくる〔追繰る〕(他動、ラ四)順

オイケン[Rudolf Eucken](名)【人】ドイツの哲學者。ゲッチンゲン大學に學び、伯林・バーゼル・イエナの諸大學教授に歴任した。その哲學は反唯物論的な新理想主義哲學であった。其の著に現代の精神的思潮」「人生の價値及び意義」等がある。(一八四六—一九一六)

おいご〔老子〕(名)老年になって生んだ子。とし子。(古語)

おいごえ〔追肥〕(名)【農】前に一度肥料を施し、更にその補助として肥料を施すこと。又、其の肥料。

おいごころ〔老心地〕(名)おいごころ。(古語)

おいごころ〔老心〕(名)㊀老人の涙もろい心。㊁老人のかたくなな心。

おいこす〔追越す〕(他動、サ四)あとから進んで來て、前のものを追ひぬく。

おいこす〔追越す〕(他動、サ四)人を背負って川を渡る。「老女たち。(古語)

おいごたち〔老御達〕(名)年老いた女房たち。

おいこみ〔老込〕(名)おいて衰へたこと。

おいこみ〔追込〕(名)㊀追ひ込むこと。㊁多くの客を一間に入れること。㊂下等な密淫賣婦。㊃(おいこみば)。**—ば**追込場(名)芝居其の他の興行場で、人數を限らずに、次次に追ひ込む場所。おほいりば。**—ひょうだい**……〔追込標題〕(名)新聞・雜誌などで、記事と其の記事の標題とを別行にせずに、すぐに記事をかき始める時の標題。

おいこむ〔追込む〕(他動、マ四)㊀追ひはらひ。㊁追跡して内に入りこませる。

おいこむ〔追籠む〕(他動、マ下二)㊀罪人などをおしこめる。㊁病を内攻させる。

おいこめる〔追籠める〕(他動、マ下二)(おいこむ)の追籠むの口語。

おいこる〔生凝る〕(自動、ラ四)おびしげる。繁茂する。(古語)

おいさかな〔追肴〕(名)追加して出す肴。

おいさがり〔生下〕(名)女の髪の切端のさがった。「年になって榮える。(古語)

おいさかる〔老盛る〕(自動、ラ四)晩

おいさき〔生先〕(名)行末。將來。

おいさぶ〔老進ぶ〕(自動、バ上二)年を積んで老衰の度がかさなる。老人らしくなる。(古語)

おいさまに……〔追様に〕(副)あとにつづいて。「て。あとを追うって。つづいて。

おいさらぼう〔甘し〕(形シク)うまい。美味である。**—い**〔甘しい〕(形)「おいし」の口語。

おいし〔追敷〕(名)【經】取引所で、相場の變動に際し、損方の賣買當事者から、本證拠金の不足額を追加徴收する證拠金。**—ぜめ**〔追敷攻〕(名)【經】取引所で、相場の買占又は賣崩から生ずる違約の損害を防止する爲に、追證拠金を徴收すること。

おいしき〔追敷〕(名)【經】取引所で、相場の變動に際し、損方の賣買當事者から、本證拠金の不足額を追加徴收する證拠金。**—ぜめ**〔追敷攻〕(名)【經】取引所で、相場の買占又は賣崩から生ずる違約の損害を防止する爲に、追證拠金を徴收すること。

おいしく〔生敷く〕(自動、カ四)生きつづける。よく繁る。(古語)「ひつく。(古語)

おいしげる〔追及く〕(自動、カ四)おいしげる。(古語)

おいした〔老舌〕(名)㊀年よりの齒が落ちてもいふ時に舌のあらはれること。㊁老人の議論がましく言ひ立てること。(以上古語)

おいしょ(感)注意する時の掛聲。「ん)。

おいしょう〔追證〕(名)【經】(おいしょうこき)。

おいしょうこきん……〔追證據金〕(名)【經】(おいしき)。

おいしらく〔老白く〕(自動、カ下二)年老いて色が白くなる。(古語)

おいしらむ〔老白む〕(自動、マ四)年よって白髪になる。(古語)

おいしる〔老痴る〕(自動、ラ下二)老いておろかになる。おいぼれる。おいしらふ。(古語)「年とってぼける。おいしる。(古語)

おいしろう〔老痴ふ〕(自動、ハ四)

おいすえ〔生末〕(名)(おいさき)。(古語)

おいすがる〔追縋る〕(自動、ラ四)㊀後から追ひついてすがる。㊁ことわられたのを無理に頼む。

おいずき〔老月〕(名)陰曆十四日以後の月。

おいすぐ〔老ずく〕(自動、カ四)㊀老人になる。㊁としよりめく。(古語)

おいすごう〔追次ふ〕(自動、ハ四)あとを追ふ。おひつぐ。(古語)

おいすつ〔追棄つ〕(他動、タ下二)追拂うてふりすてる。

おいすと〔老苞〕(名)老人のみやげ。(古語)

おいすな〔追綱〕(名)大名の曳馬に用ひる紫色の組紐の太い綱。

おいすり〔負籠〕(名)背に負ふ籠。笈。

おいすり〔笈搥〕(名)巡禮者などの着物の上に著る袖無羽織に似たうすい白衣。笈を負ふ時、背の擦れるのを防ぐ爲に著けたのに基づくといふ。

おいすり〔追刷〕(名)豫定の數では不足な爲に、引續き多く印刷すること。又、その印刷物。ましすり。おっかすり。

おいずる……【笈摺】(名)(おいすり)。

おいせまる……【追迫る】(自動、ラ四)おひかけて近づく。

おいせむ……【追迫む】(自動、マ下二)おひかけてせめて行く。

おいせめる……【追迫める】(他動、マ下一)(おいせむ)の口語。

おいせん……【追銭】(名)一旦拂つた上に、更に餘分に支拂ふ錢。追加の金錢。

おいそけもの……(名)おいぼれて役に立たぬもの。

おいそだち……【老育】(名)そだち。おひたち。

おいそのもり……【老蘇森、老曾森】(名)【地】滋賀縣蒲生郡安土村の東南にある森。(歌枕)

おいそや……(副)負征矢(名)箙にさして負つた征矢。

おいそれと……(副)考へすに。ただちに。

おいそわる……【生添はる】(自動、ラ四)成長してたけが高くなる。(古語)

おいた……(名)いたづら。わるさ。(婦人語)

おいた……(名)お板(名)かまぼこ。蒲鉾。(婦人語)

おいだき……【追炊】(名)飯が不足した時、更に炊くこと。

おいだし……【追出】(名)❶おひだすこと。❷興行物の終つた時の金圓の太鼓。❸【數】Elimination)二箇以上の方程式から、未知數の一部を含まぬ方程式を作ること。**—ぐすり**【追出藥】(名)【藥】病氣の内攻を防ぐ藥。

おいだす……【追出す】(他動、サ四)❶外へ追ひやる。❷追出藥で、病毒を外に發散させる。

おいたち……【生立】(名)❶生育。❷生立つこと。そだち。❸經歷。履歴。

おいたつ……【生立つ】(自動、タ四)次第に成長して行く。

おいたつ……【追立つ】(他動、タ下二)追ひ拂ふ。追ひやる。追ひ出す。

おいたて……【追立】(名)❶おひたてること。❷「からすき」の後方に柄のやうになつて出た所。

おいたてる……【追立てる】(他動、タ下一)(おいたつ)の口語。

おいたむ……【生留む】(他動、マ下二)生じたまま殘しておく。おひとむ。(古語)

おいちらす……【追散らす】(他動、サ四)おひ立てて散亂させる。

おいつかい……【追使、驅使】(名)おひつかふこと。又、おひつかはれる人。

おいつき……【追附、追著】(名)おひつくこと。**—くび**【追附首】(名)逃げる敵に追ひついて斬りとつた首。

おいつぎ……【追繼、追次】(名)あとから加へること。

おいつく……【追附く、追著く】(自動、カ四)追ひかけて目的物のある所に到著する。

おいつぐ……【追繼ぐ】(他動、ガ四)あとからつぎ足す。

おいつこう……【追使ふ、驅使ふ】(他動、ハ四)奴隸のやうにおひまはしてつかふ。

おいつむ……【追詰む】(他動、マ下二)逃げる所しないまでに追ひせまる。

おいつめる……【追詰める】(他動、マ下一)(おいつむ)の口語。

おいて……【於いて】(接續)(おきての音便)にて。

おいて……【追手】(名)逃げるものを追ひかけて行く人。敵兵や罪人などを追ひかける人。おって。

おいて……【御出】(名)「出づ」「往く」「來る」「居る」の敬語。**—おいで**【御出御出】(名)てまねぎで人を招くこと。**—ぶぎょう**【御出奉行】(名)鎌倉・室町兩幕府の職名。將軍出行の際、屈從の交名(ぎょうめい)を定め、路次の行列を整へる等の事を掌つた職。

おいてきぼり……(名)後れた者を見捨てて去ること。

おいとおと……(名)おしり。(關西の方言)

おいとおとのう……【生調ふ】(自動、ハ四)生長して體格が十分に發達する。(古語)

おいとおとのおる……【生調ほる】(自動、ラ四)(おいとおとのう)の(古語)。

おいとど、む……【追留む】(他動、マ下二)追ひかけてひきとめる。

おいとむ……【生留む】(他動、マ下二)(おいとど、む)。

おいとり……【追留】(名)追ひつめてとまらせる。

おいとりがり……【追鳥狩】(名)雉・鶉などを勢子等に追ひ立てさせて、馬上から弓・鐵で狩すること。

おいなおり……【生直】(名)生直ること。(古語)

おいなおる……【生直る】(自動、ラ四)おちぶれた人が好運に向かふ。改まつてよくなる。(古語)

おいなみ……【老波】(名)おいのなみ。(「老い」の條を參)

おいなみに……【老次に】(副)老い行くに從つて。年のよるままに。(古語)

おいなむ……【老並む】(自動、マ四)老い物を並べて荷なふ。(古語)

おいなむ……【老並む】(他動、マ下二)負並む。

おいなる……【生成る】(自動、ラ四)生る。年寄る。(古語)

おいなる……【老成る】(自動、ラ四)老いる。(古語)

おいなわ……【追繩】(名)❶野馬を捕へるに用ひる繩。長さ三尋ばかりのもの。ばなれ。❷(おいなし)(追綱)。

おいなわ……【負繩】(名)物をしばつてせおふ爲の繩。

おいにがほる……【追逃す】(他動、サ四)❶追ひはらつて逃す。❷捕へようとしてにげられる。

おいにほる……【老に惚る】(自動、ラ下二)老いぼれる。ぼける。(古語)

おいぬく……【追抜く】(他動、カ四)(おいぬく)の(古語)。

おいねがい……【追願】(名)追加して願ふこと。

おいのく……【追退く】(他動、カ下二)追うて退かせる。追ひ拂ふ。

おいのぼる……【生上る】(自動、ラ四)生長して脊丈が高くなる。

おいのよ……【生世】(名)生ひ行く世。生きて行く此の世。現世。(古語)

おいのりぶぎょう……【御祈奉行】(名)鎌倉・室町兩幕府の職名。水旱・疾疫・妖災などの事ある時、陰陽家及佛家に命じて祈禱せしめた職。

おいはぎ……【追剝】(名)おひはぎこと。又、追剝する人、即ち盜賊。强盜。おひおとし。**—はら**【追剝原】(名)追剝の出る原。

おいはぐ……【追剝ぐ】(他動、ガ四)旅人などを途上におびやかして、衣服・財物をかすめとる。おひおとす。

おいはこ……【追羽子】(名)二人以上のものが、(他動、サ四)(おいはしらす)。

おいはしらす……【追剝ぐ】(他動、ガ四)旅人などを途上におびやかして、衣服・財物をかすめとる。おひおとす。

おいはつ……【追走らす】(他動、サ四)追ひ拂つて逃げ走らせる。

おいはなす……【追放す】(他動、サ四)❶追ひやる。❷放しまゝで自由にさせる。

おいはつ……【追放つ】(他動、タ四)追ひ出す。追ひやる。追ひ拂ふ。

おいはね……【追羽根】(名)(おいはこ)。

おいばむ……【老いばむ】(自動、マ四)老いたさまになる。(古語)

おいばら……【追腹】(名)昔、主君の死を傷むあまりに、臣下が主君の跡を追うて切腹したこと。殉死。

おいはらい……【追拂】(名)❶後から再び支拂ふこと。❷(法)支拂を免除され又は支拂義務の不明の爲に支拂はなかつたものが、後になつて支拂ふこと。

おいはらう……【追拂ふ】(他動、ハ四)追ひやる。追ひ出す。追ひ退ける。放逐する。

おいひがむ……【老僻む】(自動、マ四)ようよう心がひがむ。

おいひろがる……【生擴がる】(自

動、ラ四）多く生まれ出て數多くなる。

おいふす（おいふす）〔追伏す〕（他動、サ下二）追ひかけておさへふせる。追ひつめて逃げる所がないやうにする。

おいふせる（おいふせる）〔追伏せる〕（他動、サ下一）（おいふすの口語。）

おいぼくく（おいぼくく）〔老惚く・老耄く〕（自動、カ下二）おいぼれる。

おいぼる（おいぼる）〔老惚る・老耄る〕（自動、ラ下二）年老いて心が鈍くなる。老耄する。

おいぼれ（おいぼれ）〔老耄〕（名）おいぼれたこと。又、其人。

おいぼれる（おいぼれる）〔老惚れる・老耄れる〕（自動、ラ下一）おいぼるの口語。

おいまくる（おいまくる）〔追捲くる〕（他動、ラ四）烈しく追ひ走らせる。追ひ散らす。（古語）

おいまさり（おいまさり）〔生優〕（名）おひまさりこと。古成長するに從つて、みめかたちが美しくなつて行く。（古語）

おいまつ（おいまつ）〔老松〕（名）年月を經た松。（若松の對）

おいまどわす（おいまどわす）〔追惑はす〕（他動、サ四）追つて見失ふ。（古語）

おいまわし（おいまわし）〔追廻〕（名）❶おひまはすこと。❷四方に竹を立てて網を張り、魚を追ひまはして捕へる漁具。❸芝居で相手が逃げるのを追廻す時、太鼓と三味線で行ふ囃子。❹勝棊で、敵の王將などをおひまはすこと。❺おひつかふ使男。

おいまわす（おいまわす）〔追廻す〕（他動、サ四）❶あちらこちらと追ひかける。❷追使ふ。

おいむしゃ（おいむしゃ）〔老武者〕（名）❶年老いた武者。（若武者の對）❷老練な武者。

おいめ（おいめ）〔負目〕（名）かり。借金。負債。

おいめ（おいめ）〔追目〕（名）頻りに負ける運命にあることを。まけめになること。

おいもの（おいもの）〔負物〕（名）❶背に負ふもの。❷借金。

おいやみ（おいやみ）〔老病〕（名）老衰が原因で起つた病。

おいやる（おいやる）〔追遣る〕（名）（他動、ラ四）おひはらふ。おひ出す。せき立てて去らせる。

おいゆく（おいゆく）〔老行く〕（自動、カ四）次第に年が寄つて行く。

おいゆく（おいゆく）〔追行く〕（他動、カ四）追ひかけて行く。あとを追つて行く。

おいゆく（おいゆく）〔生行く〕（自動、カ四）おひたつ。生育する。

おいよる（おいよる）〔追倚る〕（自動、ラ四）從ひよる。よりつく。たよる。よりすがる。

おいら（おいら）〔己等〕（代）おれ。われら。

おいらか（おいらか）〔老いらく〕（名）（「老ゆ」の連體形の延）老いゆくこと。（古語）

おいらせがわ（おいらせがわ）〔奥入瀬川〕（名）【地】青森縣・秋田縣の境の十和田湖から發し、三本木野の南方を走り、八戸の北方で太平洋に注ぐ。流は緩かで全長凡そ五〇粁。

おいらん（おいらん）〔花魁〕（名）❶妹分の女郎や新造・かむろなどが「おいら」己等の姉さん」といふのを約めて呼んだのに基づくといふ。❷東京の遊郭で、姉女郎の稱。轉じて女郎の稱。❸位置の高い娼妓。大夫。

おいり（おいり）〔御入〕（名）「入り來ること」の敬稱。

オイル（オイル）〔油〕（名）❶油。❷油繪。

オイルエンジン（オイルエンジン）〔油機関〕（名）石油發動機。

オイルシール（オイルシール）〔油母頁岩〕（名）【鑛】石油を含んでゐる一種の岩石。滿洲國の撫順炭の類。

オイルナット（オイルナット）〔落花生〕（名）なんきん豆。

オイルヒーター（オイルヒーター）〔油煙〕（名）油を燃料とするストーブ。

オイルペインティング（オイルペインティング）〔油繪〕（名）【美】

おいれ（おいれ）〔老入〕（名）年老いた後。老後。

おいれ（おいれ）〔尾入鑿〕（名）向待鑿より身薄く叩鑿で孔を荒彫りしたもの。漢へ、又、孔を彫るに【用ひる。

おいろ（おいろ）〔御色〕（名）❶紅の異稱。

おいわいかた（おいわいかた）〔御祝方〕（名）室町時代の職名。將軍家に年中恒禮・臨時の大禮のある時、酒肴の調進を掌つた職。

おいわいとり（おいわいとり）〔御祝取〕（名）吉凶の事ある家に行つて、壓甲の酒を逃べて物をもらふ賤民。

おいわいぶぎょう（おいわいぶぎょう）〔御祝奉行〕（名）室町幕府の職名。將軍宮下・任大臣・大饗・拜賀などの儀式に際し、饗膳の事を掌つた職。

おいわけ（おいわけ）〔追分〕（名）❶道の左右に分れる所。❷（おいわけぶし）。**—ぶし**〔追分節〕（名）小唄の一種。もと、中仙道と北國街道の分岐點なる長野縣北佐久郡追分の驛で歌はれた馬子歌。悲哀の調を帶び、聲を長く引いて歌ふもの。越後追分・松前追分・江差追分等にこの系統を引くもの。

おいる（おいる）〔翁〕（名）❶おきな。老人。❷老人の尊稱。

おう（おう）〔王〕（名）❶君主の稱號。❷皇族の男子で、親王の宣下のない御方。❸朝鮮李王家の長。❹將棊の駒の王將。

おう（おう）〔追ふ・逐ふ〕（他動、ハ四）❶おとをふむ。❷あとにつく。したがふ。❸おひつく。❹ひかけ。おひゆく。❺その方に向かつて行く。あ及ぶ。❻既往にさかのぼる。❼順序を經て行く。おひはらふ。❽走らす。馳驅する。❾外物に執著する。

おう（おう）〔負ふ〕（他動、ハ四）❶せおふ。❷身にひきうける。蒙る。❸名乘る。**負うた子に教へられて淺瀬を渡る**（句）時として、己よりも未熟なのから教を受けることがあることの譬。**—子より抱く子**（句）手近のものなさきにするの人情であるとの譬。❹る。生ずる。生長する。

おう（おう）〔生ふ〕（自動、ハ下二）はえる。

おう（おう）〔終ふ〕（他動、ハ下二）終るやうにする。遂ける。はたす。すます。

おう（おう）〔婚ふ〕（自動、ハ四）夫婦となる。夫婦の契を結ぶ。男女が相交はる。（古語）

おう（おう）〔合ふ〕（自動、ハ四）❶あれとこれとが一つになる。❷よくそろふ。❸よく調ふ。そろふ。❹かなふ。適合する。❺あつまる。かさなる。❻つく。むすばる。❼やはらぐ。むつぶ。

おう（おう）〔敢ふ〕（他動、ハ下二）❶強ひてする。❷なしとげる。

おう（おう）〔饗ふ〕（他動、ハ下二）馳走する。ふるまふ。（古語）

おう（おう）〔蜜ふ〕（他動、ハ下二）食物に味噌・酢などをまぜあはせて調理する。

おう（おう）〔會ふ・遇ふ・逢ふ・遭ふ・値ふ〕（自動、ハ四）❶であふ。いつしよになる。對面する。❷（イ）會は、寄りあふ。一所に集まる。（ロ）遇は、ふと出あふ。（ハ）逢は、約束してあふ。（ニ）遭は、であふ。多く好ましくないことにいふ。（ホ）値は、でくはす。

逢うた時に笠を脱げ（句）❶知つた人に逢つたら、笠をぬいで必ず挨拶せよ。❷出あつた機會はのがさずに利用せよ。**—は別れの始**（句）逢つたものは必ず別れる運命を有つから、逢ふといふことは別れの始めといへる。會者定離の意。

おうあ（おうあ）〔歐亞〕（名）ヨーロッパ洲とアジヤ洲と。

おうあんせき（おうあんせき）〔王安石〕（名）【人】支那宋の宰相。字は介甫、半山と號す。神宗の信任を得て相となり、荊國公に封ぜらる。青苗法等の新法は天下萬民の非難する所となり、失意の地位に陷り、元祐元年（一〇八六）卒。年六十八。唐宋八大家の一人。「周禮新義」「毛詩義」「王荊公詩集」等の著がある。

おういう（おういう）〔蒋蔚〕（名）草木の茂ること。

おういう（おういう）〔王維〕（名）【人】支那盛唐の詩人・畫家。字は摩詰。年十九歳にして進士第一に拔擢され、官、尚書右丞に至る。畫は南宗の祖となす。乾元二年（七五九）卒。年六十一（七五九）。

おういう（おういう）〔横位〕（名）母體の子宮内で、胎兒の位置が横になつてゐること。

おういう（おういう）〔王位〕（名）王の位。帝王の位。

おういう（おういう）〔王威〕（名）王の御威光。帝王の威嚴。稜威。

おういく（おういく）〔奥行く〕（自動、カ四）おくれまいと人の後について行く。人を捨てて彼方に行く。（古語）

おういつ（おういつ）〔汪溢〕（名）水の廣く深くして溢れること。

おういつ（おういつ）〔横溢〕（名）❶水のみなぎりあふれること。❷溢れる程に盛んなこと。

おういつ（おういつ）〔横逸・横佚〕（名）思ふがままに行ふこと。勝手に行ふこと。

おういん（ワウヰン）（名）【王院】天皇。みかど。

おういん（ワウヰン）（名）【押韻】詩句中の一定の處に同韻の字を用ひること。

おういん（ワウヰン）（名）【王胤】王者の子孫。

おうう（ワウウ）（名）【奥羽】【地】奥州と出羽と。東北六縣（福島・宮城・岩手・青森・秋田・山形縣）の總稱。

おうう（ワウウ）（名）【翁鬱】（名）❶草木のしげりてゐるさま。❷雲・霧などの盛んに集まるさま。

おうう（ワウウ）（名）【櫻雲】（名）櫻の花の盛んに咲きつづいて、白雲のやうに見えること。花の雲。

おうえ（ワウエ）（名）【御上】（名）奥の間。入口をはひつて圍爐裏のある間。**—さま**【御上様】（名）主人の妻の敬稱。

おうえん（ワウエン）（名）【應援】（名）たすけ。すくひ。かせい。**—か**【應援歌】（名）主として運動競技の選手に元氣を付ける爲に合唱する歌。**—だん**【應援團】（名）主義・目的を等しうするものを應援する團體。專ら運動競技を應援する團體。

おうおう（ワウワウ）（感）❶悲しみ叫ぶ聲。

おうおう（ワウワウ）（名）【央央】（名・副）❶應答の聲。

おうおう（ワウワウ）（名・副）❶ひろやかなさま。❷あきらかなさま。❸樂しいさま。

おうおう（ワウワウ）（名・副）【怏怏】（名・副）不平なさま。うらみ

おうおう（ワウワウ）（名・副）❶深く廣いさま。❷廣く大きいさま。

おうおう（ワウワウ）（名・副）❶小鳥の樂しげに鳴くさま。❷鈴の鳴る聲。❸善をすすめあふさま。

おうおう（ワウワウ）（名・副）【往往】（名・副）❶折折。時時。❷とおおおう（ワウワウ）（名・副）【追追】（副）あとを追ひながら。あとを追ふやうに。

おうか（ワウカ）（名）【鶯歌】（名）鶯の聲。

おうか（ワウカ）（名）【鶯歌】（名）鶯の聲。

おうか（ワウカ）（名）【櫻花】（名）櫻の花。

おうか（ワウカ）（名）【櫻歌】（名）❶聲をあはせて歌ふこと。❷天子の德をほめたたへること。

おうか（ワウカ）（名）【應化】（名）（Adaptation）❶【生】生物が周圍の狀態に應じて、組織・機能を變ずること。❷【心】人の性質や作用が、環境の狀態に應じて變化すること。

おうか（ワウカ）（名）【歐化】（名）ヨーロッパの思想や風俗に化すること。**—しゅぎ**【歐化主義】（名）ヨーロッパ文化を模倣しようとする主義。

おうか（ワウカ）（名）【王家】（名）王者の家系。又、其の家族。

おうか（ワウカ）（名）【王化】（名）君主の德化。「ねざしはひ。

おうか（ワウカ）（名）【横禍】（名）不慮の災難。むこたらしい

おうか（ワウカ）（名）【殃禍】（名）わざはひ。災難。

おうが（ワウガ）（名）【柱駕】（名）（貴を柱（ま）ぐる意）來訪の敬語。

おうかいがん（ワウカイガン）（名）【横臥】（名）よこにねること。ねること。

おうかいがん（ワウカイガン）（名）【横海岸】（名）【地】山脈の軸と直角をなす海岸。大西洋・印度洋等の海岸の類。（縱海岸の對）

おうか・かい（ワウカ・カイ）（名）（鶯花海）（名）（支那宋の陸游の「荔枝樓小酌」の句）春三四月の頃、何處も鶯は鳴き、花は盛んに開いて、春の景色の佳なること。

おうかく（ワウカク）（名）【凹角】（名）【數】二直角より大きく四直角より小なる角。

おうがく（ワウガク）（名）【王學】（名）陽明學。

おうがくまく（ワウガクマク）（名）【横隔膜】（名）【生】腹腔と胸腔とを境する膜狀筋。上面は心臟と肺に、下面は胃・脾臟・肝臟等に接する。横隔膜神經に支配されて嗽縮・強縮し、肺臟の呼吸作用を司る。

おうかん（ワウカン）（名）【往還】（名）❶ゆきき。ゆきかへり。往復。❷ゆききの道。街道。道路。

おうかん（ワウカン）（名）【横貫】（名）横に貫くこと。東西に貫くこと。

おうかん（ワウカン）（名）【王冠】（名）❶君王のかぶる冠。❷ヨーロッパで、古來尊敬を示す爲、又は高貴の表彰として頭又は頭の周圍に戴く輪。

おうかん（ワウカン）（名）【皇冠】（名）【人】支那南北朝の儒者。論語・孝經・三禮に通達し、梁に仕へて禮記講疏五〇卷を著はす。（西紀五八）「佛教經典の異名。黃紙朱軸。

おうかんせきじく（ワウカンセキジク）（名）【黃卷赤軸】（名）

おうき（ワウキ）【應器】（名）（梵 patra）❶應量器。❷僧侶が人の布施する物を受ける器で、鐵・土・木などで造った鉢。「近の地。

おうき（ワウキ）（名）【王畿】（名）王城の附

〔㊁きうお〕

「けはひ。

おうき（ワウキ）（名）【嘔氣】（名）はきけ。

おうき（ワウキ）（名）【王氣】（名）王者を出すきざしのある

おうき（ワウキ）（名）【奥義】（名）おくぎ。おくのて。

おうき（ワウキ）（名）【扇】（名）あふいで風を起こし涼を取る具。やあふひ。ぜんす。かはほり。**—あみ**【扇網】（名）四手網の類。扇形に開く網。**—あわせ**（ほたてがい）（帆立貝）。❷あげまき（揚卷）。**—が**【扇合】（名）扇に詩歌を書いて、出しあはせて優劣をきめる昔の遊戯。**—いか**【扇紙鳶】（名）扇形の紙鳶。あふぎだこ。**—うり**【扇賣】（名）江戸時代になまめいた姿で扇を賣りあるいた男。**—おり**【扇折】（名）扇をつくること。又、その人。**—がい**（がひ）【扇貝】（名）【動】❶しゃこ・種種。❷

おうき（ワウキ）【扇垣】（名）家又は塀の端に扇形に結んだ竹や蓆で結つた垣。**—かけ**【扇掛】（名）床柱などに扇を開いてかけておく具。**—がた**【扇形】（名）❶扇を摩げた形。あふぎなり。❷【數】圓の弧と二つの半徑でつくった形。**—がみ**【扇紙】（名）扇の地紙。扇に張る紙。**—がやつ**【扇谷】（名）【地】鎌倉町の地名。**—きり**【扇切】（名）扇を刀の柄頭に立てて、その刀を早く拔いて、扇の地に落ちぬうちに切るわざ。又、投げつけられた扇を拾で拂ひのけるわざ。**—ぐるま**【扇車】（名）❶扇を三箇・要を中心にして合はせて圓形を作り、柄の串の先につけ、上棟式に棟の上に立てるもの。❷紋所の扇車の形にしたものの。**—ずかい**（ずかひ）【扇使】（名）扇をつかふこと。又、そのしかた。**—ずくし**（くし）【扇壺】（名）昇風などに扇の形を書き、その一つ一つに種種な絵を描くこと。**—ぞめ**【扇染】（名）染模樣の名。扇の形などの中に、花鳥・人物などを染出した模樣。**—だな**【扇棚】（名）圓形を四分した形の櫛で、床の間・書院などの脇につける。**—だるき**【扇椎】（名）扇形に開いた樁。神社の軒などに用ひる。**—て**【扇手】（名）自由に扇をつかふやうに造った操人形の手。**—どもえ**（ともえ）【扇巴】（名）紋所。扇の地紙形の中に三つ巴を描いたもの。**—とり**【扇取】（名）扇で寸法をはかること。**—ながし**【扇流】（名）❶模樣の名。扇の水に流れるさまを染出したもの。**—なり**【扇形】（名）あふぎがた。**—の・おんな**【扇女】（名）寵愛を失った女。秋の扇。**—の・が**（がう）【扇賀】（名）夏行ふ長壽の祝賀。**—の・しば**【扇芝】（名）京都府久世郡宇治町平等院内の源頼政自殺の名所。❷**—の・はい**【扇拜】（名）往古、朝廷で夏季に公卿に扇賜はったこと。**—びき**【扇引】（名）掌に載せた扇を取らう取られまいと爭ふ遊戯。**—びょうし**（ビヤウ）【扇拍子】（名）扇をうち鳴らして諸の拍子を取ること。**—ほぞ**【扇枘】（名）袴腰の橋斷面の形をしたほぞ。**—まくら**【扇枕】（名）扇（句）扇を半ば開いて、影は立烏帽子に似てゐる。その立烏帽子は息子のことで、此方が立てば彼方が立たねといふ意。（巫女の常套語）

おうぎ（ワウギ）（名）【黃者】（名）【植】蓼科の多年生草本。蓼は蓼性、葉は奇數羽狀複葉で、小葉は長楕圓形、淡黃色又は淡紫色の花を開く。多肉の根は藥用となる。

おうぎ（ワウギ）（名）【横議】（名）ほしいままに意見を立て一つ論議すること。

おうきし（ワウキシ）（名）【王徽之】（名）【人】支那東晉の人。字は子猷。王羲之の子。王獻之の兄。官、黃門侍郎に至る。後、會稽の山陰に隱れ、竹を愛して之を植え、「何ぞ一日も此の君なかるべけんや。」といった。生歿年未詳。

おうぎし（ワウギシ）（名）【王羲之】（名）【人】支那東晉の書家。字は逸少。隸書・草書に於いて、古今獨歩の稱があった。官、右軍將軍・會稽內史に至る。その子獻之も草書を善くし、併せて二王と稱せられる。（三六九）

おうぎしょう【奥義抄】(名)【文】和歌式及び和歌の奥義を説く書。藤原清輔の著。三巻。

おうぎ-ぎく【押脚】(名) 書画の下部に押す「まなこ」。

おうぎやく【横逆】(名) ほしいままでよこしまなこと。

おうぎやく【横虐】(名) ほしいままにして虐げること。

おうきゅう【應急】(名) とりあへず、當座の間にあはせること。—しゅだん【應急手段】(名) 急場のまにあはせに施す手段。—てあて【應急手當】(名) 創傷を受けた時などのさしあたっての手當。

おうきゅう【王宮】(名) 帝王の宮殿。

おうきゅう【球鏡】(名)【理】(Concave mirror) 球狀凹面を反射面とした鏡。球面の内側を鐵鞠鏡の中央點と球の中心とを結ぶ直線に平行な光線が、鏡軸上の一點に會する點を主焦點と稱し、物體が主焦點外にある時は倒立像を、主焦點内にあれば正立虛像を生ずる。凹面鏡。

おうぎょう【王業】(名) 國王の國土統治の大業。

おうぎょがくは【横渠學派】(名) 支那宋の張横渠の學派。本然の性と氣質の性との區別を立て、本然性を得たものを聖人とし、氣質の性の濁れるものを愚人とし、性善・性惡の調和をはかった所に特徴が認められる。

おうきょく【枉曲】(名) ❶まがりかがむこと。❷よこしまなこと。

おうきょく【黄玉】(名)【鑛】(Topaz) 斜方晶系の柱狀の石で、鍛磨土との硅酸化合物。質硬くして脆く、透明又は半透明で、重赤・紫・青・綠・黄等の諸色のものがあるが、黄色のものは寶石として用ひられる。トパーズ。

おうく【横句】(名) ことつけの文句。いつはり。

おうぐ【應供】(名)【佛】人・天の供養を受ける意。如來十號の一。

おうくつ【枉屈】(名) ❶まがりかがむこと。❷身を屈して へりくだること。

おうくつ【鴛鴦】(名) 鴛鴦の鳴く音を笙の笑(たて)に譬へて、人を救ふ爲に姿をかへて出現すること。

おうけ【應化】(名)【佛】佛が人を救ふ爲に姿をかへて出現すること。

おうけい【殃慶】(名) わざはひとよろこび。

おうけい【往詣】(名) ❶貴人の許におもむくこと。❷神佛にまうでること。

おうけい【王卿】(名) 王と執政の大臣と。

おうけいこう【王荆公】(名)【人】王安石。

おうげき【横擊】(名) よこあひから攻めうつこと。又、よこさまになぐること。

おうげ-ずく【(黄)氣附く】(自動、カ四) 貴い樣子に見える。貴族のやうに見える。

おうけつ【甌穴】(名)【地】急流の激する爲に生じた孔などの穴。

おうけつ-えん【黄血鹽】(名)【化】(Yellow prussiate of potash) 炭酸カリウム・鐵及び皮毛・血・角・蹄の如き蛋素を含有する有機物を熱して得る黄色の結晶體で、染料として用ひられる。

おうけなし【(黄)氣無し】(形、ク)不相應である。力にあまる。(古語)

おうけん【王權】(名) 國王の權力。王者の權勢。

おうけん【横惡】(名)【醫】よこしまな惡性の腫瘍。

おうけん【横言】(名) 王言の冒。綸言。

おうげん【應現】(名)【佛】おうげん應化。

おうこ【往古】(名) 往昔。

おうこ【鴛語】(名) 鴛のなきごゑ。

おうこ【押後】(名) あとおさへ。あとぞなへ。

おうご【押伍】(名) 押伍列に居て列兵の監視に任ずる兵士。—れつ【押伍列】(名) 軍隊で後列兵の後方二歩を隔てた線。

おうご【初】(名) 物を荷なふ棒。てんびんぼう。

おうご【會期】(名) 面會する時。

おうご【應護】(名)【佛】衆生の所に應じて、佛がこれを護ること。

おうこう【鴛簧】(名) 鴛鴦の鳴く音を笙の簧(たて)に譬へていふ語。鴛の聲。

おうこう【往航】(名) 船舶の目的の地に向かって行く時の航路。

おうこう【横行】(名) ❶よこさまにあるくこと。❷きままにおしあるくこと。—か-ぶ【横行濶歩】(名) 大手を振って大威張であるくこと。

おうこう【王侯】(名) 王と諸侯。一地方を領有する人。—将相寧ぞ種あらんや(句)〈史記陳涉世家の句〉王侯・將相となるには、その家系や血統に依るのではない。器量次第・運次第で其の地位になれるのである。—に事へず其の事を高尚にす(句)〈易經蠱卦の句〉仕官せず閑居して志を高潔にし、世事に超然たる意。

おうこう【王后】(名) きさき。皇后。

おうこうるい【横口類】(名)【動】板鰓類の一目。口は側腹に位して横裂し、皮膚は顆粒狀の鱗で覆はれてゐる。鮫・鱏(えい)の二目に分たれる。

おうこく【王國】(名) 王を君主とする國。

おうこく【墺國】(名)【地】オーストリヤ。

おうこく【横谷】(名)【地】山脈の軸に直角をなす谷。

おうごん【黄金】(名) ❶きん。こがね。❷貨幣・金錢。お(ほ)ばんきん(大判金)。—じだい【黄金時代】(名)(Golden age) の譯語。❶【社】社會の進歩が最高調に達して、萬事缺陷なく具はると想像せられた時代。❷一生涯中、最も榮えた時。—せいりゃく【黄金政略】(名)〈政反對者に金錢を與へて歌心を買ひ、その口を塞いで行ふ政治。—せかい【黄金世界】(名)黄金時代の世。—たく【黄金宅】(名)【佛】(須達長者が、釋迦の爲に祇園精舎を建てた時、黄金を敷きつめ、ただけの價を出して敷地を買ったといふ故事に基く)伽藍の稱。—の-じゅつ【黄金術】(名) 丹砂を煉って黄金とし、長生不死の藥とするといふ神仙の術。—ばい【黄金梅】(名)【植】梅の一種。花は細かで疎らに、蕊の端に黄色を多く露出する。

—ばんのう【黄金萬能】(名) 黄金を生活の第一義として、人を救ふ爲に黄金をへれば、世の中は思ふままになるといふ思想。❷人蕪浸にいなった人。—ぶつ【黄金佛】(名) ❶黄金で鑄た佛像。❷人蕪浸にいなった人。—ぶんかつ【黄金分割】(名)【數】幾何學上の原理。一直線を外中比に分つこと、卽ち小部分の大部分に於ける比を、大部分の全部に於ける比に等しく分割すること。—りつ【黄金律】(名)(Golden rule) 意味深遠で、應用の廣い語句。

おうさ【鷹挙】(名) 鷲が枝から枝に移って鳴くままを捷さの左右にくるくるに聲をていふ語。(おうげ)(應化)。

おうさ【鷹作】(名)【佛】(機に應じて作(な)す意)

おうさ【王佐】(名) 帝王の輔佐。—のさい【王佐の才】(名) 帝王の輔佐となるべき器量。

おうさい【殃災】(名) わざはひ。災難。

おうさい【横災】(名) 不慮の災。

おうさい【往歳】(名) 過ぎ去った年。

おうさいーや【(感)〈(おう)然(さ)りや〉の意】三番叟の舞ふ時の掛聲。

おうさか【逢坂】(名)【地】滋賀縣滋賀郡にある坂。その坂の西北に逢坂山があって、そこに逢坂關があった。—ごえ【逢坂越】(名)【地】伊勢國山田から志摩國的矢(まと)に出る山路。

おうさ-さるさ【逢ふさ離るさ】(名) ❶こなたがよければかなたがわるいこと。❷あちらこちら。かれこれ。❸ゆきさき。往來。(以上古語)

おうさく【奥蹟】(名)〈「蹟」は奥深く幽かで見難い意深遠の道理。

おうさつ【慶殺】(名) みなころし。

おうさつ【横冊】(名) よこづきの本。(語)

おうさ-わに【奥旨】(副) 身分相應に。のんびりと。あうさ。

おうし【嘔】(名) おしっこ。嘔吐。

おうし【王師】(名) ❶帝王の軍隊。❷帝王の師範。

おうし【横恣】(名) きままな。ほしいまま。

おうし【横死】(名) 不慮の死。非命の死。

おうし [王氏](名) ❶支那の王の子孫。❷我が国の天子の御子孫で、姓を賜はらぬ者。

おうじ [押字](名) 名乗の字をかきくづして印としたもの。かきはん。

おうじ [皇子](名) 天子の男の御子。みこのみや。—**ふいくかん** [皇子傅育官](名) 宮内大臣の指揮を受け、皇子が未成年の間、其の傅育を掌る官。

おうじ [王事](名) ❶帝王の事業。❷帝王の上に関する事柄。—**陛下きことなし**(句)(詩経唐風鴇羽篇の句)王事は堅牢なるが故になほざりにせず、一身の限をつくすべき意。—**を以て家事を辟す**(句)(源平盛衰記の平盛の言、春秋公羊傳に出る)人臣たるものは、帝王の事の爲には、家事をなすべて、一身の力を盡くす。

おうじ [王子](名) ❶皇族の男子で、親王宣下のない御方。❷王の子。❸[地]京都から和歌山縣熊野神社へ巡詣の途次の處處に、若王子(おうじ)を勸請して祀つてある土地の名。❹[地]東京市の區名。東京市北部の一大工業地區。

おうじ [往事](名) 過去の事。いにしへのこと。—**渺茫**(句) 過去の事跡の記憶にとどまらず、朦朧としてゐること。

おうしき [往時](名) 過去の時。昔。

おうしき [黄鐘](名) 【音】音樂の調子で、十二律の一。「に任ぜられた御方。

おうじじゅう [王侍従](名) 諸王で、侍從

おうじちの-き [鬣賀樹](名) あうじちの樹の賀。—【植】忍冬(すひかづら)科の落葉灌木。高さ二米位、葉は長卵形乃至卵圓形で、春、五瓣の紅花を開く。實は小豆に似て紅熟し、藥料とする。うぐひすのき。

おうしつ [王室](名) 帝王の御家。王家。朝家。

おうじつ [往日](名) 過ぎ去つた日。先日。

おうじつ-せい [横日性](名) 【植】植物生理學上の術語。草木の葉面が殆と水平をなし、日光に對して略〻直角をなし、日光を最も能率よく受け得る性質。

おうしてい [王士楨](名) 【人】支那清の大官・詩人。漁洋と號す。官、刑部尚書に至り、詩を以て重んぜられた。諡を文簡と賜ふ。康熙五十年(一七一一)卒。「帶經堂集」「漁洋詩文集」「精華錄」「香祖筆記」等の著がある。

おうしゃ [王者](名) ❶王たる人。帝王。國王。❷王道を以て天下を治める君。帝王。(覇者の對)

おうしゃ [枉車](名) (おうが)(枉惑)。

おうしゃ [横斜](名) 横にかたむいてゐること。ななめ。

おうしゃ [王舎城](名) 【佛】(梵 Rājagṛha) 中印度摩揭陀國にあつた頻婆羅王(阿闍世王の居城。其の近くに靈鷲山(りやうじせん)がある。現今のパトナ市の南方ビハル地方のラジュギールは其の遺址である。

おうしゃ [往者](名) 昔。以前。過ぎ去つた時。—**諫むべからず**(句)(論語微子篇の語)過ぎ去つた事は、諫めて救はうと思つても出來ないことである。

おうじゃく [厄弱](名) かよわいこと。

おうじゃく [横笛](名) よこぶえ。

おうじゃく [應迹](名) 【佛】應現垂迹の略。すゐじゃく。

おうじゃく [往昔](名) むかし。いにしへ。「わうせき。

おうしゅ [王種](名) 帝王の血統。

おうしゅ [奥趣](名) おくゆかしい趣。

おうしゅ [黄酒](名) 麹子及び糯黍又は糯粟等を原料として製した淡褐色乃至黒褐色の支那酒。

おうじゅ [横竪](名) ❶よこたてと。❷空間と時間もの。❸【佛】他力と自力と。

おうじゅ [櫻樹](名) 【植】さくらの樹。

おうしゅう [押牧](名) 【法】人民の財産を差押へて、役所に收容すること。

おうしゅう [横日](名) 過ぎ去つた日。先日。

おうしゅう [應酬](名) 返答。返事。

おうしゅう [拗執](名) 固執。

おうしゅう [歐洲](名) ヨーロッパ。—**ろ** [歐洲航路](名) 我が國から歐洲に至る航路で、ロンドン、ハンブルグ線、大阪商船會社の歐洲線・リヴァープール線・ハンブルグ線、大阪商船會社の歐洲線・リヴァープール線・ハンブルグ線、大阪商船會社の日本歐洲線。—**れんめい** [歐洲聯盟](名) 【政】フランスのアリアン外相が、一九三〇年五月二十七ケ國政府に發した歐洲の地方的協約案で、歐洲の平和を脅威する政治的・經濟的・社會的危險に對し、共同して當らうとするもの。

おうしゅう [王充](名) 【人】支那後漢の學者・革新的思想家。博覽強記、百家の言に通じてゐた。不遇の餘、「論衡」八十五篇を著し、物類の異同・時俗の變疑・百子の浮虛を辯じた。永元年中(八九—一〇四)歿。

おうじゅう [王戎](名) 【人】支那西晉の人。竹林七賢の一人。字は濬沖。眞陵亮侯となつたが、晉室が亂れたから、保身の計をなし、倹素を以て身を持した。惠帝の永興二年(三〇五)歿。諡して元といふ。

おうしゅう-あだちがはら [奥州安達原](名) 【文】近松半二等作の淨瑠璃。後三年の役の事實に、諸曲安達原と善知鳥(うとう)を配合して脚色したもの。寶暦十二年竹本座初演。

おうしゅう-かいどう [奥州街道](名) 【地】千住を起點として陸奥國三廢に至る街道。宿驛數凡そ九十四。

おうしゅく [王肅](名) 【人】支那三國時代魏の大官で學者。成侯王朗の子。字は子雍。關陵侯・中領軍・散騎常侍となり、延熙二十年(二五七)歿。宿將軍を贈られ、孔子家語を僞作した。諸經の註を著し、鄭玄に反對した。

おうしゅく-ばい [鶯宿梅](名) ❶【植】梅の一種。花は八重又は一重で、色白く香の高いものといふ。又、紅白交り咲くものだともいふ。❷村上天皇が清涼殿の梅が枯れたので、紀貫之の女の庭前の紅梅をお召になつたが、女はその樹に「勅なれば いともかしこし鶯の宿はと問はばいかが答へん」と

の歌を結んで奉つたといふ故事。(大鏡・拾遺和歌集・十訓抄等に出る)。

おうしゅじん [王守仁](名) 【人】(おうよういん)(王陽明)。

おうじゅっ-こう [黄執香](名) らんじゃだ

おうしょ [押書](名) ❶或事を履行すべきことを誓ふ書。❷おどしつけられて無理に書かされた文書。

おうじょ [皇女](名) 天皇の女の御子。

おうじょ [王女](名) ❶王の御女。❷內親王で

おうしょう [横障](名) さまたげ。さはり。

おうしょう [鞅掌](名) (一になしもつ)の意)いそがしく働いて儀容をなすに暇のないこと。

おうしょう [毆傷](名) ❶うちたたいて人を傷つけること。❷うちきず。うたれきず。

おうしょう [應鐘](名) ❶【音】音樂の調子。十二律の一。❷陰暦十月の異稱。

おうしょう [王將](名) 將棋の駒の名。大將の資格を有する主腦の駒で、他の駒は之を守護する目的で動く。四方・四隅に一枡づつ動く力を有する。敵の駒に攻められて動き得ざるに至る負とする。

おうしょう [應召](名) ❶召に應ずること。❷【軍】軍人が、動員等に際し、召集に應じて指定地に參集すること。

おうしょう [黄鐘](名) ❶【音】音樂の調子。十二律の一。「わうしょう」と文字は同じであるが、其の調子を異にする。❷陰暦十一月の異稱。

おうしょう [厭狀](名) ❶人をおどしつけて無理に書かせた文書。—**すくめ** [厭狀竦](名) おどしつけて自分の思ふままにならせること。

おうじょう [王城](名) 帝王の居城。皇居。

おうじょう [往生](名) ❶【佛】彌陀の願力によつて、現世を去つて淨土にゆき蓮華の中に生まれること。❷此の世を去つて死ぬこと。❸物事のどうにも

しやうのないやうになること。**—あんらく**〔往生安楽〕(名)〔仏〕往生㊀。**—いちじょう**〔往生一定〕(名)〔仏〕信念を得て、極樂往生にまちがひのないこと。**—かんねんぶつ**〔往生観念佛〕(名)往生㊀。**—きわ**〔往生際〕(名)㊁しにぎは。㊂臨終。**—ごろ**〔往生講〕(名)〔仏〕同類他佛を念じて極樂往生を願ふ人のする法事。**—ずくめ**〔往生盡〕(名)不本意なのを無理に納得させること。**—どころ**〔往生所〕(名)極樂に往生をする人。又、往生すべき人。(しょうにん)後生人。**—にん**〔往生人〕(名)しにびと。**—ようしゅう**〔往生要集〕(名)〔仏〕源心僧都源信の著。六卷。念佛の要旨と功德とを示したもの。寛和三年成る。

おうじょう・いん〔往生院〕(名)㊀〔仏〕京都市右京區嵯峨清涼寺の西にあつた寺で、今、其の遺跡に厳王寺がある。念佛坊の開基。㊁大阪府河内郡枚岡南村にある寺。岩瀧山六萬寺といふ。行基菩薩の開基。聖武天皇の勅願所。

おうしょうくん〔王昭君〕(名)〔人〕支那前漢元帝後宮の女。名は嬙、昭君は其の字。王穜の女。元帝、後宮の女多く、常に見ることができなかつたので、像を畫かせて幸した。宮人皆賄工に賂したが、昭君のみ肯じなかつたので、まみえることができなかつた。竟寧元年匈奴の呼韓邪單于が來朝して、美人を得ることを求めた時、元帝は畫を案じて昭君に行かしめた。去るに及んで召見し、その絶世の美人なのを見て、悔いたが如何ともすることを得なかつた。昭君は胡地に居って帝を怨み、怨恩の歌を作り、後、毒を服して死んだ。胡地の草色皆黄であつたのに、昭君の墓の草は青かつたと傳へられる。

おうしょくけつろえん〔黄色血滸鹽〕(名)〔化〕(おうけつえん/黄血鹽)。

おうしん〔横震〕(名)〔地〕山脈の主軸を横斷して、それと直角の方向に震動する地震。

おうしん〔王臣〕(名)帝王の臣。**—蹇蹇躬の故にあらず**(句)(易經蹇卦六二の句)王臣として仕へた以上は、一身を忘れて艱難に處すべきにいふ。

おうしん〔往診〕(名)醫師が患者の家に行って診察すること。

おうしん〔往信〕(名)通信を發すること。(返信の對)

おうしん〔鶯脣〕(名)鶯の鳴き聲。〔た語〕

おうじん〔櫻脣〕(名)櫻花を美人の脣に譬へて、色身(しきしん)をあらはした語。

おうじん〔應身〕(名)〔仏〕佛が機に應じ物に接して、色身(しきしん)をあらはした法を說き衆生を救ふこと。

おうじんぶつ〔應身佛〕(名)〔仏〕佛の三身の一。應身をあらはした佛。釋迦は其の例である。

おうじんてんのう〔應神天皇〕(名)第十五代の天皇。御名は譽田別命(ほんだわけのみこと)。仲哀天皇の御四皇子。御母は神功皇后。御在位中、阿直岐・王仁が百濟から來朝して漢學を傳へ、又、縫工・織工・鍛工・船匠等が百濟・新羅から來朝し、諸種の工藝を傳へ、支那人も歸化して養蠶・紡績の術を傳へた。在位四十一年で崩御。寶算百十一。(八七〇)

おうす〔自動・サ四〕水中に身を浮べる。(古語)

おうす〔雄臼〕(名)すりうすの(磨臼)の上の方。

おうす〔生す〕〔他動・サ四〕㊀成長させる。はやす。㊁養育する。養ふ。

おうす〔負す〕〔他動・サ下二〕負はせる。かぶせる。罪などをきせる。おほす。(古語)

おうす〔應す〕〔自動・サ變〕㊀答へる。㊁したがふ。㊂適當する。かなふ。あてはまる。㊃和して起こる。

おうすい〔王水〕(名)〔化〕(Aqua regia)強硝酸と強鹽酸との混合液。通常の酸に溶解せぬ金・白金を溶解し得る強烈な作用を有する。

おうすいぢ〔黄水〕(名)(きみずの/黄水)。〔語〕

おうずちぐ〔鶯貫〕(名)(おうじち/鶯貫)。古

おうせ〔逢瀬〕(名)相逢ふ折。面會の時。

おうせい〔歐西〕(名)ヨーロッパ。西洋。泰西。

おうせい〔應制〕(名)〔制は天子の命令〕勅命を奉じて詩歌を詠進すること。

おうせい〔王政〕(名)帝王の政。**—いしん**〔王政維新〕(名)㊀帝王の政に復して、諸政の革新せられること。㊁〔歴〕我が國の明治初年に於ける大改革。**—ふっこ**〔王政復古〕(名)天下の政治が、古へにかへって天子親自身に政を統べ給ふやうになること。明治初年の改革。

おうせい〔王制〕(名)王者の定められた制度。

おうせい〔旺盛〕(名)さかんなこと。

おうせい〔黄精〕(名)〔植〕なるこゆり(鳴子百合)の漢名。

おうせいしゃ〔應請者〕(名)平安朝に於いて、請(せ)の特典によって刑罰の減等せられた身分の者。

おうせかた〔負方〕(名)貸方。債權者。借主。

おうせき〔往昔〕(名)むかし。いにしへ。

おうせつ〔應接〕(名)㊀あらひ。もてなし。㊁面會。**—しつ**〔應接室〕(名)來客と應接するために設けられた室。**—しょ**〔應接所〕(名)應接をする場所。**—に暇あらず**(句)舟行などの際、景色等がつきつきにあらはれて、眺めつくせぬこと。

おうせつ〔横截〕(名)横さまにたちきること。

おうせつ〔鶯舌〕(名)鶯の聲。**—はい**〔鶯舌梅〕(名)〔植〕梅の一種。花は白色・單瓣で、蕊の中から一瓣を吐くさまが鶯の舌に似てゐる。

おうせつじゅせつ〔横說竪說〕(名)縱横自在に述べ說くこと。

おうせん〔鷹戰〕(名)全軍をみなごろしにすること。

おうせん〔鶯遷〕(名)㊀鶯の谷間を出でて喬木に遷ること。㊁進士の試驗に及第すること。

おうせん〔應戰〕(名)敵の攻擊に應じてする戰鬪。

おうせん〔横線〕(名)横さまに引いた線。**—こきって**〔横線小切手〕(名)〔經〕小切手の面に二條の平行線を引いたもの。受領者は、これを自己の取引銀行に預金し、之が交換された後で無ければ現金で引出すことが出來ないから、不正に行使される虞れが無い。横線內に受領者の取引銀行を指定記載したものを特別横線小切手と云ひ、銀行名の記載して無いものを普通横線小切手と云ふ。すぢひきこぎって。

おうせ〔汪然〕(名・副)㊀水の深いさま。㊁涙のしきりに流れるさま。

おうそ〔應訴〕(名)〔法〕原告の訴訟に對して、被告となって陳述すること。

おうそ〔押送〕(名)〔法〕四人又は刑事被告人を他の官廳へ送り、うつすこと。**—じょう**〔押送狀〕(名)〔法〕押送に際し、發送官廳が被押送者に關する事項を記して、押送者に交付する書狀。

おうそう〔往相〕(名)〔佛〕自分の功德を以て、一切の衆生にめぐらし施して、共に安樂淨土に往生せんと願ふこと。〔王神と相神。

おうそうじん〔王相神〕(名)陰陽家で祭る

おうぞく〔王族〕(名)帝王の一族。

おうぞくしゃ〔贖者〕(名)平安朝に於いて、贖銅を以て罪を贖ふことを得た者のもの。

おうそ〔植〕(つくばねそう)〔衛羽根草〕の漢名。〔語〕

おうた〔筱輿〕(名)〔あみ・いたの音便。(古子。

おうた〔毆打〕(名)たたきなぐること。

おうだ〔毆打創傷〕(名)〔法〕人を毆打してその身體を傷害すること。**—ちし**〔毆打致死〕(名)〔法〕他人の身體に傷害を與へ、これが原因となって被害者を死に至らしめること。

おうだ〔横舵〕(名)〔軍〕魚形水雷の尾部に取附け、所要の深度に進行せしめる爲のもの。㊁潛水艇に取附ける水平の舵で、艇の上下動をなさしめんが爲のもの。

おうたい〔横體〕(名)水泳術で、水面に横臥する體形。水府流・神傳流の基本とするもの。

おうたい〔横隊〕(名)横に並列する隊形。(縱隊の對)

おうだい〔應對〕(名)人に面會して、その間に答へること。

おうだいし〔皇帝〕(名)㊀くわうて。㊁(おうだいはくしゃく)。**—はじんらく**〔皇帝破陣樂〕(名)〔音楽〕樂の一。唐の

玄宗の作といふ。

おうたいい[わう]〔王代〕(名) 王朝時代。**—もの**〔王代物〕(名)【文】王朝時代の事實を脚色した芝居狂言。源平時代以前の事件、主として禁中・公卿等雲上の事を扱つた狂言。「妹背山」「菅原傳授手習鑑」の類。大時代物。

おうだい[わう]〔往代〕(名) いにしへ。往昔。往古。

おうたいふ[わう]〔王大夫〕(名) 諸王で、四位・五位の御方。

おうた・かい[わう]〔御歌會〕(名) 宮中に催される歌の會。**—はじめ**〔御歌會始〕(名) 年始、一月十八日頃に宮中で催される御歌會。新年歌御會始。

おうた・く[わう]〔王澤〕(名) 帝王のおめぐみ。帝王の德澤。

おうた・く[わう]〔應諾〕(名) 人の依賴を承諾すること。

おうだつ[わう]〔横奪〕(名) 無理に奪ふこと。よこどり。掠奪。

おうたところ〔御歌所〕(名) 宮內大臣の管理に屬し、御製・御歌又は御歌會に關する事を掌る役所。

おうたん[わう]〔黃丹〕(名) くちなし(山梔)色の紅色を帶びたもので、昔の皇太子の御袍の色。

おうだん[わう]〔黃疸〕(名)【醫】膽汁の色素が全身にまはる爲に、身體の組織が黃色になる病で、肝臟病又は血管破壞の爲に起こる。頭痛・眩暈等を催し、食事進まず、便祕又は下痢を催す。**—しゅつけつびょう**——〔黃疸出血病〕(名)【醫】タイル氏病。

おうだん[わう]〔枉斷〕(名) 法を枉げて不正なさばき。

おうだん[わう]〔横斷〕(名) ❶横にきりたつこと。❷上下の二つに分つこと。❸よこざること。**—か わせ**[はせ]〔横斷爲替〕(名)【經】間接爲替の一。二國間に直接爲替の取組を爲す得ざる場合に、その二國以外の國を經由して支拂を決濟するもの。**—しゅぎ**〔横斷主義〕(名)【武】資本階級と勞働階級とを上下の階段に分け各其の組合を組織し以て相對立せしめようとする主義。**—ひこう**[かう]〔横斷飛行〕(名) 飛行機で、山河・海洋を横さまに長距離を飛行すること。**—めん**〔横斷面〕(名) 物體を、其の長さに直角なる面で垂直面に沿うて切つた切口。

おうち[あふち]〔楝・樗〕(名) ❶【植】せんだん(栴檀)の古名。❷【醫】膽汁の色素が全身にまはる爲に、身體の組織が黃色になる病で、肝臟病又は血管破壞の爲に起こる。頭痛・眩暈等を催し、食事進まず、便祕又は下痢を催す。**—しゅつけつびょう**——〔黃疸出血病〕(名)【醫】タイル氏病。

おうだん[わう]〔枉斷〕(名) 法を枉げて不正なさばき。

おうだん[わう]〔横斷〕(名) ❶横にきりたつこと。❷上下の二つに分つこと。❸よこざること。**—か わせ**[はせ]〔横斷爲替〕(名)【經】間接爲替の一。二國間に直接爲替の取組を爲す得ざる場合に、その二國以外の國を經由して支拂を決濟するもの。**—しゅぎ**〔横斷主義〕(名)【武】資本階級と勞働階級とを上下の階段に分け各其の組合を組織し以て相對立せしめようとする主義。**—ひこう**[かう]〔横斷飛行〕(名) 飛行機で、山河・海洋を横さまに長距離を飛行すること。**—めん**〔横斷面〕(名) 物體を、其の長さに直角なる面で垂直面に沿うて切つた切口。

おうち[あふち]〔楝・樗〕(名) ❶【植】せんだん(栴檀)の古名。❷【醫】膽汁の色素が全身にまはる爲に、身體の組織が黃色になる病で、肝臟病又は血管破壞の爲に起こる。頭痛・眩暈等を催し、食事進まず、便祕又は下痢を催す。**—しゅつけつびょう**——〔黃疸出血病〕(名)【醫】タイル氏病。

おうちこ[あふ]〔四地湖〕(名)【地】海面より低い地。

おうちゃく[あふ]〔横著〕(名) わるがしこいこと。人を惑はすこと。わるいと知りながら行ふこと。なまけること。**—もの**〔横著者〕(名) 横著なことを行ふ人。

おうちょうえん[わう]〔王仲淹〕(名)【人】(おうとう)王通。

おうちょう[わう]〔王朝〕(名) ❶帝王親政の朝廷。❷王朝時代。**—じだい**〔王朝時代〕(名)【歷】我が國の奈良朝・平安朝時代の總稱。(武家時代の對)

おうて[わう]〔王手〕(名) 將棋で、直接に王將を攻め立てる手。

おうて[おうて]〔道手〕(名)(敵を追ひ拂ふ意)城の表口。大手。(將棋の對)

おうてい[あふ]〔押丁〕(名)【法】刑務所で看守長・看守を助けて囚人を取締る下役。

おうてき[わう]〔横笛〕(名)【音】雅樂の左方舞・催馬樂・朗詠等に用ひる笛。龍笛。

おうてっこう[わう]〔黃鐵鑛〕(名)【鑛】(こうてつこう)。

おうてっこう[わう]〔横轉〕(名) 横さまにころがること。左右に回轉すること。

おうてん[あふ]〔四顧〕(名)【地】火山の頂上の一方の缺け凹んだ部分。

おうてんもん〔應天門〕(名)平安城內、內裏八省院の正門。外郭の南面にあつて、重閣・遙かに朱雀門を望む。**—の・へん**〔應天門の變〕(名)【歷】清和天皇の貞觀三年、大納言伴善男父子は應天門に放火し、左大臣源信の所爲であると讒したが、陰謀露顯して遠流となつた事件。

おうと[おうと]〔首〕(名)「おびと」(天)の音便。なつと。

おうと[わう]〔王都〕(名) 皇居のある都市。

おうど[わう]〔嘔吐〕(名) 胃中にある飲食物を吐くこと。へどをつくこと。

おうど[わう]〔王土〕(名) 帝王の統治し給ふ土地。

おうど[わう]〔黃土〕(名) ❶赤土を水簸して製した顏料。❷赤土より採する物質。

おうとう[わう]〔王通〕(名)【人】支那隋末の大儒。字は仲淹。唐の王勃の祖父。中說(文中子)を作つて論語に擬し、續論・樂論・續書・續詩・元經・贊易を作つて六經に擬した。大業十三年(六一七)卒。年三十四門人謚して文中子といふ。

おうとう[わう]〔櫻桃〕(名)【植】❶果實を食用とする櫻の一種。チェリー。❷ゆすらうめ。

おうとう[たふ]〔應答〕(名) 應對。うけこたへ。

おうとう[わう]〔王統〕(名) 帝王の血統。皇統。

おうどう[だう]〔王道〕(名) 帝王が天下を治めるのに仁義を本とする政道。(覇道の對)

おうどう[だう]〔横道〕(名) ❶よこみち。正道にはづれたこと。よこしま。❷(おうちゃく)。**—もの**〔横道者〕(名) 横著者。ふとどきもの。

おうどう[だう]〔黃道〕(名)(こうどう)。**—きち に**〔黃道吉日〕(名)(こうどうきちにち)。

おうどう[わう]〔黃銅〕(名) 眞鍮の異稱。

おうとつ[わう]〔凹凸〕(名) 中ぐくと中だかな。でこぼこ。**—レンズ**〔凹凸レンズ〕(名)【理】(Concavo-convex lens) 一方は中くぼで、一方は中だかである レンズ。

おうな[をうな]〔女〕(名)(おみな)女の尊稱。なつな。(古語)

おうな[をうな]〔老女〕(名) 老いた女。(嫗・媼)。

オーナー・システム〔Owner system〕(名)【教】學生自治による教育法。

おうな・おうな[をうなをうな]〔副〕身に負はれるだけ負うて。十分に力を盡くして。できうる限り。分相應に。れんごろに。

おうなし[をうなし]〔奥なし〕(形、一)(「おくなし」の音便あさはかである。(古語)

おうなづ[あふ]〔押捺〕(名) 印形をおすこと。

おうなん[わう]〔王難〕(名) 王命をそむくことによつて受ける災難。

おうに[わう]〔黃丹〕(名)(おうたん)黃丹。

おうねん[わう]〔往年〕(名) 過ぎ去つた年。むかし。

おうのう[わう]〔懊惱〕(名) 心の惱み。もだえ。

おうのうら[をうのうら]〔麻生浦・芦生浦〕(名)【地】富山縣射水郡の海濱の一部の古稱。

おうのはな[わう]〔王鼻〕(名) 鼻を極めて高くし、赤く塗つた神樂の假面。猿田彦の相といふ。

おうは[わう]〔王覇〕(名) ❶王者と覇者。❷王道と覇道。仁義による政治と武力による政治。

おうは[わう]〔横波〕(名)【理】(Transverse wave) 水面の波動・絃の振動等の如く、媒質の各部が波の進む方向に直角に振動する波動。

おうはい[わう]〔黃梅・迎春花〕(名)【植】木犀[もくせい]科の落葉小灌木。高さ一米乃至二米。莖は綠色を帶び、葉は綠色を帶びたもので、昔の皇太子の御袍の色。

おうはい[わう]〔黃疸〕(名)【醫】膽汁の色素が全身にまはる爲に、身體の組織が黃色になる病で、肝臟病又は血管破壞の爲に起こる。頭痛・眩暈等を催し、食事進まず、便祕又は下痢を催す。**—しゅつけつびょう**——〔黃疸出血病〕(名)【醫】タイル氏病。

おうはいしょうしょう[わう]〔櫻梅少將〕(名)【人】其の姿の美しかつたに基づく平維盛の別名。

おうばく[わう]〔黃蘗〕(名)【植】きはだ。

おうばく[わう]〔黃檗〕(名)【佛】黃檗宗の略稱。**—**

〔梅黃〕

おうによ[わう]〔皇女〕(名)(こうじょ)皇女。

おうにょ[わう]〔王女〕(名) 王の御女。內親王にあらせられぬ皇族の御女子。

おうにょご[わう]〔王女御〕(名) 王女で女御になつた御方。

おうにん〔應仁〕(名) 後土御門天皇の御字の年號。足利義政の時代。應仁の亂あり、京都は灰燼に歸した。(一四六七)

—の・らん〔應仁の亂〕(名)【歷】東軍細川勝元と西軍山名宗全との政權爭奪に原因する前後十一年(應仁元年より文明九年まで)間の大亂で、此の戰により京都及其の郊外は職亂の巷となり、內裏を始め、寺院・邸宅は焼き烏有に歸し、之より以後、幕府の威令は行はれず、遂に群雄割據の戰國時代を醸に至つた。

おうのう[わう]〔懊惱〕(名) 心の惱み。もだえ。

おうのうら[をうのうら]〔麻生浦・芦生浦〕(名)【地】富山縣射水郡の海濱の一部の古稱。

おうのはな[わう]〔王鼻〕(名) 鼻を極めて高くし、赤く塗つた神樂の假面。猿田彦の相といふ。

おうは[わう]〔王覇〕(名) ❶王者と覇者。❷王道と覇道。仁義による政治と武力による政治。

おうは[わう]〔横波〕(名)【理】(Transverse wave) 水面の波動・絃の振動等の如く、媒質の各部が波の進む方向に直角に振動する波動。

おうはい[わう]〔黃梅・迎春花〕(名)【植】木犀[もくせい]科の落葉小灌木。高さ一米乃至二米。莖は綠色を帶び、葉は綠色を帶びたもので、昔の皇太子の御袍の色。

おうはいしょうしょう[わう]〔櫻梅少將〕(名)【人】其の姿の美しかつたに基づく平維盛の別名。

おうばく[わう]〔黃蘗〕(名)【植】きはだ。

おうばく[わう]〔黃檗〕(名)【佛】黃檗宗の略稱。**—**

〔梅黃〕

ざん〔黄檗山〕(名)【佛】臨濟宗の大道場のある支那の山。福建省福州縣清縣にある。—**しゅう**〔黄檗宗〕(名)【佛】禪宗臨濟派の一分派。明の黄檗山萬福寺の僧隱元が、承應三年(一六五四)に來朝し、山城國宇治郡宇治に、黄檗山萬福寺を創立して弘めた宗派。—**ぜん**〔黄檗禪〕(名)【佛】黄檗宗の僧鐵眼(てつげん)が、隱元から與へられた明本によって飜刻した大藏經の版。寛文三年に著手し、延寶二年(一六七四)間に至って功を竣へた。

おうはん(ふ)〔四版〕(名)(Calcographie)印刷版の一種。印刷部が版材面より凹くなってゐる版で、直接に金屬板面に凹く模様を彫刻して製版するもの、藥品を用ひて蝕刻製版するもの等種類が多い。(凸版の對)

おうばん(ふ)〔八將神〕の一。号始にはこの神の方角に向かってすれば吉、この方角に門を建て土を掘れば凶といふ。

おうばん(わう)〔椀飯〕(名)(「わう」は「わん」の音便。「椀」は「椀」の別字)㊀椀に盛って進める飯。(古語)㊁王朝時代に公卿の殿上に集會した時、一人又は數人に課して、衆人を饗應せしめたこと。㊂鎌倉室町時代に、宿將・老臣が、毎年正月元日・三日・七日・十五日等の將軍を自己の營中に招いて盛宴を張ったこと。㊃おうばんぶるまい。—**ぶるまい**〔椀飯振舞〕(名)昔、正月に親類・緣者を招いて盛宴を張ったこと。

おうひ(わう)〔奥祕〕(名)㊀深遠にして測り難いこと。

おうひ(おう)〔横披〕(名)㊀政務又は軍事上の祕密。

おうひ(わう)〔横披〕(名)横に伸べひらく卷物・よこもの。

おうひ(わう)〔横帔・横被〕(名)【佛】袈裟をかけるもの。—**ひつ**(わう)〔王妃〕(名)王のきさき。

おうひつ(わう)〔王弼〕(名)【人】支那三國時代の魏の學者。字は輔嗣。幼より儒學を學び、又老莊の學に通じ文辭をよくした。延熙三年(一四〇〇)歿。

おうひ(わう)〔横披〕(名)横に伸べひらく卷物・よこもの。

おうひ(わう)〔横被・横帔〕(名)【佛】袈裟をかけるもの。

おうひつ(わう)〔王弼〕(名)【人】支那三國時代の魏の學者。字は輔嗣。幼より儒學を學び、又老莊の學に通じ文辭をよくした。延熙三年(一四〇〇)歿。

おうびゃく(わう)〔黄白〕(名)(こうはく)(黄白。

おうぶ(ふ)〔秋苗〕(名)稻の苗。

おうふ(ふ)〔王父〕(名)㊀死んだ祖父の尊稱。㊁王者の父。(王母の對)

おうふく(わう)〔往復〕(名)㊀ゆきかへり。ゆきき。㊁手紙のやりとり。㊂おうふくきっぷ。—**きっぷ**〔往復切符〕(名)往復の乘車切符を一枚につなぎあはせたもの。—**はがき**〔往復葉書〕(名)發信用と返信用とが續いてゐる郵便葉書。

おうぶん〔應分〕(名)身の程に相當すること。

おうぶん〔歐文〕(名)ヨーロッパ諸國に行はれる文字。—**こう**〔歐文工〕(名)歐文の活字を組立てる職工。—**タイプライター**〔歐文—〕(名)アルファベットで印刷するやうに裝置されたタイプライター。—**でんぽう**(ぽう)〔歐文電報〕(名)歐文で認めた電報。

おうぶん(ぶん)〔横文〕(名)㊀横に書き連れた文字。㊁歐米諸國に行はれる文字。よこもじ。

おうぶんせいこう(こう)〔王文成公〕(名)【人】王陽明。

おうへい(へい)〔横柄〕(名)驕りたかぶること。尊大なこと。

おうべい(べい)〔押柄〕(名)驕りたかぶること。傲慢。

おうべいきょく〔歐米局〕(名)【政】政外務省の一局。歐米等の外交事務を掌る所で三課に分れ、第一課は露國の外交事務、第二課は露國以外の歐羅巴、並にその屬領の外交事務、第三課は南北アメリカの外交事務を掌る。

おうへん〔應變〕(名)不慮の場合に、それに應じて適宜に事を處置すること。

おうへん(へん)〔往返〕(名)ゆきとかへり。ゆきき。

おうぼ〔應募〕(名)募集に應ずること。—**かく**〔應募價格〕(名)【經】公債・株式などの募集に應じた際、其の額面價格に對して實際に拂ひ込む金額。例へば額面百圓に對して拂込額が百五圓なる類の類。—**しゃ**〔應募者〕(名)募集に應ずる者。

おうぼ(ぼう)〔王母〕(名)㊀王者の母。(王父の對)㊁死んだ祖母の尊稱。

おうぽう(ぽう)〔應報〕(名)【佛】善惡の所行によって吉凶・禍福の果報を受けること。

おうぼう(ぼう)〔王法〕(名)㊀王者の施行する法律。㊁天下に王たる道。

おうぼう(ぼう)〔往訪〕(名)訪問すること。おとづれること。

おうぼう(ぼう)〔横暴〕(名)我儘で亂暴なこと。

おうぼう(ぼう)〔王法〕(名)【佛】佛の方から世間をおさめたまふ。(佛法の對)

おうぼつ(ぼう)〔王勃〕(名)【人】支那唐の詩人。字は子安。隋末の大儒王通の孫。詩賦に秀で、楊烱・盧照隣・駱賓王と共に、初唐の四傑と稱せられた。上元二年(六七五)溺死。年二十九。

おうみ〔近江蕪〕(名)【植】大津市邊から出る蕪。根塊は扁圓形で大きい。

おうみがや(ぼう)〔近江蚊帳〕(名)近江國から產する蚊帳で品質がよい。

おうみけんじ・せんじんやかた〔近江源氏先陣館〕(名)【文】近松半二・三好松洛・竹田新松等合作の淨瑠璃曲名。大阪冬の陣を主題とする史劇であるが、江戸幕府に遠慮して鎌倉時代に假託し、佐佐木高綱などの事を基として作ったもの。明和六年竹本座初演。

おうみ・しょうにん〔近江商人〕(名)近江國から出る行商人の忍耐と勤勉とで名高い。なかえとうじゅ(中江藤樹)。

おうみ・せいいん〔近江聖人〕(名)【人】(「琵琶湖」)。

おうみ・のうみ〔近江海〕(名)【地】(びわこ)

おうみ・おおつ・みや〔近江大津宮〕(名)近江國にあった天智天皇居。今の滋賀縣滋賀郡南滋賀錦織にあたる。

おうみ・の・ぎょこ〔近江海〕(名)【地】(びわこ)

おうみ・の・みふね〔淡海三船〕(名)【人】奈良朝の文學者。葛野(かどの)王の孫。文章博士・勅を奉じて神武天皇から持統天皇までの諡號を撰定した。延暦四年(一四四五)卒。年六十四。

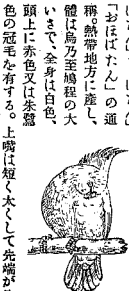
おうみ・はっけい〔近江八景〕(名)【地】近江國琵琶湖の南西岸にある八勝景。支那の瀟湘八景に擬して定めたもの。(1)比良の暮雪(2)矢橋(やばせ)の歸帆(3)石山の秋月(4)瀨田の夕照(5)三井の晩鐘(6)堅田の落雁(7)粟津の晴嵐(8)唐崎の夜雨。

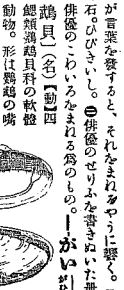
おうみ・ぶし〔近江節〕(名)近江大津岡島語齋の始めた俗曲。萬治・寛文頃の流行。ごさいぶし。

おうみ・りょう〔近江律令〕(名)近江律は、天智天皇の朝の刑法。近江令は天武令の基礎をなす法令で、天智天皇の朝に制定せられ、持統天皇の朝に頒布せられた。

おうむ〔王民〕(名)帝王の治下にある民。

おうむ〔鸚鵡〕(名)【動】鸚鵡科に屬する「きばたん」「こばたん」「おほばたん」の通稱。黝帶地方に產し、體は烏乃至鳩程の大いさで、全身は白色、頭上に赤色又は朱鷄色の冠毛を有する。上嘴は短く大くして先端が鉤の如く曲り、舌は肉質に富んでよく人語をまねる。—**いし**〔鸚鵡石〕(名)㊀物の音を反響するといふ石。特殊の岩石や鑛物ではなく、岩石の踏頭等の附近の地形が、反響を起し易いやうに出來てゐるため、人が言葉を發すると、それをまねるやうに響く。言葉石。ひびきいし。㊁俳優のせりふを書きぬいた册子。俳優のこわいろをまねる爲のもの。—**がい**〔鸚鵡貝〕(名)【動】四鰓類鸚鵡貝科の軟體動物。殼は鸚鵡の嘴に似、體殼は螺旋狀で、內室は數室に分れ、最外部の大房に體を收む。色白く、褐色又は紫褐色の斑文がある。內面は黑色。地質時代に繁榮し、現存する種類は少い。—**がえし**(がえし)〔鸚鵡返〕(名)(鸚鵡の人言を眞似るに譬へていふ)㊀他人のいひかけた和歌を少しくかへて盛りにいひかへすこと。㊁人からさされた杯の酒を少しく


〔鸚鵡〕


〔貝鸚鵡〕

飲んで直ちに返杯すること。㊁學說・議論・談話などを聞いたままに逃べること。**—のさかずき**[鸚鵡杯](名)鸚鵡貝でつくった杯。**—の**[鸚鵡袖](名)あうむの裳を織り出した美しい着物の袖。**—よく言へども飛鳥を離れず**(句)(禮記曲禮上篇の句)鸚鵡は人言をまねて達者に話すが、やはり鳥類である。

おうめい[嚶鳴](名)㊀鳥の互に睦じく啼きかはすこと。㊁朋友の睦しく唱和すること。

おうめい[鷗盟](名)俗界を離れた會合。詩文の會などの類。

おうめい[王命](名)帝王の命令。

おうめんきょう[王猛](名)【人】支那、五胡十六國時代の前秦の臣。字は景略。桓溫、關に至る時、褐袍を着てこれに見た、虱をひねって當世の事を談じた。苻堅に仕へて、尚書令・太子太傅・輔國將軍・丞相に歷任し、建元十一年歿。(三三五—三八五)

おうもう[王莽](名)【人】支那、前漢末の簒立者。字は巨君。平帝を弑し、孺子嬰を立て、自ら攝皇帝の位に居り、新皇帝と稱し、國を新と號した。在位十五年。更始元年漢の劉秀長安に入るに及んで敗死。(紀元前四五—紀元二三)

おうもうにち[往亡日](名)凶日の名。一年間に十日あって、陰陽家では、出陣・旅行・外出を忌むといふ日。

おうもくじゅうひ[横目縱鼻](名)人間の面相。

おうもん[應門](名)㊀支那で、王宮の正門。㊁門や玄關にあって、來訪者の取次をすること。

おうもん[應問](名)質問に應答すること。

おうもんきん[横紋筋](名)【生】橫紋を有する筋肉。多く動關節に於って隨意運動を司る。

おうゆ[應用](名)【佛】佛・菩薩が、衆生を救濟するために、いろいろに姿を變へて現はれる不思議はたらき。「ばをきかず」ことの。㊁おまかせ。おほらか。

おうよう[鷹揚](名)㊀勢の伸びはること。㊁はたらき。

おうよう[汪洋](名)水面の廣廣としたさま。

おうよう[應用](名)㊀原理を實際に活用すること。㊁場合に應じてはたらかして用ひること。**—かがく**[應用科學](名)一定の原理を實際に活用する科學で、工學・農學・醫學・航海學などの類。**—かがく**[應用化學](名)㊀【化】化學中の應用に關する部分を研究する生物化學・農藝化學・工業化學などの。㊁工業化學の別稱。**—けいざいがく**[應用經濟學](名)【經】經濟學を活用して國民の經濟生活の方針を研究する學問。**—すうがく**[應用數學](名)【數】數學の理論を應用して、自然科學の計數などに實地に活用する學問で、力學・熱學・航海學・測地學の類。**—せんじゅつ**[應用戰術](名)【軍】戰術の原則を實地に活用して、其の適否を研究する術。**—たいそう**[應用體操](名)各種の障碍物に遭遇する爲に行ふ體操。高跳・幅跳の類。**—びじゅつ**[應用美術](名)【美】鑑賞を主とせず、實用品に適用させる美術。純正美術に對し、圖案の類。

おうようしゅう[歐陽修](名)【人】支那、宋の學者・政治家。字は永叔・醉翁・六一居士と號す。仁宗に仕へ、太子少師となり、熙寧五年卒。年六十六。唐宋八大家の一人。文忠と謚せられた。「新唐書」「新五代史」「集古錄」「歐陽文忠公集」「六一居士詩話」等の著がある。(一〇八七)

おうようめい[王陽明](名)【人】支那、明の大儒。名は守仁。字は伯安。陽明と號する。初、致知の學を講じ、後、知行合一の說を唱へた。官、兵部尚書に至り、嘉靖七年安南に卒。年五十七。新建侯を贈られ、文成と謚せられた。其の著に「傳習錄」「王文成公全書」等がある。(一四七二—一五二八)

おうらいる[奥寄る](自動・ラ四)奥の方へ片寄る。(古語)

おうらい[往來](名)㊀ゆきき。ゆきかへり。㊁ゆきゆきの道。道路。往還。㊂書狀往復の文案を集めた書物。**—ものし**[往來手形](名)江戸時代の庶民廻國又は商用旅行の際の、旅行許可券と身分證明書を發れたもの。關所通過の時、是示するを要する。**—どめ**[往來止](名)人・馬・車などの通行を止めること。通行止。**—ほうがいざいの個土**[往來妨害罪](名)【法】陸路・水路・橋梁等を破壞・壅塞して往來を妨害し、又は電車・汽車・艦船等の往來に危險を生ぜしめ、若しくは、これを顚覆・覆沒せしめることによって成立する罪。罰金又は懲役に處せられる。

おうらさま[御裏樣](名)裏方の敬稱。

おうりゅう[横流](名)あふれ流れること。

おうりゅう[横領](名)むりやりに奪ふこと。不法に奪ふこと。ほしいままに領有すること。**—ざい**[横領罪](名)【法】委託された金品を勝手に消費し、又は拾物を屆け出ないで自己の占有とする等の罪。懲役に處せられる。

おうりょう[押領](名)㊀押掠し領すること。おさへつけて支配すること。㊁兵卒を統率すること。**—し**[押領使](名)兵を率ゐて部內の盜賊を捕へ、非違を鎭定する令外の官で、國司・郡司の兼官。

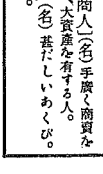
おうりょく[鴛綠](名)鴨の頭の毛の如き綠色。

おうりょっこう[鴛綠江](名)【地】朝鮮と滿洲國との界をなす川。水源は白頭山麓で全長約九百粁。ありなわがは。

おうりん[黃燐](名)【化】(赤燐と區別する爲の稱)黃色の燐。**—マッチ**[黃燐燐寸](名)軸木の頭に黃燐・鉛丹・硝子粉等の調合物をつけたマッチ。安全燐寸。「作る」こと。

おうれい[應合](名)皇太子の命令に應じて詩を作ること。

おうれん[黃蓮](名)【植】毛茛[ちょうけん]科の多年生草本。高さ約三〇糎。葉は三出複葉。その周緣は鋭鋸齒狀をなす。早春長き花梗をぬき、白色の花を開き、中に黃色の種子ある莢を結ぶ。根は健胃劑又は染料となる。



〔蓮　黃〕

おうレンズ[四レンズ](名)【理】(Concave lens)中央薄く、周緣に至るに從って厚くなってゐるレンズ。(凸レンズの對)

おうろ[歐露](名)【地】ヨーロッパにあるロシヤ領の個土。

おうろく[女王祿・王祿](名)貴・白馬節會の巳の日に、女王・王祿・新嘗祭の翌日(十一月中の巳の日)に、絹布・綿等の祿物を賜ふた公卿。

おうわく[枉惑](名)道をまげてたぶらかし惑はすこと。不正。無法。

おえ[汚穢](名)(おわい)。

おえさま[御家樣](名)(おいえさま)。**—がお**[御家樣顏](名)主婦のやうな顏つき。女房氣取。

おえ[御會式](名)【佛】會式の敬稱。

おえっち[唯唯](感)(お)唯)㊀應答の聲。㊁急變に驚き又は急に思ひ出した時に發する聲。

おお[感]

おお[大](接頭)㊀或語に冠して、廣大又は多量の意を表す語。㊁或語に冠して、尊敬又は歎賞の意を表す語。㊂或語に冠して、最初又は根原の意を表す語。㊃或語に冠して、「甚だしい」又は「烈しい」意を表す語。

おお[凡](名)おろそか。なほざり。(古語)

オー[O](名)【論】論理學に於ける殊(特)稱否定命題の符號。

おおあえ[大饗](名)(だいきょう)(大饗)。

おおあかげら[大赤啄木鳥](名)【動】啄木鳥の一種。「おかげら」に似て大きい。腰のあたりが白いもの。

おおあがたぬし[大縣主](名)我が國古代の地方官の一。朝廷何領の大きな縣を治めた縣主。

おおあきんど[大商人](名)手廣く商賈をする人。盛んに商業を營み、大資產を有する人。

おおあくび[大欠び](名)甚だしい あくび。大聲立ててあくびすること。

おおあぐら[大胡坐](名)威張って大きくあぐらをかむこと。無遠慮にゆっくりとあぐらを組むこと。

おおあさ[大浅](名)町村内の小学を含むあた。

おおあし[大足](名)㊀大きな足。㊁おほまた。「しらふこと。横柄につきあふこと。

おおあしらい[大接遇](名)おほやうにあ

おおあせ[大汗](名)多く出る汗。

おおあたま[大頭・大頭](名)㊀大きなあたま。㊁かしらぶん。なさ。領袖。

おおあたり[大当](名)㊀大骨よく適中すること。㊁都合よく大成功すること。

おおあつあつ[大熱熱](名)㊀深く物事に熱中すること。㊁甚だしく恋慕って夢中になること。

おおあな[大穴](名)㊀大きな穴。㊁大きな

おおあなぐり[大穴探](名)甚だしく探ること。(古語)

おおあなむちのかみ[大己貴神](名)【神】おおくにぬしのかみ。大国主神。

おおあに[大兄](名)第一の兄。長兄。総領の男子。

おおあね[大姉](名)第一の姉。長姉。総領の女子。

おおあま[大尼](名)年老いた尼。

おおあまの・おうじ[大海人皇子](名)【人】天武天皇御即位前の御名。

おおあめ[大雨](名)甚だしく降る雨。

おおあや[大綾](名)大紋の綾。又弁の綾の大きなもの。(古語)

おおあらい[大洗](名)【地】茨城縣東茨城郡磯濱町の海濱。風光明媚で、海水浴場がある。

おおあらき[大荒城](名)あらきゐ(荒城)の敬称。(古語)

おおあらめ[大荒目](名)鎧の縅の一種。幅の廣い札(さね)を緋目を太くまばらに綴つたもの。

おおあり[大蟻](名)【動】蟻の一種。體大きく、胸背部は赤褐色、其の他は黒色。松根に巣くって食害する。

おおありくい[大蟻食](名)【動】大蟻食科の奇獣。中央アメリカ・南アメリカの熱帯地方に棲息する。頭胴の長さ一三〇糎位、尾長六八糎位。體の大部は黒色を交へた灰色。全身粗剛な長毛で被はれ、尾長く長毛を有する。巨大にして強力な前肢の爪で蟻の巣をあばき、尖った口吻から長い舌を出して巧みに蟻を舐食する。

〔食蟻大〕

おおあれ[大荒](名)㊀ひどく荒れはてたこと。㊁暴風雨の最烈しいこと。

おおい(感)遠くから人を呼びかける聲。

おおい[大](接頭)(「おほき」の音便)㊀位階の正位を表す語。(ひろいの對)㊁同じ官の高い方を表す語。(すないの對)(以上古語)

おおい[大蘭](名)【植】(ふとい)(大闊)。

おおいぐさ[大蘭草](名)【植】(おおい)。(古語)

おおい[被](名)物をおほふに用ひるもの。おほふこと。

おおいおおいきさいのみや[太皇太后宮](名)(たいこうたいこうぐう)(太皇太后宮)。

おおいがわ[大井川](名)㊀【地】駿河國と遠江國との境にある川源を甲斐・駿河の境の赤石山脈の中心白根山に發し、駿河灘に入る。長さ百二十四粁。江戸時代には、架橋・渡船が禁ぜられたので、旅人は必ず人足を雇って人肩又は蓮台で渡った。㊁京都市右京區嵯峨亀山の下を流れる川で、上流を保津川、下流を桂川といふ。大堰川。

おおいがわ・ぎょうこうわか・じょ[大堰川行幸和歌序](名)【文】醍醐天皇の延喜七年(一五六七)九月十日、宇多法皇が大堰川に御幸のあった時、躬行の貫之・紀恒等七人の歌人が、勅に應じて九首題の和歌を詠進したが、此の時、紀貫之が假名文の序を書いた五百字の短文。

おおいき[大息](名)ふとと吐く息。歎息する時つく息。ためいき。ふといき。

おおいぐさ[大軍](名)烈しいたたかひ。(古語)

おおいぎみ[大君](名)第一の姉君。(古語)

おおいこ[大子](名)(おおいぎみ)(大君)。(良雄は正しくは「まったかひこ」といふ)淺野長矩(ながのり)の家老。赤穂四十七士の頭領。遠藤内蔵助。元禄十四年三月、主君長矩刃傷事件のために死を賜はり邸を除かれるや、子幸高等、遂に同志の士と共に同十五年十二月十四日の夜、吉良義央の邸に躍る報に、細川家に預けられ、翌年二月四日(一三五六三)死を賜ふ。年四十五。

おおいしよしお[大石良雄](名)【人】(「うしよくおおいしよしお」)大炊寮。(古語)

おおいすかさ[大炊寮](名)(おおいりょう)

おおいそ[大磯](名)【地】神奈川縣中郡にある町。東海道五十三驛の一。北に高麗寺山を負ひ、南は海に臨み、風光明媚。遊覧・避暑・海水浴等に適し、別荘が多い。

おおいた[大板](名)茶道の風炉の敷板の大なる方のもの。はんいた。—**ぶき**[大板葺](名)井戸屋形・木戸門等に用ひる屋根で、幅三〇糎程の板を棟から斜になべて、その板のつぎめに目板をうちつけたもの。

おおいたし[大分市](名)【地】大分縣廳所在地。別府灣に臨み、水陸交通の要地。高等商業學校がある。

おおいちざ[大一座](名)多人數の一座。

おおいどの[大炊殿](名)㊀飯を炊ぐ所。㊁京都大炊御門の南、西洞院の東にあった里内裏。又、大炊御門の北、富小路の西にあった後白河法皇の仙洞御所で、九條家の傳領の邸の名。(古語)

おおいに[大い・に](副)㊀ひどく。甚だしく。㊁たくさんに。多くも。(古語)

おおいぬ[大犬](名)㊀【動】犬の一種。形大きく力が強い。狩獵に用ひる。㊁【天】南天の星座。

おおいのかみ[大炊頭](名)大炊寮の長官。(古語)(おいりょう)。

おおいのつかさ[大炊寮](名)(おおいすかさ)

おおいのみかど[大炊帝](名)淳仁天皇。(古語)

おおいば[覆羽](名)鳥の翼をひろげておほふこと。

おおいまつりごとのつかさ[太政官](名)(だじょうかん)(太政官)。(古語)

おおいもうちぎみ[大臣](名)(だいじん)。(古語)

おおいり[大入](名)㊀興行場で裁客の多くはいること。㊁大入場の略。—**ば**[大入場](名)(おいこみ)。(おいこみば)。いりこみ。

おおいりょう[大炊寮](名)昔、宮内省に屬し、御料田の米粟、諸司の食料分給の事を掌った役所。

おおう[被・覆・蔽](他動、ハ四)㊀かぶせる。きせる。㊁上からかけふさぐ。遮りかくす。㊂全部を包む。㊃包みかくす。㊄かぶる。庇護する。㊅着せる。㊆(覆)は上にかぶりふさがる。ふさぐ。かうむる。かぶる。かぶりもせる。かばひかくす。㊇(庇)は小かぶせる。かばふ。たすけまもる。㊈「蔽」は表面をおほひかぶせる。かぶる。着る。㊉(被)は表面をおほひかぶせる。かぶる。着かうむる。かぶる。かぶりふさがる。ふさぐ。「庇」はかくすかぶせる。かばふ。たすけまもる。㊋「奄」は掩にはおほひかくす。おほひ閉ちる。不意うちにする。㊌「蓋」はおほひかぶせる。ふたをする。㊍「蔽」はかぶせつつむ。くらます。ふさぐ。

オーヴァー[Over](名)㊀オーヴァーコート。㊁オーヴァーシューズ。—**ワーク**[Over-work](名)過勞。働き過ぎ。—**シューズ**[Over-shoes](名)雨天・雪天などの際、靴の上にはめるゴム製の上靴。—**コート**[Over-coat](名)外套。—**スエター**[Over-sweater](名)毛糸の上シャツ。—**スロー**[Over-throw](名)野球で、腕を上から下へ振って投げ下す投球法。上手投。—**プロダクション**[Over-production](名)

【經】生薑過剰。**—ラップ**[Over-lap](名)映畫用語。甲の畫面が映ってゐるところに、更に乙の畫面が映り、甲の畫面が次第に消え行き乙の畫面のみ殘る撮影法。二種撮影。

オーヴァー・タイム[Over-time](名)規定時間以外の勞働時間。**—マネー**[Over-time-money](名)規定時間以外の勞働に對する賃銀。

オーヴァーチュア[Overture](名)【音】序樂。前奏曲。

おおうえ[大上](名)貴人の母。おほきたかた。(古語)

オーウェン[Robert Owen](名)【人】イギリスの社會思想家。空想的社會主義者。英國幼雅園・協同社會運動の創始者・勞働銀行の創立者。其の著に「新社會觀」・自傳等がある。(一七七一—一八五八)

おおうじ[大氏](名)上古の一族中の宗族、卽ち本家で、天皇に直隷し、數多の小氏を統率したもの。(古語)

おおうすのみこと……[大碓命](名)【人】やまとたけるのみこと(日本武尊)の御名。

おおうた[大歌](名)【文】(おほうたは敬稱)昔、宮中の大歌所で教習せられた歌曲、又、それを奏する人。(小歌の對)**—どころ**[大歌所](名)昔、諸國の風俗歌・舞樂・雅樂等の歌曲を掌り、大嘗會・新嘗祭などに、舞姫參入の時、初音を奏する等の事を掌った役所。**—はじめ**[大歌始](名)大歌所を開く日。卽ち陰曆十月二十一日。

おおうち[大内](名)だいり。ごしよ。禁裏。皇居。**—がた**[大内方](名)宮中方。(武家方の對)**—ぎり**[大内桐](名)五七の桐の模樣。

おおうち[大内](名)【人】(おほうちは敬稱)源頼朝の臣。故實・朝憲を請んじ政治に進し、はかりごとに富み、賴朝の天下に號令する得たのはその功に依る。頼髑として營阿といふ。嘉祿元年(一八八五)歿。年七十八。

おおえまさふさ……[大江匡房](名)【人】平安朝の學者・歌人。江帥と稱す。後冷泉・後三條・堀河の三朝に仕へ、參議・中納言・大藏卿となり、天永二年(一七七一)歿。年七十一。詩文は紀本朝文粹に、歌は勅撰和歌集に殘る。その著に「江家次第」「江談抄」等がある。藤原長房・藤原伊房と並んで三房の稱がある。

おおえやま……[大江山](名)【地】❶山城と丹波との境にある山。❷京都府與謝郡にある山。其の頂上を千丈が嶽といひ、昔、酒呑童子の棲んだといふ窟がある。海拔約八三三米。

【きな組紐の緒。

おおお[大緒](名)鹿の足を括りに用ひる大抄。(古語)

おおおき[大峯](名)大きな峯。(古語)

おおおぎ[大扇](名)昔、天皇出御の時、御顔をおほひ奉る爲に、左右の女官がさしかけた長い柄の扇。

おおおじ[大祖父](名)祖父の父。ひぢ

おおおかただすけ……[大岡忠相](名)【人】江戸時代の名奉行。通稱は忠右衛門。八代將軍徳川吉宗に用ひられて江戸町奉行となり、裁斷明快を極め、令名があった。越前守に任じ諸侯の列に入る。寶曆三年(一七五三)歿。年七十七。

おおおく[大奥](名)江戸城中の將軍の夫人卽ち御簾所及び女中の住居した所。

おおおじ[從祖父](名)祖父母の兄弟。(古語)

おおおそどり[大嘘鳥](名)烏を罵っていふ語。(古語)

おおおとこ[大男](名)身體の大きな男。**—總身に智慧が廻りかね**(句)(川柳の句)身體ばかり大きくて、愚鈍な男を罵っていふ語。

おおおば[從祖母](名)祖父母の姉妹。(古語)

おおおば[大祖母](名)祖父母の母。ひばば。(古語)

おおおみ[大臣](名)上古の官職。大連と相並んで朝政を執った臣姓の長。(古語)

おおおよび[大指](名)おやゆび。(古語)

おおおろし[大鋸](名)大きな鋸。おが。かがり。

おおがい[大峽](名)大きな山と山とのあひだ。(小峽の對)(古語)

おおがい[貝](名)「厩」などの漢字の右にある「貝」の字。「貝」の字に似て字畫の多いことからいふ。(「小貝」の對)

おおかがみ……[大鏡](名)【文】文德天皇の嘉祥三年から後一條天皇の萬壽二年に至る十四代百七十六年間の事蹟を、藤原道長の榮華を中心として描寫した假名文の歷史物語で、列傳體たる支那の史記に倣って、序文・帝紀・列傳等に別ち、雲林院の菩提講に出會った百五十歳の大宅世繩、百四十歳の夏山繁樹が若侍と語りあひつつ批評してゆく構想である。

おおかかり……[大掛](名)大仕掛の準備。大計畫。

おおがき[大垣](名)居宅の周圍の大きな垣。

おおがきし[大垣市](名)【地】岐阜縣にある市。東海道線の一驛。大垣城址がある。

おおがさ[大傘](名)柄長くさしかさすやうにした大きな傘。

おおがしら[大頭](名)❶竿の先に馬の尾又は熊襲の掌を束ねたもの。御旗・御鑓の時に用ひる。おにがしら。たつ(龍)。❷多人數の長。(小頭の對)

おおかしわで・つかさ……[大膳職](名)明治二十二年より同四十一年一月まで、宮內省に屬し、諸國の調雜物及び膳部に關する一切の事を掌った職。だいぜんしき。

おおかぜ[大風](名)あれくるふ風。**—のあと**(句)大騷のあった後の靜けさ。「八九。よよそ。

おおかた[大方](名・副)大抵・あらかた。十中八九。

おおかた[大方](名)貴人の母。(古語)。

おおがた【大形】(名) ㊀大きな形。(小形の對)

おおかたなし【大方なし】(形、ク) なみなみでない。甚だしい。

おおかたびら【大帷子】(名) ㊀裝束の下に着るもの。布で作り、單衣(ひとえ)より小さく短い。中古には汗取として冥だけ用ひた。後世は夏冬共に用ひた。色は春・冬は白、夏は紅。㊁裃をこはくつけた白布で仕立て、武家で、單衣の直垂の下に重ねて着用したもの。

〔㊀子帷大〕

オーガニゼーション[Organization](名) 組織。編成。—**オブ・インダストリー**[Organization of Industry](句) 產業組織。(古語)

おおがね【巨鑑】(名) つりがね。梵鐘。(古語)

おおがね【大矩】(名) 大形の三角定規で、土木・建築に於いて直角を測定するに用ひる。

おおがね【大金】(名) 多くの金錢。たいきん。おほまうけ。—**もうけ**(ヨウ)【大金儲】(名) 大金を儲けること。おほまうけ。—**もち**【大金持】(名) 多額の財產を有する人。富豪。

おおかぶら【大鏑】(名) 鏑矢の、鏑の大なるもの。

おおかべ【大壁】(名) 土藏の壁のやうに、全體を壁で塗つたもの。

おおかま【大鎌】(名) 鎌は曲つてゐることから、人の心の邪曲なのに譬へていふ語。

おおかみ【大神】(名) 神の敬稱。おほかみか。

〔狼〕

おおかみ【狼】(名) 【動】食肉類の獸。性猛惡で深山に棲み、夜間群をなして徘徊し、餌を求めて人畜を害し、吠聲遠く響く。形は和犬に似て瘠せ、耳小さく、口大きく眼鋭く、全身黃灰色若しくは赤褐色、前肢に五爪、後肢に四爪ある。—**もの**【狼者】(名) 性獰惡で横暴な人。—**れん**【狼連】(名) 女義太夫の樂人に、けしからぬ野心を抱く男子の仲間。—**の衣**(句) ㊀表面は柔順で內心の恐るべき人。㊁衣服の大きくて身體にあはぬもの。

おおがみのまつり【大神祭】(名) 昔、四月と十二月との上の卯の日に行はれた大物主神を祀つた祭。

おおかめのき【植】忍冬(すいかづら)科の落葉灌木。葉は廣楕圓形又は圓心形。夏、繖狀圓錐花序に白色の花を開き、黑熟する果實を結ぶ。

おおがら【大柄】(名) ㊀身體の、普通より大きなこと。㊁普通より大きな鍋柄。

おおがら【大辛】(名) 七色唐辛子、味の極めて辛いもの。(中辛・小辛の對)

おおかり【多かり】(自動、ラ變) 多くある。

おおがり【大雁】(名) 【動】ひしくひ。

おおがんどう【大强盜】(名) ㊀おほはすびと。大盜。㊁人を罵つていふ語。

おおき【大】(接頭) ㊀おほきなこと。すぐれたこと。(古語) ㊁おほい(正)。(ひろい(從)の對)(古語)

おおき【正】(接頭) おほい(正)。(ひろい(從)の對)(古語)

おおきい【大きい】(形、ク) (おおきし)

おおきおおいどの【太政大臣】(名) (だじようだいじん)。(古語)

おおきおおいもうちぎみ【太政大臣】(名) (だじようだいじん)。(古語)

おおきおとど【太政大臣】(名) (だじようだいじん)。(古語)

おおきおまえ【大御前】(名) 貴人の母の敬稱。おほかた。おほきたのかた。(古語)

おおきおみ【大臣】(名) 大臣。(古語)

おおきさき【大后】(名) 皇后。(古語)

おおきさい【大后】(名) 「おほきさき」の音便。(古語)

おおきさき【大后】(名) ㊀皇后。(古語) ㊁皇太后。(古語)

おおきし【大きし】(形、ク) ㊀ひろい。㊁多い。㊂重い。㊃年が長けてゐる。㊄しまりがない。㊅聲高い。高い。㊆度量が廣い。㊇甚だしい。

おおきたかとう【大木喬任】(名) 【人】佐賀藩士。伯爵。明治元年徵士として出仕し、後、司法大臣・文部大臣・元老院議長・樞密院議長に歷任し、明治三十二年五月九、薨。年六十九。

おおきたのかた【大北方】(名) 貴人の母。(おうえ)(大上)。(古語)

おおきたのまんどころ【大北政所】(名) 攝政・關白の母の尊稱。おほまんどころ(大政所)。(古語)

おおきど【大城門・大城戶】(名) 大きな城の出入口に設けた關門。㊁構造の大きな木戶。㊂昔の劇場の事務員の職名。㊃大阪の遊郭、新町の東の大門。

おおきなかお【大顏】(名) ㊀はばの廣い顏。㊁尊大な顏つき。

おおきに【大きに】(副) ㊀甚だ。大いに。㊁ありがたう。—**御世話**(句) いらぬ世話。餘計な世話。

おおきまちてんのう【正親町天皇】(名) 第百六代の天皇。御名は方仁(ひと)。後奈良天皇の第一皇子。弘治三年卽位。皇室式微の爲、毛利元就の獻資によつて卽位禮を行はれた。又、織田信長に詔して、皇威の振作を計らせ給ふ。在位二十九年、文祿二年崩御。(一三二七)

おおきみ【大君】(名) ㊀天皇の尊稱。㊁親王及び諸王の敬稱。—**すがた**【大君姿】(名) 衣冠・束帶の人人の中に直衣姿のうち解けた姿。—**の**【大君の】(枕) みかさ(御笠)の枕詞。

おおきみ【大君】(名) 若君に對して主君を呼ぶ。わうきみ(王女)。(古語)

おおきみおんな【王女】(名) 女王。ひめみ。

おおきみずかさ【正親司】(名) 昔、宮內省に屬し、皇族の名籍・年祿・時服の事などを掌つた役所。おほきみのつかさ。おほきんだちのつかさ。

おおきもいり【大肝煎】(名) (おおじょうや)(大庄屋)。

おおきもうちぎみ【大臣】(名) 「(つぎみ)(大臣)の音便。大臣。(古語)

おおきまま【おおきやか】(名) 大いなるさま。したたか。

おおきやか【大きやか】(名) 大いなるさま。諦大。

おおぎり【大切】(名) ㊀大きく切りわけた切身。㊁芝居の狂言で、その日演ずる最終のもの。おほづめ(大詰)。㊂物事のなはけり。

おおぎょう【大形】(名) 必要な程度を越えて大仕掛なこと。實際よりもおほげさなこと。おほげさ。誇大。

おおぎり【大切】(名) 切斑の一種。

おおきん【小切斑の對】(名) 切斑の矢羽。(小切斑の對)

おおきんだちのかみ【正親正】(名) (おおきんだちのつかさ)の長官。

おおきんだちのつかさ【正親司】(名) (おおきみずかさ)。

おおく【多く】(副) おほかた。あらまし。ただ時に多くの句を吟ずること。

おおくかず【大句數】(名) 【文】俳諧で、一句・又は一つにまとめること。總括。

おおぐくり【大括】(名) 全部を一つにくくり、又は一つにまとめること。總括。

おおぐそく【大具足】(名) ㊀刀・矢などすべて長大な武器。㊁大形の鎧。

おおくち【大口】(名) ㊀大口袴。㊁茶道で、釜又は水指に水を入れる道具。—**ばかま**【大口袴】(名) 昔、束帶の時、表袴(うへはかま)の下にはいた一種の袴で、紅の生

〔袴口大〕

絹・平絹・張絹などで製した褌の口の大きく廣いもの。武家時代には、直筋・水干の下に用ひられた。

おおぐち（大口）(名) ㊀口を大きく開くこと。㊁おほげさなことをいふこと。

おおく—をきく（句）諺 大なることをいふ。

おおくにぬしのかみ（大國主神）(名)【神】神代の出雲の主神。葦蘆鳴尊の御子とも六世の孫ともいふ。少彦名神と協力して天下を經營し、又、禁厭・醫藥の道を敎へ、國土を天孫瓊瓊杵尊に讓って杵築の地に隱退せられた。今、出雲大社に祀る。

おおくび（大領）(名) 袍・狩衣などの襟領（えりぐび）の前襟。おくみ。

おおくぼ—しぶつ（大窪詩佛）(名)【人】江戸時代の詩人。通稱柳太郎。字は天民。常陸の人。草書をもよくし、性酒落で奇行が多い。天保八年（一四九七）歿。年七十一。「詩聖堂詩集」「詩學自在」「詩聖堂詩話」等の著がある。

おおくぼ—ただのり（大久保忠敎）(名)【人】德川氏の重臣。通稱彦左衛門。家康に仕へて戰功あり、常に大議に參與し、秀忠・家光の三代に仕へた。勤儉にして奇行に富む。寛永十六年（一六三九）歿。年八十。

おおくぼ—としみち（大久保利通）(名)【人】明治維新の功臣。薩兒島藩士。字は正助、後一藏と改む。甲東と號す。藩務奉還の事に努め、參議・大藏卿・內務卿に歷任し、征韓論起るやその非を辯じ、征臺の役には全權辨理大使として清國に赴き、又、西南の役に功があった。明治十一年（一八七八）五月、島田一郎等の爲に紋せられた。年四十七。右大臣・從一位を追贈し、後嗣に爵位を授けられた。

おおくぼ—ひこざえもん（大久保彦左衛門）(名)【人（おおくぼただのり）】大久保忠敎。

おおくま—ことみち（大隈言道）(名)【人】江戸時代末期の歌人。常堂と號す。福岡の人。前代模倣の歌風に慊らずして、自ら一派の歌道を拓いて進んだ。明治元年（一三二八）歿。年七十一。其の著に「ひとりごち」「こごのちり」「草徑集」等がある。

おおくまざ（大熊座）(名)【天】【Ursa Major】北天に見える星座。星の數二百二十七、其の主なものは北斗七星である。西洋では星の並び工合を熊になぞらへて命名したが、支那では、北斗・斗は酒を飲む器といって柄杓の形としてゐる。この星座の第一・第二の星は、北極星の位置を知る目標となる。

おおくましげのぶ（大隈重信）(名)【人】明治・大正の政治家。侯爵。佐賀の人。參議・外務卿・內閣總理大臣・早稻田大學總長として敎育にも盡瘁した。大正十一年（一九二二）歿。年八十五。

おおぐみ（大組）(名) 新聞の印刷で、一部分づつ組んだ活字列を全部まとめて一頁の大きさに組上げること。又、そのもの。

おおくめのかみ（大久米神・大來目神）(名)【神】大久米部の遠祖。神武天皇東征の先導を勤めて功のあった神。

おおくめべ（大久米部・大來目部）(名) 上古、朝廷の守衛に當った兵士。

おおぐも（大蜘蛛）(名)【動】蜘蛛の一種。平蜘蛛に似て體大きく色は黃褐色、脚長く毛が多い。

おおくらきはちろう（大倉喜八郎）(名)【人】實業家。男爵。新潟縣新發田町の人。公共事業に貢獻する所が多かった。昭和三年（一五八八）歿。年九十二。

おおくらきょう（大藏卿）(名) ㊀古への大藏省の長官。㊁明治十八年、官制改革以前の大藏省の長官。

おおくらじかん（大藏次官）(名)【政】各省次官の一。大藏大臣を輔佐し、各部局の事務を統轄する官。政務次官と事務次官とがある。

おおくらしょう（大藏省）(名) ㊀古への八省の一。太政官に屬し、出納・貢調・權衡・度量・資買・金銀・珠玉等に關する事務を掌った官廳。おほくらのつかさ。㊁政現今の各省の一。大藏大臣の統轄の下に、租稅の徵收及び國家の出納・國債・造幣等の事を掌る機關。

—しょうけん（大藏省證券）(名)【經】會計年度內に、歲入の不足を塡補する爲に大藏省が發行する短期の公債證書で、十二箇月を以て償還の最長期とする。

おおくらだいじん（大藏大臣）(名)【政】各省大臣の一。政府の財務行政を總轄し、會計・租稅・出納・貢幣・國債・預金・信託・保管物・銀行等に關する事務を管理し、且府縣・市町村及び公共組合の財務を監督する者。

おおくらたいふ（大藏大輔）(名) 往古の大藏省の次官。

おおくらのかみ（大藏卿）(名)（おおくらきょう）。(古語)

おおくらのつかさ（大藏省）(名)（おほくらのつかさ）。(古語)

おおくらりゅう（大藏流）(名) ㊀大藏宗金を祖とする能樂小鼓の一派。㊁大藏朝右衛門を祖とする能狂言の一派。

おおぐれ（大暮）(名) 體格などの大きいこと。

おおけいず（大系圖）(名) 往古、氏の嫡流が、分家よりの報告に基づいて、生死其の他の異動を記入した系圖。

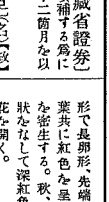
オーケー（O.K.）(名・感)（All correct の略）合點だ。「萬事承知」「オーライ」「完了」「檢査濟」等の意に用ひられる。

おおけさ（大袈裟）(名) ㊀まほどにもないことを大きくいふこと。㊁肩から斜に切りおろすこと。

おおけし（大けし）(形・一)（おほけし）。(古語)

オーケストラ（Orchestra）(名) ㊀音樂くの樂器を用ひて重音の畫樂曲を合奏すること。その中心となすものは絃樂器で、之に管樂器及び打奏樂器を用ひる。管絃樂。㊁劇場・公會堂等に設けた音樂演奏席。オルケストラ。㊂合奏團。**—ボックス**（Orchestra-box）(名)（洋式劇場で、舞臺の直下にあって、オーケストラを奏する所。

おおけたて（大毛蓼・紅草）(名)【植】蓼科の一年生草本。高さ一米半位。蓼は長柄を有し、大形で長卵形、先端尖る。葉共に紅色を呈し、毛事を密生する。秋、穗狀なして深紅色の花を開く。



おおけつひめのかみ（大宜都姫神・大氣都比賣神）(名)【神】伊弉諾尊の御子。五穀をつかさどり給ふ神。とゆけひめのかみ（豐受姫神）。

おおけなし（大けなし）(形・一) 不相應である。過分である。(古語)

おおけばな（大下馬）(名) 大きな下馬の標木。

おおけみ（大檢見）(名) 代官の檢見。(小檢見の對)

おおごうし（大格子）(名) ㊀大棒への遊女屋。㊁五穀縞の大なるもの。(つづれし小格子の對)

おおごうもり（大蝙蝠）(名)【動】蝙蝠の一種。形大きく鼠大で、翼は一米以上。果實を好んで食する。小笠原島・琉球に稀息する。

おおごし（大腰）(名) ㊀相撲の手の一。㊁女の腰束に用ひる裳の紐の一種。

おおごしょ（大御所）(名) ㊀隱居した將軍の居所、轉じて隱居した將軍の稱。㊁表面には活動せぬが、隱然政界に大勢力を有し、內閣の更迭には必ず參與する政治家。㊂すべて其の道の大家の第一人者。「文壇の—」。

おおごしょう（大小姓）(名)（おほこしょう）。奥小姓・小姓組等の總稱。(小小姓の對)

おおごすん（大五寸）(名) 長さ二寸二分

おおごと（大事）(名) 重大な事柄。大事件。

おおごばん（大御番）(名) 江戸幕府の職制の一。平時は要地城塞の守備に當り、戰時には先鋒となったもの。

おおごもり（大籠）(名) 多人數のおこもり。

おおさいばり（大前張）(名)【音】神樂歌の

オーサー（Author）(名) 著述家。作家。著者。

歌曲の一。(小前張の對)

おおさか・あさずけ〔大阪浅漬〕(名) 浅漬の一種。細い大根を塩と共に鹽漬とし、重い壓石をかけたもの。一夜を經れば食し得る。

おおさか・わら〔大阪瓦〕(名) 宮殿・神社・佛閣等に用ひる大形の瓦。ひろまもの。やぐらもの。

おおさか・きりずけ〔大阪切漬〕(名) 蕪と大根とを等分に塩薬とともに刻み込み、鹽を入れて揉み合はせ、強くしてならした漬物。

おおさか・どうし〔大阪格子〕(名) 横桟なみえ。其の間にとりはづしの出來る細格子の障子をはめたもの。店と奥の間・茶の間と茶所との界などに用ひる。

おおさか・さんごう〔大阪三郷〕(名) 大阪の南組・北組・天滿の三區劃をいふ。

おおさかし〔大阪市〕(名)【地】大阪灣頭淀川の口に發達した都會。市域約一八五方粁。本邦第二、世界第六の大都市。我が國經濟商業の中樞である。北・此花・東・西・港・天王寺・淀川・東淀川・東成・住吉・西成の十三區に分つ。產業は工業最もよく發達して、東洋のマンチェスターと呼ばれ、紡績・電鍍・船舶・雜貨等の製產が特に多く、貿易は綿絲布・綿製品・蔬機械等の輸出、鐵原料・絲綿等の輸入が多い。交通は、最もよく發達して、內外の航路よく通じ、又、關西に於ける鐵道網の中心をなし、東海道線・福知山線・西成線・港灣鐵道・關西線・城東線等があり、郊外電車には、阪神・阪急・京阪・新京阪・大軌・參宮・南海・阪和等があり、又、飛行便もはやく發達してゐる。海・陸和等があり、又、飛行便もはやく發達してゐる。學校の著名なものに、大阪外國大學・私立關西大學・大阪高等學校・大阪外國語學校・府立淀高等學校・府立女子專門學校等がある。

おおさが・じょう〔大阪城〕(名) 大阪市東區馬場町にある城。石山本願寺の舊地。天正十一年(一二四三)豐臣秀吉の築いたもので、周圍凡そ十二粁。石壘高く濠堀深く、規模の壯大な忍ばせる。今は第四師團の本營となる。昭和六年、大阪市は舊規により、天主閣を設けた。

おおさかじょうだい〔大阪城代〕(名) 江戸幕府の職名。大阪城に駐在して諸役人を總括し、市中の訴訟と警備とを掌り、關西諸大名の動靜を監視したもの。

おおさかじょうばん〔大阪定番〕(名) 江戸幕府の職名。大阪城に在勤し、大阪城代に屬し、京橋口と玉造口とを守備したもの。

おおさかずけ〔大阪漬〕(名) 大阪淺漬と大阪切漬との總稱。

おおさかずち〔大阪土〕(名) 壁に用ひる赤黄色の上塗土。

おおさかど〔大阪戸〕(名) 漆喰塗にした土蔵の引戸。

おおさかにわか〔大阪俄〕(名) 大阪で興行する滑稽寄門の道化芝居。

おおさかまちぶぎょう〔大阪町奉行〕(名) 江戸幕府の職名。大阪に在勤し、城代・定番と議して、市務・訴訟を掌り、攝・河・泉・播に於ける幕府直轄地の租稅の徵收を掌つたもの。

おおさくらそう〔大櫻草〕(名)【植】櫻草科の多年生草本。我が國の特產。高さ三〇糎位。本州北部の高山や北海道に產する。葉は腎臟狀の圓形で、掌狀に淺裂し、缺刻狀の齒牙緣を有し、長葉柄を具す。又、紫紅色の花を開き、線形花序をなす。

おおさけ〔大酒〕(名) 多量の酒。**—のみ**〔大酒飲〕(名) 一時に多量の酒を飲む人。たいしゅが。

おおざっぱ(名) ❶小雨に、こだはらぬこと。緻密ならぬこと。おほまか。❷あらまし。おほよそ。

おおざと〔邑・阝〕(名) 漢字の部首の一。

おおさび〔大皺〕(名) 烏帽子の皺の大小不揃で、岩石の面に似たもの。

おおし〔大羊蹄〕(名)【植】蓼科の多年生草本。肥大な根を有し、葉は綠邊波狀をなして卵形、長き葉柄を有する。夏秋の候、田舍に雜花序をなす小形の淡綠白色の花を穀る。根は下痢及び健胃劑に用ひられる。からだいわう。「さんであるのあまたである。

おおし〔凡〕(副) およそ。(古語)

おおし〔多し〕(形、一) 數多がたくさんである。「しい。

おおじ〔大路〕(名) 廣い道路大道。(小路の對)

おおじ〔雄雄し〕(形、二) 勇ましい。(古語)

おおじ〔祖父〕(名) ❶父母の父。ちち。おぢ。❷老翁。(古語)

おおしお〔大潮〕(名) 一箇月中で最もさしひきの多い潮。陰暦の一日及び十五日のあげしほ。太陽及び月が、地球に對して同方位にある時か、又は地球が太陽と月との間にある時に起こる。

おおしお・へいはちろう〔大鹽平八郎〕(名)【人】大阪の與力。名は後素。字は子起。中齋と號し、洗心洞を以て其の室に名づけた。吏務に熟達し、陽明學に通じ語生を教へた。天保八年(一二九七)の饑饉に救濟を奉行に請うて聽かれなかったので、家財を盡くして窮民を救ひ、大阪城を攻めようとして事敗れ焚死した。年四十四。其の著に「古本大學刪目」「洗心洞劄記」等がある。

おおじか〔麁〕(名)【動】偶蹄類の獸。形、鹿に似て大きく、毛に斑なくして、牡は青黑色、牝は褐色、角は牡にのみ生じて毎年脫けかはり、其の度毎に枝を增す。

おおじかけ〔大仕掛〕(名) 仕掛の大きいこと。

おおじがふぐり〔螺蛸〕(名)【動】がまがえる(蟇蛙)の卵塊。秋の末樹枝につき、初めは唾の如く、後には凝って黑褐色となる。あしまき。あしがらみ。

おおしきあみ〔大敷網〕(名)【漁】敷網の一種。魚の通路を要する逗網又は返しと、魚を集め捕へる筵網又は魚取網とからなる網。

おおしこうち・のみつね〔凡河內躬恒〕(名)【人】平安朝の歌人。字多・醍醐の兩朝に歷事し、和泉大掾に至る。古今和歌集の撰者の一人で、紀貫之・壬生忠岑と並び稱せられた。延喜七年(一五六七)歿。年四十九。家集に「凡河內躬恒集」がある。

おおしだい〔大時代〕(名) ❶甚だしく古びて疎味あること。❷新しい流行をおはぬ傾向。

きょうげん〔大時代狂言〕(名) 芝居狂言の時代物の中で、源平時代以前の狂言。王代物に同じ。

おおした・つ〔生立つ〕(他動、タ下二) そだてあげる。

おおし・ばい〔芝居〕(名) ❶設備の大仕掛の芝居。❷江戸時代に幕府から興行を許せられた劇場で、江戸では、中村・市村・森田の後に守田の三座。「きなもの。

おおし・ほ〔大鯰〕(名) 烏帽子のしほの疎く大きな烏帽子。

おおしま〔大島〕(名) ❶大きな島。❷【地④】大隅國五郡の一で、薩摩國坊岬の南方に散在せる群島中の最も大なる島で、東西七十六粁、南北二十粁、周囲二百九十六粁餘。◎國東地方の相模灘の南方限る火山島。東西八粁、南北十二粁、周囲約四十三粁。東京府管下で元村と島嶼が置かれてゐる。三原山に高さ約七五五米)が噴火してゐる。❸大島紬。

—つむぎ〔大島紬〕(名) 大隅國大島から產出する紬。手工で紡いだ糸を鹽とで褐色に染めて飛白に織つた絹織物。

—の〔大島風通〕(名) 風通の織方によって、結糸を表と裏に現し、絣織のやうな文を現した絹織物。

—りゅう〔大島流〕(名) 大島伴六の流とする稽古の一派で、江戸時代の始めに起つたもの。

おおしまりょうた〔大島蓼太〕(名)【人】江戸時代の俳人。名は平太。信濃國の人で雪中庵三世と稱する。作句の伎倆は天蘭の才藻で、巧みに天然・人事を描寫した。天明七年(一二四七)歿。年八十。其の著に「蓼太句集」「筑波紀行」

「俳諧付合小鏡」「俳諧發句小鏡」等がある。

おおしもと【大椿】(名) 大きなしもと。〈古語〉

おおじょいん【大書院】(名) 大きな書院。武家の客間。おもてざしき。

おおしょうじょう【大猩猩】(名)【動】ゴリヨ。

おおしょうだん【大上段】(名) 力なこめて勢よく、得物を頭上にふりかざした構。

おおじょうや【大庄屋】(名) 多くの庄屋の上に立って、旗い區域を支配する庄屋。帶刀を許された。おほざもいり。大横目。

おおじょうろう【大上臈】(名) 禁中の女官の最上位のもの。又、幕府でも管して此の名稱を用ひた。〈近松門左衛門作「冥途の飛脚」の召使ふ女の」ことに用ひてゐる。

おおす【果す】(他動・サ下二)

おおす【生す】(他動・サ四) ❶成長させる。はやす。〈古語〉❷養ふ。そだてる。〈古語〉

おおす【負す】(他動・サ下二) ❶せおはせる。〈古語〉❷うけもたせる。かつぐ。〈古語〉❸金を借らせる。〈古語〉

おおす【課す】(他動・サ下二) ❶貢物を出させる。〈古語〉❷割りあててさせる。〈古語〉❸相應ならしめる。似合はせる。〈古語〉

おおす【仰す】(他動・サ下二)「いふ」の「いひつ」の敬稱。おっしゃる。お命じになる。

おおず【大都】(名・副) おほよそ。おほかた。

おおずがおつじ【大須賀乙字】(名)【人】明治時代の俳人。福島縣の人。新領向の句を作り「常磐木」「人生と表現」「懸葵」「石楠」等の俳句雜誌に關係した。大正九年(一五八〇)没。年四十。其の著に「故人春夏秋冬」「俳句評釋」「乙字俳論集」「俳句の研究」「俳句講子論」等がある。

おおずかみ【大摑】(名) ❶大きくつかむこと。❷大盃をすべくくること。❸およそ。あらまし。

おおすけ【大介】(名) ❶中古以後、年給として國司を勝にした公卿の推擧によって國守に任ぜられ、國衙に政務を執るものが、國符・廳宣等の公文書に自署する場合に「守」に代へて用ひた稱號。❷祖先以來、地方に土著して檢斷の職を執ったもの。

おおずじ【大筋】(名) あらましの筋。

おおずつ【大筒】(名) 大砲。火砲。

おおずつば【大透波】(名) 大ぬすびと。

オーストラリヤ[Australia]【濠太利】(名)【地】世界最小の大陸。東は太平洋、西及び南は印度洋、北はアラフラ海に面する。面積約七五萬方粁。英國の自治植民地。羊毛の産出は世界第一。金・銀・石炭等の産出も多い。所謂白人濠洲主義を唱へて亞細亞人種の移住を拒否してゐる。濠洲。

オーストリヤ[Austria]【墺太利】(名)【地】ヨーロッパに於ける一共和國。面積九千六萬百五十方粁。我が北海道より稍〻大きい。首府はウィーン。オーストリー。

オーストリヤン・スクール[Austrian School]【墺】(名)【經】オーストリヤ派經濟學。墺國經濟學者カール・メンガーによって創始された主觀主義的經濟學。限界效用學。

おおずな【大綱】(名) ❶太い綱。❷おほくくり。

おおすべらかし【大垂髪】(名) 婦人の髪に髱をかぶへ、背後に長く垂れ下げたもの。「り。

おおずめ【大詰】(名) 芝居狂言の最終。おほさ

おおせ【仰】(名) ❶おいひつけ。御命令。❷おことば。**—いだし**【仰出】(名) おきしつ。いひつけ。御命令。**—いで**【仰出】(名) 前條に同じ。**—がき**【仰書】(名) 仰の旨を書いた文書。

ごと【仰言】(名) 仰のこと。御命令。**—ぶみ**【仰文】(名) おほせがき。

おおせい【大勢】(名) 多くの人。大衆。民衆。**—に手なし**(句) 民衆の輿論には手段の施しようがない。

おおせいろうだな【大西樓棚】(名) 床間又は書院などの脇に取附ける棚の一種。

おおせき【大關】(名) ❶力士の階級の上位の一。❷仲間の中で最もすぐれたもの。

おおせった【大世帶】(名) ❶大きなくらしむき。❷家族の多い家の生計。

おおせっき【大節季】(名) 一年の終。年末。

おおせんじ【大宣旨】(名) 大臣が宣し、辨官が奉する宣旨で、太政官から被官の諸司や社寺などに下した公文書。

おおぞう【大ざう】(名) おもてむき。〈古語〉

おおそば【大相場】(名)【經】大變動の相場。

おおそうだい【大總代】(名)「おおしょうだい」。

おおぞうりとり【大草履取】(名) 主人の草履を持って供する奴僕の中、若者を小草履取と稱したのに對して成人したものをいふ。若衆姿でない草履取。

おおそうりょう【大總領】(名) 本家の總領。

おおそで【大袖】(名) ❶昔の禮服で、袖口廣く、小袖の上に着る服。❷大鎧の袖。❸幅廣く仕立てた袖。

オーソドックス[Orthodox](名) 正統派。宗教では、教主の教義を正しく繼承してゐる宗派。學術では、教主の教義を正しく繼承してゐるもの。なみたいてい。なほざり。よのつね。

おおぞら【大空】(名) ❶廣大な天。そら。❷

おおそり【大反】(名) 刀のそりの大きなもの。

オーソリティー[Authority](名) 權威。權力。大家。當局。

オーダー[Order](名) ❶規律。❷命令。❸勤章。❹註文。❺野球用語。順。バッティング・オーダーの略。打撃順。

おおだいかん【大鯛】(名)【動】(まだい)〈眞鯛〉。

おおだいかんだい【大代官】(名) 武家時代の職名の一。もと地方の守護に任ずるものであったが、鎌倉・都代・郡奉行の類。

おおだいこ【大太鼓】(名)【音】❶大きな太鼓。❷舞樂に用ひる一種の太鼓。周圍に木の外輪を用ひ雲形をきざみ、上に火焔の彫刻がある。火焔太鼓ただいこ。❸芝居囃子の方用ひる大きな太鼓。❹西洋音樂に用ひる大きな太鼓。ドラム。

おおたか【大高】(名) ❶こしだか(腰高)。❷おほたかだんし。**—だんし**【大高檀紙】(名) 檀紙の一種。地白く厚く横に皺があるもの。備中・越前などから産する。

おおたか【大鷹】(名)【動】❶大きな鷹。❷鷹の雌。雄より大なるを以ていふ。これを用ひる鷹狩を大鷹狩といふ。

おおたがきれんげつ【太田垣蓮月】(名)【人】江戸時代末期の女流歌人。因幡の人太田垣光古の妻。初の名は園。尼となって蓮月と號し、千種有功の門に和歌を學び、陶器を製して自詠の歌を書きつけた。歌風は優美纖細。又、俳句をも作った。明治八年(一八七五)没。年八十五。歌集に「海士の刈藻」「蓮月歌集」がある。

おおたかげんご【大高源吾】(名)【人】赤穂四十七士の一人。名は忠雄・子葉と號する。俳諧を善くし茶事を好むも後、野長短の死後、藩士新兵衛と改名し、茶師羽倉齋から吉良邸の内情を探り仇討に資した。元祿十六年(一三六三)死。年三十一。

おおたち【大太刀】(名) 中古、戰場に出る時背に負ひ、又は肩に擔って持っていった太刀。

おおたちまわり【大立廻】(名) 烈しいたちまはり。

おおたてあげ【大立揚】(名) すれあての一種。膝頭から上を大きくし、外側を縫に長く腹を張ふやうにしたもの。

おおたてもの【大立物】(名) 兜の前だてもの。「の特に大きなもの。

おおだてもの【大立者】(名) ❶一座中で技倆の最もすぐれた役者。❷或社會で最も尊重せられる人物。

おおたどうかん【大田道灌】(名)【人】武將。關東管領扇ヶ谷上杉氏の臣。初の名は資長。後、持資と稱し、蕨城・道灌と稱した。築城・兵馬法に長じ、江戸城を築造し、又、川越・岩槻・鉢形の諸

城を築く。兵馬の間も、讀書を廢さなかつた。和歌集に「暮景集」の著がある。文明十八年(一四八六)其の主定正に謀殺せられた。年五十五。

おおたなんぼく【大田南畝】(名)【人】江戸時代の學者、狂歌師。戲文家。名は覃、通稱は直次郎。蜀山人・四方赤良・四方山人・寝惚先生・竹羅山人等の號がある。學は和漢雅俗に亙り、性、洒落・諷逸、世事を滑稽化して時勢を達觀・諷刺する所、古今獨歩。實に代表的の狂歌師であつた。文政六年(一八二三)歿。年七十五。其の著に「千紫萬紅」「萬紅千紫」「百首夷歌」「蜀山百首」「南歌帖」「寝惚先生文集」「浮世書類考」「假名世說」「一話一言」等がある。

おおたには【大谷派】(名)【佛】眞宗の一派。本願寺第十二世教如が一旦隱退して、德川家康から今の東本願寺の地を賜はり、新に一寺を建立して本願寺の支派を開いたもの。**—ほんがんじ**【大谷派本願寺】(名)【佛】本派本願寺(西本願寺)に對して、教如の開いた本願寺で、東本願寺ともいふ。京都市烏丸七條上る西側にある寺。

おおたば【大把】(名)❶たばの大きなもの。❷おほぐくり。おほざっぱ。❸おほけず。

おおたぶさ【大髻】(名)男子の結髮のたぶさを大きくして結んだもの。又、その男。

おおたぶみ【大田文】(名)全國の田文を集成したもの。田地の大目錄。

おおたやき【大田燒】(名)明治の始に、横濱の商人鈴木保兵衛が、京都清水の陶工宮川香山を聘して、武藏國久良岐郡太田村で製した陶器。保兵衛が京都眞葛原の出身だから「まくずやき」ともいふ。

おおたわけ【大痴】(名)大馬鹿。人を罵つて

おおだんな【大檀那】(名)寺院に布施物を多く喜捨する檀家。「おやだんな」。

おおだんな【大旦那】(名)若旦那の父親。

おおつ【大唾】(名)多くのつば。

おおつ【大津】(名)❶【地】おおつし。❷船の多く碇泊する處。❸壁の上塗に用ひる料のもの。粘土・漆喰・蠣灰などに種種の色を加へて造る。黄おほつ・泥おほつ・鼠おほつなどがある。**—きゃはん**【大津脚絆】(名)白木綿・淺葱木綿・雲齊木綿の脚絆で、昔、飛脚又は宰領などの用ひたもの。滋賀縣大津市から製出した。**—のみや**【大津宮】(名)(しがのおおつのみや。**—ぶくろ**【大津袋】(名)茶入・千利休が近江國大津に滯在中、米の麻袋を見て、その形に模してつくつたもの。茶道で、茶碗などを包むに用ひる袋。こめぶくろ。

おおつうじ【大通詞】(名)江戸時代に、和蘭人との通辯の役をつとめた官吏の長。

おおつうじ【大通事】(名)江戸時代に、支那人との通事を勤めた人。唐通事の長官。

おおつえ【大津繪】(名)❶筑紫の頃、近江國大津から賣出した

(一)繪津大

素書の粗畫。もとは佛畫であつたが、戲畫となつた。❷(おおつえぶし)。**—ぶし**【大津繪節】(名)一種の俗謠。二上り調子で、大津繪の戲畫を畫題をよみ並べて節附したものから起こつた。

おおつか【大束】(名)❶たばの大きなもの。❷中古時代の公事の文書。

おおつかなおこと【大塚楠緒子】(名)【人】女流歌人・小說家。文學博士大塚保治の妻。歌を佐佐木信綱に學ぶ。明治四十三年(一三五七〇)歿。年三十六。其の著に「露」「晴小神」「空蟬」等がある。

おおつかやすじ【大塚保治】(名)【人】美學者、文學博士。我が國美學の創建者。群馬縣の人。明治二十四年、東京帝國大學哲學科を卒業、獨佛伊各國に留學、歸朝後同大學教授として美學を講義した。昭和四年退職、同六年(一三九一)歿。年六十四。

おおつきげんたく【大槻玄澤】(名)【人】仙臺藩の侍醫。名は茂質、字は子煥、磐水と號した。江戸に出て、杉田玄白・前野良澤に就いて醫學・蘭學を修め、尋いで長崎に遊學して醫術及び蘭學を研究した。文政十年(一四八七)歿。年七十一。「重訂解體新書」「蘭學階梯」「環海異聞」等の著がある。

おおつきばんけい【大槻磐溪】(名)【人】儒者。名は清崇、字は士廣、通稱は平次、磐溪は號の號。玄澤の第二子。詞藻豐富、又、西洋の砲術を講じて嘉永六年歿。年七十八。

おおつきふみひこ【大槻文彦】(名)【人】國語學者。文學博士。漢學者大槻磐溪の子。通稱復三郎。名古屋藩・宮城縣師範學校長・宮城縣中學校長・東京高等師範學校講師を經て、國語調査會委員・帝國學士院會員となる。昭和三年(一三九八)歿。年八十二。其の著に「言海」「廣日本文典」「廣日本文典別記」「國語法別記」「伊達騷動實錄」「大言海」等がある。

おおつごもり【大晦】(名)一年の最終日。十二月の晦日。おほみそか。おほぼしら。除日。

おおつし【大津市】(名)【地】滋賀縣の縣廳所在地。琵琶湖の南岸、逢坂山の麓に位する水陸交通の要地で、市の內外に近江八景の名勝がある。

おおつずみ【大鼓】(名)つづみの一種。左の膝の上に横たへて打つもの。えつづみ。おほかは。

おおつち【大地】(名)(放火なるよりふ)地面。陸地。(古語)

おおつのみこ【大津皇子】(名)【人】奈良朝の詩人・歌人。天武天皇の皇子。學殖深く、武勇に勝れさせられたが、反を謀つて、朱鳥元年(一三四七)歿。歌は「萬葉集」に、詩は「懷風藻」に出てゐる。年二十四。

おおつ【大壺】(名)❶大きな甕。❷しゅび。(古語)

おおつぼりゅう【大坪流】(名)馬術の流派。室町時代の初期の大坪慶秀を祖とするもの。

おおつわもの【大兵】(名)多勢の軍兵。大兵。(古語)

おおて【大手】(名)❶敵の正面を攻撃する部隊。❷城の前面。❸おおてもん。❹【經】相場で多額の買賣をすること。**—すじ**【大手筋】(名)【經】多量に買賣して、相場を變動し得る有力者。**—もん**【大手門】(名)城の正門。

おおて【大手】(名)兩手を左右に振り擴げること。**—を振る**(句)威張つてあるくさま。

おおて い【大手い】(名)(おおふい)。おほざっぱ。こせこせしない風。

オーディエンス・ピクチュア[Audience picture](名)人氣映畫。大衆向映畫。(映畫用語)

オーディオン[Audion](名)無線電話で、電話の檢出又は周波電流の擴電に用ひる小形の眞空管。

オーディター[Auditor](名)❶會計士。❷會計檢査。

おおて【大父】(名)祖。(古語)

おおて【大月】(名)表日などにある大きな月。

おおどうぐ【大道具】(名)芝居の舞臺面を飾るに用ひる岩組・立木・門口・船などの道具。(小道具の對)**—がた**【大道具方】(名)芝居の大道具の師附を擔當する者。

オードヴル[佛 Hors d'oeuvre](名)洋食の前に出す食慾をつける肴のつまみもの。前菜。

おおどおり【大通】(名)市中の廣い通り。大道。本通り。「おほやう。(古語)

おおどか(名)ゆるやか。おほまか。おほらか。

オートカー[Auto car](名)自動車。

おおどく【大兜出】(名)能樂の裝束の一。天狗の頭に戴く金襴製の大きな兜巾。

おおどく【自動、力四】おほやうである。おほどかである。ゆるやかである。(古語)

おおどく【自動、力下二】前條に同じ。

オートクラシー[Autocracy](名)【政】專制政治。獨裁政治。

おおどこ【大床】(名)❶棺を覆ふ石造のかこひ。くわく(槨)。(古語)❷大きな床の間。

おおどこ【大所】(名)大きな構への家。資產家。**—の犬**(句)大家に飼はれる犬。轉して大家の犬。

おおどころ【大所】(名)(おおどこ)。「人。

おおとし【大年】(名)おほつごもり。おほみそか。**—こし**【大年越】(名)舊年を送つて新年を迎へること。としこし。

オートジャイロ [Autogiro] (名) スペイン人セノーージェアンデーラセルゲアが發明し、アメリカ人ピートケーロルが改良した垂直に舞上る飛行機。竹蜻蛉式飛行機。自動旋回飛行機。「名の一人老。

おおどしより [大年寄] (名) 江戸幕府の職

おおとなぶら [大殿油] (名) 「おほとのあぶら」の約。正殿にともした燈火。(古語)

おおとねり [大舎人] (名) 古昔、中務省に屬して、宮中の分番・宿直供奉等を掌った職。—**の**

つかさ [大舎人寮] (名) 古昔、中務省に屬し、大舎人に關する事項を掌った役所。—**の**

かさ

おおとのいとつかさ [大舎人寮頭] (名) おほとねりのつかさの長官。

おおとの [大殿] (名) ㊀殿殿。正殿。(古語) ㊁大臣の敬稱。おとど。(古語) ㊂貴族の當主の父の敬稱。㊃貴人の世子に對して當主の敬稱。—**あぶら** [大殿油] (名) (おおとなぶら)。(古語)—**ごもり** [大殿籠] (名) 御寢になること。(古語)—**ごもる** [大殿籠る] (自動、ラ四) 御寢になる。—**ほがい** [大殿祭] (名) ㊀屋船久久遲命・屋船豐宇氣毘賣命・大宮賣命・御巫祝詞命を祭って、宮殿の火災其の他の災異を祓はれた宮中の祭事。恒例の祭は、神今食・新嘗祭・大嘗祭の時に行はれ、臨時の祭は、皇居の移遷・齊宮・齊院の卜定の後に行はれた。㊁大殿祭の時に用ひる祝詞の名。

おおとのい [大宿直] (名) (おおとのいどころ)。—**どころ** [大宿直所] (名) 大内裏を警衛する者の詰所。

オート・バイ [Auto bicycle] (名) 自動自轉車。

オート・ピアノ [Auto piano] (名) 自動ピアノ。

オートマット [Automat] (名) ㊀自動裝置。寫眞機のシャッターなどが自動的におりる裝置。㊁自動販賣器。料金を入れると品物の出て來る裝置で、停車場の入場券賣渡などに利用される。

オートマティック・テレフォン [Automatic telephone] (名) 自動電話。

おおどまり [大泊] (名) 【地】樺太最大の都邑。亞庭灣に臨む。樺太線の起點。北海道の稚内(わかない)との間に鐵道連絡船が往復してゐる。大泊支廳と兵營とがある。明治三十八年七月、樺太征討軍が此處に上陸して、露國守備兵を北走させた處。

オートミール [Oatmeal] (名) 燕麥のひきわりの西洋食品。煮て砂糖と牛乳を混じて用ひる。

おおども [大供] (名) わかもの。おとな。

おおともい [大辨] (名) 大政官の判官。(べんかん)。(古語)

おおともおおえまる [大伴大江丸] (名) 【人】江戸時代の俳人。本名、安井政胤。大島蓼太の門人。滑稽的の句を好くした。享保七年生、文化二年(一八〇五五)歿。年八十四。其の句は「一茶大江丸全集」に出てゐる。

おおともくろぬし [大伴黑主] (名) 【人】平安朝の歌人で、六歌仙の一人。和歌は古今集以下の勅撰集に出てゐる。

おおともさかのうえのいらつめ [大伴坂上郎女] (名) 【人】奈良朝女流歌人の第一位に位する人。旅人の妹、家持の叔母。天武天皇の皇子穂積皇子の妃となり、皇子の早逝の後、大伴宿奈麿(すくなまろ)に嫁した。其の七十餘首の長・短歌は理智に勝った冷靜な作で、萬葉集に收められた。

おおともたびと [大伴旅人] (名) 【人】奈良朝の歌人。家持の父。元明・元正・聖武の三朝に仕へ、大納言・大宰帥に至る。其の和歌は明朝な色調に富む。天平三年(一三九一)薨。年六十七。歌は萬葉集に出てゐる。

おおともの [大伴の] (枕) (みつ(三津)だかし(高師)の枕詞。三津は攝津國に、高師は河內國にある。

おおともの

おうじ [大友皇子] (名) 【人】弘文天皇の御即位前の御名。

おおともの

たびと [大伴部] (名) 上古、武事を以て朝廷に仕へた部族。天忍日(あまのおしひ)の命の後裔。

オートモビル [Automobile] (名) 自動車。

おおともやかもち [大伴家持] (名) 【人】奈良朝の歌人で、萬葉集の撰者。旅人の子で、後、叔母大伴坂上郎女に養育された。聖武・淳仁・稱德・光仁・桓武の諸朝に歷仕し、中納言・持節征東將軍となった。蠻愛陶醉に、自然觀照に、家・國を思ふ情に、多くの秀れた歌を殘してゐる。延暦四年(一四四五)歿。年六十八。和歌は「家持集」に、又、「萬葉集」「拾遺集」以下の勅撰和歌集に採られてゐる。

おおとり [大鳥] (名) ㊀(動) 鴨鷗(こ)などの如き大形の鳥。(古語) ㊁悲子遊遊篇に見えた鳳(ほう)といふ鳥。—**あゆみ** [大鳥歩] (名) 大またに歩むこと。闊歩。—**げ** [大鳥毛] (名) 鷲の羽を槊の穂の形に大きく作り、馬じるし又は槍の初とした。—**の** [大鳥の] (枕) (はがへ(羽交)の枕詞。

おおとりけいすけ [大鳥圭介] (名) 【人】幕臣。男爵。樞密顧問官。維新の際、榎本武揚等と函館に脫走し、兵をあげたが敗れて幽囚。明治二十七八年戰役勃發の際、朝鮮公使として折衝に力めた。明治四十四年(一五七一)薨。年七十九。

おおど・る [大己貴命] (自動、ラ下二) ㊀ひろがり亂れる。みだれ亂る。(古語) ㊁(おおどくる)。(古語)

おおなおおな [大直日神] (名) 【神】天照大神の和魂(にぎたま)の大神。凶事を直して吉事と給ふといふ。

おおなかぐろ [大中黑] (名) ㊀切斑(ふち)の一種。上下白くして、中程の大部分が黑色のもの。㊁紋所の一。中黑の中央の線の太いもの。(のびつひきりょう)。—**の**

おおなかしぐ [大中黑矢] (名) 大中黑の羽で矧いだ矢。

おおなかしぐ

や [大中白矢] (名) 大中白の羽で矧いだ矢。

おおなかぬし [大直日神] (名) 【神】天照大神の御魂(にぎたま)の大神。凶事を直して吉事と給ふといふ。

おおなかぬし

のかみ [大直日神] (名) 【神】天照大神の御魂(にぎたま)の大神。凶事を直して吉事と給ふといふ。

おおなおおな [間] 身に負へるだけ負うて。十分に力を盡くして。おふなおふな。(古語)—**の**

おおなおおな

びと [大直日人] (名) (物忌から平常に復する意)神事終・後の宴。なほらひ(直會)。(古語)—**のかみ** [大直日神] (名) 【神】天照大神の御魂(にぎたま)の大神。凶事を直して吉事と給ふといふ。

おおなかぬし

のみこと [大己貴命・大穴牟遲命] (名) 【神】おおくにぬしのかみ(大國主神)。「ちかに當るやう、下敷のもの。

おおなかれ [大流] (名) 高く大きく寄せる波。

おおなたい [大名題] (名) 芝居狂言の總題の標題。又、其の標題を記した看板。

おおなむちのみこと [大己貴命・大穴牟遲命] (名) 【神】おおくにぬしのかみ(大國主神)。

おおなめ [大嘗] (名) (おおなめまつり)。—**まつり** [大嘗祭] (名) 天皇即位の後、始めて新穀を供へて天祖を始め奉り、天神地祇を祀らせ給ふ一世一度の大典。十一月卯日に始まり午日に至る四日間に亙る。七月以前に即位あらせられた時は、當年に行はせられ、八月以後の時は、翌年に行はせられ、諒闇登極の時は、其の期滿ちて後行はせられる。だいじやう。

おおなめ

まつり [大嘗祭] (名) (おおなめまつり)。—**まつり** [大嘗祭] (名) (おおなめまつり)。(古語) ㊁つと。あらまき。(古語)—**まつり** [大嘗祭] (名) (おおなめまつり)。

おおにしはじめ [大西祝] (名) 【人】哲學者・評論家。文學博士。攝山と號した。岡山の人。東京專門學校教授・高等師範學校講師となる。明治三十三年(一五六〇)歿。年三十七。「大西祝全集」七卷に其の著が集めてある。

おおぬ [大野] (名) (おおの(大野)。(古語)

おおなかとみのよしのぶ [大中臣能宣] (名) 【人】平安朝の歌人で、梨壺五人の一。村上天皇の勅によって、坂上望城と共に「後撰集」を撰した。正暦二年(一六五一)卒。年七十。其の和歌は「拾遺集」・「後拾遺集」等に入り、家集に「大中臣能宣朝臣集」がある。貴人の飲みのこしの酒。

おおなぶり [大名] (名) 「を銚子の中に入れ、臣下に賜ふ酒。

おおぬ

おおぬき[大貫](名)幅四寸、厚さ一寸、長さ二間の杉材のぬき。

おおぬさ[大麻・大幣](名)❶大串に附けたぬさ。(古語)❷ぬさ幣の美称。(古語)❸ひくて數多なること。人望のすぐれたこと。(古語)—の[大幣の]枕)「引く」のすぐれた枕詞。(古語)

おおぬさ(名)おほやう。おほまか。おほどか。

おおね[大根](名)❶【植】おほいこん。(古語)❷物事の起源。物の根本。本質。❸太い矢の根。

おおねむし[大野](名)【動】いなむし。(古語)

おおのあずまんど[大野東人](名)【人】武将。陸奥鎮守府將軍となり、蝦夷を討って功があった。天平十一年藤原廣嗣の叛とした時、大將軍となって討伐し、從三位に叙せられた。天平十四年(一四〇二)薨。

おおのか(名)❶寃かに靜かなこと。おほやう。(古語)❷おほげさ。おほさやう。(古語)

おおのかい[大野貝](名)【動】蝦蟹類の二枚貝。外殼は長楕圓形で、裏面は暗灰色、内面は白色。長水管を殼外に出し、吸水して生活する。

おおのくろべえ[大野九郎兵衛](名)【人】遠野郎長垣の臣。俗說には貪慾にして財貨を蓄め、同志が彼仇を圖ろに當り、事に託して逃れ、その終る所がわからないと傳へられる。

おおのしゃちく[大野酒竹](名)【人】明治・大正の俳人。名は豐夫。東京の人。佐佐醒雪等と筑波會を起して俳句の革新に努めた。大正二年(一五七三)歿。年四十二。

おおのはるなが[大野治長](名)【人】豐臣氏の臣。名は修理大夫。秀吉及び秀頼に仕へ、柔弱・遊惰で酒色に耽った。大阪冬の陣に德川の軍と和を結び、後又、再興を謀って成らず、元和元年(一二一七五)歿。

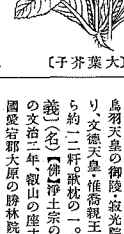
おおのみこみ[大呑込](名)すっかり合點すること。

おおのやすまろ[太安萬侶](名)【人】奈良朝の學者。古事記・日本書紀の編纂者。文武・元正の三朝に仕へ、官、民部卿に至る。稗田阿禮の誦誦してゐた我が國の神話・歴史を漢字の音訓を藉りて写みに記した。これが和銅五年(一三七二)に成った古事記で、その漢文の序は名文として知られて居り、元正天皇の養老中には、日本書紀の撰に與った。養老七年(一三八三)卒。

おおば[祖母](名)父母の母。ばば。(古語)

おおばかせ[大博士](名)(みょうざうはかせ×明經博士)。

おおばがらし[大葉赤子](名)【植】十字花科の草本。高さ一米位。葉は大形、長楕圓形で鈍頭、鋸齒を有し深緑色を呈する。からしなに似た小花群り咲き、花後長角を結ぶ。葉を乾かして粉末としたものを菁粉といひ、餅を染めるに用ひる。


〔子芥葉大〕

おおばこ[車前](名)【植】車前科の多年生草本。春の初、宿根から生ずる。葉は根生し長さ一〇糎位で廣楕圓形、葉柄が長い。夏日、葉間から花莖を抽き、穂狀花序に花を開き、蒴果を結ぶ。葉は食用とし、種子は藥用となる。かへるば。おんば。。

おおばこ[大葉子](名)【人】上代の烈婦。調伊金傑(つきのきの)の妻。欽明天皇の朝、夫に從って新羅を討った。

おおばし[大橋](名)大きなはし。

おおばしおとわ[大橋乙羽](名)【人】明治の文士。本姓は渡邊、名は又太郎といひ、米澤の人。「風俗畫報」に筆を執り、のち博文館に入り、硯友社風の文章で情話・隨筆などを書く。明治三十四年(一二五六一)歿。年三十三。

おおばしだな[大橋棚](名)(おおせいろ)

おおばしょ[大場所](名)❶廣い場所。❷東京國技館で、一月と五月とに行はれる大相撲。

おおばしりゅう[大橋流](名)御家流書風の一派。大橋長左衛門重政及び其の子隆慶より起こったもので、江戸時代に行はれた。

おおはず[大筈](名)無稽。なげやり。—**もの**[大筈者](名)大筈な人。

おおはだぬぎ[大肌脱](名)上體部の着物をぬいで、肌をあらはすこと。

おおはば[大幅](名)布帛の幅の普通のものより廣く、本綿幅の二倍のもの。(中幅・小幅の對)

おおばやり[大流行](名)甚だしくはやること。

おおはら[大原](名)【地】京都府愛宕郡にある村。八瀬・大瀬の北にあって、八瀬・大原といふ。後鳥羽天皇の御陵・寂光院・來迎院・三千院の古刹があり、文德天皇・惟喬親王の遺跡がある。京都市三條から約一二粁。歌枕の。—**だんぎ**[大原談義](名)【佛】淨土宗の開祖法然上人が、後鳥羽天皇の文治二年、叡山の座主顯眞僧正の請に應じて、山城國愛宕郡大原の勝林院で、各宗の學僧と教理を論議、問答して勝を占めた事蹟。大原問答。—**め**[大原女](名)京都府愛宕郡大原地方から出る女で、薪に花を折添へて頭に載せ、京都市中を賣りあるくもの。おはらめ。—**もんどう**[大原問答](名)【佛】おはらだんだん。

おおはらい[大祓](名)古昔、六月と十二月の晦日に、百官を朱雀門に會して、百官・萬民の罪穢を祓はれた神事。現今は賢所大前の神樂舍で行はせられる。—**のことば**[大祓詞](名)【文】大祓の祝詞(のりと)。朝廷の大切な神事を奏するもので、その中には去穢・顯神・改過遷善・淨化等の思想が含まれてゐる。

おおはらえ[大祓](名)(おおはらい)。

おおはらしげのり[大原重德](名)【人】勤王家。文久三年六月孝明天皇の勅を奉じて江戸に使し、幕府の弊政を改めた。後、從二位・參議に累進し、維新後は參與に任ぜられて新政に參畫した。世に大原三位といふ。明治十二年(一三三九)歿。年七十九。

おおはらの[大原野](名)【地】京都府乙訓郡にある村と大原山(一名小倉)を區出しがある。(梓馬)。

おおはらみこ[大原巫](名)(おおすまみこ)り寸法の大きなもの。

おおはん[大判](名)❶江戸時代の金銀貨の一。楕圓形で、量目は四十四匁一分。表面に拾兩・後藤四郎と花押とを黒漆で記す。その一枚は小判十枚に當り、慶長大判金・元禄大判金・享保大判金等の種類がある。(小判の對)—**きん**[大判銀](名)大判の金貨。—**ぎん**[大判銀](名)大判の銀貨。南鐵大判銀・桐大判銀などの類。

おおばん[大番](名)❶中古及び鎌倉時代に禁中の守護として、諸國より交替して京都に駐在した武士。❷(おおばんぐみ)。—**がしら**[大番頭](名)大番組の長。—**ぐみ**[大番組](名)江戸幕府の職名。江戸・大阪・京都の三城の交替で警衛した武士。—**せき**[大番席](名)江戸幕府で、扶持高二千石未滿から原米二百俵以下の旗本の稱。

おおばん[大鶴・骨頂](名)【動】涉禽類の鳥。形大きく體色黒褐色、嘴は側扁尖鋭で白色、頭の毛は短くして白色、脚と趾とは青黒く、雑草の茂った沼などに棲み、水をくぐることに巧みである。

〔鶴大〕

オーピアム[Opium](名)阿片。阿片。—**イーター**[Opium-eater](名)阿片喫飲者。

おおびき[大引](名)【建】床板を支へる爲に渡す横木。

おおびけ[大引](名)❶【經】取引所で、立會各戸すべて閉店して緩に就く時。—**ねだん**[大引値段](名)【經】取引所で、立會の最終の値段。

おおびし[大菱](名)刀の柄に柄縁を卷きはせた間に、大きな菱形の目を作るもの。

おおびたい[大額](名)昔、男子の額を廣

く刺って、角を錐のきさきのやうに尖らせて抜きあげたもの。中間・小者などの間に流行した。

おおひめみ〔大姫君〕(名)姉の姫。(古語)**—ぎん**〔大姫御前〕(名)前條に同じ。(古語)

おおびゃくえ〔大白衣〕(名)❶舘の下に着る白い小袖。❷白衣のみを着て袴を着けぬこと。

おおびゃくしょう〔大百姓〕(名)多くの田畑を持つてゐる農夫。

おおびょうし〔大拍子〕(名)大太鼓を加へた芝居の囃子。

おおひら〔大平〕(名)❶芋・大根・蒟蒻などに鳥肉を加へて汁を多くして煮た食品。❷おおひらわん。**—わん**〔大平椀〕(名)ひらたい大きな椀。

おおびら〔大平〕(名)あらはで人目に顧著せぬさま。隠り隠すことのないさま。

おおびる〔大蒜〕(名)【植】にんにく。

おおひるめむちの・かみ〔大日孁貴神〕(名)【神】天照大神の(古語)

おおひろま〔大廣間〕(名)❶廣大な座敷。❷江戸時代の式日に國持大名・四位以上の外様大名等が列席した江戸城内の殿間。「所。(古語)

おおひんがし〔大東〕(名)正しく東に當る

おおふう〔大風〕(名)たかぶつたさま。尊大。おほへい。

おおぶ・ちゃや〔大服・大福〕(おおぶくちゃや)。**—ちゃや**〔大服茶〕(名)元旦に年中の惡水をはらふ爲と稱して、茶の湯で、椎・黒豆・山椒などを入れて飲むもの。

おおふだ〔大札〕(名)❶大きな札。❷金額の大きな紙幣。❸芝居の入場券。絵目見物し得られるもの。又、大人の入場券。❹芝居の興行上の出納會計を擔任し、興行主の代理となる人。

おおふで〔大筆〕(名)大字を書くに用ひる筆。

オープニング〔Opening〕(名)開放。開通。開會。開會の辭。**—アドレス**〔Opening address〕(名)

おおぶね〔大船〕(名)大きな船。**—の**〔大船の〕〔枕〕「たのむ」「かとり」「つ」「ゆくらゆくら」「たゆたふ」「ゆた」「わたり」の枕詞。**—に乗ったやう**(句)心丈夫に思ひ、安心することのたとへ。

おおふばこ〔大文箱〕(名)名筆の文などを入れて黒棚に飾るかぶせぶたの箱。

オーブビン〔仏 Aubepine〕(名)化粧品や香水等の基礎香料の液體で、ヒヤシンスのやうな芳香を放つもの。

おおぶり〔大降〕(名)雨などの甚だしく降ること。

おおぶり〔大風〕(名)(おおかた)〈大形。

おおぶりそで〔大振袖〕(名)大きく仕立てた振袖。「大饗宴。

おおぶるまい〔大振舞〕(名)盛大な宴會。

おおぶろしき〔大風呂敷〕(名)❶大きな風呂敷。❷誇大な言を吐くこと。**—をひろげる**(句)大言壯語する。ほらをふく。

オープン〔Open〕〔英・名・形〕❶あけつぱなし。祕密でないあけすけな。❷公開競技。❸飛入競技。❹無蓋自動車。

オープン・エーヤ・スクール〔Open-air school〕(名)【教】野外學校。林間學校。

オープン・ゲーム〔Open game〕(名)独逸等になまれ、何人でも參加し得る競技會。

オープン・コース〔Open course〕(名)長距離競走者の走路に白線を引かず自由に走らるる。「海。

オープン・シー〔Open sea〕こうかい(公

オープン・ショップ〔Open shop〕(名)開放工場。原則的には勞働組合員でなくても、雇傭の機會を與へる工場。

オープン・ハーテッド〔Open-hearted〕(英・名・形)❶自己の思想・感情を率直に表明すること。❷ありのまま。飾氣ない。

おおべ〔大管〕(名)(ふいにょうえ)〈大管會。

おおへい〔大柄〕(名)(おうへい)〈横柄〕。傲慢。おほへい。

おおべや〔大部屋〕(名)❶大きな室。廣間。❷劇場や映畫撮影所の樂屋にある廣い部屋。下級の俳優が雑居する所。❸下級の俳優。

おおぼうしょ〔大奉書〕(名)【書】大判の奉書紙。

オーボエ〔Oboe〕(名)【音】洋樂の木製管樂器。下端は漏斗狀をなし、上端の口には金屬管の上に二枚の簧たを取附け、金體を三部にとりはづし得るやうにしたもの。音色に一種の特色があつて、異國情調のある稍・陰鬱な色調を持つてゐる。「だいぶつ。

おおぼとけ〔大佛〕(名)特別に大きな佛像。

おおま〔大間〕(名)❶廣い間。❷(きょうま)(京間)。❸(おおまかき)。(名)任官の時、闕官を書いた文書。闕官の行下をあけておいて、任官後、追書・附記するからいふ。

おおまいり〔大參〕(名)多人數の參詣。

おおまえ〔大前〕(名)❶神又は天皇の御前。❷神饌又は貴人の御前。❸最初の射手。

おおまえつぎみ〔大臣〕(名)大臣の古稱。

おおまか〔大まか〕(名)ゆるやかなこと。おほやう。こまかに考へぬこと。

おおまがき〔大籬〕(名)江戸遊郭で、格式の最も高い遊女屋。張見世を出さぬ遊女屋の大店。

おおまがつびの・かみ〔大禍津日神〕(名)【神】天照大神の荒御魂。まがごと(禍事)をせさせ給ふといふ。

おおまかが・ま〔大禍時〕(名)夕方の薄暗くなつた時。おほまがき。ものかれも。(古語)

おおまがり〔大曲〕(名)道路などの甚だしく屈曲してゐること。

おおまどころ〔御座所〕(名)おはします所。おまんどころ。(古語)

おおまします〔おまします〕(自動・サ四)います。おはします。(古語)

おおまじめ〔大真面目〕(名)甚だしくまじめ。「めなこと。

おおまた〔大股〕(名)兩足を廣く開くこと。(小股の對)

おおまたぎ〔大跨〕(名)おほまたにまたぐ。

おおまたぎみ〔大臣〕(名)(おおまうちぎみ)〈大臣の略。大臣。(古語)

おおまち・けいげつ〔大町桂月〕(名)【人】明治・大正の文章家。名は芳衛。高知縣の人。桂月・桂湖・月下迷郎は其の號である。花紅葉・黄菊白菊など出すに及んで有名になつた。「太陽」「中學世界」等に評論の筆を揮ひ、後、雑誌「學生」の主筆となつた。大正十四年(二五八五)歿。年五十七。著書には、「大紘小紘」「一蓑一笠」「學生訓」「社會訓」「日本文章史」「古今史談」等がある。すべて「桂月全集」(一五卷)に收められてゐる。

おおまつりごと・の・おおまえつぎみ〔大政大臣(名)(だいじょうだいじん)。(古語)

おおまつりごと・の・おおまつぎみ〔太政大臣〕(名)(だいじょうだいじん)。

おおまつりごと・びと〔太政人・參議〕(名)參議。(古語)「(古語)

おおまどぎ〔大禍時〕(名)(おおまがどき)。

おおまゆ〔大眉〕(名)眉をまゆすみで太く作つたもの。

おおまわし〔大廻〕(名)❶船を遠くまはして航海させること。❷船で遠地に荷物を送ること。

おおまわり〔大廻〕(名)❶道なりを遠く廻つて行くこと。❷役者が無變な大輪に一廻りすること。

おおまんじゅう〔大饅頭〕(名)❶大形の饅頭。(おおまんじゅう)。**—しころ**〔大らめてつくつたもの。

おおまんどころ〔大政所〕(名)❶攝政・關白の母の尊稱。大北の政所。攝家の大人を北政所といふに對して、母を大北の政所、略して大政所といふ。❷【人】豊臣秀吉の母の特稱。

おおみ〔大忌〕(名)大管會・五節會などの時、卜定に合はなかつたもの、卯ちなみ(小忌)以外の人。(古語)**—の・おんゆ**〔大忌御湯〕(名)大管祭の時、天皇の先づ一度召される御湯。

おおみ〔大身〕(名)❶(おおみ)〈大御身。(古語)❷紫檀の刃わりの長大なもの。

おおみ〔大御〕(接頭)敬語に冠して尊敬の意

をあらはす語。(古語)—あえ[大御饗](名)㊀天皇のきこしめす食物。(古語)㊁宮中で群臣に賜ふ酒饌の敬稱。(古語)—あかし[大御燈](名)神佛に奉る燈火の敬稱。(古語)—いつ[大御稜威](名)天皇の御威。—うた[大御歌](名)天皇の御製。—おや[大御祖](名)天皇の御先祖。(古語)—かど[大御門](名)㊀宮門の尊稱。㊁皇居の尊稱。(古語)—かみ[大御神](名)神の敬稱。—かむこ[大御巫](名)神祇官の八神に仕へる巫女。(古語)—け[大御食](名)天皇のきこしめす食物。(古語)—ごころ[大御心](名)天皇の御心。—こと[大御言](名)天皇のみことのり。(古語)—た[大御田](名)國民。おほたから。(古語)—たから[大御寶](名)國民。おほたから。(古語)—て[大御手](名)天皇の御手。(古語)—と[大御床](名)天皇の御寢所。(古語)—ふね[大御船](名)天皇又は皇后の召させられる御船。—ま[大御身](名)天皇の御身體。(古語)—ま[大御馬](名)天皇のお召しになる御馬。(古語)—み[大御身](名)天皇の御身體。玉體。—めぐみ[大御惠](名)天皇の御めぐみ。—もの[大御物](名)高貴の方の食物の敬稱。供御。(古語)—ゆき[大御行](名)行幸の敬稱。(古語)—よ[大御世](名)天皇の御治世。聖代。

おおみがわり[身替](名)左右の片身・片袖を別の色にした衣服。若い人の衣服。かたみがはり(片身替)。

おおみけつかみ[御食津神](名)[神]五穀その他の食物を生ぜしめ給ふ神。

おおみず[大水・洪水](名)大雨などの爲に河水が溢れて陸地を浸すこと。こうずゐ。

おおみせ[大店](名)㊀構へ大きく、手廣く商ふ店。㊁(おおまがき)(大籬)。

おおみそか[大晦日](名)一年の最終日。おほつごもり。おほとし。

おおみだいどころ[大御臺所](名)前[幕]軍の御臺所。

おおみち[大道](名)㊀幅の廣い道。大道。大通り。㊁長い里程。(古語)㊂三十六町を一里とする里程。

おおみなと[大湊・大港](名)船舶の出入多く、規模の大きな港。「島にある海軍要港。

おおみなねと[大峯](名)【地】吉野郡下北山郷の東の大山脈。海拔約千七百米。山脈重巒して和歌山縣熊野に及ぶ。昔は、金峯山の頂上と誤って考へられた。修驗者の修行した根本靈場。—いり[大峯入](名)【佛】修驗者が、大和國大峯に入って修行すること。熊野から入るを順といひ、吉野から入るを逆といふ。陰暦四月に入るを例とする。みれいり。—せんだつ[大峯先達](名)たびたび大和國大峯に入って修行の功を積んだ人の敬稱。

おおみのやり[大身槍](名)大形の刀の槍。大身。(「せに聞くこと。おほざっぱなこと。

おおみみ[大耳](名)㊀大きな耳。㊁ゆるがせに聞くこと。おほざっぱなこと。

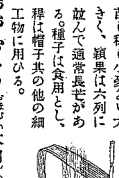
おおみや[大宮](名)㊀皇居又は神宮の稱。(古語)㊁太皇太后又は皇太后の尊稱。(古語)㊂母宮(若宮の對)(古語)—ごしょ[大宮御所](名)㊀寛永年中、江戸幕府東福門院の爲に營んだ御所で、後、火災に燒った。位置は京都市上京區御苑内京都御所の東南。㊁皇太后陛下の御殿。御在所は東京市赤坂區の赤坂離宮内。—ごよみ[大宮暦](名)朝廷頒暦の事の廢れた戰國時代に、武藏國大宮で私に作った暦。—ずかさ[大宮司](名)神社又は皇宮の護營。—ずくり[大宮司](名)神社又は皇宮の造營。—どころ[大宮所](名)内裏のある所。皇居。(古語)—ばしら[大宮柱](名)「みやばしら」の敬稱。(古語)—びと[大宮人](名)宮中に仕へる人。公卿。くもゐびと。(古語)「の御息所。(古語)

おおみやすどころ[大御息所](名)父帝の御寵を受けた女官。

おおみやオーム(Ohm)(名)【理】電氣抵抗を計る單位。導線の二點間に、一アンペヤの電流があって、二點間の電位差が二ボルトなる時をいふ。—げい[一計](名)【理】オームの單位によって、導線の抵抗を測る器械。

おおむかし[大昔](名)遠い昔。大古。上古。

おおむぎ[大麥](名)【植】禾本科の一年生又は二年生の栽培草本。苗も穂も麥藁より大きく、穎果は六列に並んで通常長芒がある。種子は食用とし、稈は帽子其の他の細工物に用ひる。



おおむこう[大向](名)㊀芝居の立見の場所、即ち一番見の觀覽席。向桟敷の後方にあることからいふ。㊁見物の大衆。下等な批評家。

おおむたし[大牟田市](名)【地】福岡縣の南部、有明海に面する港市。附近の三池炭田によって急速な發展を遂げ、港は近年淵船渠が完成した。

おおむね[大棟](名)【建】水平の棟。宮殿・寺院等の建築には、その兩端に鴟尾をつける。(隅棟・下棟等の對)—もん[大棟門](名)【建】屋根は一條の冠木で連れた切妻破風造で、中央に二枚開きの扉があり、其の左右に更に一枚開きの低い戸のある門。

おおむねひ[旨](名)大體の趣意。大意。

おおむねひ[概・大率](副)概略。大略。概略。

おおむべ[大嘗](名)おほむべのまつり。(古語)—のまつり[大嘗祭](名)(おおにえまつり)。(おおなめまつり)。(古語)

おおむら[大村](名)戸數の多い村。

おおむらじ[大連](名)連姓の統領で、大臣に並んで、朝廷の政治に與った上代の職名。

おおむらますじろう[大村益次郎](名)【人】明治維新の功臣。姓、村田藏六と稱した。周防國鬮錢司村の人。兵部大輔となる。フランス式の軍制を用ひようとして、守舊派の反對に遇ひ、明治二年(一八六九)刺客の手に斃れた。年四十六。後、その後裔に子爵を贈られた。

おおめ[大目](名)㊀大きな目。㊁二百目を一斤とすること。㊂きびしい咎めだてをせぬこと。寛大。

おおめかし(名)ひどく身を飾ること。

おおめだま[大目玉](名)眼窩が大きく、眼球の突出した目。㊁甚だしく叱られること。

おおめつけ[大目附](名)江戸幕府の職名。老中の配下にあって政務を監督し、諸大名の糺彈等を掌った。

おおもうけ[大儲](名)巨大な利得。巨利。

おおもうちぎみ[大臣](名)(おおいもうちぎみ)の大臣。(古語)

おおもうちあい[大持合](名)【經】相場が高一低して、上放れも下放れもない。

おおもて[大持](名)多くの人から非常に歡待せられること。大いにもてること。

おおもと[大本](名)第一の根本。おほね。たいほん。—きょう[大本教](名)【宗】非公認の神道的宗教の一派。本部を京都府伏見郡綾部町に置く。明治二十五年に起る。天御中主神・國常立尊等を主神とし、神人合感を說き、鎭魂・歸神を唱へ、綾部を地上の高天ヶ原と稱し、綾への聖地とした。今、京都府亀岡町に宣傳本部を設け、人類愛善新聞を發行し、全國的に宣傳を行ってゐる。

おおもとゆい[大元結](名)(いいもとゆい)。(けしょうもとゆい)。

おおもの[大物](名)㊀大量のもの。㊁大いもの。㊂すぐれたもの。—くい[大物食](名)相撲などで、地位の高い力士をよく倒すこと。その人。

おおものぐい[大物食](名)大食すること。又、

おおものぬしのかみ[大物主神](名)【神】大國主神の和魂で大和の大神。(おおみわ)神社の祭神。

おおものみ[大物見](名)多人數の斥候。

おおもり[大森](名)㊀大きい森。㊁【地】東

京市の東南部の區名。㊁東海道線及び京濱電車の一驛。**—さいく**[大森細工](名) 東京市大森から産出する美術細工。

おおもん[大門](名) ㊀おもてもん。正門。㊁遊郭の入口の門。**—ぐち**[大門口](名)(おおもん)。

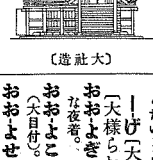
おおや[大家](名) ㊀おもや。本家。㊁貸家大屋。**—かず**[大矢・大數](名) 普通の矢よりも長大な矢。

おおやぶ[大矢・大節](名) 昔、京都及び江戸深川の三十三間堂で通矢(とおしや)の競爭をしたこと。其の數の多いのを射術家の誇りとした。日暮から翌日の夕刻に及ぶ。

おおやか[公](名)(大宅の意) ㊀皇居。(古語) ㊁天皇又は皇后。(古語) ㊂國家。朝廷。政府。官廳。官事。㊃世間又は衆人。㊄表だったこと。公共。公事。㊅公平。私なきこと。㊆平等。**—おおやけし**[公公し](形、二)(おおやけし)(古語) **—がた**[公方](名) おやけ事に關する方。(古語) **—がたさまに**[公方樣に](副) 朝廷の儀式どほりに。(古語) **—どころ**[公心](名) 公平な心。私曲なき心。(古語) **—ごと**[公事](名) ㊀宮中の事。㊁政務。公務。㊂宮中の儀式。㊃私事に關せず表だったこと。くじ。**—さた**[公沙汰](名) 表だったこと。政府の沙汰となるべきこと。**—し**[公し](形、二) おほやけらしい。おもてだった。(古語) **—ずかい**[公使](名) 朝廷からの使者。(古語) **—どころ**[公所](名) ㊀朝廷の御料地。官有地。(古語) ㊁朝廷。政府。(古語) **—ばら**[公腹](名) おほやけ心より腹立つこと。公憤。義憤。(古語) **—びと**[公人](名) 朝廷又は政府に仕へる人。官吏。(古語) **—むき**[公向](名) おもてむき。役所向。官邊。**—もの**[公物](名) 公有又は官有のもの。(古語)

おおやしま[八洲](名) 大日本帝國の古稱。

おおやしろ[社](名)【神】いすもしのおおやしろ。**—ずくり**[大社造](名)【建】神社建築樣式の一。正面を破風造にして、側面に階段を設け、殿内を二間とし、奥の間に神位を安置し、神座は階段の方に向かはずして側面に向かふもの。



〔造社大〕

おおやね[大屋根](名) 二階建の上屋の屋根。

おおやすみどの[大安殿](名) だいごくでん(大極殿)。

おおやすみ[大休](名) 菩薩兒菩薩士。維新前後國事に奔走し、戊辰の役・西南の役に功があった。歐洲に遊學すること三度、明治十八年以來屢〻陸軍大臣に歴任し、明治二十七年戰役に第二軍司令官、明治三十七八年戰役に滿洲軍總司令官となつて偉勳を奏し、大勲位・功一級に進み、晩年内大臣となつた。大正三年(一三五七四)薨。年七十三。國葬を以て過ぎられた。

おおやまくいのかみ[大山咋神](名)【神】大年神の御子。一名山末之大主神。一說に建御雷神に同じといふ。

おおやまつみのかみ[大山祇神](名)【神】伊弉諾伊弉册二尊の御子。山を司る神。神社の社殿の床。(濱床の對)

おおゆか[大床](名)【建】㊀ひろびさし。㊁「積った雪。

おおゆき[大雪](名) はげしく降る雪。多くの對)

おおゆな[大湯女](名) 年增の湯女。小湯女の對)

おおゆび[大指](名) 手足で一番大い指。お

おおゆみ[大弓・弩](名) 中古に用ひられた一種の弓。はじきによつて石又は矢を發射する裝置のもの。弩。どきゅう(弩弓)。(古語)

おおよう[大樣](名) ㊀寛大でこまかなことにかかはらぬさま。㊁おちつきがあつて擧動の卑しくないこと。㊂おほまか。㊃おほかた。たいりゃく。**—げ**[大樣げ](名) おほやうなさま。**—らか**[大樣らか](名) おほらか。おほやう。(古語)

おおよぎ[大夜着](名) 普通の夜着より大きな夜着。

おおよこめ[大横目](名) ㊀おおめつけ(大目付)。㊁(おおじょうや)(大庄屋)。

おおよせ[大寄](名) 客が大勢の友を誘ひ、遊女を數多寄せて、一所に會會すること。

おおよそ[凡・大凡](名) ㊀概略。㊁ほぼざり。かりそめ。なみたいていい。**—びと**[大凡人](名) 世上一般の人。ただの人。常人。(古語)

おおよそ[凡・大凡](副) ㊀おほかた。たいてい。おおよそ。㊁すべて。おしなべて。(古語)

おおよそごろも[凡・大凡](名)【神】神樂人の着る着物。

おおよど[大淀](名)【建】三重縣多氣郡大淀村。歌枕の一。**—の**[大淀の](枕)「おほせ」の枕詞。「丸・殿・袋などに對して普通の鎧ないふ。

おおよろい[大鎧](名) ㊀大きな鎧。㊁胴

おおライ[All right](感) オール・ライト。たくさん。(古語) ㊁おほやう。おほらか。

おおらか(名) ㊀分量の多いこと。(古語) ㊁おほやう。おほらか。(古語)

おおり(名) ㊀なることこと。又、その物。(古語)

おおりうどう[大林檎・苹果](名)【植】(とうりんご)唐林檎。

おおりんてん[大輪轉](名) 昔、正月女叡位(にょうい)の時、女官の順次を追うて爵に叡ぜられたこと。(小輪轉の對)

おおる[繞る](自動、ラ四) たわみまがる。たわわに撓る。(古語)

オール[Oar](名) 端艇用のかい(櫂)。

オール[All](名) 全體。總べて。「—日本」。

オーナッシング[All or nothing](句) 一切か、又は無かの意で、或事に對する徹底的決意を示す語。

—スター・キャスト[All star cast](名) 映畫用語。人氣の中心たる幹部俳優の總出演。

—セーム[All same](名) 全く同じこと。そっかり同じであること。

—トーキー[All talkie](名) 映畫用語。全發聲映畫。俳優の聲も音樂も擬音もすべてはかつてゐる發聲映畫。

—パック[All back](名) 延ばした髪をわけないで、全部後へ梳きあげる一種の髪形。

—マイティ[All mighty](名) ㊀全能。高能。㊁宗)知全能の神。㊂トランプの最も強い札。

—ライト[All right](感) 宜しい。心得た。總て正しい。

オール・コンクール[佛 Hors concours](名)【美】(略してH. C. と書く)特別の權利により、審査を經ず、美術展覽會に出品される作品。無審査出品。

おおるるき[大留守居](名) 江戸幕府の職名。將軍他出の際、江戸城に詰めた守衛で、大奥の取締・非常立退の處置・座敷の諸事を掌つたもの。留守居頭。

オールド・ボーイ[Old boys](名) 校友。同窓生。現今では、運動用語にして「在校當時、選手であつた者の意に用ひる。「まゐ期を過ぎた友。

オールド・ミス[Old miss](名) 老處。未婚のまま

おおるり[瑠璃・竹林鳥](名)【動】燕雀目鶲(ひたき)科の鳥。形は鶺鴒よりやや大きい。雄は上面瑠璃色を呈し、喉・胸部は黑く、腹部は白い。雌は上面橄欖色を帶びた茶褐色で、腰部に黑褐色である。囀聲美妙で籠鳥として飼育される。ろりてう。

おおろうか[大廊下](名) 江戸時代の江戸城内本丸にあつた座敷の名。御三家・前田・島津等の大諸侯の著席した所で、蒼松・千鳥を畫いた襖がある。

おおろかし(名) おぼろかし。(古語)

オーロラ[Aurora](名) ㊀地球球の南極に近い所で、空氣の層の關係から、太陽の光線が、空中高く帶を廣げたやうに美しく見える現象。極光。㊁神話)曉の女神。「る曲形の木で、牛車の名所。

おおわ[大輪・輪](名) 車輪の外部を構成するもの。

おおわざさし[大脇差](名) 大がたのつくりの脇差。ながわきざし。(古語)「だ刀。

おおわざもの[大業物](名) 切味のすぐれ

おおわだ……〔大曲〕(名) 河湖などの水の深く入込んで淀んだ所。いりえ。

おおわたし……〔大渡〕(名) ㊀船の帆足をとる綱。㊁〈おおわたしかけ〉。**—かけ**〔大渡懸〕(名) わたしかけ。

おおわだたてき……〔大和田建樹〕(名)【人】明治時代の國文學者・歌人。伊豫宇和島の人。高等師範學校教授・東京女子・高等師範學校教授となる。明治四十四年(一五七一)没。年五十四。その著に「明治唱歌」「鐵道唱歌」「和文典」「話曲通解」「和文學史」「日本大辭典」「修辞學」「日本大文學史」等がある。

おおわらい……〔大笑〕(名) ㊀聲高く笑ふこと。

おおわらわ……〔大童〕(名) ㊀頭髪の髪がとけてばらばらになったこと。㊁念場に際して力の限り奮闘すること。

おおん……〔御〕接頭)「おほみ」の音便。(古語)

—かた〔御方〕(名) おんかた。(古語)**—ぞ**〔御衣〕(名) 天皇の御服。(古語)**—たから**〔御寶〕(名) おほんたから。(古語)

おおんべ……〔大嘗〕(名) (「大嘗の祀」(だいじょうえ)の大嘗會)。(古語)

おか……〔岡〕(名) 土地の小高い所。**—っぴき**〔岡引〕(名)(おかひき)。**—ばしょ**〔岡場所〕(名) 江戸時代に、江戸で官許の吉原以外の遊里で、私娼のゐた所。**—ひき**〔岡引〕(名) 江戸時代に、捕吏の手引をして罪人を捕縛したもの。てさきくめあかし。なかっぴき。**—ひょうぎ**……〔岡評議〕(名) 局外者がかれこれと評議すること。**—べ**〔岡邊〕(名) 岡のほとり。**—み**〔岡見〕(名) 昔、十二月晦日の夜、蓑笠を着て岡に上り、我が家の方に向かって、來年の吉凶を知ったこと。**—もち**〔岡持〕(名) 平たくて蓋があり、手のついた桶。食物を入れて持ち運ぶに用ひるもの。

おか……〔陸〕(名)【地】地球の表面の水におほはれぬ所。くが。くぬが。陸地。**—しね**〔陸稲〕(名)【稙】(おかぼ)〈陸稲〉。**—じょうき**〔陸蒸汽〕(名) 汽車。(蒸汽船の對)**—ずり**……〔陸釣〕(名) 陸上から魚を釣ること。(船釣の對)**—た**〔陸田〕(名) 畑。(水田の對)**—ふ**〔陸生〕(名) 陸に生えてゐること。又、その物。**—ぶら**〔陸歩〕(名) 文化の頃、江戸深川仲町(なかまち)の遊里に多く船で通ったに對して、陸上より通ったこと。**—ぼ**〔陸稻〕(名)【稙】陸田に植ゑる稻。普通の稻を陸田にも生育し得るやう馴致したもの。早稻・中手・晩稻の別がある。米粒は水田のものよりも、粘力乏しく、味も劣ってゐる。なかしね。りくたう。**—もの**〔陸物〕(名) 陸地に産するもの。**—ゆ**〔陸湯〕(名) 錬湯で、入浴湯の外に備へた清い湯。あがりゆ(上湯)。

おか……〔傍〕(名) かたはら。局外。**—ほれ**〔傍惚〕(名) 他人の關係してゐる異性に戀慕すること。**—み**〔傍見〕(名) 他人のしてゐることを、わき又は局外から見てゐること。**—め**〔傍目〕(名)(おかみ)。**—やき**〔傍燒〕(名) 關係もない他人を妬むこと。ばたでやきもちをやくこと。**—目八目**(句) 局外にゐて他人の圍碁を見ると、對局者よりは八目も見越して勝負の大勢を觀察し得ること。轉して、局外に居って觀察する時は、物事の是非・得失が明らかにわかることにいふ。

おか……〔大鋸〕(名) 大きな鋸。おほが。**—くず**……〔大鋸屑〕(名) 大鋸で材木を引いた時に出來る屑。**—ひき**〔大鋸挽〕(名) 大鋸で材を挽くことを職業とする人。こびき。

おかいこぐるみ……〔御蠶纏〕(名) ㊀動【蚕】㊁絹布。**おかいこさま**……〔御蠶〕(名) 上から下まで絹布の衣服を纏ふこと。轉して衣服に奢ること。

おかかさま……(名) ㊀おかみさま。奥樣。㊁小兒が母を呼ぶ時の語。おかあさま。

おかかみ……〔御鏡〕(名) おかがみもち。**—もち**〔御鏡餅〕(名) 圓く平たく鏡のやうにつくった餅で、神事・佛事・祝賀等に用ひるもの。

おかかみ……〔尾鏡〕(名) 尾ろの鏡。山鳥の尾の水にうつったもの。山鳥の尾ろの鏡。(古語)〔語〕

おかき つ……〔小垣内〕(名)(かきつ)〈垣内〉。(古語)

おかけ……〔尾掛〕(名) 蛇の尾にかけて、禮床に留める綱。しめかけつな。

おかげ……〔御蔭〕(名) ㊀神佛のたすけ。加護。㊁恩惠。なさけ。**—まいり**……〔御蔭參〕(名) 江戸時代に流行した伊勢參宮。路銀を持たず沿道の人人の喜捨・庇護によって、伊勢大神宮に參詣したこと。ぬけまゐり。

おかざがけ……〔小笠懸〕(名) かさがけ(笠懸)。

おかざき……〔岡崎市〕(名)【地】愛知縣(三河國)の市。岡崎平野の東部に位し、東海道線の一驛がある。生絲・絹織物・味噌等を産する。

おかざきさむね……〔岡崎正宗〕(名)【人】鎌倉時代の刀工。銘刀「正宗」の作者。名は五郎。初代行光の子。相模國鎌倉に住んだ。古刀の鍛傳を調べて、遂に相州傳なる一派を開き、古今無比の名匠と稱せられた。興國五年(二〇〇四)没。年八十一。

おかざきみそ……〔岡崎味噌〕(名) 愛知縣岡崎の名産。煮た大豆をつぶし丸めて塊とし筵の上に乾かした上、塊を砕き、數十日の後麴を混じ、桶に入れて一年の後用ひるもの。はっちやうみそ。

おかざり……〔御飾〕(名) ㊀神佛の前の裝飾。㊁正月のしめかざり。

おかざわらじま……〔小笠原島〕(名)【地】本州の南の海上、相模灘の南に當り、伊豆七島の八丈島から約七百粁の太平洋上に南北に散在する諸島で、面積約一〇三方粁。父島・母島が最も大きい。文祿二年(一二三五)小笠原貞頼が發見した。父島の大村には海底電信の中繼所がある。東京府に屬する。

おかざわらながきよ……〔小笠原長清〕(名)【人】射術家。小笠原流の祖。阿波の守護。甲斐國小笠原に生まれた。源頼朝の兵を起すや、駿河國黄瀬川に會し、平氏討伐・藤原泰衡の征討・承久の役等に功があった。鞠射に長じ、後世傳へて、模式とする。仁治三年(一九〇二)卒。年八十一。

おかざわらながひで……〔小笠原長秀〕(名)【人】武將。射術家・禮法家・通鞠兵庫助。禮式・騎射の法に通じ、足利義滿の師範となり、命を奉じて武家の禮法を定めた。應永三十二年(二〇八五)卒。

おかざわらりゅう……〔小笠原流〕(名) ㊀射術及び馬術の一派。源頼朝の臣小笠原長清を祖とし、武家時代弓馬の術の故實はすべて之に據った。㊁武家禮式の一派。足利義滿の時、小笠原長秀の定めたもので、武家禮式の大宗として幕府及び諸侯皆之に從った。㊂かたくるしい禮儀作法。**—の三指**(句) 小笠原流の禮式に從って婦人が坐して三本の指を床についてじきをすること。轉してかたくるしい禮儀作法。

おかし……〔可笑し〕(形シク) ㊀笑ふべきさまである。見ともなき。あがりめ。㊁面白い。あぶない。趣がある。㊂怪しい。不審である。**—い**……〔可笑しい〕(形) (おかしの口語。**—が**る……〔可笑しがる〕(自動、ラ四) おかしと思ふ。**—げ**〔可笑しげ〕(名) おかしい樣子。**—さ**〔可笑しさ〕(名) おかしいこと。おかしい程度。**—なげ**〔可笑しなげ〕(名) おかしいさま。**—み**〔可笑しみ〕(名) 滑稽みの。**—やか**〔可笑しやか〕(名) おかしいさま。「のきさうげん」(狂言)。

おかし……〔可笑〕(名) ㊀おかしいこと。㊁あやしい場合に、尾も頭も切りはなされない魚類を用ひること。

おかしらつきず……〔尾頭付〕(名) 神事・祝儀等の場合に、尾も頭も切りはなされない魚類を用ひること。

おかす……〔犯す・侵す〕(他動、サ四) ㊀法律・規則・道德などにそむいた事をすること。㊁人にさからふ。人を侵ぐ。㊂姦淫する。㊃成し難いことを敢行する。㊄求める。攻め入る。

おかす……〔冒す〕(他動、サ四) 他人の姓名を稱する。

おかず……〔御數〕(名) (數を取りあはせる意)飯のおいで。副食物。**—このみ**〔御數好〕(名) おかずのすききらひなすること。

おかずき……〔尾被〕(名)【動】むささび(鼠)。

おかずけ……〔陸著〕(名) 陸路の運搬によって、荷物を送り届けること。

おかせ……〔廡桂〕(名) 廡(をなぎ)つけるかせ。

おかた……〔御方〕(名) ㊀他人の敬稱。㊁他人の妻妾

又は子女の敬稱。㊁貴人の子息の部屋住みの敬稱。**—ぐるい**〔御方狂〕(名)將軍家又は大臣家の部屋住みの子息の稱。**—さむらい**〔御方侍〕(名)右筆・茶坊主などの如く武事に携はらぬ侍の稱。**—ずまい**〔御方住〕(名)おかたごし。**—ぼうちょう**〔御方庖丁〕(名)和泉國堺から出て庖丁で、鰹丁が妻に手傳はせて造ったから、此の名があるといふ。**—めく**〔御方めく〕(自動、カ四)貴人の妻らしく見える。

おかたけんさんを……〔尾形乾山〕(名)【人】陶工。京都の人。光琳の弟。名は惟允。紫草・蠟涙等の號がある。剛法は光悅及び仁清に倣って別に新意を出した。書を父宗謙に、畫を兄光琳に學び、作る所の陶器にも雅趣があった。點茶家の間に愛玩せられる。正德二年江戸に下り、樂燒を製した。寛保三年(一四〇三)歿。年八十一。

おかたこうあんを……〔緒方洪庵〕(名)【人】蘭法醫。備中の人。名は章、通稱は三平。江戸に出て、坪井信道・宇田川玄眞に蘭學を學び、更に長崎に赴て蘭醫に親炙し、大阪に業を開く。後、江戸に來り、侍醫に擧げられ、法眼に敍せられ、西洋醫學所頭取となり、文久三年(一八六三)歿。年五十四。

おかたこうりんを……〔尾形光琳〕(名)【人】畫家。京都の人。名は惟實。光琳と號する。(初めは尾形と書いたが後自ら小形と改めた)光悅・俵屋宗達に私淑し、又、土佐派の畫風を學び、光琳風・光琳模様の名が喧傳せられた。元祿十四年、法橋に敍せられた。豪奢の行を以て京都を逐はれ江戸に移る。享保元年(一三七七)歿。年五十九。

おかたま・**の**・**き**〔樹心(黄)〕

〔樹心(黄)〕

〔黄心樹〕(名)【植】木蘭科の常綠喬木。幹高一八米位。直徑七〇糎に達する。樹皮は暗綠色で平滑。葉は長楕圓形万至長倒卵形で、全緣、革質で互生する。春、葉腋に粉・紫色を帶びた白色の花を開き、芳香を有する。果實は圓形で簇生する。暖地に自生し、又、觀賞用として庭園に栽培する。材は帶綠褐色で、床柱又は器具とし、葉は香料とする。

おかちしゅう〔御徒士衆〕(名)徒歩で供する身分の輕い士の敬稱。**—めつけ**〔御徒士目附〕(名)「かちめつけ」の敬稱。

おがちスレートを……〔雄勝—〕(名)宮城縣桃生(ものう)郡十五濱村字濱板・水濱及び雄勝濱から産出する黑色の粘板岩。

おかちん(名)㊀餅の異稱。㊁仲のよい若夫婦。

おかっさま〔御上様〕(名)「おかみさま」の訛。

おかったるい〔—たるい—〕(形)㊀だるい。㊁十分でない。不足である。㊂てぬるい。

おかつらを……〔男桂・槐〕(名)【植】ふう(楓)。(女桂の對)

おかでらを……〔岡寺〕(名)【佛】りゅうがい山(龍蓋)寺。

おかど〔御門〕(名)門の敬稱。**—ちがい**〔—違い〕(名)〔御門違〕(名)見當ちがひ。

おかとときき〔桔梗〕(名)【植】(ききょう)〔桔梗〕。

おかにしいちゅう〔岡西惟中〕(名)【人】談林派の俳人。名は誠、一時軒と號した。鳥取の人。大阪に出て醫業を開き、西山宗因に就いて俳諧を學び、又、和歌に通じてゐた。元祿五年(一三五二)歿。年五十四。

おかのやを……〔岡屋〕(名)【地】京都府宇治郡の昔の地名。今の宇治郡宇治村字木幡舊莊の地。

おかべ〔御壁〕(名)豆腐の異稱。(婦人語)

おかま〔御釜〕(名)㊀釜の鄭重語。㊁しり(尻)。㊂男色。㊃妻。女中・下女。㊄女の陰部。**—こおろぎ**〔御釜蟋蟀・御竈蟋蟀・竈馬〕(名)【動】竈馬科の昆蟲。全體黃褐色。觸角・後脚長くして巧みに跳躍する。翅と鼓器を缺く。晝間は床下に棲み、夜間窓の傍に來る。人のなかしたこほろぎ。**—を起す**(句)(二十四孝の一人、郭巨が黃金一釜を掘出した故事に基づく)運よく財產をつくること。**—を掘る**(句)雞姦を行ふ。

おかみ〔鑿〕(名)たつ。龍。龍神。(古語)

おかみ〔御上〕(名)㊀主上みかど。朝廷。㊁政府。官廳。㊂貴族の敬稱。㊃料理屋・待合茶屋などの女主人。女將。**—さん**〔御上様〕(名)〔おかみさま〕の音便)中流以下の人妻の敬稱。

おかみ家〔御上家〕(名)貴族。又、其の家。**—け**〔御上家人〕(名)〔おかみさま〕の敬稱。

おがみ〔拜〕(名)をがむこと。禮拜。**—いし**〔拜石〕(名)庭園の淨地に据ゑた平たい石。**—いる**〔拜入る〕(他動、ラ四)「をがむ」で強めていふ語。**—うち**〔拜撃〕(名)手の形を合掌して拜むさまにしてうちおろすこと。刀の柄を兩手で握り、眞向にふりかざして斬りつけること。**—きり**〔拜斬〕(名)柄を兩手で握って、眞向にふりかざして、搗くこと。**—たおす**〔拜倒す〕(他動、サ四)切に懇願して遂に目的を達する。

おがみを……〔尾髮〕(名)馬の尾と鬣。

おがみそり〔御剃刀〕(名)(こうぞり)〔髮剃〕。

おがむ〔拜む〕(他動、マ四)㊀身體を屈めて敬禮すること。㊁見たり讓渡していふ語。合せて禮拜すること。㊂阿多福の假面。㊃阿多福の面に似た顏の女。醜女を あざけっていふ語。㊄おかめそば。**—ささ**〔阿龜笹〕(名)【植】こまいささ(五枚笹)。**—そば**〔阿龜蕎麥〕(名)蒲鉾・松茸・海苔等を入れたつゆそば。

おかめ〔阿龜〕(名)

おかもう〔拜まう〕(他動、ハ四)(おがむ)。(古語)

おかもと・ぶんや〔拜まん〕(他動、ハ四)(おがむ)。**—**〔岡本文彌〕(名)【人】淨瑠璃の大夫。大阪の人。山本土佐掾の門人。一流を出して文彌節といふ。その節は悲哀の調を帶びる。元祿七年(一三五五)歿。年六十二。

おかやを……〔小萱〕(名)【植】かや(萱)。

おかやまし……〔岡山市〕(名)【地】岡山縣の縣廳所在地。もと、池田氏の城下町。山陽本線の要驛に當り、中國鐵道及び宇野線を分岐する。後樂園・醫科大學・第六高等學校等がある。

おがらを……〔麻幹〕(名)あさがら。**—すきん**……〔麻幹頭巾〕(名)(がらむだすきん)(苧頭巾)。**—ばし**〔麻幹箸〕(名)精進祭(しょうじんまつり)の供物に添へ、又、その迎火・送火を焚く時に用ふる箸。

オカリナ〔Ocarina〕(名)【音】西洋樂器の一。粘土製又は陶器製の中空の樂器。形は卵形、十孔を穿ち、一端に突出した吹孔がある。此の吹孔を口に含んで氣息を吹入れ、兩手の指で十孔を開閉して吹奏するもの。はとぶえ。

〔オリカリナ〕

オカルティズム〔Occultism〕(名)(ヨーロッパ中世期の鍊金術・占星術等、秘密の繼承を要する學問の義に基づく)秘密主義。神祕的・秘密的の學說及び儀式。

おかわ……かは〔御厠〕(名)(御厠(おかわ))の略。

おかわ……かは〔小川〕(名)細い流の川。こがは。細流。

おがわらをがは〔牡瓦〕(名)竹筒を半切にした形の瓦で、うつむけて葺く。つつがはら。(牝瓦の對)

おかんを……〔惡寒〕(名)發熱の爲に、そくそくと「寒けを感ずること。

おかんあげ〔御髮上〕(名)(—かんは—かみの音便)貴人の髮をとること。又、其の人。

おき〔沖・奥〕(名)㊀海又は大湖などの岸から遙かに離れた處。㊁左。(逆)(この對)(古語)。**—にも附かず磯にも離るる**(句)(古語)たよるべき處のない譬。**—を越える**(句)技藝などのとびはなれてすぐれてゐること。

おき〔煙〕(名)㊀おこった炭火。㊁薪の燃えてしまって炭火のやうになったもの。

おき〔置〕(名)㊀やめること。すておくこと。㊁ひな隈でなこと。

おき〔息〕(名)いき(息)。(古語)

おぎ[名]【男木】(名) 木材を食ひ合はす時の凸狀ななす方。(女木の對)

おぎ[名]【荻】(名)【植】禾本科の多年生草本。水邊又は原野に自生し、高さ一米半位。地下莖は根狀をなし横走し、地上莖は節々有して細く、中空。葉は硬質、細長き線狀で、尖頂、全緣、葉鞘は莖を包む。夏秋の交、基部に絹樣の毛の密生せる花が、莖頂に圓錐花序をなして開く。花色は、初は淡紫色で、後、白色に變ずる。かぜきぎくるるがもちぐさ。

〔荻〕

おぎ[名]【荻風】(名) 荻の生えてゐる原。

おきあい[名]【沖合】(名) ❶海の沖の方。❷漁船の船頭。

おきあか・す[他動・サ四]【起明す】(他動・サ四) 朝すに夜明かす。

おきあがりこぼうし[名]【起上小法師・不倒翁】(名) 達磨の形に造つた土の人形の底におもりをつけて倒しても直ちに起きなほるやうにしたもの。

おきあが・る[自動・ラ四]【起上る】(自動・ラ四) 臥したる者がすわり又は立つこと。

おきあげ[名]【置上】(名) 器物を高く置く爲に、その物の下に他物を添へ置くこと。

おきあげ[名]【置揚】(名) 蒔繪などをするのに、地に胡粉を塗つて高くすること。**—にんぎょう**[名]【置揚人形】(名) 木彫の上に置揚の著色をした人形。

おきあじ[名]【沖鯵】(名)【動】❶にべ(鮸)の幼魚。「あしらひ。

おきあみ[名]【置網】(名) まちあみ。

おきあわせ[名]【置合】(名) とりあはせ。配合。

おきいし[名]【置石】(名) ❶風致を添へる爲に庭などに据ゑおく石。❷砌に据ゑおく石。❸園菜で、强者に對する場合に、獨め二目以上を置いた石。

おきいだ・す[他動・サ四]【他動・サ四】だしぬく。

おきえ[名]【置餌】(名) 餌を伺ふ餌。

おきえ・ぶし[名]【招餌】(名) 鹿を招きよせる餌。(古語)

おきえ・ぶし[名]【荻江節】(名)【音】俗曲の節の一。江戸長唄に上方長唄の曲節を交へたもので、明和年中荻江露友の興したもの。「き出て出あふ。

おきおう[名]【起合ふ】(自動・ハ四) 起き合ふ。

おきおき[名]【起起】(名) 目覺めたまま。又、その時。起きたばかり。起きたて。

おきかえ[名]【置換】(名) ❶(Substitution)おきかへること。❷【化】化學上で、一物質が或化合物を分解しその成分と代つて新化合物を生ずること。❸【數】代數式中の文字を其の數値に書き改めること。又、聯立方程式で、一の未知數を他の未知數に代へて示すこと。

おきかえ[名]【置替】(名) 銀行又は停車場で、一見「同」品と見えるものとすりかへる盜人。

おきかえる[他動・ハ下一]【置換へる】(他動・ハ下一)(おきこう)の口語。

おきかえる[自動・ラ四]【起返る】(自動・ラ四) おきあがる。おきなほる。

おきかがり[名]【熨斗】(名) 沖に碇泊すること。

おきかき[名]【熨斗】(名) ❶熨をかきたて又はかきよせるに用ひる道具。ひかき。❷熨を持ち運ぶ鐵器。ふのう(斗能)。

おきかけ[名]【起掛】(名) 臥床から起出て程へぬこと。

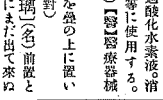
おきがた[名]【置形】(名) 布に模樣を染めすに、型紙を用ひて繪具を擦りつけたもの。(染形の對)

おきかる・す[他動・サ四]【置枯らす】(他動・サ四) 草の上に霜が降つて、草を枯らすこと。

おきかんばん[名]【置看板】(名) ❶看板としておく物。❷座を占めてゐるばかりで無能なもの。

おきき[名]【御聞】(名) 聞くことの敬語。

おききす[名]【沖鱚】(名)【動】硬骨類の魚。常に深海に棲息し、春に至つて浅い所に來る。長さ三〇糎位。形、鱚に似、背部は銀白色で多く蒲鉾の材料とする。


〔すぎきす〕

おきくち[名]【置口】(名) 金銀などで、器具又は衣服などの縁をとつて飾ること。

おきくむし[名]【阿菊蟲・蝨蟲】(名)【動】擬羽蟻の蛹蟲。隋又は巢を造らず、裸出のまま樹皮に尾端を固著し、頭部は一條の絲によつて枝懸る。

〔しむくきむ〕

おきくら[名]【置座】(名) 物を載せるところ。たな。「目以上をおいてうつ碁。

おきご[名]【置碁】(名) 伐病の劣つた人が、最初から二目以上をおいてうつ碁。

おきごい[名]【置鯉】(名) 親供の席に据ゑおく鯉。

おきこう[他動・ハ下二]【置換ふ】(他動・ハ下二) あれとこれとをとりかへておくこと。

おきごたつ[名]【置火燵・置炬燵】(名) 底板のあるやぐらの中に炭櫃を入れたこたつ。(据火燵・掘火燵の對)

おきこむ[他動・マ下二]【置籠む】(他動・マ下二) 「いてきぼり。

おきさく[自動・カ下二]【沖放く】(自動・カ下二) 沖の方に遠ざかる。(古語)

おきさり[名]【置去】(名) 捨ておいて立去ること。おきぼり。

おきじ[名]【置字】(名) ❶漢字を訓讀する時に讀まない文字。「焉」「矣」などの類。❷書翰文で、副詞・接續詞等に用ひる文字。

おきしお[名]【置潮】(名) やめるに都合のよい機會。

オキシパサー[Oxypather](名)【醫】オキシヘラー。

オキシフル[Oxyful](名)【藥】過酸化水素液。消毒殺菌劑及び化粧用として齒牙漱白等に使用する。

オキシヘラー[Oxyheater](名)【醫】療器械の一。酸素應用の呼吸器病治療機。

おきじゃく[名]【置尺】(名) 織物などを盤の上に置いて、物さしではかること。(もち尺の對)

おきじょうるり[名]【起淨瑠璃】(名) 前置として語る淨瑠璃。芝居で役者の舞臺にまだ出て來ぬ中に語る淨瑠璃。

おきす[名]【沖洲】(名) 沖にある洲。

おきすう[他動・ワ下二]【据ふ】(他動・ワ下二) 据ゑておく。

おきすえ[名]【置据ゑ】(名) おきすゑること。すゑておき。「てゐる頭巾。まる頭巾。ほうろく頭巾。

おきすきん[名]【置頭巾】(名) 大黑樣がかぶつてゐる頭巾。

おきすけ[名]【沖漬】(名) 小魚を背開きにしたものを、諸白・柘に酢・鹽などを混じて煮沸して冷した中に漬けたもの。

おきすて[名]【置捨】(名) すてておくこと。

おきすみ[名]【置墨】(名) 髮の生え際や薄い部分に墨を塗り、又眉を描くこと。又、その墨。

おきすり[名]【沖釣】(名) 沖に出て釣すること。

おきそう[名]【沖沽】(名) 沖に出て釣すること。(古語)

おきそう[名]【置添ふ】(自動・ハ四) 置いてある上に更に置く。

おきそう[名]【置添ふ】(他動・ハ下二) 前條に同じ。

おきそえ[名]【置添ふ】(他動・ハ下二) おきそへは。おきそへる。

おきだて[名]【置楯】(名) 据ゑおく楯。(もち楯の對)

おきちじみ[名]【起縮】(名) 寢の眠起の際に成長がとまつて、却つて縮小する病。「る。命ずる。

おきつ[他動・タ下二]【掟つ】(他動・タ下二) さだめ

おきつ[名]【興津】(名)【地】靜岡縣庵原郡にある町。薩埵峠の麓にあつて清見潟に臨み、風景絕佳。清見寺(せいけいじ)があり、避暑・避寒に適する。もと東海道五十三次の一。**—だい**[名]【興津鯛】(名)❶【動】(あまだい)。❷興津の名産で、甘鯛を鹽乾にしたもの。**—のり**[名]【興津苔】(名)【植】紅藻類の海蘊。矮小にして扁平、海中の岩に附著す。色は深紫・乾けば黃褐色に變じ、質强靭となる。糊料・食料とする。

おきつ・ありそ[名]【沖津荒磯】(名) 沖の荒磯。(古語)

おきつ・いくり[名]【沖津いくり】(名) 海底にある巖。(古語)

おきつ・うみ[名]【沖津海】(名) 海の沖。(古語)

おきつかい〔沖津櫂〕(名) ❶沖で漕ぐ櫂。❷左のかの櫂。(〈つ櫂の對)(古語)

おきつかじ〔沖津楫〕(名) ❶沖にゐる船。(古語) ❷沖つ楫。(古語)

おきつかぜ〔沖津風〕(名) 沖を吹く風。(古語)

おきつき〔奥津城〕(名) おくつき。(古語)

おきつくに〔沖津國〕(名) 海上隔てて遠い方にある國。(古語)

おきつけ〔置附〕(名) 常に据ゑおくこと。おきすえ

おきつしおあい〔沖津潮會〕(名) 沖で潮流の出合ふところ。(古語)

おきつしおさい〔沖津潮騷〕(名) 沖合で潮のさす時に波の騷ぐこと。(古語)

おきつしおじ〔沖津潮路〕(名) 沖の潮の流れる路。(古語)

おきつしまね〔沖津島根〕(名) 沖にある島。(古語)

おきつしまもり〔沖津島守〕(名) しまもり。(古語)

おきつしまやま〔沖津島山〕(名) 大洋中にある島。(古語)

おきつずみ〔置鼓〕(名) 下に置いて打つ鼓。(手鼓の對)

おきつち〔置土〕(名) ❶あるが上に置き添へた土。❷平地の上に高くおいた土。(客土)

おきつどり〔沖津鳥〕(名・枕) ❶沖にゐる鳥。❷「あち」〔鴨〕かも〔鶴〕むなみる〔胸見る〕の枕詞。

おきつなみ〔沖津波〕(名・枕) ❶沖の波。(〈つ波の對)(古語) ❷「しき」とをむ」たかし」荒の枕詞。

おきつふね〔沖津船〕(名) 沖を渡さ行く船。

おきつみとし〔奥津御年〕(名)【植】いね(稲)の異名。(古語)

おきつみや〔沖津宮〕(名) 海神の住む宮。(古語)

おきつも〔沖津藻〕(名) 沖に生ずる藻。おきつもは。(〈つ藻の對)(古語) **―の**〔沖津藻の〕(枕)「なびき」の枕詞。

おきつもは〔沖津藻葉〕(名) おきつも。(〈つ葉の對)(古語)

おきて〔掟〕(名) ❶さだめ。きめ。いましめ。❷規程。法度。法律。❸心だて。心ばへ。❹田島の小作。

―さく〔掟作〕(名) 小作。**―まい**〔掟米〕(名) 年貢などを地主が出す約束の下に、小作人が一反別割に餘分に小作米を地主に納めること。

おきてがみ〔置手紙〕(名) 用件を書いて、面談のかはりに殘し置く手紙。

おきてぬぐい〔置手拭〕(名) 畳んだ手拭を頭や肩にのせること。又、その手拭。

おきど〔置戸〕(名) 物を置きすゑる具で、机などの類。「ゑおく」時計。

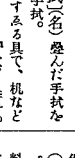
おきどけい〔置時計〕(名) 机・棚などの上に据ゑおくもの。

おきどこ〔置床〕(名) 床の間のやうに造り、他にうつし得るやうにした臺。

おきどころ〔置處〕(名) ❶物を置くべき處。物を置いた處。❷なすべき手段。**―無し**(句) 自分のかちだの處置に當惑するにいふ。

おきとり〔置鳥〕(名) 姫體の式などに飾る鳥。

おきな〔翁〕(名) ❶年寄った男。❷老人の敬稱。❸老人の容貌に似せて作った假面。❹能樂の一。老人の假面をかぶって行ふもので、最しめでたい曲。**―あめ**〔翁飴〕(名) 越後直江津・高田地方の名産の粟餅。**―あんどん**〔翁行燈〕(名) 古書、芝居の顔世興行に掛ける方形の行燈。**―ぐさ**〔翁草〕(名) ❶【植】❷毛莫科の多年生草本。高さ二〇糎位。全體に白毛密生し、根葉は二回羽狀に分裂し、各裂片は長形で缺刻が多い。上部に二葉より成れる總苞がある。四五月の頃花莖を抽出し、その頂に一花を著く。花は六角の花蓋を有し、その外面には白色の軟毛がある。花後、瓶果が集まって球形をなし、白色羽毛狀の花柱を生じ、老人の白髮を亂したやうである。◎菊の異稱。(古語)◎松の異稱。(古語) ❸【文】江戸時代の神淨杜口の著。江戸時代俗間に傳へられた奇事逸話・軍談武功等を蒐集し、併せて他人の著述を抄錄したもの。安永五年(一四三六)に成る。**―どうし**


[おきなぐさ]

―[ゐ]**が**〔翁格子〕(名) 格子の中に、更に多くの細い格子をあらはした縞。**―さぶ**〔翁さぶ〕(自動、バ上二) 年寄って老人らしくなる。(古語) **―じるこ**〔翁汁粉〕(名) 白餡で製し、餅の代りに求肥(ぎゅうひ)を入れた汁粉。**―すがた**〔翁姿〕(名) 老人の姿。**―ぶ**〔翁ぶ〕(自動、バ上二) おきなさぶ。(古語) **―やき**〔翁燒〕(名) 料理の名。鯛の肉を、白味噌を味醂で溶いた中に漬けておき、これを焼いて白味噌仕立ての羹。

おきない〔補〕(名) おきなふこと。又、そのもの。**―ぐすり**〔補藥〕(名) ❶精力の衰へたのを補ふ爲の藥。❷富豪の間にあはせの藥。

おきなおる〔起直る〕(自動、ラ四) 起きかへって正しく坐する。❷起坐する。

おきなます〔沖膾〕(名) 沖で捕獲した魚を直ちに船中で膾にしたもの。

おきなわ〔沖繩・水索〕(名) 魚を捕へるに用ひる繩。

おきなわ〔招繩〕(名) 懲をならす爲に、脚を繋いでおく繩。

おきぬう〔補ふ〕(他動、ハ四) おきなふ。(古語)

おきぬき〔起抜〕(名) 着物などを縫ひつくろふこと。(古語)

おきぬけ〔起抜〕(名) 朝、起出で間のない時。おきがけ。

おきのいん〔隱岐院〕(名) 後鳥羽上皇。

おきのう〔補ふ〕(他動、ハ四) ❶不足を補ふ。❷おきなひ藥。

おきのたゆう〔沖大夫〕(名)【動】あほうどり。〈信天翁〕

おきのどくさま〔御氣毒樣〕(名・副) ❶他人の手數を煩はした時に發する語。❷商人が客の求める品のない時に相濟まぬと思ふ情をあらはす語。

おきのり〔除〕(名) おきのること。掛け買ふこと。**―わざ**〔除事〕(名) おきのりをすること。掛け買ふこと。

おぎのる〔おぎのるる〕(自動、ラ四)〔補賢の〕(名) 他人の爲に物を買ふ。代價を借りて物品を購買する商人。

おきばん〔起番〕(名) ねずのばん。(古語)

おきび〔熾火〕(名) 紅く熱した炭火。

おきびき〔置引〕(名) 銀行や郵便局の窓口で、受取人の知く紛って金を受取り、又は停車場の待合室で所持者の知く紛って鞄などを盗みとること。

おきびと〔招人〕(名) よりまし(選)。(古語)

おきふし〔起伏〕(名) ❶起きることと臥ることと。❷日常。つれづれ。

おきぶみ〔置文〕(名) かきおき。遺書。「その物。

おきふるし〔置舊〕(名) おきふるしたこと。又、

おきふるす〔置舊す〕(他動、サ四) 捨てておいて時日を過す。物を使用せずにふるくする。

おきべ〔沖邊〕(名) 沖の方。遠かな海の方。

おきまつり〔釋典〕(名) せきてん。しゃくてん。

おきまどわす〔置惑はす〕(他動、サ四) ❶見わけにくいやうにおく。❷おきわすれる。「おき所にまよふ。まちがっておく。

おきまよう〔置迷ふ〕(自動、ハ四) おきまどわす。

おきまり〔御決〕(名) 常にきまってゐること。おいふ文句。

おきもんく〔御決文句〕(名) 口ぐせにいふ文句。

おきみやげ〔置土産〕(名) 立去るに臨んで殘しておくみやげ。

おきみち〔置路〕(名) 置土をして盛りあげた路。

おきむし〔置尺蠖〕(名)【動】しゃくとりむし。

おきめ〔置目〕(名) ❶おきて。まだめ。法則。❷處刑。しおき。❸圖案の模樣などを器物の面に寫取って、下書とする方法。

おきめばる〔沖目張〕(名)【動】あかめだいの。

おきもの〔置物〕(名) ❶神佛の前や床の間の裝飾にすゑておく物。❷或位地に居って、請事すべて配下の者の手に渡す人。**―だい**〔置物臺〕(名) 置物を据ゑる臺。

おきや〔置屋〕(名) 藝娼妓を抱へおく家。我が家では客を遊興させず、揚屋・茶屋からの迎へに應じて

之な遺はすもの。

おきやさぎ〔置屋詐欺〕(名)質物又は粗悪品に手を加へ、良品の如く見せかけ、賃屋から眞價以上の借出をする常習詐欺。

おきゃん〔御俠〕(名)妙齢の女子の、擧動輕輕しくて臆面もないもの。おてんば。フラッパー。

おきゅうそらい〔荻生徂徠〕(名)【人】江戸時代の儒者。字は茂卿。號は蘐園。本姓は物部氏。物徂徠といふ。始め朱子學を學び、後、古文辭學を唱道し、門下から太宰春臺・服部南郭等を出した。享保十三年(一三八八)歿。年六十三。其の著に「徂徠集」「蘐園隨筆」論語徵」「譯文筌蹄」「辨道」等がある。

おきょう〔御形〕(名)【植】ははこぐさ。

おきょどころ〔御清所〕(名)清所の敬稱。貴人の食事所。勝手元。

おきる〔起きる〕〔自動、カ上一〕〔お〕

おきろ〔廣〕(名)廣大なること。深遠なること。(古語)

—なし〔廣なし〕〔廣なし〕(形、ク)廣大無邊である。(古語)

—に〔廣に〕(副)甚だしく。非常に。(古語)

おきろく〔隱岐絲〕(名)【織】(おきろくしょう)。

—しょう〔隱岐絲青〕(名)【織】絲青の一種。檜皮に用ひる。昔、隱岐から産出したから此の名がある。

おきわする〔置忘る〕〔他動、ラ下二〕❶物の置所を忘れる。❷置いたままで、持歸ることを忘れる。

おきわすれ〔置忘〕(名)おきわすれること。又、其の物。

おきわすれる〔置忘れる〕〔他動、ラ下一〕おきわする。の口語。

おきわた〔置綿〕(名)綿帽子。

おきわたし〔沖渡〕(名)碇泊中の本船に解を送って、買取つた貨物の受渡しを終了すること。

おきわたす〔置渡す〕〔他動、サ四〕一面におくこと。

おきわたる〔置渡る〕〔自動、ラ四〕

おく〔億〕(名)數の多いこと。

おく〔億〕(數)數の名稱。萬の萬倍。

おく〔置く〕〔他動、カ四〕❶據る。❷除く。❸離る。(古語)❹家内に著へる。❺貨物を預け入れる。❻箔・蒔物・模樣などを施す。❼計算する。❽後の爲に備へる。❾時日を隔てる。❿後に殘す。

おく〔置く〕〔自動、カ四〕露・霜などがたまる。

おく〔奥〕(名)❶内へ深くはひつた處。❷物のはて。❸家の内で主人の燕居し、又、妻女の起臥する所。❹貴人の妻。❺物事の秘密。❻深遠にして知り難い所。❼「地」みちのく(陸奥)。

おく〔措く〕〔他動、カ四〕❶施す。用ひる。❷やめる。捨てる。❸ふるまひをする。動作する。

おく〔擱く〕〔他動、カ四〕とどめる。さしおく。

おく〔起く〕〔自動、カ上二〕❶立ちあがる。おきあがる。❷目がさめる。

おく〔招く〕〔他動、カ四〕招き寄せる。(古語)

おくい〔奥意〕(名)❶他人に知らざる心。底の心。

おくいし〔奥醫師〕(名)江戸幕府の職名。將軍又は大奥の診療を掌つたもの。「に」書類の終におす印。

おくいん〔奥印〕(名)官公署が事實を證明する爲

おくう〔屋宇〕(名)家。家屋。

おくう〔屋鳥愛〕(名)屋根にとまつてゐる鳥。

—の・あい〔屋鳥愛〕(名)(說苑貴德篇に出る)人を愛する情の、其の關係する者に及ぶこと。

おくか〔奥處〕(名)❶奥深い處。はて。(古語)❷おくい。おくのて。ごくい。

おくが〔屋瓦〕(名)やねがはら。

おくがいほう〔屋外架線法〕(名)電力を傳送する爲に、電線を布設する方法。架空式と地中式とがある。

—しゅうかい〔屋外集會〕(名)屋外に多人數集會すること。

おくがき〔奥書〕(名)❶書物の終りに發行の年月日・著者の名又は來歷を書きつけた文章。❷官公署が事實の眞正・確實な事を證明する爲に書く文。

おくがた〔奥方〕(名)貴人の妻。夫人。

おくがろう〔奥家老〕(名)奥勤めの家老。

おくき〔奥義〕(名)學藝・武術などの高尚なところ。おくのて。あうき。

おくぎを〔小岫〕(名)くき(岫)。(古語)

おくぐち〔奥口〕(名)奥の方に通ずる入口。

—せず(句)反物などの商品に、奥卽ち末端の方と、口卽ち最初の部分との賃金がへない。卽ち、品質を全部てがた調製するといふ。

おくげんかん〔奥玄關〕(名)奥の方にある玄關。

おくごしょう〔奥小姓〕(名)おくづとめの小姓。

おくじ〔御髮〕(名)❶頭髮の敬稱。❷首の敬稱。

—あげ〔御髮上〕(名)他人の頭髮を結ぶこと。

おくじ〔小櫛〕(名)くし(櫛)。

おくじえ〔奥智慧〕(名)❶深い智慧。❷子供のちゑづきのおそいこと。

おくじ〔奥縞〕(名)紺色に樺茶色の入りまじつた平坦にして、花壇を設け、遊歩・運動に適する設備をした島。

おくじょうるり〔奥淨瑠璃〕(名)江戸時代に、奥羽地方の座頭が扇子拍子で語つた淨瑠璃で、主として賴光四天王・金平・手柄・義經記などを語つた。

おくす〔遣す〕〔他動、サ變〕氣おくれして恐れる。おちける。

おくす〔遣す〕〔他動、サ四〕「おこす」の發行者の氏名。發行年月日などを記載した紙。

おくすぐり〔奥附〕(名)書册の終りにある著者・

おくすじ〔奥筋〕(名)奥州地方。

おくすぢ〔奥詰〕(名)江戸時代に、將軍の諮問に應ずる爲、隔日交替に大名が幕中に伺候した。

おくせい〔奥勢〕(名)奥羽の軍勢。

おくせつ〔臆說〕(名)❶事實に基づかず推測していふ意見。❷【論理】(Hypothesis)論理學に於いて、事物の原因を說明する爲に、假に設けた想像說。假說。

おくせめ〔奥攻〕(名)奥州を征伐すること。

おくせり〔臆測〕(名)いい加減な推測。あてずりやう(當推量)。「て」戒めた心事。本心。

おくそ〔奥底〕(名)❶深く入りこんだ奥。❷深い意味。

おくそすきん〔苧屑頭巾〕(名)「をくづきん」の說。頭巾の一種。苧屑を用ひて製したものか。又、「おこそづきん」の說ともいふ。やまをかづきん。

おくそ〔奥袖〕(名)一布半又は二布から成る奥の方になる袖。

オクターヴ〔Octave〕(名)【音】或振動數を有する音に對して、その二倍の振動數を有する音の稱。或から同名の高い音或は低い音までの間、卽ち「a」から「a'」「c」までの間。八度音程。

オクタヴィヤヌス〔Octavianus〕(名)【人】ケーザルの甥。ケーザルの嗣子として姓を改め、ユリウス・ケーザル・オクタヴィヤヌスと登稱された。後、ローマの內亂を平定し、西曆前三一年帝位に登る。アウグスッスとして知られてゐる。このアウグスッスの時代はローマ文化の黃金時代である。(前六三—四)

おくだかし〔臆高し〕(形、ク)臆病である。きおくれする。(古語)

おく・たく〔臆度億度〕(名)おしはかること。あてずゐりやう。臆測。

おく・だん〔臆斷〕(名)おしはかってきめること。

オクタント〔Octant〕(名)三百六十度の圏を八分したもので、角度を測る器。八圏儀。

おぐち〔尾口〕(名)馬などの尾のつけね。

おく・ちょう〔億兆〕(名)❶限なく多い數。❷人民。民衆。

おく・ちょうば〔奥帳場〕(名)❶奥にある帳場。主人又は重役・支配人などのゐる所。❷おくやく(奥役)。

おぐつ〔麻沓〕(名)麻でつくったわらぢで、軍用に供するもの。いはぐつ(麻沓)。

おく・つき〔奥津城〕(名)墓。(古語)**—どころ**〔奥津城處〕(名)墓場。

おく・つま〔奥妻〕(名)其だしく愛する妻。(古語)

おく・つむぎ〔奥紬〕(名)奥州から産出する紬。

おくて〔晩稻〕(名)【植】おそくみのる稻。

おくて〔奥手〕(名)後れて花咲き又は實る草木。

おくど〔奥土〕(名)奥州の土地。

おく・どこ〔奥床〕(名)家の奥にある臥床。(古語)

おくどしより〔奥年寄〕(名)(ろすいどしより)。

おくな〔童男〕(名)(うなは)は「小」の義。「くなは」人」の古語。朝鮮語 kun(人)と關係がある。をのわらは。男の子。(第の對)(古語)

おくなし〔奥無し〕(副)奥まで窮めて。殘る所なく。

おくに〔御國〕(名)❶江戸時代に於ける大名の領地の敬稱。❷他人の國の敬稱。❸故郷。出生地。❹故國。祖國。❺地方。ゐなか。

おくに・かぶき〔阿國歌舞伎〕(名)江戸時代の始め、出雲大社の巫女(ミコ)阿國とふものが、神樂から出でついて演じ出した舞曲で、今の芝居の始めである。

おく・ぬの〔奥布〕(名)昔、陸奥國から産出した布。(古語)

おく・ねん〔憶念〕(名)堅く心中に銘記して忘れぬこと。心中に把持して絶えず思ひ起こすこと。

〔おくぶかにくき〕

おく・の・いん〔奥院〕(名)【佛】寺院の本堂から奥の方にあって、本尊などを安置した所。

おく・の・て〔奥手〕(名)❶おくぎ。ひけつ。こくい。❷容易に人に知らさぬ手段。

おく・の・ほそみち〔奥の細道〕(名)【文】芭蕉が元禄二年三月廿七日、江戸深川の庵を出で、門人河合曾良と共に奥州を行脚し、北陸の勝を探り、更に濃州から伊勢路に入った日數六ヶ月、行路六百里の俳文紀行。元禄七年(一三五四)刊。

おく・の・ま〔奥間〕(名)家の奥の方にある室。

おく・の・や〔奥屋〕(名)武家で、「對の屋」の稱。

おく・は〔奥齒〕(名)口腔の奥の左右にある齒。臼齒。**—に劍**(句)言葉に害意のこもる譬。**—に物が挟まる**(句)十分に心が打解けないで、思ふことを十分にいひ切らぬ感になぞらへていふ語。又、十分に呑み込めないで、心に懸念あるさまにいふ。

おく・はい〔屋背〕(名)❶屋根の上。❷家のうしろ。

おくび〔衽・袵〕(名)(おほくびしの略)おくみ。

おくび〔噯氣〕(名)胃にたまった瓦斯の、口腔外に出るもの。**—にも出さぬ**(句)或物事を深く融して口外せぬこと。

おくびょう〔臆病〕(名)膽力なくして少しの物事にもおぢおそれること。**—かぜ**〔臆病風〕(名)おぢけだつこと。臆病の心。**—がみ**〔臆病神〕(名)臆病の心を起させる神。**—ぐち**〔臆病口〕(名)❶能氣藥の切戸口。❷芝居の本舞臺の下座の方の出入口。**—まど**〔臆病窗〕(名)商店の戸前に設けて開閉せられるやうにした小窓で、戸を閉ぢた後に、買物に來る客に金品を授受し、又、來訪者ある時は、樣子を窺い視る爲のもの。**—むし**〔臆病蟲〕(名)臆病な心。又、その心を有する人。**—もの**〔臆病者〕(名)臆病な性質の人。**—風に吹かれる**(句)臆病な心が起こる。**—神がつく**(句)前條に同じ。**—の神おろし**(句)臆病者が神神の名を念じて救助を所ること。

おく・ふかし〔奥深し〕(形、一)❶奥が深い。❷意味が深くてわかりにくい。

おく・ぼうず〔奥坊主〕(名)江戸時代に、江戸城の奥向に居って、將軍に茶を進め、登城の諸侯の接待給仕などをした坊主。

おく・まく〔奥まく〕(自動、カ下二)

おく・まる〔奥まる〕(自動、ラ四)奥深い。

おくみ〔衽・袵〕(名)着物の前の左右にあって、上は襟につづき、下は裾に至る帷のきれ。**—さがり**〔衽下〕(名)衽さがり。襟と身頃との間に挾まって尖ったところ。**—なり**〔衽形〕(名)衽の如く斜なる形。

おくみ〔御組〕(名)くみやしき。

おくみや〔奥宮〕(名)本社の奥にある社。おくやしろ。

おくむき〔奥向〕(名)❶上流家屋の内儀の仕事など。❷家の奥の方、卽ち居間の愛國婦人會の創設者。肥前國唐津の人。北清事變の際、軍人遠族救護の事を志し、翌年愛國婦人會を起こした。明治四十年(一五六七)歿。年六十三。

おくめつけ〔奥目附〕(名)江戸幕府の職名。幕府又は諸侯の家の、奥勤めの者の執務狀態を監督したもの。おくまつめ。

おく・めん〔臆面〕(名)氣おくれした容貌。恐れた顏つき。**—なし**〔臆面無〕(名)子供などの臆して「稱。おくのや。

おく・や〔奥屋〕(名)室町時代の武家の「對の屋」の

おく・やく〔奥役〕(名)芝居で、一切の事務を支配

おく・やしろ〔奥社〕(名)奥深くして人里離れた山

おく・やま〔奥山〕(名)深山。**—が**〔奥山家〕(名)深山の中にある人家。又は村里。**—しき**〔奥山式〕(名)昔、淺草觀音堂裏を奥山といったことに基づき、淺草式の意で、俗惡・淫蕩の意に用ひられる。**—そだち**〔奥山育〕(名)奥山で育ったこと。又、その人。**—でら**〔奥山寺〕(名)奥山にある寺。**—の**〔奥山の「まき」(臥木)〕ふかきと「深き」の枕詞。

おく・ゆうひつつ〔奥右筆〕(名)江戸幕府の職名。若年寄の管下で機密の文書や記錄を掌ったもの。

おく・ゆか・し〔奥床し〕(形、二)❶おくふかくして尊はしい。❷機微・野卑でなくて、思慮深さうに見える。「での距離。(間口の對)

おく・ゆき〔奥行〕(名)家や地面などの表から奥まで。

おく・ゆきし〔奥許〕(名)師匠から奥義の傳授を許可せられること。奥傳。(初手許・中許の對)

おく・よこめ〔奥横目〕(名)おくめつけ。

おくら〔倉〕(名)❶もののたはり。千秋樂。

おぐら〔小倉〕(名)❶京都市右京區嵯峨町上嵯峨小倉山附近一帶の古稱。❷(おぐらあん)。❸遊餡に、大納言赤小豆の蜜漬を混ぜた餡。**—あん**〔小倉餡〕(名)小豆の

—かん〔小倉羹〕(名)赤小豆又は隱元豆などの粒を交へた煉羊羹。**—さんそう**〔小倉山莊〕(名)京都市右京區嵯峨町上嵯峨の小倉山の附近にあった宇都宮頼綱の山莊。**—しきし**〔小倉色紙〕(名)藤原定家(一説に、宇都宮頼綱)が小倉山莊で、百人首を各別に記した百枚の色紙。**—じるこ**〔小倉汁粉〕(名)小豆又は隱元豆の粒を交へた汁粉。**—ひゃくにんいっしゅ**〔小倉百人一首〕(名)

【文】おぐらしきし〔小倉色紙〕。

おぐら〔名〕〔小暗し〕(形・一)うすぐらい。ほのぐらい。「やうにする。おくれさせる。

おくらす〔後す〕(他動・サ四)おくれる。

おぐらす〔小暗す〕(他動・サ四)くらます。(古語)

おぐらの・いけ〔巨椋池〕(名)【地】京都市伏見區の南にある池。周囲一七粁餘。もと宇治川の彎入によって生じたもの。古稱おほくらの入江。

おくり〔送〕(名)㊀おくること。㊁送り届けること。㊂ついて送って行くもの。見送。㊃おくり狀。㊄酒肴の例。㊅俳優の陰侯。「―あし〔送足〕(名)㊀貴人の前に目錄を持出す時、跪居際で、足を引いて、踏直した上で越える古代禮式の足どり。㊁御道で、打懸らうとする時、前足を引いて後足と共に踏出す足どり。―あり〔送蟻〕(名)鴨居などを釣木するに用ひる仕口。―おおみみ〔送狼〕(名)㊀山中などで、行人の後を追ふ狼。㊁女義太夫などの後を追ひ行くたはけ男。狼れんも。―がな〔送假名〕(名)㊀漢文を訓讀する場合に、漢字で書いた語の讀み方を明らかにする爲に漢字の下につける假名。「穏かに」「高らか」「即ち」など。

きょう〔送經〕(名)【佛】盂蘭盆の終りの日に、亡者の冥途に歸るを送る爲に讀む經文。―けん〔送券〕(名)運送者が荷物を送附する場合に、其の貨物に添へて受取人に送附する貨物の明細書。―こみ〔送込〕(名)おくりこむこと。―こむ〔送込む〕(他動・マ四)送って先方に届ける。送り入る。―ざかな〔送肴〕(名)宴席で、客に肴などを送ること。―さる〔送猿〕(名)雨戸の相接せる縁に横にさす木片。―さんじゅう〔送三重〕(名)浄瑠璃の段きれを次の詞へ續ける時の三味線の地。―じ〔送字〕(名)同一の假名や漢字を重れて書くもの。―じょう〔送狀〕(名)荷送人から荷物を發送した時に、荷受人に送附する荷物の明細書。―ぜん〔送膳〕(名)饗應の際、來集せる客に、勝部を送ること。―だし〔送出〕(名)㊀送って出すこと。㊁相撲の手。相手が背面を見せた時に、之を突き出すこと。―つく〔送附く〕(他動・カ下二)先方へ送り届ける。―つける〔送附ける〕(他動・カ下二)「おくりつく」の口語。―てがた〔送手形〕(名)【經】送附する物品に添へる發送者の記名・調印した手形。―とどける〔送屆ける〕(他動・カ下二)「おくりとどく」の口語。―とどく〔送屆く〕(他動・カ下二)おくりつける。送って先方へ届ける。―び〔送火〕(名)【佛】盂蘭盆の最終日陰暦七月十六日に、祖先の靈魂を送る爲に焚く火。(迎火の對)㊁死者の亡骸を送る爲に門前に焚く火。―びと〔送人〕(名)見送の人。―ぶ〔送夫〕(名)荷物を運び行く人夫。―ぶね〔送船〕(名)品物を送る時に添へてやる手紙。―むかえ〔送迎〕(名)送ると迎へること。そうげい。

おくり〔御庫裏〕(名)眞宗の僧の妻。

おくり・そうたん〔小栗宗丹〕(名)【人】貴栗。丹波の人。周文に從ひ、後、一家をなし、布色・水墨共に妙境に入る。周文の後を受けて、將軍足利義政に寵遇せられた。寛正五年(一四六四)歿。年六十七。

おくりな〔贈名・諡〕(名)人の死後に、其の德を稱へて追贈する稱號。

おくりは〔小栗派〕(名)【美】足利義政時代の小栗宗丹を祖とする繪畫の一派。

おくりはんがん〔小栗判官〕(名)【傳】傳說的人物。常陸國の人。名は助重、通稱は小次郎、父滿重が管領足利持氏に攻められた時、助重は相模に逃れて、賊の爲に命を失はうとしたのを、遊女照葉・照手姫の救によって死を脱し、名馬鹿毛に乘って遊行上人の藤澤の道場に投ず。又、小栗が毒酒に中てられて後、照葉は車に乘せて温泉に挽いて行たなどと傳へられる。以上の説話を主題とする戲曲に、山本土佐掾の「小栗の判官」、近松門左衛門の「當流小栗判官」、千前軒・文耕堂合作の「小栗判官車街道」、紀海音の「鬼鹿毛無佐志鎧」等がある。

おぐり・ふうよう〔小栗風葉〕(名)【人】明治大正の小説家。名は磯夫。愛知縣の人。紅葉門人。其の門下から眞山青果・中村武羅夫等を出した。大正十五年(二五八六)歿。年五十二。その作品に「戀慕流し」「戀さめ」「金色夜叉終篇」「青春」等がある。

おくりもの〔贈物〕(名)人に贈與する物品。じんもつ。

おくる〔送る〕(他動・ラ四)㊀此所から彼方へつかはす。㊁去る人の後について行く。㊂旅立つ人を見送る。㊃葬送する。㊄送假名をつける。㊅贈る。(すこーす。へる。

おくる〔贈る〕(他動・ラ四)㊀やる。遣はす。與へる。㊁死者に官位を授ける。

おくる〔後る〕(自動・ラ下二)㊀人の後になる。㊁くだる。劣る。㊂とどかぬ。及ばぬ。

おくるす〔小栗栖〕(名)【地】京都市伏見區の地名。天正十年明智光秀が土兵に殺された處。

おぐるま〔小車〕(名)くるま。

おぐるま〔旋覆花〕(名)【植】菊科の多年生草本。莖の高さ九〇糎位。葉は無柄で互生し、廣楕圓形又は披針狀廣楕圓形で先尖・緣邊に小鋸齒がある。夏、莖梢に菊花に似た鮮黄色の頭狀花を著ける。花を乾かして藥用とする。のぐるま。

おくれ〔後〕(名)㊀おくれること。あとになること。㊁おちおそれること。㊂おくれ毛。―がけ〔後驅〕(名)鈍くなること。㊃劣ること。おくればせ。―がみ〔後髪〕(名)おくれげ。―げ〔後毛〕(名)後れてのびた髪の毛の垂れ下ってゐるもの。―ざき〔後咲〕(名)花の時季におくれて咲くこと。(早咲の對)―はせ〔後馳〕(名)㊀おくれてはせつけること。㊁おくれて思案の出ること。㊂時機におくれたこと。

おくれる〔後れる〕(自動・ラ下一)おくれる。(古語)

おくろ〔小黒〕(名)形小さくて色の黒いもの。

おくろ〔屋漏〕(名)㊀家の西北隅。人の居ちぬ屋内の陰氣な處。㊁あまもり。やもり。―に愧ぢず(句)(詩經大雅抑篇に出る)人の見ない所でも恥づかしい行をしないことにいふ。

おけ(感)神樂・盛馬樂の歌の拍子。

おけ〔桶〕(名)(前條の轉)細長い板を縱に並べ合せ、底なっけ鐵(箍)で締めた圓形の器。多く水を盛り、又は漬物をするに用ふる。―がわ〔桶側〕(名)桶の側の板。㊀おけがわどう。―がわどう〔桶側胴〕(名)うちのべにした金胴で、其の形は桶側に似る。胴の左側に蝶番(ちょうつがい)を設け、風伸を便にする。―ぐい〔桶側胴鎧〕(名)袖と草摺のある桶側胴。―ごし〔桶越〕(名)桶に乘って川越をすること。昔、遠江大井川で行はれた。―び〔桶火〕(名)火桶の中に入れること。㊁昔、遊里で、揚錢の支拂のできぬ場合に、桶をかぶせて支拂を強請承諾せしめたこと。―ぶろ〔桶風呂〕(名)桶の形に造った據風呂。―や〔桶屋〕(名)桶・井戸側などを造り、又は桶の修繕などをする人。又は其の家。

おけ・ぶし〔御祓祭節〕(名)越後國柏崎邊から流行し始めた小唄の節。二上り調子のもの。佐渡おけさ・新潟おけさ等あり。多少曲調を異にする。

おけつ〔惡血〕(名)廢物の混った血液。わるちち。くろち。

おけつ・こう〔烏骨雞〕(名)【動】(おこっけ)

おけはさま〔桶狭間〕(名)【地】愛知縣知多郡大脇村の字。その東北の屋形狭間(田樂狭間)は永祿三年(一二二〇)織田信長が今川義元を襲って奇捷を博した處。

おけら〔螻蛄〕(名)【動】(けら。

おけら〔朮・蒼朮〕(名)【植】菊科の多年生草

本。葉は下部水質をなし、巻、宿根から出た嫩芽は、多く白軟毛を被る。高さ九〇糎位。葉は卵狀楕圓形で多く羽狀に分裂する。葉緣は鋸狀齒となり、小葉三乃至五より成る。又、單葉のもあり。秋、白色の筒狀花を開く。冠毛は羽狀で、根は鎚冒藥とし、又、乾かしたものを蚊遣、殺菌に用ひる。うけつ。えやみぐさ。〔そうじゅつ〕。**—のもち**〔いも〕。**—花餅**〔名〕古昔、節分の夜、神に供へた餅で、花の葉をまぜて搗いたといふ。**—まつり**〔白花祭〕〔名〕京都の官幣大社八坂神社で、毎年一月一日寅刻に行はれる神事。花を焚きその煙の靡く方角を見て其の年の豐凶を占ふ。

〔らけお〕

おこ〔御鷽〕〔名〕かひこ。**—さま**〔御鷽様〕〔名〕笑はれるほどに愚かなこと。**—え**〔烏滸繪〕〔名〕滑稽な樣を畫いた繪。おどけ繪。戯畫。痴畫。**—おこし**〔烏滸おこし〕〔烏滸烏滸し〕〔形シク〕甚だ愚かである。ばかげばかしい。**—がまし**〔烏滸がまし〕〔形シク〕●笑ふべし。ばかばかしい。愚かめいてゐる。●ですすてゐる。こしらへてゐる。**—がる**〔烏滸がる〕〔自動ラ四〕ばからしいと思ふ。なこに思ふ。**—ごと**〔烏滸言〕〔名〕たはけたことばかりごと。**—ぶる**〔烏滸ぶる〕〔自動ヤ上二〕おこめくる。**—めく**〔烏滸めく〕〔自動カ四〕をこなやうに見える。ばかげてゐる。

おこ〔海髪〕〔名〕〔植〕おこのり。

おこう〔御講〕〔名〕〔佛〕●宮中に行はせられる御佛事。●眞宗で、其の開祖親鸞上人の忌日に行ふ佛事。報恩講。●信仰上の談合の爲に行ふ會合。

おこう〔汚行〕〔名〕けがれたおこなひ。

おこう〔汚垢〕〔名〕けがれ。よごれ。あか。

おごく〔麻小筍〕〔名〕〔自動カ四〕うごく。〔古語〕

おごけ〔麻小筍〕〔名〕〔おけ×麻筍〕。〔語〕

おこ〔海髪〕〔名〕〔植〕おこのり。

おこう〔御講〕〔名〕〔佛〕●宮中に行はせられる御佛事。●眞宗で、其の開祖親鸞上人の忌日に行ふ佛事。報恩講。●信仰上の談合の爲に行ふ會合。

おこう〔汚行〕〔名〕けがれたおこなひ。

おこう〔汚垢〕〔名〕けがれ。よごれ。あか。

おごく〔麻小筍〕〔名〕〔自動カ四〕うごく。〔古語〕

おごけ〔麻小筍〕〔名〕〔おけ×麻筍〕。〔語〕

おこ〔御高祖頭巾〕〔名〕〔日蓮宗高祖日蓮上人の像の頭巾に似てゐるから云ふ〕頭巾の一種。目の部分だけ出し、他の頭部・面部を全部包むもの。主として婦人の防寒用。

〔御高祖頭巾〕

おこたい〔窩闊臺〕〔名〕〔人〕Ogodai〕〔蒙古帝國第二代の王。成吉思汗（太祖）の第三子、太宗と謚す。一二二二年即位し、後、金國を滅し、首都をオルコン河畔のカラコラム（哈剌和林）に營み、拔都（ブ）を將として、オロス（南ロシヤ）を經略させた。（一二四六）**—かんこく**〔窩闊臺汗國〕〔名〕〔歴〕蒙古四大藩國の一。太祖成吉思汗が諸子の封地を定めた際、窩闊臺に與へた地で、乃蠻（ナイマン）國の地、餘ちアルタイ山の西邊、タルバガタイ地方のエミルを中心とした地方。後、察八兒（チャバル）の時元朝に降つたが、再び元朝に叛き、（西歴一二一〇）武宗に滅ぼされた。

おこたり〔怠〕〔名〕●おこたること。なまけ。ぶしやう。不注意。油斷。●怠りから起こる罪過。●あやまること。謝罪。●病氣の快方に赴くこと。**—ざま**〔怠樣〕〔名〕病氣のやうに快方に向かつたこと。**—ぶみ**〔怠文〕〔名〕あやまりじやうもん。たいじやう。〔古語〕

おこたる〔怠る・惰る〕〔自動、ラ四〕●働かない。なまける。いいかげにする。●注意をしない。油斷する。●病が少しなほる。●病がだらけて動めない。●懶ほものうくいやである。物事を手にしない。

おこつけい〔烏骨雞〕〔名〕〔動〕雞の一品種。冠は紫黑色で低く族生し、絹絲狀の羽毛を有し、嘴・脚共に黑く、皮・肉・骨は黑色に近い紺桔梗色をなす。容貌頗る奇異。〔語〕

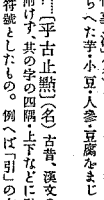
おこと〔御事〕〔代〕〔名〕〔尊〕。

おごと〔小拳〕〔名〕こと（尊）。

おことおさめ〔御事納〕〔名〕●昔、二月八日に年神の棚をとりはづして、正月の行事を終へたこと。●昔、東國で十二月八日に農事を終へたこと。

おことじる〔御事汁〕〔名〕江戸時代に、御事始と御事納にこしらへた芋・小豆・人參・豆腐をまじへた味噌汁。

おことてん〔平古止點〕〔名〕古昔、漢文の調讀に送假名を附けず其の字の四隅・上下などに點を打つて讀方の符號としたもの。例へば「引」の左下の隅に點あれば「引きて」と讀み、左上の隅にあれば「引くし」と讀むが如きもの。天暦年波に、此の四隅の點を左下より左上へ、次に右上・右下へと列れ讀んだことから起こつた。



おことに〔御事煮〕〔名〕おことじる。

おことはじめ〔御事始〕〔名〕●昔、十二月八日に煤拂をして正月の準備をしたこと。●昔、東國で、二月八日に農事を始めたこと。

おこない〔行〕〔名〕●おこなふこと。しわざ。ふるまひ。動作。●品行。行狀。身持。●佛僧但が佛戒を修めること。**—がち**〔行勝〕〔名〕〔佛〕佛事の動めばかりして日を送ること。**—こと**〔行聲〕〔名〕〔佛〕戒行して誦經する聲。**—すます**〔行澄ます〕〔自動・サ四〕●專ら佛戒を修して心を清らかにする。●殊勝らしくとりすます。

おこなはる〔行はる〕〔自動、ラ下二〕●まけりなく成り立つ。行ふやうになる。●用ひられる。流行する。

おこなはれる〔行はれる〕〔自動ラ下一〕〔おこなはるの口語〕

おこのう〔海髪・江雛〕〔名〕〔植〕紅藻類の海藻。暗紅色で細い圓柱狀をなし、數多の枝があつて、亂れた髮の形をなす。全長三〇糎位。磯邊の岩に附着す

おごと〔名〕〔御供御ごと〕の轉びひるめし。〔心〕。

おごころ〔雄心〕〔名〕雄雄しい心。勇ましい心。

おこし〔起〕〔名〕●おこすこと。●花合で、めくり札を開くこと。**—え**〔起繪〕〔名〕裏打して切り抜き、考案して、立てて組合はすやうにした繪。**—も立てず**〔句〕倒れた人に起上ることを得させぬこと。

おこし〔粗枚〕〔名〕おこしごめ。**—ごめ**〔粗枚興米〕〔名〕おこし種に、水飴をまぜて砂糖をまぶし固めた菓子。大阪製のものが有名である。**—だね**〔粗枚種〕〔名〕もちごめ・うるち又は粟などを蒸して乾かし、後、炒つた菓子。

おこし〔御越〕〔名〕〔「行く」「來る」の敬語。

おごし〔峰越〕〔名〕山の峰を越すこと。みねごし。やまごし。

おこし・かえ・る〔起反る〕〔自動、ラ四〕りきみかへる。

おこし〔熾火〕〔名〕盛んに起こつた炭火。

おこす〔起す〕〔他動、サ四〕●立たす。起して立てる。●人の眼を覺ます。●養へたものを盛んにする。●はじめる。●火を熾んにする。●土地を掘りかへす。●發生する。●固著した物を剝きとる。

おこす〔遣す・致す〕〔他動、サ四〕送り來る。よこす。

おこ・す〔遣す・致す〕〔他動、サ下二〕〔前條に同じ。

おこず・る〔誘る〕〔他動、ラ四〕〔招をきゆる〕の意からいふ〕すかし欺く。欺き誘ふ。誘惑する。〔古語〕

おこぜ〔鰧・虎魚〕〔名〕〔動〕棘鰭類の魚。形は楕圓形で、頭部大きく、凸凹があつて、奇形をなす。脊鰭棘は長く、棘しく毒腺があり、刺されると甚だしく痛む。全長二〇糎位。體色は棲む處によつて、黑褐色或は赤色・紫色を交へ、又は黃味を帶びる。形は醜いが、味は美である。近海の、岩礁起伏し海草の繁茂する所に棲息する。

〔鰧〕

おこそか〔厳〕〔名〕威嚴正しくなれ近づきにくいこと。いかめしいこと。嚴重。

おこそ・すきん〔御高祖頭巾〕〔名〕〔日蓮宗高祖日蓮上人の像の頭巾に似てゐるから云ふ〕頭巾の一種。目の部分だけ出し、他の頭部・面部を全部包むもの。主として婦人の防寒用。

〔巾頭祖高御〕

おこ・ぶる〔怠文〕〔名〕あやまりじやうもん。たいじやう。〔古語〕

おこたる〔怠る・惰る〕〔自動、ラ四〕●働かない。なまける。いいかげにする。●注意をしない。油斷する。●病が少しなほる。●病がだらけて動めない。●懶ほものうくいやである。物事を手にしない。

おこつけい〔烏骨雞〕〔名〕〔動〕雞の一品種。冠は紫黑色で低く族生し、絹絲狀の羽毛を有し、嘴・脚共に黑く、皮・肉・骨は黑色に近い紺桔梗色をなす。容貌頗る奇異。〔語〕

おこと〔御事〕〔代〕〔名〕〔尊〕。

おごと〔小拳〕〔名〕こと（尊）。

おことおさめ〔御事納〕〔名〕●昔、二月八日に年神の棚をとりはづして、正月の行事を終へたこと。●昔、東國で十二月八日に農事を終へたこと。

おことじる〔御事汁〕〔名〕江戸時代に、御事始と御事納にこしらへた芋・小豆・人參・豆腐をまじへた味噌汁。

おことてん〔平古止點〕〔名〕古昔、漢文の調讀に送假名を附けず其の字の四隅・上下などに點を打つて讀方の符號としたもの。例へば「引」の左下の隅に點あれば「引きて」と讀み、左上の隅にあれば「引くし」と讀むが如きもの。天暦年波に、此の四隅の點を左下より左上へ、次に右上・右下へと列れ讀んだことから起こつた。

おことに〔御事煮〕〔名〕おことじる。

おことはじめ〔御事始〕〔名〕●昔、十二月八日に煤拂をして正月の準備をしたこと。●昔、東國で、二月八日に農事を始めたこと。

おこない〔行〕〔名〕●おこなふこと。しわざ。ふるまひ。動作。●品行。行狀。身持。●佛僧但が佛戒を修めること。**—がち**〔行勝〕〔名〕〔佛〕佛事の動めばかりして日を送ること。**—こと**〔行聲〕〔名〕〔佛〕戒行して誦經する聲。**—すます**〔行澄ます〕〔自動・サ四〕●專ら佛戒を修して心を清らかにする。●殊勝らしくとりすます。

おこなはる〔行はる〕〔自動、ラ下二〕●まけりなく成り立つ。行ふやうになる。●用ひられる。流行する。

おこなはれる〔行はれる〕〔自動ラ下一〕〔おこなはるの口語〕

おこの・う〔海髪・江雛〕〔名〕〔植〕紅藻類の海藻。暗紅色で細い圓柱狀をなし、數多の枝があつて、亂れた髮の形をなす。全長三〇糎位。磯邊の岩に附着す

おこ・のり〔海髪・江雛〕〔名〕〔植〕紅藻類の海藻。暗紅色で細い圓柱狀をなし、數多の枝があつて、亂れた髮の形をなす。全長三〇糎位。磯邊の岩に附着す。ふるまふ。●あつかふ。つとめる。●佛戒を修める。修行する。

る。剰身のつまに用ひ、楽天製造の材料となる。

おこめ・く〔ぐ〕〔蠢く〕〔自動・カ四〕うごめく。

お・ども〔御薦〕〔名〕を食。

お・こもり〔御籠〕〔名〕神佛に祈願をこめる爲に、その堂に參籠すること。

おこらこ〔御子良子〕〔名〕大神宮の神饌に奉仕する少女。大神宮の神饌を調へる所を子良館といふ。そこに奉仕するから名づけた。

おこり〔起〕〔名〕事のはじまり。もと。起因。起源。

おこり〔怒〕〔名〕いかり。立腹。—**じょうご**〔—じょうご〕〔怒上戸〕〔名〕酒に酔へば怒り易い癖のある人。

おこり〔瘧〕〔名〕〔醫〕間歇的に熱の出る病。隔日又は毎日、一定時間に寒・熱を發する病。多くは蚊の媒介によって傳染する。わらはやみ。—**ふるい**〔—るひ〕〔瘧慄〕〔名〕瘧の發熱によって、身體のふるふこと。又、其の人。

おごり〔奢〕〔名〕●おごること。ぜいたくし。しゃし。

おごり〔驕傲〕〔名〕驕ること。たかぶること。

おこりさま〔發歇〕〔名〕體熱の或は高くなり、或はさめること。

おこりび〔發日〕〔名〕瘧などの起こる日。

おこる〔おこれる〕〔熾る〕〔自動・ラ四〕●火が炭にうつる。●炭火が燃えんこと。

おこる〔おこれる〕〔起る〕〔自動・ラ四〕●始まる。新たに成り立つ。●興る。●立ち立つ。いきほふ。●生ずる。發作する。●ふるひ立つ。いきほふ。

おこる〔おこれる〕〔怒る〕〔自動・ラ四〕いかる。

おごる〔おごれる〕〔驕る〕〔自動・ラ四〕●人を見さげる。たかぶる。ほこる。●無禮なする。●わがままな振舞をする。●制御に從はない。—**平家は久しからず**〔句〕平家物語の始め「驕れる者は久しからず」と、平家の衰亡を說いた句に出で、驕奢なる人は、長くその身を保つことを得ぬといふことを諷した語。—**者は久しからず**〔句〕榮華を極めて勝手なことをするものは、その地位を保つを得ぬといふ。

おごる〔おごれる〕〔奢る〕〔自動・ラ四〕●分に過ぎた身なりをし、又、食事をする。はでに暮す。●過度に金錢を費す。●金を出して人にふるまふ。饗應する。●人を人とも思はない。勝手放題にする。●傲ぶる人を見くだす。●慢は自分をえらいものと思ふ。

おころり〔御轉〕〔名〕蛺。こまむし。せきはんし。

おころわ……は〔御强〕〔名〕こまむし。せきはんし。

おさ〔筬〕〔名〕●織機の附屬具。經糸の位置を整へ、緯糸を織り込むに用ひるもの。在來のものは、竹の薄い小片を櫛の齒のやうに列れ、上下・左右に框をつけたものであるが、現今では、鋼鐵又は眞鍮製の針金で製したものを用ひる。●動〔くじらひげ〕。—**どおし**〔—どおし〕〔筬通〕〔名〕經糸を筬目に通すこと。なまぬま。●**むし**〔筬蟲〕〔名〕〔建〕竪の棧をこまかく縦にし、横棧を中央に三筋、上下に各一筋ほどにしたらもの。

おさ〔長〕〔名〕●一群の人の中で、頭立ってすぐれた人。—**おさし**〔—をさしをさし〕〔長長し〕〔形・二〕●おとなしい。おとなびてゐる。〔古語〕●立ちまさってゐる。巧みである。〔古語〕

おさ〔譯〕〔名〕外國語を通譯すること。又、その人。通譯。通辯。〔古語〕

おさ〔御座〕〔名〕●座席の敬稱。●說教の敬稱。

おさあい〔御宰〕〔名〕〔さいりょう〕〔宰相〕の敬語。

おさい〔御宰〕〔名〕〔さいりょう〕〔宰相〕の敬語。

おさ〔押〕〔名〕おさへること。おさへ。ふせぎ。●おし。おし。●隊の後のおさへ。しんがり。●たしかめること。念をおすこと。●終り。—**き**〔押木〕〔名〕おさへにする木。—**さす**〔—させす〕〔押刺す〕〔他動・サ四〕頭髮をおさへて櫛を刺す。—**じろ**〔押城〕〔名〕國境に設けて防備とする城。—**ぜい**〔押勢〕〔名〕職線の後方に配置し、押へとする軍勢。—**だち**〔押立〕〔名〕〔けたち〕物を押へて立つ〔—〕。つかまえだち。—**つく**〔—けつく〕〔押附る〕〔他動・カ下二〕しっかり押へる。—**つ・ける**〔—けつける〕〔押附ける〕〔他動・カ下二〕(おさえつく)の口語。—**ば**〔押齒〕〔名〕(やえば)〔八重歯〕。—**はしら**〔押柱〕〔名〕板間の本柱の反對の側にとりつけた柱。—**もの**〔押物〕〔名〕花鳥の作り物の盃の上に、肴を盛ったもので、酒宴の最後に出すものの。—**の盃**〔句〕差さうとするのを強ひて返して飲ませる盃。

おさえる〔—える〕〔押へる〕〔他動・ハ下一〕盃をささうとするのを強ひて返して飲ませる。(おさへる)の口語。

おさおさ〔副〕おほかた。大抵。

おさか〔忍坂〕〔名〕〔ろ〕〔—ろ〕坂の略。今の奈良縣磯城郡桜島〔—ま〕村大字忍坂の邊。道臣命が神武天皇の命を奉じて賊を誘殺した古蹟。

おさかき〔—ま〕〔筬掻〕〔名〕筬を造る人。—**だこ**〔筬擣胼胝〕〔名〕なまかさの手に出來るたこ。

おさかべ・きつね〔於佐賀部狐〕〔名〕姫路に棲んでゐたといふ有名な老狐。刑部狐。

おさがり〔御下〕〔名〕●神佛の供物のとりさげられたもの。●客に出した食物の殘り。●主家などから貰った使ひふるしの衣服・物品。●都會から地方へ行くこと。下向。

おさかり〔—ま〕〔男盛〕〔名〕をとこざかり。〔古語〕

おさき〔御先〕〔名〕●〔—さき〕の敬稱。●人の手先になるものを嘲っていふ語。—**まっくら**〔御先眞暗〕〔名〕先見の明のないこと。前途の見當つかぬこと。思慮を缺くこと。

おさぎ〔—さぎ〕〔兎・兎〕〔名〕〔動〕うさぎ。〔古語〕

おさぎ・ぎつね〔おさぎぎ狐〕〔名〕俗に、飼ひ慣らす時は、よく飼主の命を奉じて種種の神變不思議なことをなすといふ怪獸。形、狐に似て、大きさ二十日鼠ぐらゐ。色は白色。飼養者は、京都伏見の稻荷から受けて來るといふ。

おさき・こうよう〔—こうよう〕〔尾崎紅葉〕〔名〕〔人〕明治時代の小說家。名は德太郎。明治十年山田美妙齋と共に硯友社を起し、我樂多文庫を創刊。明治二十年時代の寫實派小說の中堅作家。否、明治文壇第一の巨擘として偉大な業績を殘し、又、鏡花・風葉・春葉・秋聲その他多くの逸材をその門下から出した。又、俳句をよくし、秋聲會を起す。明治三十六年(二五六三)歿。年三十七。その著に「二人比丘尼」「色懺悔」「伽羅枕」「多情多恨」「金色夜叉」等がある。

おさきまさよし〔—まさよし〕〔尾崎雅嘉〕〔名〕〔人〕國學者。大阪の人。通稱は春藏。華陽・春屋と號す。博覽強記、「群書一覽」「百人一首一夕話」を著す。文政十年(一四八七)歿。年七十三。

おさげ〔御下〕〔名〕●女の帶の結び方。兩端を垂れさげたもの。●少女のさげ髮。又、その少女。

おささ〔—ささ〕〔小笹〕〔名〕ささ(笹)。

おさし〔御差〕〔名〕●大名の子に乳をのませる女。又、その人。

おさし〔—さしこしこし〕〔長し〕〔形・二〕(おさおさし)〔御起〕〔名〕●將軍又は大名の侍醫の敬稱。●細長い櫛。

おさし〔—さしさせす〕〔尾指〕〔名〕●尾のさま。●なさす(建す)〔食さす〕〔他動・サ四〕(おさす)の敬稱。めしあがる。〔古語〕

おさす〔—さしさせす〕〔建す〕〔自動・サ四〕(尾指す)の意。北斗星の斗柄が十二支の何れかの方角を指して、陰暦の正月は、寅の方角を指し、二月は卯を指し、順次一年中に十二支の方角を指す。

おさすり〔御壁〕〔名〕●なでさすること。の敬重語。●女中衆帶の姿。—**いしゃ**〔御摩醫者〕〔名〕患者をなでさすり外に能のない醫者。

おさたがき〔御沙汰書〕〔名〕江戸時代に、諸藩の留守居の依賴によって、幕府の坊主から日日の政治又は將軍・老中等の動作を報告したる文書。

おさだいみょう〔—みょう〕〔長大名〕〔名〕頭だった大名。

おさだまり〔御定〕〔名〕おきまり。いつも同じまねこと。

おさだめがき〔御定書〕〔名〕江戸幕府の法典で、上下二卷あり。上卷には、幕府の刑務・司法警察の事を定め、下卷には、刑法・訴訟法の事を定めた。下卷を御定書百箇條・御仕置百箇條といふ。

おさつ〔御札〕(名)紙幣。(婦人語)

おさつ〔御薩〕(名)さつまいも。(婦人語)

おざつき〔御座附〕(名)藝妓が宴席に招かれて最初に三味線を弾いて歌ふこと。又、その歌。

おさと〔御里〕(名)❶氏素姓。經歴。❷嫁入した婦人の實家。**—が知れる**(句)言語・動作によって、其の人の素性や經歴がよくわかること。

おさな〔幼〕(接頭)なさないこと。うひうひしいこと。**—あそび**〔幼遊〕(名)なさない見の遊戯。見戯。**—がお**〔幼顔〕(名)なさない時の顔つき。**—げ**〔幼げ〕(名)なさない様子。**—ご**〔幼兒〕(名)なさない兒。稚兒。**—ごころ**〔幼心〕(名)幼心地(名)なさないこころ。**—さ**〔幼さ〕(名)なさないこと。なさない程度。**—そだち**〔幼育〕(名)なさない子の生びたち。幼少の頃。**—な**〔幼名〕(名)なさない時の名。元服前の名。幼字。小字。**—なじみ**〔幼馴染〕(名)幼時に親しかったこと。又、その人。**—びる**〔幼びる〕(自動、バ上一)(おさなび)の口語。**—ぶ**〔幼ぶる〕(自動、ラ四)〔幼ぶ〕(自動、バ上一)なさなく見える。

おさない〔おさない〕(形)なさない。**—かおる**……〔小山内薫〕(名)【人】劇作家。廣島市の人。帝大文科を卒業、早く演劇に趣味を持ち、明治四十一年伊井・河合の座附作者となり、翌年市川左團次と共に自由劇場を組織して、新劇の開拓に努め、大正十三年土方與志と共に築地小劇場を起こした。多くの小説・戯曲・評論等は全集八卷に收めてある。昭和三年(一五八八)歿。年四十八。

おさない〔おさない〕(形)〔長ない〕無しの意)❶年がゆかぬ。いとけなし。幼少である。幼稚である。❷おとなげない。おろかである。未熟である。

おさなり〔御座形〕(名)當座限にすること。その場のがれにいい加減に物事をすること。

おさふね・もの……〔長船物〕(名)備前國邑久(ゆく)郡行幸(ぎょうこう)村長船の刀工の造った刀劍。一條天皇の朝の人、正恒を祖とする。備前刀。

おさまし〔おさまし〕(形、二)あさはかである。あさましい。(古語)

おさまり〔治〕(名)なさまること。

おさまり〔納・收〕(名)❶かいり。とりいれ。領收。收納。❷かたづき。おちつき。落著。

おさまる〔おさまる〕(自動、ラ四)平かにさだまる。靜まる。

おさまる〔治まる〕(自動、ラ四)「とのふ。正しくなる。

おさまる〔修まる〕(自動、ラ四)と

おさまる〔納まる・收まる〕(自動、ラ四)❶手に入る。❷内にはひる。❸ことすみになる。かたづく。おちつく。

おさむ〔治む〕(他動、マ下二)❶亂れぬやうにする。平かに定める。しづめる。❷統御する。まとめる。すべる。❸統治する。經營する。❹さばく。扱ふ。❺決定する。なさまりをつける。

おさむ〔修む〕(他動、マ下二)❶よくなるやうにする。つくろふ。❷學び習ふ。研究する。❸正しくする。ととのへる。

おさむ〔納む・收む〕(他動、マ下二)❶うけいる。受納する。收納する。❷うけとる。領收する。❸はらひこむ。納入する。❹かたづける。しまふ。❺しまひおく。納めおく。❻埋葬する。

おさむる・つかさ〔治部省〕(名)(しぶしょう)。

おさめ〔治〕(名)なさめること。

おさめ〔納・收〕(名)❶なさめること。❷とりいれ。收穫。❸しまひ。最後。終結。**—どの**〔納殿〕(名)昔、禁中宣陽殿内の金品・衣裳を納めおいたところ。**—ふだ**〔納札〕(名)❶江戸幕府の金藏に納めた金に對して、金奉行から交附する受領書。❷江戸幕府の後草の米蔵に納めた米に對して、藏奉行から交附する受領書。❸(のうさつ)〈納札〉。

おさめつくるつかさ……〔修理職〕(名)

おさめもの……〔納物〕(名)❶租稅。❷社寺に奉納する物。

おさめやど〔納宿〕(名)ふださし(札差)。

おさめる〔おさめる〕(他動、マ下一)(おさむ)〈治む〉の口語。

おさめる〔おさめる〕(他動、マ下一)(おさむ)〈修む〉の口語。

おさめる〔納める・收める〕(他動、マ下一)(おさむ)〈納む・收む〉の口語。

おさめる〔修める〕(他動、マ下一)(おさむ)〈修む〉の口語。

おさゆ〔押ゆ・抑ゆ〕(他動)(おそう)の誤。

おさらば(感)別れる時の挨拶。さらば。さやうなら。「待。

おさわまち〔御申待〕(名)(こうしんまち)〈庚申待〉。

おさわ・ろあん……〔小澤蘆庵〕(名)【人】江戸時代の歌人。名は玄中、通稱は帶刀、尾張の人で京都に住む。始め古今集に學んだが、後、俗談平語のままに歌を唱へた。享和元年(一四六一)歿。年七十九。其の著に「六帖詠草」「蘆庵集」「ふりわけ髪」「萬葉新類」等がある。

おさん〔御饗〕(名)めしたき女。女中。おさんど。

おさんだん〔御讃談〕(名)【佛】佛の功德を讃して說くこと。お說教。御法話。

おし〔壓〕(名)❶おすこと。おしつけること。❷もの。壓すに用ひるもの。おもし。おさへ。❸人を威壓する力。❹皇などを抽へる一種の裝置。おとし。**—も壓されもせぬ**(句)或長所・技能を有して人を壓倒もしないが人にも壓倒されず、立派にやって行くこと。

おし〔押〕(名)❶おさへつけること。❷おしだすこと。❸あくまで我意をつらぬかうとすること。**—が強い**(句)どこまでも我意を通さうとする。

おし〔啞〕(名)言語を發し得ざるもの。おふし。あしや。**—の問答**(名)互に意思が疏通しないで要領を得ぬこと。**—の夢**(句)自分ではわかってはゐるが說明のできぬ聲。**—の旅行**(句)外國語を知らないで洋行すること。

おし〔御師〕(名)❶祈の師。❷伊勢神宮などに於ける身分の低い神職。

おし〔礫〕(名)いそ。(古語)

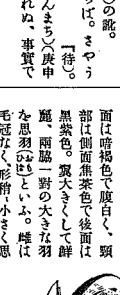
おし〔(おおしこの略)聲踊の壁。(古語)

おし〔感〕(おおしこの略)聲踊の壁。(古語)

おし〔押〕(接頭)或動詞に添へて、意を強め、「しひて」の意あらはす詞。

おし〔鴛鴦〕(動)雁鴨科の鴨の一種。形は鴨に似て小さく、雄は嘴紅く、絲黒色の毛冠がある。背面は暗褐色で腹白く、頸部は側面焦茶色で後面は黒紫色。翼大きくして鮮麗、兩脇一對の大きな羽を思羽(おもはね)といふ。雌は毛冠なく形稍小さく思羽なく羽毛も鮮麗でない。古來雄雌離じく並んで離れぬ性ありと信ぜられ、夫婦の睦まじき象徴とせられてゐる。**—がも**〔鴛鴦鴨〕(名)【動】(おしどり)。

—どり〔鴛鴦〕(名)❶【動】(おし)。❷夫婦の睦じく常に相連立つもの。❸婦人の髪の結び方。髪を左右に分け、笄の上でたすきがけにやうにしたもの。**—の衾**(名)雌雄の鴛鴦を縫物にし、又、畫いた衾。


〔鴛鴦〕

「である。めづべし。いつくし。

おし〔愛し〕(形、二)愛すべきさま。

おし〔惜し〕(形、二)❶手離しにくい。思ひきれない。❷心が殘る。殘念である。❸のぞましい。ほしい。**—がる**〔惜しがる〕(他動、ラ四)惜しく思ふ。惜しむ。**—げ**〔惜しげ〕(名)❶なしいさま。❷なしい心。**—けし**〔惜しけし〕(形、一)惜しの。(古語)**—さ**〔惜しさ〕(名)惜しいこと。惜しい程度。

おし〔感〕(おし)を重れていふ壁。(古語)

—おし〔おし〕「ふ。

おじ〔祖父〕(名)「おほぢ」の略。父母の父。そ父。**—**〔小父〕(名)❶父の兄(伯父)。❷父の弟(叔父)。❸母の兄(大舅)。❹母の弟(小舅)。❺老いた男。じぢ。❻子供から大人の男を指していふ語。**—**

き〔小父君〕(名)「ぢ」の寮稱。〔「きぢ」は「君」の略。「殿」は假借の字。〕**—じゃひと**……〔小父御〕(名)「ぢ」〔「ぢ」である人の約〕ぢ。

おしあい……〔押合〕(名) おしあふこと。**—へしあい**……〔押合壓合〕(名・副) 多人數が雜沓して おしあふさま。

おしあく〔押開く〕(他動・カ下二)

おしあぐ〔押上ぐ〕(他動・ガ下二) ⊖押して上へあがらせる。⊜ひきたててのぼらせる。

おしあけ〔押明〕(名) おしあがれた。**—がた**〔押明方〕(名) あがれかた。よあがれかた。

おしあげポンプ〔押揚喞筒〕(名)〔理〕(Forcepump) 筒内の活塞の力によって水を低い所から高い所へ押しあげる裝置のポンプ。(吸上喞筒の對)

〔プンポげあしお〕

おしあける〔押開ける〕(他動・カ下一)〔おしあくの口語。〕

おしあげる〔押上げる〕(他動・ガ下一)〔おしあぐの口語。〕

おしあつ〔押當つ〕(他動・タ下二) ⊖おさへておほす。⊜推量する。おしはかる。

おしあて(名)〔押當て〕(他動・タ下一)〔おしあつの口語。〕

おしあてる〔押當てる〕(他動・タ下一)〔おしあつの口語。〕

おしあぶ〔押鮎〕(名) 昔、元日の儀式などに用ひた鹽壓の鮎。

おしいず〔押出づ〕(他動・ダ下二)〔押出づの口語。〕

おしいず〔押出づ〕(自動・ダ下二)〔用ひる板。しひて出る。〕

おしいだし〔押板〕⊖書院の床の間。⊜物を壓すにだしぎぬ。**—ぎぬ**〔押出衣〕(名) 昔、女房などが、御簾の下から袖を出したこと。又、その衣。いだし

おしいた〔押入〕(名)〔がうたう强盜。おしこみ。おしこめる。おしやってはひらせる。〕

おしいる〔押入る〕(自動・ラ四)〔無理におしこめる。〕

おしいれ〔押入〕(名) 家財を入れておくくりつけの戸棚。

おしいれる〔押入れる〕(他動・ラ下一)〔おしいるの口語。〕

おしう〔敎ふ〕(他動・ハ下二) ⊖知ってゐることを告げ知らせる。⊜教へるやうに告げ知らせる。⊜できるやうに導く。⊜さとす。いましめ。教訓する。訓戒する。**—るは學ぶの半分**〔なかば〕(句) 人に教へることは、教へる人にとっても半分位の學得がある。〔書經、說命篇〕

おしうつる〔推移る〕(自動・ラ四) 時勢などがかはって行く。年月が過ぎて行く。

おしうり〔押賣〕(名) 無理に賣りつけること。又、その人。

おしえ〔敎〕(名) ⊖をしへること。⊜教訓。⊜德化。⊜教育。⊜宗教。教義。**—かた**〔敎方〕(名) 教へる方法。⊜學問。**—ぐさ**〔敎種〕(名) ⊖教へる材料。⊜教材に關する書籍の名。**—ご**〔敎子〕(名) 弟子。門人。生徒。**—の-にわ**……〔敎庭〕(名) 學問を教へる所。學校。

おしえ……〔押繪〕(名) 花鳥・人物などの形を厚紙で製し、之に美しい布帛を貼りつけ、中に綿を入れて高低をつけて、物に貼りつけたもの。**—ざいく**〔押繪細工〕(名) 押繪の細工。又、その細工物。

おしおう〔押合ふ〕(自動・ハ四變) 方から互におす。

おしおき〔御仕置〕(名) ⊖仕置の御重語。⊜死刑。**—じゃっかじょう**〔御仕置百箇條〕(名) おさだめがき。**—もの**〔御仕置物〕(名) 處刑せられるもの。罪人。

おしおくり〔押送〕(名) 帆を用ひず、櫓のみで船を押送ること。又、その船。**—ぶね**〔押送船〕(名) おしおくりをする船。

おしおけ……〔押桶〕(名) ⊖えなおけ。⊜つけもの桶。

おしおじ(感) 警蹕の聲。(古語)

おしおそ〔怖怖〕(名・副) 恐れるさま。おづおづ。恐る恐る。〔郡大原野村にある大原山の別名。

おしおやま……〔小鹽山〕(名)〔地〕京都府乙訓郡大原野村にある大原山の別名。

おしおる〔押折る〕(他動・ラ四)〔をしか。牝鹿の對〕

おじか……〔牡鹿〕(名)〔動〕をすの鹿。さをしか。

おしがい〔押賣〕(名) 無理に買取ること。(押賣の對)

おしかえし……〔押返〕(副) ⊖くりかへし。(古語) ⊜却って。反對に。(古語)

おしかえす〔押返す〕(他動・サ四) ⊖強びてもどす。⊜ひきかへす。⊜こみあっておしあふ。⊜くりかへす。

おしかかる〔押掛かる〕(自動・ラ四)〔よりかかる。〕

おしかく〔押角〕(名) 圓みを持った角材。

おしかく〔押掛く〕(自動・カ下二) ⊖招かれぬのに、强ひて人の家に行く。⊜進んで攻撃する。おしよせる。

おしかけ〔押掛〕(名) ⊖おしかけること。⊜馬の頭・胸・尾などから轡にかけて組紐。さんがい(三繼)。

おしかけ……〔押掛客〕(名) 招かないのに、おしかけて來た客。**—にょうぼう**……〔押掛女房〕(名) 無理に妻になりうと迫る女。又、迫ってなった妻。

おしかける〔押掛ける〕(自動・カ下一)〔おしかくの口語。〕

おしかす〔壓粕〕(名) 壓搾して殘った粕。

おしかた〔押方〕(名) 射術に於ける左の手。おして(押手)。

おしかた〔押型〕(名) 紙を彫刻物の上にあてて、其の上を墨壓で刷り、下の彫刻した模樣を寫すこと。**—しかたずけ**〔押型附〕(名) 版木を織物に壓しつけて、種種の模樣を寫あらはすこと。

おしかはんとう……〔牡鹿半島〕(名)〔地〕宮城縣牡鹿郡の東南に突出する半島。長さ二八粁。奥羽地方太平洋岸に於ける最も大きな半島。半島の突端黑崎の東方に、金華山(四五五米)の名勝地がある。

おしがみ〔押紙〕(名) ⊖疑問や注意すべき事を記して、文書に貼りつけた紙。⊜ひとりがみ。

おしがり〔押借〕(名) 無理に金品を借ること。なめしかはし。もみかは。

おしかわ……〔折敷〕(名)〔地〕京都府乙訓郡大原野村にある大原山の別名。

おしき……〔折敷〕(名) ⊖へぎ製の角盆又は隅切盆で、食器を載せるに用ひるもの。足をとりつけたものを足打折敷といふ。**—うお**……〔折敷魚〕(名)〔動〕喉鰾類の魚。長さ一〇糎位。體扁平にして鱗細かく、腹は稍赤い。淡水魚で、琵琶湖に多い。なしき。

おしきしょう……〔御直衆〕(名) 直參の人の敬稱。

おしぎそう……〔含羞草〕(名)〔植〕れむりぐさ。

おしきり〔押切〕(名) ⊖おしきること。⊜わりいん。⊜秋や蕣などをきざみ切るる用具。⊜相手を土俵の外に押出す相撲の手。**—ちょう**……〔押切帳〕(名) 金錢を渡した時、受取の證印を受ける帳簿。**—ばん**〔押切判〕(名) 割印。契印。

おしきる〔押切る〕(他動・ラ四) ⊖おして物を斷ち切る。⊜困難を排して目的を果す。おしとほす。⊜絕えず櫓を押して船を進める。

おしくく〔怖く〕(自動・カ下二)おそろしくなる。おそれる。おぞけたつ。

おしくくみ〔押含〕(名) つつんだ物。(古語)

おしくくむ〔押含む〕(他動・マ四) 包むくくむ。

おしくだす〔押下す〕(他動・サ四) おしくらべ〔押競〕(名) 互にしあって、倒れたり退いたりしたものを負とする遊戲。

おしけ……〔怖氣〕(名) 恐るしい息ふ心。おそれ。ひるみ。**—だつ**〔怖氣立つ〕(自

動、タ四）おちけが生ずる。

おしけ・つ〔おしけつ〕〔押消つ〕（他動、タ四）威壓する。壓服する。（古語）

おじ・ける〔おじけ・ける〕〔怖ける〕（自動、カ下一）（おじく）の口語。こはがる。おぢる。

おしこうじ・どの〔……〕〔押小路殿〕（名）里内裏の一。京都市押小路（二條通と三條通との間）の南、室町の東に在ったもの。

おしごと〔押言〕（名）おしあていふ言。推測の言。

おしごと〔……〕（名）惡いと知りつつさせること。強ひること。㊁おしいれ。㊂強盜。

おしこみ〔押込〕（名）㊀おしこむこと。強ひてはいれること。㊁強盜。

おしこむ〔押込む〕〔押込む〕（自動、マ四）故意に逆入する。おしいる。㊁わりこむ。こみあふ。（古語）

おしこむ〔押込む〕〔押込む〕（他動、マ四）次條に同じ。

おしこむ〔押込む〕〔押込む〕（他動、マ下一）㊀押してはひらせる。強ひてはひらせる。おひこむ。㊁心にをさめて口外しない。（古語）㊂おしこめにする。禁錮する。

おしこめ〔押込〕（名）㊀おしこめること。㊁江戸時代の刑罰の一。監禁。屏居。—**いんきょ**〔押込隱居〕（名）江戸時代の刑罰。押込にした上に、隱居を命ずること。

おしこめる〔おしこめる〕〔押込める〕（他動、マ下一）「おしこむ」の口語。

おしこ・ぞ〔おしこぞ〕〔押疑る〕（自動、ラ四）あつまる。よりあふ。こみあふ。おしこむ。（古語）

おしさ・ぐ〔おしさぐ〕〔押下ぐ〕（他動、ガ下二）おして下の方にやる。

おしさげる〔おしさげる〕〔押下げる〕（他動、ガ下一）「おしさぐ」の口語。

おししず・む〔おししずむ〕〔押鎮む〕（他動、マ下二）おさへてしづまらせる。おちつかせる。

おししず・める〔おししずめる〕〔押鎮める〕（他動、マ下一）（他動、マ下二）〔おししずむ〕の口語。

おしずいいりょう〔おしずいいりょう〕〔押推量〕（名）（あてすせる。

おしつけ〔おしつけ〕〔押附〕（名）㊀おしつけること。㊁強ひて人にかづけること。強ひて人にさせること。—**がまし**〔おしつけがまし〕〔押附がまし〕（形、二）強ひて人にさせるやうである。無理にあてがふやうである。—**のいた**〔押附板〕（名）鎧の背の上部、綿噛と逆ぶ板との間にある板。—**わざ**〔押附業〕（名）強ひてさせる仕業。無理な頼み。「おっつけ」

おしつけ〔押附〕（副）やがて。程なく。まもなく。

おしつつ・む〔おしつつむ〕〔押包む〕（他動、マ四）㊀つつむ。㊁強ひて隱す。わざと祕密にする。

おしつま・る〔おしつまる〕〔押詰る〕（自動、ラ四）㊀切迫する。きはまる。㊁歳の暮に近くなる。

おしつむ〔おしつむる〕〔押詰む〕（他動、マ下二）㊀押して入れこむ。㊁つづめちぢめる。㊂つめよる。

おしつめる〔おしつめる〕〔押詰める〕（他動、マ下一）「おしつむ」の口語。

おして〔おして〕〔押して〕（副）しひて。無理に。

おして〔おして〕〔押手〕（名）㊀昔、掌に朱・墨などを塗って之を押して印章とした。㊁印形。讃印。（古語）㊂琵琶・琴などの絃を押して音を發すること。（古語）㊃射術で、左手。ゆんで。おしかた。（引手の對）—**いれ**〔押手入〕（名）印形を入れる器。—**ずくり**〔押手造〕（名）印形を造る人。—**ぶみ**〔押手文〕（名）印形の押してあるふみ。（古語）

おしてる〔押照〕（枕）なには・難波の枕詞。—**や**〔押照や〕（枕）おしてる。

おしとおす〔おしとおす〕〔押通す〕（他動、サ四）㊀無理にとほす。㊁なしとげる。やりぬく。

おしとどむ〔おしとどむ〕〔押止む〕（他動、マ下二）強ひてとめる。おさへとどめる。

おしとど・める〔おしとどめる〕〔押止める〕（他動、マ下一）「おしとどむ」の口語。

おしとむ〔おしとむ〕〔押止む〕（他動、マ下二）「おしとどむ」の口語。

おしとめる〔おしとめる〕〔押止める〕（他動、マ下一）「おしとどむ」の口語。

おしどり〔おしどり〕〔押取〕（名）無理に取ること。強奪。

おしとる〔おしとる〕〔押取る〕（他動、ラ四）無理に取る。

おしな〔おしな〕（御信濃の略）信濃者。江戸時代に、主に信濃國の者が、江戸に來て奉公をしたから田舎者を總稱してかくいふ。田舎者をいやしめていふ語。（江戸時代の語）「びきなほす」改める。

おしなおす〔おしなおす〕〔押直す〕（他動、サ四）

おしなおる〔おしなおる〕〔押直る〕（自動、ラ四）正しく醇に著く。なほる。

おしなし〔おしなし〕〔怖甚し〕（形、一）鈍くて弱い。劣ってゐる。（古語）

おしなし〔おしなし〕〔怖甚し〕（形、一）甚くしなびかす。（古語）

おしなぶ〔おしなぶ〕〔押萎ぶ〕（他動、バ下二）

おしなぶ〔おしなぶ〕〔押萎ぶ〕（他動、バ下二）㊀おしならぶ。（古語）㊁すべて。樣にする。（古語）

おしなべて〔おしなべて〕〔押並べて〕（副）㊀なべて。一樣に。おしくるめて。㊁普通に。尋常に。

おしなみ・に〔おしなみに〕〔押靡に〕（副）おほよそに。普通に。（古語）

おしなむ〔おしなむ〕〔押靡む〕（自動、マ四）なびく。（古語）

おしならす〔おしならす〕〔押均す〕（他動、サ四）ならす。均しとする。

おしならぶ〔おしならぶ〕〔押並ぶ〕（他動、バ下二）無理に並ばせる。おしなぶ。

おしなる〔おしなる〕〔押成る〕（自動、ラ四）無理になる。おしきってなる。

おしね〔おしね〕〔晩稲〕（名）（おそいね）の約。おくて。（古語）

おしね〔おしね〕〔小稲〕（名）【種】いね（稲）。

おしねじ〔おしねじ〕〔押捩〕（名）或物を或位置に固定せしめるに用ひる螺旋。

おしね・ぐ〔おしねぐ〕〔押退ぐ〕（他動、ラ四）おしのける。（古語）

おしの・ける〔おしのける〕〔押退ける〕（他動、カ下一）「おしのく」の口語。「おきへてふきとる。

おしの・ごう〔おしのごう〕〔押拭ふ〕（他動、ハ四）

おしのび〔御忍〕(名) ❶徴行の敬称。❷おしのびかご。**—かご**〔御忍駕籠〕(名) 江戸時代に、諸侯及び奥方などの徴行に用ひた駕籠で、屋根は黒羅紗でおほひ、腰と綾とを黒くしたもの。

おし・は〔押羽〕(名) 鳥の翼のもとにある産毛のやうな極めて短い羽毛。(古語)

おし・ばおり〔押羽織〕(名) (じんばおり)〈陣羽織。

〔ごかぴのしお〕

おし・はかり〔推測〕(名) おしはかり。推量。

おし・はかる〔推測る〕(他動、ラ四) 此の事から推して彼の事に及ぼして考へる。推量する。「着物をおし開いて肌を脱ぐ。推測する。

おし・はだぬぐ〔押肌脱ぐ〕(自動、ガ四) 肌を脱ぐ。

おし・はなつ〔押放つ〕(他動、タ四) おして放ちやる。おしてのける。

おし・はる〔押張る〕(他動、ラ四) ❶おしてはる。❷おしとほす。「おしひらく。(古語)

おし・はる・す〔押晴るす〕(他動、サ四) 殿の高下について押問答すること。

おし・ひき〔押引〕(名) ❶押し、又、引くこと。❷直

おし・ひし・ぐ〔押ひしぐ〕(他動、ガ四) ❶押しひしぐ。❷おさへつける。

おし・ひら・く〔押一向に〕(副) ひたすらに。

おし・ひらぶ〔押平む〕(他動、マ下二) おして平たくする。

おし・ひろ・ぐ〔推擴ぐ〕(他動、ガ下二) おしてひろくするのはしひろげる。擴張する。

おし・ひろ・む〔推弘む〕(他動、マ下二) ひろく行きわたらせる。ひろめる。

おし・ひろ・める〔推弘める〕(他動、マ下二)「おしひろむ」の口語。

おし・ぶち〔押縁〕(名) 物のおさへに打附ける細長い竹又は木。

おし・ぶみ〔押文〕(名) はりつけた文。(古語)

おし・べ……〔雄蕊〕(名) 【植】(ゆうずい)〈雄蕊。(雌蕊の對)

おし・へ・す〔押へす〕(他動、サ四) 押附けて薄くする。おしつぶす。おしひしと。

おし・ほうし……〔押帽子〕(名) 背、犬飼の用ひた帽子。

おし・ボタン〔押釦〕(名) (Push-button) 押して電

おじま……〔雄島〕(名) 【地】宮城縣松島灣の群島の一。陸岸小松崎との間に渡月橋がある。

おし・まい……〔御仕舞〕(名) ❶しまひ(仕舞)の敬語。❷終りの化粧。おつくり。❸商家の總勘定。

おし・まく〔押捲く〕(他動、カ四) 押して捲く。

おし・まぐ〔押曲ぐ〕(他動、ガ下二) 「押して」まげる。無理にまげる。

おし・まずき〔几〕(名) ❶けふそく(脇息)。(古語) ❷机。

おじまだ……〔小島田〕(名) 小島にある田。

おじまどう……〔小島道〕(名) 小島にある道。

おし・まわ・す〔押廻す〕(他動、サ四) おそれまはす。

おし・まわ・す〔押廻す〕(自動、サ四) ❶まはす。❷車などに乘つておほげさに人の家を訪れまはる。「ちんぱう。

おしみ・て〔惜手〕(名) 物をしみをする人。けち。

おしむ〔愛しむ〕(他動、マ四) いつくしむ。めづ。愛する。(古語)

おし・む〔惜しむ〕(他動、マ四) 惜しいと思ふ。惜しがる。**—らくわ**〔惜しむらくは〕(副) 惜しいことには。殘念なことには。

おし・むく〔押向く〕(他動、カ下二) 強ひて向かせる。

おし・むける〔押向ける〕(他動、カ下一)「おしむくる」の口語。

おしめ〔押目〕(名) 【經】取引所で、連日上向でゐた相場が、低落したこと。**—がい**〔押目買〕(名) 【經】取引所で、相場が低落した時機を見て買ふこと。

おしめ〔襁褓〕(名) むつき。しめし。おむつ。**—かご**〔襁褓籠〕(名) 火の上に伏せて、おしめのぬれたのを乾かす籠。又、おしめを入れるかご。

おじめ……〔緒締〕(名) 袋・巾著・煙草入などの緒を通して束ねしめる具で、玉・石・角・象牙・珊瑚珠・金屠・煉物などでつくり、多くは球形で、緒を通す孔がある。「貴人に仕へるはしため。

おし・もり〔御下〕(名) ❶内侍以下の女官の敬稱。❷

おし・もり〔押振〕(名) 射藝の語。犬追物。遠笠懸等の時、後の方を射ること。

おし・もつき〔御霜月〕(名) 門徒宗では、親鸞上人の忌日(二十八日)が十一月であるから、特に御の字をつけていふ。

おし・もどす〔押戻す〕(他動、サ四) 押して後へ歸らせる。

おし・もの〔押物〕(名) ❶侍意の物事。たてもの。❷固くおしかためてつくつた菓子。落雁の類。「語」

おし・ものし・き〔御下屋敷〕(名) 便所を上品にいふ語。

おし・もんどう……〔押問答〕(名) 互にいひはつて譲らぬこと。問答をしつつ論じあふこと。

おし・ゃく〔御酌〕(名) ❶「酌」の敬重語。❷酌婦。なかま。❸舞妓。半玉。雛妓。

おし・ゃこ〔御蝦蛄〕(名) 婦人の髪の結び方。後頭部で髪の全部を束ねるもので、下流社會に行はれる。

おじや・ちじみ〔小千谷縮〕(名) 新潟縣北魚沼郡小千谷町から産出する綿布。又は麻布の縮。

おし・ゃぶり〔名〕 嬰兒に持たせてしゃぶらせる玩具。形、啞鈴に似、木又はゴム・セルロイドでつくる。

おし・ゃべり〔饒舌〕(名) 口かずの多いこと。又、その人。多辯家。

おし・ゃま〔名〕 しゃあしあてゐる少女。人前をはばかる少女。人前をつくろふ。

おし・ゃます〔押しやまする〕(自動、サ變)「おっしゃます」の訛。おっしやる。おほせなる。

おし・ゃら〔御酒落〕(名) 身なりを飾ること。又、その人。おしゃれ。

おし・ゃる〔仰やる〕(他動、ラ四) おっしゃる。「ゐる。仰せられる。

おじゃる〔仰やる〕(自動、ラ四)〈御出でなさる〉の轉)ござる。おいでなさる。來たまふ。行きたまふ。

おし・ゃれ〔名〕 おしゃらく。しゃらく。

おじゃれ〔名〕〈(お出であれ)の約〕旅人に淫を鬻ぐ女中。「敗。おしまめ。

おじゃん〔名〕 あてにしたことはづれること。失

おし・ゃん・す〔押しやまする〕(自動、サ變) おっしゃます。おしゃます。「う」の訛。

おし・ゅう〔教ゆ〕(他動、ヤ下二)〈おしへ〉

おし・ゅう〔汚臭〕(名) きたなくて臭いこと。

おし・ゅう〔汚習〕(名) けがらはしい習慣。

おじゅう〔御十夜〕(名) (じゅうや)〈十夜。

おし・ゅくろう……〔御宿老〕(名) 町内の年寄役。

おし・ゅんでんべえ……〔阿俊傳兵衛〕(名) 【文】吳服商井筒屋傳兵衛と先斗町近屋の抱遊女お俊との心中巷說(元文三年十一月十六日心中)。故に之を主題とする戯曲(近頃河原達引)。現に京都市東山區鳥邊山本願寺にお俊傳兵衛の墓と傳へるものがある。

おし・ょう〔和尚〕(名) (梵 Upādhyāya の俗語 khoshā 師の意) ❶【佛】師僧。道を敎へ傳へる人。修行を積んだ僧の敬稱。僧侶。坊主。❷武術などの師匠。(興福寺寶藏院の僧侶が、槍術を敎へた故事による。)わじやう。

おじょうぐち……〔御錠口〕(名) 江戸時代に、幕府・諸侯等の邸内の表と奥との境界の出入口に杉戸を立て、時を定めて錠をおろしたところ、卽ち貴族の邸の表と裏との界に設けた出入口。

おじょうさま……〔御孃樣〕(名) 上流・中流の家の娘の敬稱。

おし・ょく〔御職〕(名) ❶江戸時代に朋輩中で頭立つた女郎。(名) 同輩中で頭立つた遊女。「かしめ。

おじょく……〔汚濁〕(名) はづかしめること。はづかしめ。

おじょく……〔汚辱〕(名) けがれにごること。(おだく)〈汚濁。「多人數でおしかける。

おし・ょす〔押しやまする〕(他動、サ下二)〔押寄す〕(自動、サ下二)

おしよす〔おしよせる〕〔押寄す〕(他動、サ下一)押して近づく。引きよせる。

おしよせる〔おしよせる〕〔押寄せる〕(自動、サ下一)「おしよす」の口語。

おしよぼからげ(名)裾をからげて帯に插むこと。

おじる〔おじる〕〔怖ぢる〕(自動、ダ上一)(おす)の口語。

おしろい(白粉)(名)顔面等の化粧に用ひる白粉。水白粉・煉白粉・紙白粉等の種類がある。原料はもと多く炭酸鉛(鉛白)で造つたが、近時鉛毒の恐るべきことが唱道せられ、鉛白粉は少くなり、亞鉛華又は澱粉性のものと變つた。**—くさい**〔おしろいくさい〕〔白粉臭い〕(形)❶おしろいのにほひがする。❷あだっぽい。つやつぽい。**—した**〔白粉下〕(名)おしろいを塗る時、つやをよくし、且その美しさを發揮させる爲に、獲肌に塗るクリーム・化粧水。**—ちゆうどく**〔白粉中毒〕(名)【醫】白粉に含んだ鉛分毒。**—ばな**(白粉花・紫茉莉)(名)【植】紫茉莉科の多年生草本。高さ一米位。莖・枝に結節を有して分岐する。葉は對生、有柄で卵狀披針形、全緣。夏・秋の交、梢頭に數花簇生し、漏斗狀をなす。花形は〔なばいろしお〕皮質狀をなす。色は黄・紅・白等種種ある。果實は球形で、中に白色粉狀の胚乳がある。おしろい・おしろいぐさ。

おしわ・く〔おしわける〕〔押分ける〕(他動、カ下一)前後・左右へおしてわける。

おしわ・ぐむ〔おしわぐむ〕〔押絞む〕(他動、マ四)おしゆがめて輪をつくる。(古語)

おしわ・ける〔おしわける〕〔押分ける〕(他動、カ下一)「おしわく」の口語。

おしわり〔押割〕(名)❶おさへてわること。❷おしりりむぎ。**—むぎ**〔押割麥〕(名)脱穀した大麥の粒をおしつぶしたもの。(ひきわり麥の對)

おしんを……〔惡心〕(名)心持がわるく、はきけを催さうとする感じ。むかつき。

おしんを……〔汚疹〕(名)膿疱や潰瘍などの皮が厚く重なつて、牡蠣殼の狀をなすもの。かさぶた。

おじんをん〔汚塵〕(名)けがれたちり。

おす〔おす〕〔押す〕(他動、サ四)❶おさへつける。❷突きやる。突きつける。❸強ひてなす。❹忍んでする。❺たしかめる。❻印章の面に朱・墨などをつけて、紙面などにおさへてうつす。❼船をあやつつて舟を進める。❽とまる。すすむ。

おす〔おす〕〔推す〕(他動、サ四)❶進めやる。つきやる。❷おしひらく。❸くらべ考へる。きはめ考へる。おしはかる。❹推擧する。❺いただく。仰ぐ。❻及ぼす。うつす。

おす〔おす〕〔壓す〕(他動、サ四)❶重みを以ておさへつける。❷しへたげる。虐ぐ。

おすをす〔小籠〕(名)す(巢)。

おすをす〔牡〕(名)を(牡)の對。

おす〔おす〕〔食す〕(他動、サ四)❶くふ(食ふ)の心(飲む)などの敬語。めす。(古語)❷身に受けて保つ。しろしめす。しろす。(古語)

—くに〔食國〕(名)天皇の治めたまふ國。(古語)

—くにのまつりごとをもうすきみ……〔食國政申大夫〕(名)政務を天皇に奏する人。大臣。(古語)

おず〔おずる〕〔怖づ〕(自動、ダ上二)おそれる。ひるむ。

おすいをす〔汚水〕(名)きたない水。

おすえ……〔御末〕(名)❶內裏又は室町時代の將軍家で、食膳を調へる室。又、そこにゐる女中。❷江戸時代の將軍家又は諸侯の水仕の事をする女中。はしため。❸室町幕府の格勤(かくごん)の侍の中で、雜役・宿直を勤めた士。**—しゅう**〔御末衆〕(名)❶御末の女中。❷御末の侍。

おすおず〔おずおず〕〔怖怖〕(副)こはごは。おそるおそる。

おずかい〔おかい〕〔尾使〕(名)鳥獸などの尾を振動かすこと。又、そのさま。

おずかみ〔おかみ〕〔小摑〕(名)手に摑み得る程に頭髮をかつぶしたもの。(ひきつり髮の對)

おしんを……〔惡心〕(名)心持がわるく、はきけを

おすぎおたま〔おすぎおたま〕〔阿杉阿玉〕(名)昔、伊勢神宮の內宮と外宮の中間、間山(あいやま)に、小屋がけの舞臺をつくり、一人は三味線・胡弓を彈き、一人は踊つて、參宮のもの、または參宮の二人の若い女。

おず・し〔おずし〕〔悍し〕(形、シク)強情である。わるかしこい。おそし(悍し)。(古語)

おずずを……〔小鈴〕(名)す(鈴)。

おずず〔おずず〕〔尾筒〕(名)❶馬の尾にかぶせる袋。なぶくろ。❷馬の尾の根のふくれた部分。

おすてき〔おすてき〕〔お素敵〕(名)素敵。非常にすぐれてゐること。(古語)

おすべ(名)いそべ(磯邊)。(古語)

おすべどり〔御潛〕(名)❶ふとん。❷おさがり。(古語)

おすべり〔護田鳥〕(名)おすめどり。(古語)

おずまし〔おずまし〕〔悍し〕(形、シク)おずし。(古語)

オスミウム(Osmium)(名)【化】白金屬元素の一。白金原鑛中に含有し、青白色の金屬光澤がある。金屬中最大の比重を有し、硝子よりも硬く、殆ど熔け難い。合金に用ひる。

—ランプ(Osmium lamp)(名)オスミウムの線條を用ひた白熱電燈。

おすめどり〔護田鳥〕(名)【動】うすべ。ばん(鷽)。

おすもじ〔御酢文字〕(名)すし(鮨)。(婦人語)

おすや〔御須屋〕(名)すや(須屋)の敬稱。

オスラム(Osram)(名)【化】英語オスミウム(Osmium)と獨逸語タングステン(ウォルフラム(Wolfram)との合成語。オスミウムとタングステン(ウォルフラム)との合金。**—ランプ**(Osram lamp)(名)電球の一。獨逸國アウエル(Auer)會社で製造・販賣するオスラムを發光線にした電球。

オセアニヤ—しゅう……〔一洲〕(名)【地】Oceanie)六大洲の一。大洋洲。オーストラリヤ大陸と太平洋上に散在する數多の島嶼との總稱。なつてゆくこと。

おせ・おせ〔押押〕(名)月月・年年にやりくりの重

おせ・ぐく(名)おしひめたまま。(古語)

おせ・ぐむ……〔おしぐむ〕(自動、マ四)人の背の曲たやうに見えること。(古語)

おせ・ぐ〔おせぐ〕(名)おせちく。**—く**〔御節供〕(名)五節句などの節日に用ひる副食物の素しめ。

お・せっかい(名)おせっかいなお世話。餘計な心配。

お・せながく(名)背丈が高くて曲つたやうに見えること。(古語)

お・せんを……〔汚染〕(名)けがれに染まること。よごれ。しみ。

おせん〔御膳〕(名)「膳」の敬稱。**—ぶ**〔御膳部〕(名)膳に具へる食物の敬稱。❷貴人の膳部の事を掌る所。又、その人。(古語)

おそをそ〔虛〕(名)うそ。嘘。そらごと。いつはり。

おそをそ〔獺〕(名)【動】(かわおそ)。(かわうそ)。

おそをそ〔惡阻〕(名)婦人が妊娠して二三月目に起こる病。つはり。

おそ〔遲〕(接頭)「おそい」の意をあらはす語。

おぞ〔鈍〕(名)心の鈍いこと。おぞいこと。おぞましいこと。(古語)

おそ・あし〔遲足〕(名)❶そろそろとあるくこと。徐行。❷體操で、一分間に七十歩の速度で行進すること。

おそいおそい〔襲〕(名)❶おほひ。(古語)❷うはぎ。

おそい〔おそい〕〔遲い〕(形)「おそし」の口語。

おそい〔おそい〕〔悍い〕(形)おそし(悍し)の口語。

おそいおそい〔襲ふ〕(他動、ハ四)❶着物を重ねて着る。❷不意に乘じて攻めかかる。❸不意に訪問する。❹うけつぐ。うける。

おそうおそう〔押ふ・抑ふ〕(他動、ハ下二)❶おしつける。❷忍ぶ。❸ふせぐ。さまたへる。くひとめる。❹おほふ。❺自由にさせぬ。❻捕へる。❼しかと持つ。❽さされた杯をとめて酌をする。

おそうち〔遲打〕(名)乘物で報知に行く使者が、行路をいそがぬこと。(早打の對)

オゾーン〔Ozone〕(名)【化】無色で、少しく鹽素のやうな臭のある氣體。放電の際、又、雷鳴の際發生する。酸素の變質したもので、酸化作用強く、殺菌・消化等の作用をなす。

おそかれはやかれ〔早晩〕(副)遅いと早いとの相違はあるが、その中には。いつか。つひには。

おそぎ〔襲着〕(名)うはぎ。上衣。(古語)

おぞく〔汚俗〕(名)けがらはしい風俗。

おぞぐつのえ……〔しゅんが×春画〕。戯画。

おそげ〔遅げ〕(名)おそい様子。〔枕絵〕(古語)

おぞけ〔怖気〕(名)おそれる心。**—ずく**〔怖気付く〕(自動、カ四)おちる心が出ること。**—だつ**〔怖氣立つ〕(自動、タ四)恐しさの餘りぞっとして身の毛がよだつ。〔早咲の對〕

おそざき〔遅咲〕(名)時季におくれて咲くこと。

おそざくら〔遅桜〕(名)おそざきの櫻。

おそし〔遅し〕(形、一)㊀早くない。㊁おくれた。時機が過ぎた。㊂ながびく。㊃のろい。にぶい。

おぞし〔悍し〕(形、一)おすし。こはし。おそろしい。わるがしこい。ずるい。(古語)

おぞし〔鈍し〕(形、一)にぶい。のろい。

おぞじえ〔遅智慧〕(名)(おくじえ)(奥智慧)。

おそしさま〔御祖師様〕(名)〔佛〕祖師の敬稱。

おそなえ〔御供〕(名)「そなへもち」の敬稱。又「そなへもの」の敬稱。

おそなわる〔遅なはる〕(自動、ラ四)おそくなる。延引する。

おそば〔鰯〕(名)(やえば)。(そいば)。

おそば〔御側〕(名)㊀「側」の敬稱。㊁主君の側。㊂主君の側に仕へる人。侍臣。近習。**—ご**〔御側附〕(名)主君の側に仕へること。又その人。

おそはやも〔遅早も〕(副)おそかれはやかれ。

ようとりつき〔御側御用取次〕(名)江戸幕府職制の一。將軍に近侍し、御用部屋から上申する文書の取次をする御側衆。**—さらず**〔御側不去〕(名)㊀常に主君の近側にあること。㊁君寵の厚いこと。又、その人。**—しゅう**〔御側衆〕(名)武家時代に將軍に近侍したもの。**—づき**〔御側附〕(名)主君の側に仕へること。又その人。

おそはやも〔遅早も〕(副)おそかれはやかれ。今はともあれ。つひには。(古語)

おそば・ゆ〔おそばえゆゆし〕(自動、ヤ下二)おそばえる。

おそぶる〔おそりをる〕〔押そぶる〕(他動、ラ四)押す。(古語)

おそべ・る〔おそべる〕(自動、ラ四)おやすみになる。

おそぼう〔おそぼうする〕(自動、サ下一)㊀あまへる。㊁ざれほこる。そばふ。(以上古語)

おそまき〔遅時〕(名)㊀時季におくれて種子を蒔くこと。㊁時機におくれて事なすこと。

おぞまし〔おぞましげし〕〔悍し〕(形、二)おすし(悍し)。おそし。こはし。(古語)

おぞまし〔おぞましげし〕〔鈍し〕(形、二)おすし(鈍し)。にぶし。のろし(鈍し)。

おそめ・ひさまつ〔於染久松〕(名)【文】大阪東堀瓦屋橋通の油屋太郎兵衛の娘お染と丁稚久松との情事と心中との巷説。之を題色したものに、紀海音の「お染久松袂自絞」、菅專助の「染模樣妹脊門松」、近松半二の「新版歌祭文」等の淨瑠璃、鶴屋南北の脚本「於染久松色讀販」、新内の「妹脊の久松」、常磐津の「初戀千草の濡事」、清元の「道行浮塵鵜」等がある。〔おほかた。たぶん。

おそらくわ……〔恐らくは〕(副)ことによると。

おそる〔恐る〕(名)おそれ。(古語)

おそる〔恐る・畏る・懼る・怖る〕(自動、ラ下二)㊀人又は外物に對して敵し難いとみてづかふ。㊁いたみいる。おづおづ。㊂あやぶむ。きすくむ。㊃畏はおそれてすくむ。㊄懼はおそれてあとずさりする。㊅怖はおそれて氣がよわる。**—おそる**〔恐恐〕(副)こはごはと。おづおづ。おそれながら。

おそれ〔恐・畏・懼・怖〕(名)おそれ。(古語)

おそれる〔恐れる〕〔恐入る〕(自動、ラ四)㊀あやまる。謝罪する。㊁かたじけなく思ふ。いたみいる。もったいないと思ふ。**—おおし**〔おそれおほし〕〔恐多し〕(形、一)もったいない。**—なから**〔恐乍〕(副)はばかりあれど。もったいないが。

おそれ〔恐〕(副)おそるおそる。

おそれ〔恐れる〕(自動、ラ四)はばかりあれど。もったいないが。かしこいけれど。**—やま**〔恐山〕(名)【地】青森縣下北半島の中央にある火山。噴火口内に圓形の火口湖を有する。標高九四二米。〔「おそろ」の口語。

おそれる〔おそれられる〕〔恐れる〕(自動、ラ下一)

おそろし〔おそろしげし〕〔恐し・怖し〕(形、二)㊀こはい。㊁あやふい。心配である。㊂甚だしい。たいさうである。**—がる**〔恐しがる〕(自動、ラ四)こはがる。恐しいと思ふ。**—げ**〔恐しげ〕(名)おそろしい様子。**—さ**〔恐しさ〕(名)恐しい程度。恐しいこと。

おそわる〔おそわられる〕〔魘はる〕(自動、ラ下二)夢で苦しめられる。うなされる。

おそわる〔おそはる〕〔敎はる〕(自動、ラ四)敎へを受ける。

おそん〔汚損〕(名)けがれそこなはれること。けがしそこなふこと。

おだ〔小田〕(名)田。

おだ〔小田〕(名)除暦九月の稱。**—や**〔小田屋〕(名)田の中に設けた庵。**—やもり**〔小田屋守〕(名)小田屋の番人。こやもり。

おだい〔御臺〕(名)妻の敬稱。**—がい**〔御臺貝〕(名)めしびつ。

おだいこ〔御太鼓〕(名)たいこもち。おたいこもすぐ。**—むすび**〔御太鼓結〕(名)女の帶の結び方。かけた結び目の中に入れて太鼓の胴のやうにまるく結んだもの。

おたいみょう〔御大名〕(名)諸侯の敬稱。

おたいら〔御平〕(名)足をくづすことの敬稱。

おたがじゃくし〔御多賀杓子〕(名)(滋賀縣多賀神社から、お守として出す杓子に似てゐるからいふ)㊀小形の杓子。㊁おたまじゃくし。

おたから〔御寶〕(名)㊀一月二日の夜、枕の下に敷いて寢る寶船の畫。たからぶね。㊁金錢の異稱。**—うり**〔御寶賣〕(名)寶船を賣る人。

おたき〔おたき〕(名)〔雄瀧〕(名)一對の瀧で、大なる方のもの。(めだき)の對。

おたく……〔汚濁〕(名)よごれにごること。たくし。

おたけ……〔雄竹〕(名)〔種〕まだけ(著竹)。(めだけ)の對。

おたけび……〔雄叫・雄哮〕(名)ををしく叫ぶこと。(古語)

おたし〔おたしげし〕〔穏し〕(形、二)おだやかである。やすらかである。(古語)

おたずね〔御尋〕(名)たづねることの敬語。**—もの**〔御尋者〕(名)まだ捕縛されぬ罪人。その筋でありかを尋ねてゐる罪人。

おたち〔御立〕(名)㊀出立することの敬稱。㊁客の歸ることの敬稱。

おだち……〔小太刀〕(名)短い太刀。

おだちゃん〔御駄賃〕(名)進物を持って來た子供に與へる金錢。又は菓子。おちん。

おだつ〔おだつ〕〔煽つ〕(他動、タ下二)その勢を勢動かす。たぶらかしさそふ。

おだて〔煽〕(名)おだてること。そそのかし。

おだてる〔おだてる〕〔煽てる〕(他動、タ下一)「おだつ」の口語。

おだのぶかつ〔織田信雄〕(名)【人】武將。信長の第二子。小字は茶筌丸。初め北畠氏を嗣ぎ、伊勢に居り、後剃髮して常眞と號す。性優柔不斷、信長の歿後、弟信孝と桶を爭ふ。後、秀吉と隙を構へ、德川家康の援を得て、小牧山に秀吉を破る。寛永七年(一二九〇)卒。年七十三。

おだのぶたか〔織田信孝〕(名)【人】武將。信長の第三子。通稱三七郎。初め神戸氏を嗣ぐ。資性剛勇。信長の歿後、柴田勝家と計り、信雄・秀吉を除かうと謀り、事破れて天正十一年(一二四三)自殺。年二十六。

おだのぶただ〔織田信忠〕(名)【人】武將。信長の嫡男。字は奇妙丸。三法師と稱す。天正五年、弟信雄・信孝と共に紀伊を平げ、大和に松永久秀を討ち、左近衛權中將に任ぜられた。天正十年(一二四二)京都本能寺の變に、妙覺寺に自殺。年二十六。

おだのぶなが〔織田信長〕(名)【人】武將。字は吉法師。資性剛勇果斷、細節に拘らず、永祿三年、今川義元を桶狹間に破ってから威名天下に鳴り、正親

町天皇の勅を拝じて海内を平げ、天正五年右大臣に任ぜられた。天正十年(一五八二)京都本能寺で、其の臣明智光秀に誅はれて自殺。年四十九。

おたばこぼん[御煙草盆](名) ㊀煙草盆の敬稱。㊁少女の髪の結び方。左右の髪を壁方から髱にあはせて結び、其の上にきれをかけたもの。㊂でしゃばりで、すきもの。

(㊁ムスビ)

おたび[御旅](名) 祭禮前に神輿を拜殿又は御旅所に運ぶ間。**—しょ**[御旅所](名) 神社の祭禮に、神輿の渡御して暫くとどまり給ふ處。

おたふく[阿多福](名) ㊀額高く、頬ふくれ、鼻の低い女の顔の假面。おたふくめん。㊁おたふくめんに似た顔の婦人。おかめ。㊂婦人を罵っていふ稱。㊃中興相場が當先に比して安いこと。**—あめ**[阿多福飴](名) 細長くした飴の棒の中に、阿多福の形をしこみ、どこを切っても阿多福のあらはれるやうにしたもの。**—ずら**[阿多福面](名) おたふくの面相。**—まめ**[阿多福豆](名)[植]蠶豆の實。**—めん**[阿多福面](名) おたふく。

おたぶつ[御陀佛](名) ㊀死ぬこと。㊁失敗して間復の見込の立たぬこと。

「ふる(古語)」

おたま[御玉](名) ㊀おたまじゃくし。㊁雞卵。**—じゃくし**[御玉杓子](名) ㊀しゃもじの小さいもの。㊁[動]蛙の幼蟲。水中に棲息す。體は楕圓形で、頭大きく尾は細い。尾を掉って水中を游泳する。蝌蚪。

おだま[苧玉](名) うんだ苧を、内を空虛にして作る。**おだまき**[苧環](名) ㊀をだまき(苧玉)。㊁紋所の一。絲を巻きつけたわくを上方より對角線的に見た形。㊂枯木の枝も葉も無くなったもの。(発水)。㊃[動]腹足類の貝。外殼、塔狀をなし、外面の縱線太く、恰も白絲をかけたやうに見える。**おたまき**[植]毛茛(きんぽう)科の多年生草本。高さは三〇糎位。葉は互生、二回三出複葉。根生葉は葉柄長く、莖葉は短柄である。小葉は廣楔形で三深裂し、裂片は更に分裂し、小裂片は鈍頭乃至鋭頭に鋸色又は白色の五瓣花を開き、瓣片の下端より距を生ず。專は五片より成りて花瓣狀をなす。果實は莢骨で平滑。とくり(瓶斗)菜。㊄餡入の求肥餅の上に蕎麥粉で緒の綻びたまきなつけた菓子。**—むし**[苧環蒸](名) 麺類に鳥類・菜・蒲鉾・桃茸などを加へた茶碗盛に卵をかけて蒸したもの。麺類を苧に見立てていふ。

「所。雖廟。

おたまや[御靈屋](名) 貴人の神靈を祀ってある

おため[御爲](名) ㊀ためになることの敬語。㊁恩義だて。㊂おうつり。**—がお**[御爲顔](名) 主人の爲を思ふやうな顔つき。恩義だての顔つき。**—ごかし**[御爲轉](名) 表面は他人の爲になるやうにいひなして、その實は害をなし、又は自分の利になることを。**—もの**[御爲者](名) 主人に對して恩義だてをするやうに見せかけてゐる者。

おだやか[穏](名) ㊀やすらか。しづか。㊁心のおほまかなこと。㊂おちついてゐること。言葉がしづかで丁寧なこと。

「みる。

おだやみ[小弛](名) をだやむこと。をだゆ

おだやむ[小弛む](自動・マ四) をだゆむ。

おだやん[阿多樣](名) おだふく。

おだゆむ[小弛む](自動・マ四) 雨などが暫く降ってやむこと。をやむ。

おたらい[御盥](名) ㊀たらひの鄙重語。㊁婦人の奚の給ひ方。笄に髪をうちちがひに巻いたもの。

おたるし[小樽市](名)[地]北海道日本海岸の港市。鐵道函館本線の重要驛、港灣の設備よく整頓し、北海道の門戸に當り、又、樺太航路の起點。

おたわら[小田原](名) ㊀[地]神奈川縣足柄下郡にある町。江戸時代には、東海道の宿驛で、箱根峠にかかる東西重要の關門であった。㊁(おだわらじょうちん)の。㊂(おだわらじょうちん)の。**—じょうちん**[小田原提燈](名) ㊀不用の時は折疊みて腰にさし、用ひる時は延べひろげ得るやうにした細長い提燈。享保の頃、小田原で造り出したもの。㊁萎縮した老人の陰莖。**—せいばつ**[小田原征伐](名)[歴]天正十八年(一五九〇)豐臣秀吉が小田原城を包圍し、北條氏政・氏直を降した戰役。氏政は自殺を命ぜられ、氏直は紀伊國高野山に閉居を命ぜられた。**—ひょうじょう**[小田原評定](名) ㊀[歴]豐臣秀吉が小田原城を征伐した時、小田原城中で北條氏の腹臣等の和戰の評定が長びいて決しなかったこと。㊁長びいて決せぬ相談。

おち[滝](名) ㊀おちること。㊁もれること。脱漏。㊂てぬかり。おちど。㊃にげることのがれること。

おち[御乳](名) 貴人の乳母。おちのひと。うば。

—のひと[御乳人](名) 貴人の乳母。おち。

おち[復](名) ㊀落語などの終局。㊁貴人の乳母。おち。

おち[復る](自動・ラ四) ㊀もどること。もとにかへること。㊁[復還る](自動・ラ四) もとにもどる。はじめにかへる。(古語)。**—みず**[復水](名) 飲めば若返るといふ水。(古語)

おち[御](名) 者がかへること。(古語)。**—かえる**[復還る](自動・ラ四) もとにもどる。はじめにかへる。(古語)。**—みず**[復水](名) 飲めば若返るといふ水。(古語)

おち[遠](名) ㊀遠い處。遠方。あち。あなた。

おち[雲蕊池菜](名)[植]あぶらな。

おち[汙池・洿池](名) くぼんだ地に水が溜まって、池のやうになったもの。みづたまり。ためいけ。

おち[遠](名) ㊀遠い處。遠方。あち。あなた。

かた[遠方](名) 遠い處。遠方。**—かたびと**[遠方人](名) 遠方の人。**—こち**[遠近](名) 遠い處と近い處と。あちちこちら。え、ここら。ふんきん。**—つかた**[遠方](名) 以後。それより後。

おちあい[落合](名) ㊀おちあふこと。㊁川と川との出あふ所。**—みょうと**[落合夫婦](名) できあひ夫婦。**—やき**[落合燒](名) 伯耆國會見郡(ふ)祇(現在西伯郡)落合から産した陶器。同村の人松浦助六が寛政五年に創めたもの。

おちあふ[落合ふ](自動・ハ四) ㊀[文]の[落合夫婦]の項。

おちあふみ[落合ふ](名)[人]明治時代の國文學者・歌人。萩の家と號す。第一高等學校・皇典講究所・國學院等で國文教育を鼓吹し、淺香(あさか)社を起して和歌の改善に努め、明治歌壇の重鎮となり、多くの門下生を出した。明治三十六年(二五六三)没。年四十三。其の著に「日本文學全書」「日本文典」「ことばの泉」「萩の家遺稿」「落合直文集」等がある。

「ゆく時の。㊃水のひきさけ。

おちあし[落足](名) ㊀にげゆく足どり。㊁にげ

おちあな[落穴](名) おとしあな(陷穽)。

おちあゆ[落鮎](名) 十月頃、産卵の爲に流れ下る鮎。

おちいたじき[落板敷](名) 一段低くなった板の間。

「さまをなすこと。

おちいり[落入](名) 芝居で、負傷や病氣で死ぬ

おちいる[落入る・陷る](自動・ラ四) ㊀計略にかかる。㊁はまる。はまりこむ。㊂おちこむ。陷没する。㊃城する。㊄絶命する。㊅氣絶する。㊆深く凹む。

おちいる[落入る・陷る](自動・ワ上一) ㊀おちついてふる。(古語)㊁安心する。(古語)㊂道理があると思ふ。信ずる。(古語)

おちうお[落魚](名) 死んだ魚。

おちうす[落失す](自動・サ下二) にげかくれる。のがれかくれる。

おちうせる[落失せる](自動・サ下一)「おちうす」の旧語。

おちうど[落人](名)(「おちびと」の音便)㊀戰に負けて逃げてゆく人。㊁人目を避けて逃げて行く人。

おちうなぎ[落鰻](名) ㊀秋の頃、流に從って下る鰻。㊁死んだ鰻。

おちえつじん[越智越人](名)[人]江戸時代の俳人。名は氏恒。熊本の人。越人は其の雅号。芭蕉の門に入り、蕉門十哲の一人となる。元禄十五年(二三六二)没。「鶉尾冠」、「庭鴛」の著がある。

おちえん[落縁](名) 座敷より一段低くて、雨戸の外にある縁。

おちおう[落合ふ](自動・ハ四) ㊀同じ所でであふ。㊁川と川とが出あふ。「落合ふ」の項。

おちおち[落落](名・副) 心の安らかなさま。お

ちついて。

おちょうしもの[落調子者](名)〔俗語〕くだけくだけ。かどかどしくくだけくだけ。

おちょうがかり[落掛](名)斜横両材の合する所。

おちょうかかる[落掛かる](自動、ラ四)落ちようとする。

おちょうかさなる[落重なる](自動、ラ四)落ちたものの上に、又、落ちて重なる。

おちょうがた[落方](名)❶花や城などの落ちる頃。

おちょうがみ[落髪](名)抜けおちる髪。ぬけげ。

おちょうく[落句](名)劣ってゐる句。(俳諧の語)

おちょうくさ[落草](名)鹿が鳥を追うて落した草。

おちょうぐち[落口](名)❶おちはじめ。❷水の流の落ちる處。

おちょうぐび[落首](名)❶首を斬ること。うちくび。❷首を下に傾けること。〔古語〕

おちょうぐま[落窪](名)床の一段低くさがった處。

おちくぼものがたり[落窪物語](名)【文】平安朝初期の小説。宇津保物語と共に源氏物語の先驅と見るべきもの。繼子いぢめの物語を骨子とし、戀愛談で潤色し、復讐と義俠といふ人情の自然を描く。一篇の梗概は繼母に苦しめられた中納言忠賴の女落窪の君が、左近の少將賴道に懸想せられて家出して榮え、落魄してゐる繼母に報復を遂げ、更に衰へた中納言一家を救ひその繁榮を計り、自らも繁榮したといふ筋である。作者未詳。四卷。

おちぐり[落栗](名)❶落ちた栗の實。❷おちぐりいろ。—**いろ**[落栗色](名)❶黒ばんだ紅色。おちぐりの色目。表は黒みある蘇芳(すは)、裏は香色(いろ)。

おちげ[落毛](名)おちがみ。❷高貴の僧に侍る童。

おちご[御児・御稚児](名)❶祭禮などに美服をつけて列に加はる童。❷ちこい。稚見輪)。—**なり**[御稚児成](名)祭禮などの時、おちごが列をつくって練り行くこと。—**わげ**[御稚児髷](名)ちごわ。

おちこぼれ[落零](名)❶落ちてちらばってゐる物。❷とりのこして残ってゐるもの。遺利。

おちこむ[落込む][落込む](自動、マ四)❶はまる。❷おちくぼむ。❸自然に手にはひる。

おちころび[落轉](名)おちめ。おちぶれる。不運。

おちさま[落様](名)落ちようとする時。おちし。

おちしお[落潮](名)ひきしほ(引潮)。「な。

おちぜい[落勢](名)負けてにげ行く軍勢。

おちそう[落添ふ][落添ふ](自動、ハ四)おち加はる。

おちたぎつ[落滾つ](自動、タ四)高所から水が落ちてわきあがる。

おちつき[落著](名)❶おちつくこと。❷旅宿などに到著して食する物。(古語)❸器物のすわりぐあひ。❹【總】相場の變動後、人氣のしづまること。—**どころ**[落著所](名)おちつく場所。—**はろう**[はろふ][はろふ]〔落著拂ふ〕(自動、ハ四)きはめて平氣にかまへる。おわてずにゐる。沈著である。

おちつく[かちつく][落著く](自動、カ四)❶居所がきまる。❷動務が定まる。❸沈著である。❹安心する。❺鎮定する。❻調和する。❼かなふ。❽言行が重重しい。物事に動じない。❾なさまる。歸著する。❿【總】相場の變動がないやうになる。

おちつく[かちつく][落著く](他動、カ四)おちつくやうにする。しづめる。

おちつけ[かちつけ][落著ける](他動、カ下一)「おちつくの口語。

おちど[をち][越度](名)❶關所又は渡場などに依らず、間道から通る罪。❷あやまち。引禍。落度。

おちとまる[をちとまる][落留る](自動、ラ四)❶落ちてあとに殘りとどまる。❷殘って長く傳はる。

おちのびる[落延びる](自動、バ上一)「おちのぶの口語。

おちのぶ[落延ぶ][落延ぶ](自動、バ上二)「おちのびの上二段活用。「遠方へ逃げて行く。

おちば[落葉](名)❶散り落ちた葉。❷おとしだれ。らくいん。❸おちぶれる。—**いろ**[落葉色](名)枯れた落葉の色。茶色に黄赤を帶びた色。

おちぶれ[落魄零落](名)おちぶれること。れいらくく。らくはく。—**はつ**[落魄零落つ][落魄零落つ](自動、タ下一)全くおちぶれる。甚だしくおちぶれる。—**はてる**[落魄果てる][落魄果てる](自動、タ下一)「おちぶれはつの口語。

おちぶれる[落魄れる][落魄れる](自動、ラ下一)「おちぶれるの口語。

おちぶれる[落魄れる][落魄れる](自動、ラ下一)おちぶれるの口語。

おちぼ[落穂](名)落ち散った稲の穂。

おちま[落間](名)❶床の一段低くなった室。❷貴・京阪の芝居にあった桟敷。きりおとし。

おちむしゃ[落武者](名)たたかひに負けて逃げる武者。—**は薄の穂に怖づ**(句)落ち行く武者は、心がおちついてゐぬから、つまらぬ物にも驚く。

おちめ[落目](名)❶おちぶれかかる運命。❷商品の値目が、送狼面の値目より減じてゐること。

おちゃ[御茶](名)茶の郷重語。—**こ**[御茶子][御茶]吹場又は茶屋などの女中。—**こしょう**[こしやう][御茶所](名)神社・佛閣などに附屬して、その神佛へ茶を奉り、又、參詣人を休ませる所。—**めめ**[御茶目](名)❶おちぶれかかる運命。❷商品の値目が、送狼面の値目より減じてゐること。

おちゃ[御茶](名)茶の郷重語。—**こ**[御茶子][御茶]吹場又は茶屋などの女中。—**のこ**[御茶の子](名)御茶の給仕をする小姓。—**どころ**[御茶所](名)神社・佛閣などに附屬して、その神佛へ茶を奉り、又、參詣人を休ませる所。—**の**[御茶通](名)お茶の給仕。食膳のお世話。—**のこ**[御茶子](名)❶ちゃのこ。ちゃうけ。❷物事をするのにたやすいこと。—**のこさいさい**[御茶子さいさい](名)たやすく物言が出來ること。朝めしの前。—**のこ**[御茶間](名)❶茶室。❷家人のゐる室。❸上女中のゐる室。—**ひき**[御茶挽](名)客がなくて手隙な者は、葉茶を白にかけて粉にする仕事をしたから。遊女・芸妓の客がなくて暇なこと。又、其の藝妓。—**や**[御茶屋](名)❶茶の渦の室。❷茶店。掛茶屋。❸料理屋。—**を濁す**(句)よい加減に其の場をごまかす。

おちゃぴい(名)多辯で滑稽な淡白な小娘。

おちゃのみず[御茶水](名)昔、徳川將軍の御茶用とした水。東京市本郷區御茶水橋附近の御茶水川の斷崖に奥泉湧出し、その水を將軍の御茶用とした。

おちゆく[おちゆく][落行く](自動、カ四)❶逃げて行く。❷成り行く。

おちょうばなし[ちやうばなし][御町話](名)色町のうはさ。遊女・揚屋などの評判。

おちょぼ(名)十五六歳までの下婢。「つ」の口語。

おちる[おちる][落ちる](自動、タ上一)「落つ」の上一段活用。

おつ[つ][つ](名)❶十干の「きのと」の第一位。甲の對。❷さげて低くする調子。(甲乙の對)❸(御通)「の轉か)減物事によく通ずること。粋なこと。❹奇なること。異なること。—**だい**[乙第](名)❶しもやしき。甲第の對。❷支那で進士に及第したものの中、成績のやや劣るもの。

おつ[つ][つ][落つ](自動、タ上二)❶高所から低い所へ移る。❷はまる。陷る。❸沈む。❹のがれる。❺止む。❻死ぬ。❼衰へる。❽あたる。❾ねげる。❿ぬける。⓫無くなる。⓬全快する。⓭わかる。解する。⓮遊落する。⓯劣る。⓰離れる。⓱城が陷る。⓲鞘得する。⓳手に入る。⓴さまなる。㉑落第する。㉒精進おとしをする。㉓罪に服する。㉔肌膚は異なっても最後に落ちつく所は同じである。

おつ[をつ][をつ][古語]〔復つ〕(自動、タ上二)もとにもどる。

おつ(感)❶驚いた時、又は遽かに氣のついた時に發する聲。❷叫聲。

おつう[乙](副)きたいに。へんに。おつに。

おつか[をつか][屋下](名)屋根のした。—**に屋を架す**(句)あるが上に、無用の事をなする譬。(世說、顏氏家訓、事文類聚)

おつかい[をつかひ][御使](名)「つかひ」(使)の敬稱。—**ばん**[御使番](名)「つかひばん」(使番)の敬稱。

おつかい[をつ][越階](名)順序を越えて位階の進む

こと。**—晴れて**〔句〕おもてむきに。誰に憚る所なく。公然と。

おっかえす〔追返す〕〔他動、サ四〕「おひかへす」の音便。

おっかかる〔押掛る〕〔自動、ラ四〕㊀よりかかる。㊁始と近づく。なろうとする。

おっかく〔追掛く〕〔他動、カ下二〕「おひかく」の音便。

おっかけ〔追掛〕〔名〕㊀おひかけること。㊁辻待をして客を引くこと。㊂ひきつづいて事をすること。

—おっかけ〔追掛追掛〕〔副〕更にひきつづいて。

おっかない〔形〕〔俗〕〔お恐恐〕おそろしい。こはい。〔口語〕

おっかなびっくり〔名・副〕怖る怖る事をすること。

おっかぶせ〔令押被〕〔名〕ごまかして つまらぬ物ほどかぶせる。

おっかぶせる〔他動、サ下一〕おそばせる。

おつき〔御附〕〔名〕つきそひ。

おつぎ〔御次〕〔名〕㊀つぎの人の敬稱。㊁つぎの間の敬稱。㊂次の室に住へる人の敬稱。

おっきょう〔越境〕〔名〕國境を越えて隣國を侵すこと。

おっくう〔億劫〕〔名〕〔おこうの轉〕

オックスフォード〔Oxford〕〔名〕【地】イギリス、ロンドンの西北、テームス河の左岸にある都市。古來多くの偉人傑士を出した有名なオックスフォード大學がある。オクスフォード。

おっくり〔御作〕〔名〕けしやう。みじまひ。

おっけ〔御汁〕〔名〕㊀麺類のつけ汁。㊁つけしる。㊂味噌汁。おみおつけ。

おつけ〔緒附〕〔名〕釣的の釣緒を取附けるところ。「いはれて」。

おつけ〔御告〕〔名〕㊀告げることの敬稱。㊁神佛の託宣。

おっけはれて〔越階晴れて〕〔句〕〔おっかはれて〕

おっけん〔越權〕〔名〕〔えっけん〕越權。

おっけん〔臆見〕〔名〕〔おくけん〕想像に基づく意見。

おつこ〔越期〕〔名〕或時期を越して長く續くこと。ておくれになること。

おっこう〔億劫〕〔名〕㊀〔佛〕一劫の億倍。㊁數へ盡くされぬ程の數。㊂手間のかかることを致想して著手に氣のりがせぬこと。㊃面倒なこと。

おっごく〔越獄〕〔名〕らうやぶり〔牢破〕。〔えっごく〕。

おっこち〔名〕男女相戀愛すること。情人。私通。

おっしゃる〔仰る〕〔他動、ラ四〕「言ふ」の敬語。仰せらる。

おっしゅ〔乙種〕〔名〕甲種に對して第二種の稱。

—ごうかく〔乙種合格〕〔名〕【軍】徴兵檢査で、甲種に次ぐ合格。

—とうきょう〔乙種興行〕〔名〕活動寫眞の興行を甲乙二種に分つ時、十五歳以下の兒童にも觀覽せしめる事を得る興行。

—しょうぎょうがっこう〔乙種商業學校〕〔名〕【教】義務制で、甲種よりは程度低く、入學資格は滿十二歳以上、修業年限三箇年の商業學校。

—のうがっこう〔乙種農學校〕〔名〕【教】程度、資格、修業年限等前條と同じ農學校。

お-ずらうま〔御葛籠馬〕〔名〕葛籠を負うた馬の敬稱。

おっ-せき〔越關〕〔名〕せきしやぶり。關所破。

おっ-せき〔越訴〕〔名〕順序を越えて、直ちに上官に訴へ出ること。

—ぶきょう〔越訴奉行〕〔名〕鎌倉・室町時代に越訴を引受けて吟味すること。

おっ-たつ〔押立つ〕〔他動、ダ下二〕「おびたつ。

おっ-たつ〔追立つ〕〔他動、ダ下二〕

おっ-たつ〔追立つ〕〔他動、タ下二〕おびたつこと。

—じり〔追立尻〕〔名〕尻の落ちつかぬわりかた。

—じる〔追立汁〕〔名〕にはかづくりの汁。船宿などで、客を促しながらすすめる熱い汁。

おっ-たて〔押立てる〕〔他動、タ下一〕「おったつ」の口語。

おっ-たて〔追立てる〕〔他動、タ下一〕「おったつ」の口語。

オッタワ〔Ottawa〕〔名〕【地】英領カナダの首府。オッタワ河に臨み、木材集散の中心地。製材業は世界第一。

おっちょこ-ちょい〔名〕輕輕しいこと。おちつかぬこと。輕薄なこと。又、その人。「つく。

おっつ〔現〕〔名〕うつつ〔現〕。〔古語〕

おっつく〔追附く〕〔自動、カ四〕おびなつける。

おっつくねる〔押捏ねる〕〔他動、ナ下一〕辛うしてまとまりなつける。ともかくもかたなつける。

おっつけ〔追附〕〔副〕間もなく。程なく。

おっつける〔押附ける〕〔他動、カ下一〕おしつける。

おっつける〔追附ける〕〔他動、カ下一〕㊀おひつく。㊁おひつくことができる。

おっつめる〔追詰める〕〔他動、マ下一〕おひつめる。

おって〔追手〕〔名〕逃げて行く人のあとを追ふ人。

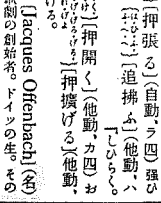
おって〔追而〕〔副〕㊀やがて。まもなく。㊁つけ加へて。なほなほ。

—がき〔追書〕〔名〕書翰文の末につけ加へて書くこと。なほなほがき。

おっと〔夫・良人〕〔名〕妻の配偶者。有婦の男。〔妻の對〕

おっと〔感〕㊀驚いた時に發する聲。㊁心づいた時に發する聲。

おっとせい〔膃肭臍・膃肭獸〕〔名〕【動】海獺。科の海獸。頭は圓く、體は長大で暗褐黑色を帶び、上脣に粗剛な鬚がある。四肢は短く鰭狀をなす。水中の動作は機敏であるが、陸上の動作は遲鈍。牡は體長二米に近く、牝は其の半ばで、我が國では北海に棲み、肉は食用、藥用となり、毛皮は特に珍重せられる。



〔膃肭臍〕

おっと〔夫〕〔名〕〔をっと〕

おっとって〔副〕もっぱら。主として。思ふ存分に。

おっとまかせ〔感〕氣輕に受取る掛聲。よしきた。承知した。

おっとり〔押取〕〔名・副〕そのまま。すぐ。

—がたな〔押取刀〕〔名〕危急の場合に、刀を腰に帶びず、急いで手にさげること。

—ぐわし〔押取鍬〕〔名〕急いで手に取る鍬。

—こうがい〔押取笄〕〔名〕意氣にさす笄。

おっとり〔副〕おほやうなまま。おほまか。おほらか。

おっとりこむ〔追取込む〕〔他動、マ下二〕追ひつめてかこむ。

おっとりこめる〔追取込める〕〔他動、マ下一〕〔おっとりこむの口語。

おっとりまく〔追取卷く〕〔他動、カ四〕おひつめてとりまく。

おっとる〔押取る〕〔他動、ラ四〕手に入れる。

おっに〔乙・に〕〔副〕へんに。きたいに。ふしぎに。

おっにん〔越任〕〔名〕順序を越えて官職の進むこと。

おっねん〔越年〕〔名〕年を越すこと。舊年を送って新年を迎へること。

—せい〔越年生〕〔名〕二年生。

おっぱい〔名〕〔一杯の訛〕乳〔幼兒の語〕

おっぱしる〔押走る〕〔自動、ラ四〕走る。

おっぱなす〔押離す〕〔他動、サ四〕はなす。

おっぱめる〔押塡める〕〔他動、マ下一〕はめる。

おっぱる〔押張る〕〔自動、ラ四〕強ひて行ふ。

おっぱろう〔追拂ふ〕〔他動、ハ四〕おひはらふ。

おっぴらく〔押開く〕〔他動、カ四〕おしひらく。

おっぴろげる〔押擴げる〕〔他動、ガ下一〕おしひろげる。

オッフェンバッハ〔Jacques Offenbach〕〔名〕【人】フランスの喜劇劇の創始者。ドイツの生。その著、ホフマンの物語は有名である。〔一八一九〕

おっぷせる〔押伏せる〕〔他動、サ下一〕おさへふせる。

おっぺしる〔押壓折る〕〔他動、ラ四〕

おつ・べ・す〔御歯・す〕〔押・歴・す〕〔他動・サ四〕おしつける。

お・つぼ〔御壺〕(名) ❶つぼの尊重語。❷膳部に載せる、壺に入れた盛物。「機嫌斟主義。❸便宜主義。

オッポーチュニズム〔Opportunism〕(名) 臨会。時機。時宜。都合。

オッポーチュニティー〔Opportunity〕(名) 機

オッポジション〔Opposition〕(名) ❶反對。妨害。❷反對者。政府反對黨。—**パーティ**〔Opposition party〕(名) 反對黨。

オッポチュニスト〔Opportunist〕(名) 定見を持たぬ日和見主義者。御都合主義者。

お・つぼね〔御局〕(名) 宮中の典侍・權典侍・掌侍・權掌侍・命婦・權命婦などの稱。

おつ・ぼりだ・す〔押投出す〕〔他動・サ四〕❶投げ出す。❷要を醒絲する。

おっぽろがみ〔おっぽろ髪〕(名) 子供の垂れ亂れ髪。

お・つむ〔頭〕(名) つむり。あたま。〈小兒・婦人の語〉

—てんてん(名) 赤子が兩手で自分の頭を輕く打つこと。

お・つめしゅう〔御詰衆〕(名) ❶室町時代に、將軍の幼稚な場合に庭所の宿衛を命ぜられた侍。❷江戸時代に、雁の間詰の諸侯中で、將軍の近侍を命ぜられたもの。

おつ・もり〔御積〕(名) 酒宴のみなりの酒。

おつ・や〔乙夜〕(名) いつや(乙夜)。

お・でを……〔汚泥〕(名) 水溜の泥。「く醫者。

おで・いしゃ〔御手醫者〕(名) お手許に抱へておく醫者。

オディッセー〔Odyssey〕(名)【文】イリヤッドと共に、古代ギリシャの大詩人ホーマー(ホメロス)の二大叙事詩。トロイ城陥落後、本國ギリシャへ凱旋する途中、暴風に遭つて、諸方を漂泊しあらゆる艱難と戰つて故郷へ歸るまでの冒險譚を叙してゐるもの。

お・てうち〔御手打〕(名) 一手打」の敬稱。「づから臣下を斬ること。

お・てかけ・もの〔御手懸者〕(名)てかけもの(妾)

お・ざき〔御出來〕(名) しゅつつ。できもの。

おでこ(名) 高く出た額。又、その額の人。

おでこ(名) 高く出た額。又、その額の人。

おてだま〔御手玉〕(名) 少女の弄ぶ小豆などを入れた布製の小袋。又、その遊戯。「ざること。

おてつき〔御手附〕(名) 貴人が侍女を寢所に侍らせて邊つた札に手をつけること。又、その間に引取る札。

おてつけ〔御手附〕(名) 歌がルタを取る時、過つて邊つた札に手をつけること。又、その間に引取る札。

オデッサ〔Odessa〕(名)【地】ロシヤ南部、黑海沿岸にあるウクライナ共和國の重要都市で、黑海岸第一の貿易港。豐富な穀物・麻・砂糖を輸出する。

おて・ぢ〔御木偶〕(名) ❶昔、故下師などの見世物に用ひた人形。❷おでで。ことしぢ。—**しばい**……〔御木偶芝居〕(名) 江戸時代の江戸三座以外の小さい劇場。もと木偶を用ひた人形芝居に基づく。

おてのもの〔御手物〕(名) 得意のわざ。

おてまえ〔御手前〕(代) あなたの。きみ。(同輩の對稱代名詞)

おてまえ……〔御手前〕(名) 茶の湯の技術又は腕前。—**いしゃ**〔御手前醫者〕(名) お抱へ醫者。

おてまし〔御出座〕(名) 出て行くことの敬稱。

おてら〔御寺〕(名) ❶〔佛〕寺の敬稱。❷寺の住職又は僧侶の敬稱。—**しゅう**〔御寺衆〕(名)〔佛〕僧の敬稱。

おてんを……〔汚點〕(名) ❶きめでんがくの芽田樂。❷蹈鞴・芋・はんぺん等を多く串にさして煮込にしたもの。—**かんけ**〔御田楽酒〕(名) おでんとかんざけとを賣る屋號店。

おてんば〔御轉婆〕(名) 女としてのたしなみなく、臆面もなくはしゃぎ廻る女。お出過ぎ女。おきゃん。

おと〔音〕(名) ❶物の振動の空氣を傳つて耳に聞えるもの。こゑ。ね。おん。ひびき。❷音づれ。たより。—**がね**〔音金〕(名) 月の末弭(ゆみはず)の方の弓弭(ゆみはず)の中に入れた銅又は錫で、矢を射る時、響の出るやうにしたもの。—**ぎき**〔音聞〕(名) ❶音のひびき。人づてに聞く。❷世間のうはさ。—**に聞く**(句) 評判に聞く。人づてに聞く。

おと〔弟〕(名) ❶弟。❷妹。—**おじ**〔弟小父〕(名) 父の弟。叔父。

おとき〔御齋〕(名) ❶佛に供する飯。❷江戸時代に、將軍の側にゐて、伽の話相手となるもの。❸妾の稱。—**こしょう**……〔御伽小姓〕(名) 幼主の遊相手となる小姓。—**しばい**……〔御伽芝居〕(名) 御伽話を芝居に仕組んだもの。—**しゅう**〔御伽衆〕(名) 豐臣時代の職名。君側に侍つて話相手を勤めたもの。—**ぞうし**……〔御伽草紙〕(名)【文】室町時代の短篇小說の汎稱。「文正草子」「鉢かづき」の類。—**ばなし**〔御伽噺〕(名) ❶人のつれづれを慰めるために語り合ふ話。❷子供に聞かせる話。桃太郎・かちかち山の類。—**ぼうこ**……〔御伽這子・御伽婢子〕(名) ❶天見(あまみ)の一種。頭部を白い練帛で包み、黑い絲を以て縫ひとし、左右に分けて前方に垂らした玩具。❷〔文〕浅井了意著の假名草子。三卷、怪談實話六十餘種を收む。—**ぼうず**……〔御伽坊主〕(名)〔佛道後世〕

おとこ〔男〕(名) ❶男子。❷夫。❸男子の敬稱。❹男子の尊稱。❺男子の卑稱。❻男子の自稱。❼男子の呼稱。❽男子の愛稱。❾男子の侮稱。❿男子の罵稱。⓫男子の謙稱。⓬男子の親稱。⓭男子の親稱。⓮男子の親稱。⓯男子の親稱。⓰男子の親稱。⓱男子の親稱。⓲男子の親稱。⓳男子の親稱。⓴男子の親稱。㉑男子の親稱。㉒男子の親稱。㉓男子の親稱。㉔男子の親稱。㉕男子の親稱。㉖男子の親稱。㉗男子の親稱。㉘男子の親稱。㉙男子の親稱。㉚男子の親稱。㉛男子の親稱。㉜男子の親稱。㉝男子の親稱。㉞男子の親稱。㉟男子の親稱。㊱男子の親稱。㊲男子の親稱。㊳男子の親稱。㊴男子の親稱。㊵男子の親稱。㊶男子の親稱。㊷男子の親稱。㊸男子の親稱。㊹男子の親稱。㊺男子の親稱。㊻男子の親稱。㊼男子の親稱。㊽男子の親稱。㊾男子の親稱。㊿男子の親稱。

おとこ〔乙〕(名)〔接頭〕(名) ❶末「次」などの意。❷愛らしい。「語」

おとを〔囮〕(名)〔おとり〕〈囮〉。

おどを〔大門〕(名) 廣い水門(みなと)。〈小門(こと)の對〉(古語)

おどを〔小門〕(名) 狹い水門(みなと)。〈大門(だい)の對〉(古語)

おとあわせ……〔音合〕(名) 地震・雷などの時、「雄の鳴くこと。

おとあわせ……〔御頭會〕(名)〔佛〕年頭の法會の意。毎年正月十二日に身延山(みのぶさん)で行ふ法會。

おとうか……〔男踏歌〕(名)〔おとこうか〕。

おとうかし〔弟猾〕(名)【人】兄猾(えうかし)の弟。儀の菟田縣(うだあがた)の祖長。神武天皇の東征し給ふや、降服して忠勤を勵み、縣主に任ぜられた。

おとうと〔弟〕(名)〔おとと〕の音便。同じ親から生まれた年下の男子。—**ご**〔弟御〕(名) 弟の敬稱。—**でし**〔弟子〕(名) 同じ師匠の許に後から來た弟子。—**ぶん**〔弟分〕(名) かりに弟ときめたもの。義弟。—**よめ**〔弟嫁〕(名) 弟の妻。

おとおど〔怖怖〕(名・副)〔おづおづ〕の訛。恐れて心のおちつかぬさま。

おとおり〔御通〕(名) ❶おとほりなさること。御通行。❷貴人の前に召出されること。おめどほり。❸おとほりのきかづき。—**の盃**(句) 貴人の前に召出されて、手づから御酒を賜ふこと。

おとがい……〔頤・頤〕(名) ❶したあご。❷惡口。—**ずきん**……〔頤頭巾〕(名) あごに掛けるやうにつくつた頭巾。—**が落ちる**(句) ❶食物のうまい譬。❷聲へて齒の根のあはぬさま。—**で蠅を追ふ**(句) 精力の衰へ果てたことに譬へる語。—**の雫**(句) 手近にあるが、我が物となつて思ふままになる。—**を叩く**(句) しゃべる。—**を解く**(句) 口をあけて笑ふ。—**を養ふ**(句) 口すぎをする。「おどし。

おどかし〔嚇〕(名) 威勢を示して恐れさせること。

おどかす〔嚇す〕〔他動・サ四〕おどかしをする。おどす。

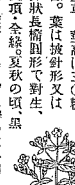
おとき〔御齋〕(名)〔佛〕「とき」(齋)の敬稱。

おとぎ〔御伽〕(名) ❶「とき」(齋)の敬稱。❷江戸時代に、將軍の側にゐて、伽の話相手となるもの。❸妾の稱。—**こしょう**……〔御伽小姓〕(名) 幼主の遊相手となる小姓。—**しばい**……〔御伽芝居〕(名) 御伽話を芝居に仕組んだもの。—**しゅう**〔御伽衆〕(名) 豐臣時代の職名。君側に侍つて話相手を勤めたもの。—**ぞうし**……〔御伽草紙〕(名)【文】室町時代の短篇小說の汎稱。「文正草子」「鉢かづき」の類。—**ばなし**〔御伽噺〕(名) ❶人のつれづれを慰めるために語り合ふ話。❷子供に聞かせる話。桃太郎・かちかち山の類。—**ぼうこ**……〔御伽這子・御伽婢子〕(名) ❶天見(あまみ)の一種。頭部を白い練帛で包み、黑い絲を以て縫ひとし、左右に分けて前方に垂らした玩具。❷〔文〕浅井了意著の假名草子。三卷、怪談實話六十餘種を收む。—**ぼうず**……〔御伽坊主〕(名)〔佛道後世〕

の時、価をして經た證む倍。

おときりすう(名)【植】おときりそう。

おときりそう……(弟切草・小蓮翹)(名)【植】金絲桃科の多年生草。草高は三〇糎餘。葉は披針形又は卵狀長楕圓形で對生、蝕頂・全緣。夏秋の頃、黒點・黒條ある黄色五瓣の花を開き、その蒴果は切傷を治する效がある。



〔草切弟〕

おどく(行自ケ)〔諧〕(自動、カ下二)㊀心にとりしまりがない。大らかである。うちとけてゐる。(古語)㊁しまりないふ。滑稽ないふ。

おどく(行自ケ)〔汚瀆〕(名)㊀けがれたみぞ。どぶ。㊁けがすこと。けがれること。

おどけ〔諧謔・滑稽〕(名)おどけること。しゃれ。たはむれ。**—え**〔諧謔絵〕(名)おどけたさまに戯いた繪。ざれゑ。**—ぐち**〔諧謔口〕(名)おどけたものいひ。じやうだん。**—しばい**……〔諧謔芝居〕(名)おどけた狂言の芝居。**—ばなし**〔諧謔話〕(名)おどけた話。

おどける(行自ケ)〔諧謔ける〕(自動、カ下一)「おどくの口語。ふざける。たはむれる。

おとこ(名)㊀男性の人。なのこ。男子。㊁血氣盛りの男。元服した男。青年・壯年の男。㊂むすこ。子息。㊃なをしい男。男らしい男。㊄なっと。㊅なす。なを。雄性。㊆情夫。密夫。㊇男の面目。男の體面。㊈召使の男。下男。㊉出家せぬ男子。㊊をとこぶり。**—あるじ**〔男主〕(名)一家の主人たる男。(女主人の對)**—え**〔男絵〕(名)男の姿なゐがいた繪。(女絵の對)**—えし**〔男郎花〕(名)【植】敗醤科の多年生草本。形、女郎花に似、高さ約一米半。葉も亦大形、女郎花に似た白色の小花を深緑花序に配列して開く。**—おび**〔男帯〕(名)男用の角帶又は兵見帶。**—おもい**……〔男思〕(名)妻が夫を深く思ふこと。**—おや**〔男親〕(名)ちちおや。父。(女親の對)**—かげ**〔男影〕(名)男の姿。(古語)**—がた**〔男形〕(名)芝居で、專ら男子に扮裝する役。(女形の對)**—がた**〔男方〕(名)男・女とに組を分けた場合の男の方。**—がな**〔男假名〕(名)萬葉假名。**—かみゆい**……〔男髪結〕(名)昔、男子の髪を結ぶことを業とした人。**—がら**〔男柄〕(名)㊀男としての人柄。㊁男の著用に適する布帛のがら。(女柄の對)**—ぎ**〔男氣〕(名)男だての心。俠氣。**—ぎみ**〔男君〕(名)㊀貴人の子息の敬稱。㊁「なっと」の敬稱。**—ぎらい**……〔男嫌〕(名)女が、男に接することを嫌ふこと。又、その女。**—きれ**〔男切〕(名)男のはしたない。(おとこけ)。**—きんだち**〔男公達〕(名)貴人の子息たち。(女公達の對)**—ぐさ**〔男草〕(名)【植】蕨の異稱。**—ぐさし**(形、ク)〔男臭し〕(形、ク)㊀衣服などに男の身體の臭のあること。㊁女でありながら、男のやうであること。**—ぐるい**……〔男狂〕(名)女が情夫などに戯れること。(女狂の對)**—け**〔男氣〕(名)男のけはひ。なをこっけ。(女氣の對)**—げいしゃ**〔男藝者〕(名)たいこもち。幇間。**—げいせい**〔男藝者〕(名)俳優などが竊かに淫女に賞るもの。なをこっぐ。**—こうろ**〔男心〕(名)㊀なをしい心。(女心の對)㊁男の浮氣な心。**—ごろし**〔男殺〕(名)㊀男を殺すこと。㊁男を惱殺する程の美貌の女。**—さか**〔男坂〕(名)神社・佛閣等のある山で、相對する二つの坂の急なる方。**—さかり**〔男盛〕(名)男の最も血氣盛んな年配。**—さび**〔男さび〕(名)男らしくますます元氣の出ること。(古語)**—じごく**……〔男地獄〕(名)をとこけいせい。**—じまん**〔男自慢〕(名)㊀男が自分の腕前・容貌などを自慢すること。㊁女が自分の夫を自慢すること。**—じむ**(ばんむじ)〔男染む〕(自動、マ四)男らしくなる。**—じょたい**……〔男世帶〕(名)男子だけで女子のゐぬ世帶。**—す**(すいしゅうする)〔男す〕(自動、サ變)男と情を通ずる。**—ずかい**〔男使〕(名)昔、陰暦四月上の申の日に、山城國平野・春日・大原野の祭に遣はされた勅使。**—すがた**〔男姿〕(名)㊀男つき・男ぶりの姿の男に似てゐるもの。**—ずき**〔男好〕(名)㊀男のすき好むこと。㊁女が男を好むこと。**—ずく**〔男臺〕(名)男の體面を全うすること。男の面目にかけて行ふこと。**—だて**〔男立〕(名)男の意地を見せて振舞ふこと。**—だて**〔男達・俠〕(名)信義に富んで、男子の面目を重んずる人。強きを挫き弱きをたすけることを己の任とする人。任俠・俠客。町奴。**—つき**〔男附〕(名)をとこぶり。**—てとうか**……〔男手唐歌〕(名)昔、正月十四日・十五日に行はれた少年の歌舞。後、朝廷の儀式となった。〔男手〕(名)㊀漢字。(女手の對)㊁男子の力。**—な**〔男名〕(名)(えぼしな)(烏帽子名)。**—なき**〔男泣〕(名)男が感極まって泣くこと。**—ばしょり**〔男端折〕(名)男らしく高くまくりあげて端折ること。**—はしら**〔男柱〕(名)橋・階などの左右の大柱。**—ばら**〔男腹〕(名)男ばかりを又は男を多く生む女。(女腹の對)**—ひじり**〔男聖〕(名)妻を迎へぬ男。**—ひでり**〔男旱〕(名)女が思をかける程の男のないこと。(女旱の對)**—ぶり**〔男ぶり〕(名)男の面目。**—まい**……〔男舞〕(名)自拍子の水干を着、立烏帽子を戴き、綯巻をさして舞ふた舞。**—まえ**〔男前〕(名)(おとこぶり)。**—まげ**〔男髷〕(名)女の髪の結ひ方。男の結髪の形にまれたもので、少女の結ったもの。**—まさり**〔男勝〕(名)男にもまさる程の勝氣の女。**—まゆ**〔男眉〕(名)女が、男のやうに整った作眉。**—みこ**〔男御前〕(名)皇子。**—みょうが**……〔男冥加〕(名)男に生まれた仕合。**—みょうり**……〔男冥利〕(名)前條に同じ。**—むすび**〔男結〕(名)紐の結ぶ方。右の端を左の下にまはして返した輪の結ぶ方。右の端を結ぶ方。**—めかけ**〔男妾〕(名)婚入にかかへられて寵間の伽をする男。**—めじ**〔男文字〕(名)(おとこで)。漢字。**—やく**〔男役〕(名)㊀男の務むべき役。㊁男がた。**—やま**〔男山〕(名)㊀或山を男性に擬していふ語。㊁〔地〕京都府綴喜郡にある山。山頂に男山八幡宮がある。**—やまはちまんぐう**〔男山八幡宮〕(名)〔神〕京都府綴喜郡八幡(やはた)町の男山に鎮座する官幣大社。祭神は應神天皇・神功皇后・玉依姫。勅祭に預る。石清水(いはしみづ)八幡宮とも稱す。例祭は九月十五日。歴代の崇敬厚く、伊勢神宮と併せて二社宗廟といひ、賀茂神社と併せて國家鎮護の神として尊崇あり。**—やもめ**〔男鰥〕(名)妻帶せぬ男。妻に死別或は生別した獨身の男。**—よもぎ**〔男艾・牡蒿〕(名)【植】菊科の多年生草本。高さ六・七〇糎。葉は楕形で缺刻がある。互生。夏秋の交、淡褐色の頭狀花を穂狀に綴る。**—らし**(しくしく)〔男らし〕(形、シク)㊀男の男たる氣性を備へてゐる。㊁姿・性質の女らしくなくて男に類するもの。**—になす**(句)元服させて一人前の男にする。**—になる**(句)㊀元服して一人前の男になる。㊁立派な男になる。選抜する。**—れ**(句)男に成長する。**—の目には絲を引け女の目には鈴を張れ**(句)男の目には眞直なるがよく、女の目はぱっちりと明らかなるがよい。**—は裸百貫**(句)男は無一物でも、働いて富をつくることができる。**—は松、女は蕊**(句)女は男に纏ふべきもの。**—は蛇が湧く**(句)男が獨身で居れば、不始末の爲に身のまはりが不潔になる。**—を上ぐ**(句)立派な行をして男の面目を施す。**—を拵へる**(句)情夫をもつ。**—を蔑**(句)袈裟心なみがく。

おとご〔乙子・弟子〕(名)末に生まれた子。末子。**—すき**(すき)〔乙子月〕(名)一年の末の月、即ち陰暦十二月の称。**—の いわい**……(いはい)〔乙子祝〕(名)陰暦十二月一日に行ふ祝で、此の日、餅を食すれば、水難をまぬがれると稱する。**—のついたち**〔乙子朔日〕(名)陰暦十二月一日。**—もち**〔乙子餅〕(名)乙子祝に搗く餅。かはびたりともち(川浸餅)。

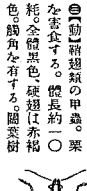
おとこど……〔小床〕(名)とこ(床)。

おとごぜ〔乙御前〕(名)おたふく。

おとこぼう[乙護法](名)【佛】法力に使役せられ、または佛法を守護する爲に示現する童形の鬼神。

おとさた[音沙汰](名)おとづれ。たより。いんしん。

おとし[落](名)❶おとすこと。❷鳥獸などをおとしれて捕へる裝置。❸話のおち。❹木製の火鉢の灰を入れる所。銅などで製した部分。❺戸の桟にとりつけ敷居の穴にさし込む木片。❻音曲で節を短く急にすること。❼話曲で節をさげてうたふ所。—**あな**[落穴・陷穽](名)❶人又は鳥獸などをだまし寄せて落し入れる穴。❷人を欺き陥おとし入れる計略。—**あみ**[落網](名)魚類をおび集めてすくひ捕へる網。—**いも**[落薯](名)すりいもを吸物の汁の中におとし入れた食品。—**え**[落餌](名)❶坂路をおりる時、落ちるやうな心地のする所。(古語)❷鰯問などの下に添へる雲形などの彫物。❸床の間又は書院窓の上方に架する横木。❹元祿の頃に流行した男の髪の結ひ方で、元結を根に近く掛けて結ぶもの。❺おとし❻。—**がみ**[落巾著](名)紐を著けて袴物の襟につける巾著。—**ご**[落子](名)おとしだね。—**さし**[落差](名)腰刀をこじりさがりにさすこと。—**だて**[落閉](名)戸を上からおとして閉した裝置の脇に取附ける棚。—**だな**[落棚](名)床間又は書院などの脇に取附ける棚。—**だね**[落胤](名)貴人が私通して生ませた子。—**だね**[落種](名)鳥などの啄んで來て落した植物の種子。—**たまご**[落雞卵](名)吸物の汁の中に生たまごを割って入れること。—**ちがいだな**[落違棚](名)他の室より一段低くつくった天井。—**てんじょう**[落天井](名)他の室より一段低くつくった天井。—**はなし**[落話](名)話のおちを他の事にいひかけて面白くいひなす話。—**ぶた**[落蓋](名)箱の蓋の上縁にかからずして、其の中に落込むやうに作った物。—**ぶみ**[落文・落書](名)❶公然と言へぬことを記して道路などに落しておく文書。❷除暦五月頃、山城國比叡山中で、木の葉が結文(ゆいぶみ)の形に捲かれて、落ち散ってゐるのを、于規(ほとと)の落した文に見立てていふ稱。❸【動】鞘翅類の甲蟲。葉を害食する。體長約一〇粍。全體黑色、硬翅は赤褐色。觸角を有する。闊葉樹の葉丸めて巣を造る。—**ぼり**[落堀](名)用水の殘りを落す爲に設けた堀。—**まく**[落幕](名)吊つてある緞を切りおとすやうに裝置した芝居の幕。—**みず**[落水](名)稻を刈る前に、田の水を流し去ること。又、その水。—**もの**[落物・遺物](名)心附かず落した金品。遺失物。—**もの**[落者](名)他國又は寺院に逃がしてやる罪ある人。—**や**[落矢](名)❶うはさしの矢。❷上の方から下の方に射る矢。


(三)みぶしとおし

おとしを[絨](名)(「落通しの意、又、嚇す意)鎧の札を綴ぶる絲又は細い革・絹で綴ること。又、その絲・革などの色目。—**ぎぬ**[絨衣](名)鎧の表面を包む布帛又は革。—**げ**[絨毛](名)鎧の札を綴る絲・革・絹など。絲綴・革綴・綿綴・絲貫綴などの名がある。—**た・つ**[絨立つ](自動、タ下二)立派に縅する。

おどし[威嚇](名)❶おどかし(案山子)。—**ぐさ**[威種・嚇種](名)人をおどすたね。(古語)—**つく**[威附く・嚇附く](他動、カ下二)勢强くおどす。—**てっぽう**[威鐵砲](名)鳥獸などを威して追ひ拂ふ爲にうつ鐵砲。

おとし・いる[陷る](他動、ラ下二)❶誘っておとす。おしおとす。❷欺きおとす。たばかって仲間に入れる。❸罪におとす。❹城などを攻めとる。

おとし・いれる[陷れる](他動、ラ下二)「おとしいる」の口語。

おとしき[弟磯城](名)【人】大和國の磯城の曾長。兄磯城の弟。神武天皇の東征し給ふや、直ちに歸順して天皇に従ふ仕へ奉り軍功があった。よって磯城の縣主(あがた)に任ぜられた。

おとしいれ・ず[落据ゑず](他動、ワ下二)心をしづまらせる。

おとし・つ・く[落著く](他動、カ下二)おちつかせる。しづめる。

おとし・む[貶む](他動、マ下二)見さげる。いやしめる。さげすむ。みくびる。

おとしめごと[貶言](名)さげすんでいふ言。

おとしめぐさ[貶様](名)おとしめるやうなもの。

おとしめ・める[貶める](他動、マ下二)「おとしむ」の口語。

おとし・す[落す](他動、サ四)❶高い所から低い所へやる。くだす。❷もらす。のこす。❸紛失する。❹おちいらせる。誘ひ入る。❺攻めとる。❻損じへらす。なくする。❼おちつかせる。❽いやそうなほう。❾おちのこす。去る。❿逃げ走らせる。⓫罪に服させる。⓬劣るようにする。低いやうにする。わるくする。

おどし・す[威す](他動、サ四)驚かせる。恐れさせる。おびやかす。おどかす。

おどし・す[縅す](他動、サ四)鎧の札を綴又は細い革・絹などで綴る。

おとしぬる[訪る](自動、ラ下二)❶人の許を尋ねる。見舞ふ。訪問する。❷書狀で安否を問ふ。

おとずれ[訪](名)❶訪問。❷消息。たより。

おとずれすつ[訪れ捨つ](自動、タ下二)訪れたままで語らひもせぬ。(古語)

おとず・れる[訪れる](自動、ラ下一)(おとずる)の口語。

おとたちばなひめ[弟橘媛](名)【人】日本武尊の御妃。忍山宿禰の御女。尊の東征し給うた時、上總に赴き給ふ相模海上で、風波の起つた際、海神の怒をなだめる爲、尊に代って海に投じて犧せられた。❷尊に愛らしいたなばたしめる。

おとたちばなばた[乙棚機](名)うるはしいたなばた。

おとつ・い[一昨日](名)(「遠つ日」の轉)昨日の前日。いっさくじつ。

おとと[弟](名)❶おとうとの略。❷年齢の劣ってゐること。又、その人。—**い**[弟兄](名)おととえ。—**え**[弟兄](名)はらから。兄弟。(古語)—**ぐさ**[弟草](名)【植】菊の異稱。—**てし**[弟子](名)おとうとでし。—**むすめ**[弟娘](名)妹。—**よめ**[弟嫁](名)弟の妻。

おとど[大殿](名)貴人の邸宅の敬稱。(古語)—**まち**[大殿町](名)貴人の邸宅の建ち並んだ町。

おとど[大臣](名)❶大臣の敬稱。❷婦人の敬稱。(古語)—**がね**[大臣兼](名)大臣となるべき人。大臣の候補者。(古語)

おとと・い[一昨年](名)(「遠つ年」の轉)昨年の前年。前前年。

おとな[乙名](名)❶一族の長。部落の長。酋長。(古語)❷昔、琉球で、各主の役を務めたもの。❸さ。かしら。❹家老。❺諸侯に仕へた下臈の女官。

おとな[大人](名)❶十分に成長した人。一人前になった人。元服のすんだ人。❷子供のおとなしいさま。—**おとなし**[大人臭い](形)少年の大人らしい擧動あるこいふ。—**げ**[大人げ](名)おとならしいこと。❷大人で、子供らしい擧動がある。—**ごころ**[大人心](名)大人らしい心。おちついた心。—**し**[大人し](形、二)❶大人のやうにおちついてゐる。❷おだやかですなほである。—**しい**[大人しい](形)「おとなし」の口語。—**しげ**[大人しげ](名)おとならしいこと。—**しさ**[大人しさ](名)おとなしいこと。—**じ・む**[大人染む](自動、マ四)おとならしくなる。—**しやか**[大人しやか](名)すなほ。いかにもおと

なしいさま。**—たつ**〔大人立つ〕(自動・タ四)㊀大人のやうに挙動がおだやかである。㊁頓だつ。老成する。(以上古語)**—なみ**〔大人並〕(名)子供であるが、凡てが大人と同一である。**—はずかし**〔大人恥かし〕(形・二)子供の智慧の大人にもまさってゐるさま。**—ぶ**〔大人ぶ〕(自動・バ上二)〔おとなだつ〕の㊁。**—ぶる**〔大人ぶる〕(自動・ラ四)㊀大人らしい風をする。㊁大人のやうなことを語る。**—めく**〔大人めく〕(自動・カ四)おとなだつ。**—やく**〔大人役〕(名)大人のすべき役目。

おとない〔訪ない〕(名)㊀ひびき音の立つこと。(古語)㊁おとづれ。訪問。**—びと**〔訪ない人〕(名)おとなふ人。訪問客。

おとなし・がわ〔音無川〕(名)【地】和歌山縣熊野川の上流。本宮村附近を音無の里といったのに基づく。

おとなし・のたき〔音無瀧〕(名)京都府愛宕郡來迎院の東にある瀑布。高さ約五〇米。幅約一米半。

おとに・のみ〔音にのみ〕(枕)「聞く」「菊の枕詞。

おとね〔乙子〕(名)月の下旬の子の日。(古語)

おとの・う〔音なふ〕(自動、ハ四)㊀音立つ。ひびく。㊁訪問する。おとづれる。

おとぼね〔音骨〕(名)聲。音聲。

おとまし〔音まし〕(形・二)うとまし。好ましくない。

おとめ〔乙女〕(名)(小(を)つ女の)の轉)㊀年若の女子。むすめ。㊁未婚の少女。きむすめ。おぼこむすめ。**—ご**〔少女子〕(名)をとめ。**—さび**〔少女進〕(名)〔少女らしくなること。少女のふるまひ。(古語)〕**—そう**〔少女草〕(名)【植】菊の異稱。㊁(わたそう)(八幡草)。**—みこ**〔少女神子〕(名)みこ(神子・巫女)。**—らが**〔少女等が〕(枕)「ゆきあひ」(行逢)の枕詞。**—らに**〔少女等に〕(枕)「ゆきあひ」(行逢)の枕詞。

おとめを〔夫妻・夫婦〕(名)めをと(夫妻)。

オドメーター〔Odometer〕車にとりつけて、運行距離を測る器械。計距器。

おとめを〔緒止〕(名)(おとめ)(緒締)。

おとめば〔御留場〕(名)(諸人の狩獵を禁止する場所の意)江戸時代に、將軍の鷹狩とした場所。

おとも〔御供〕(名)ともびと。從者。**—しゅう**〔御供衆〕(名)㊀多數の從者を呼ぶ敬稱。㊁室町幕府職制の一。將軍に近侍して、食膳の事を掌り、外出の際は駕籠を守衛したもの。

おともり〔劣〕(名)とどこほり。未濟の金。

おとり〔劣〕(名)劣ること。品のさがること。**—さま**〔劣樣〕(名)おとったかた。**—ばら**〔劣腹〕(名)身分の低い母の生んだ子。妾腹。(古語)

おとりを〔四・媒鳥〕(名)(「おきとり」(招鳥)の略)㊀他の鳥を誘ひ寄せる爲の鳥。㊁他の者を誘ひ寄せる爲に利用するもの。

おとりを〔雄鳥〕(名)をすの鳥。をんどり。

おどりを〔踊躍〕(名)㊀とびはねること。㊁俗曲にあはせて、種種の手振・身振・動作をなすこと。舞踊・舞踊。㊂ひよめき(躍門)。㊃利息の重なること。**—あがる**〔踊上がる〕(自動・ラ四)飛びあがる。はねあがる。**—あし**〔躍足〕(名)馬の足のなどやうに見えるもの。**—かゑる**〔躍返る〕(自動・ラ四)躍りあがりながら飛びかかる。**—こ**〔踊子〕(名)㊀をどりをする少女。㊁舞妓。㊂とちゃ(泥鰌)。(俗信の隱語)**—こ・む**〔踊込む・躍込む〕(自動、マ四)㊀をどりながら、家の中に入込む。㊁身をなどらせてはひろ。㊂あばれこむ。**—じ**〔踊字〕(名)同一の假名又は漢字を重ねたもの。かさね字。畳字。**—だいもく**〔踊題目〕(名)をどりに合はせて題目を稱へること。**—つ・く**〔躍附く〕(自動、カ四)をどりながら飛びつく。**—て**〔踊手〕(名)をどる人。**—ねんぶつ**〔踊念佛〕(名)【佛】㊀くうやねんぶつ。㊁彼岸の中日に、大阪天王寺の念佛堂で、大和・河内の道者が集まって十德を著、鉦に紐をつけて持ち、之を叩いて、踊りながら念佛する行事。**—ば**〔踊場〕(名)㊀をどる場所。㊁階段の中途の踊板を廣くして足休とした所。**—ぶ**〔踊歩〕(名)期限に至って借財を返濟し得ず、證書の書替をする際に、二重に拇ふその月の利息。**—やた**い〔踊屋臺〕(名)祭禮などにをどりをする屋臺。

おとりこし〔御取越〕(名)【佛】浄土眞宗の佛事。陰暦十月に在來で行ふ親鸞上人忌。正忌は十一月であるのを取越して行ふのでいふ。

おとる〔劣る〕(自動・ラ四)㊀及ばぬ。等位が降る。㊁減る。損失する。(古語)

おどる〔踊る〕(自動・ラ四)㊀はねあがる。飛びあがる。㊁をどりを演ずる。㊂胸さわぎがする。㊃利息が重なる。をどりぶとなる。

おどろ〔棘・蓬〕(名)㊀雜草・雜木・荊棘などの繁った場所。㊁物事のみだれ入りくんだ所。**—が軒**(句)草木の生び茂った軒。あばら屋。(古語)**—の路**(句)㊀おどろの下のいぶせき路。㊁支那の昔、外朝の公卿の位次をあらはすに、九棘の棘を植えた故事による。公卿の地位。

おどろえ〔衰〕(名)おとろへること。衰弱。

おどろえを〔衰ふ〕(自動、ハ下二)次第によわる。勢がおとって行く。衰弱する。

はつえ〔衰ふ〕(自動、ハ下二)

おどろえる〔衰へる〕(自動、ラ四)〔衰へる〕の轉)甚だしくおとろへる。

おどろ・おどろし〔驚く・驚かす〕(形・二)恐ろしい。驚くべきさまである。仰山である。(古語)

おどろかし〔驚〕(名)㊀おどろかすこと。㊁かかし(案山子)。おどし。(古語)

おどろか・し〔驚かし〕(形・二)驚くべきさまである。おどろおどろし。(古語)

おどろか・す〔驚かす〕(他動、サ四)㊀驚くやうにする。おどすやおどかす。㊁注意を與へる。㊂眠をさます。「夢」

おどろき〔驚愕・駭〕(名)おどろくこと。びっくりすること。**—いる**〔驚足〕(名)大股にあるくこと。**—いる**〔驚入る〕(自動、ラ四)甚だしく驚く。**—うま**〔驚馬〕(名)驚いてはねあがる馬。はね馬。(古語)**—ばん**〔驚盤〕(名)【理】廻轉し得る圓盤内に、運動體の每一定時の狀態を畫いた紙を貼り、その圓盤を廻轉しつつ、圓盤の周圍の孔より覗けばあかいたものが活動するやうに見える裝置のもの。きやうばん。

おどろく〔驚く・愕く・駭く〕(自動、カ四)㊀意外な事に遭って心がさわぐ。びっくりする。㊁めざめる。(古語)

おとわの・たき〔音羽瀧〕(名)㊀京都府比叡山にある瀧。高さ約六米。幅約一米。㊁京都府宇治市にある山。近江國との境なした、笠取山に連る。清水寺はその京都市に面する麓にある。**—やき**〔音羽山燒〕(名)新婚の角。おなあ。

おな〔他〕(名)他人の妻の敬稱。

おないぎ〔御内儀〕(名)「おなじとし」の音便。

おないどし〔同年〕(名)食事。(婦人語)㊁腹の異稱。(婦人語)㊂室町時代の武家の奥向に奉仕する女中の役名。中禿。(古語)**—がしら**〔御中頭〕(名)中禿の頭。**—ごころ**〔御中心〕(名)はらぐあひ。

おなか〔御中〕(名)㊀食事。(婦人語)㊁腹の異稱。

おなかさるを〔尾長猿〕(名)【動】尾の長い猿の總稱。尾を樹枝にまきつけて垂下する癖がある。ア

フリカに産する。

おながどり[名]【尾長鳥】(名)【動】❶(びちょうけい)(尾長鷄)。❷(ふうちょう)(風鳥)。❸燕雀類の鳥。頭・嘴・脚黒く、背は灰色、腹白く、翼は藍色、尾の末端は白く長い。

おながれ[御流れ](名)❶貴人から賜はる飲み殘しの盃の酒。❷目上の人から所有物の不用となったのを與へられること。又、その物。❸計畫した事の廢止となること。

おなご[女子](名)(「なな」は「なんな」の略)❶女の子供。女兒。❷はしため。女中。**—おうぎ**[女子扇](名)婦人持の小さな扇。**—ぎ**[女子氣](名)❶女のせまい心。❷女のしとやかな心。**—しゅう**[女子衆](名)❶女。❷女中。**—じたい**[女子世帶](名)女のみで男のゐぬ世帶。**—だけ**[女子竹](名)【植】めだけ。**—だて**[女子薹](名)女のなとこだて。女俠。**—むすび**[女子結](名)紐の結び方。左の端を男結の右の端のやうに、右の端を左の端のやうに結ぶもの。**—ら・し**(ひくらしい)[女子らし](形・二)❶女として相應にしとやかである。❷めめしい。男でありながら女子のやうである。

おなじ(ひとしい)[同じ](形・二)彼と此と一樣である。元のままである。同一である。**—く**[同じく](副)ならびに。ともに。何れも。**—くわ**[同じくは](副)同じことならば。むしろ。いっそ。**—とし**[同年](名)❶生年の同じなること。又、その人。❷その年。當年。**—に**[同じに](副)ひとしく。同樣に。**—穴の狐**(句)同類の惡輩。

おなじ(ひとしい)[同じ](形・二)彼と此と一樣である。元のままである。同一である。**—く**[同じく](副)ならびに。ともに。何れも。**—くわ**[同じくは](副)同じことならば。むしろ。いっそ。**—とし**[同年](名)❶生年の同じなること。又、その人。❷その年。當年。**—に**[同じに](副)ひとしく。同樣に。**—穴の狐**(句)同類の惡輩。

おなで[御撫](名)❶はうき(箒)。(婦人語)❷下婢を養れた姿。おさすり。

おなべ[阿鍋](名)女中の稱。

おなみ[男波](名)高低ある波の中の高い方。

おなら[屁](名)「へ」の異稱。(婦人語)

おなり[御成](名)❶貴人の來訪。❷貴人の乘物。❸現代、皇族方の御外出の敬稱。**—ぎり**[御成切](名)恭石程の大きさに平たくつくった玄子餅。昔、將軍から之を包んで臣下に賜ふった。**—そうぶぎょう**(ごぶぎょう)[御成總奉行](名)室町時代に、將軍が諸侯の邸に赴く時、諸侯が臨時に命じて當日の萬事を總監させた職。**—にわ**[御成庭](名)宮方・攝家などの出入せられる場所に設けた苑などをせぬ庭で、不敬漢の隱れることのできないやうにしたもの。**—みち**[御成道](名)貴人の御成の時の道路。**—もん**[御成門](名)御成を奉迎する爲に設けた門。

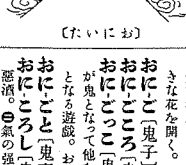
おなわ[縄](名)麻糸で綯った縄。

おなんど[御納戸](名)❶貴人の衣服・調度などを入れておく部屋。❷おなんどやく。❸おなんどいろ。**—いろ**[御納戸色](名)染色の名。鼠色がかった藍色。**—かた**[御納戸方](名)江戸時代の職名。將軍や諸侯の衣服・調度の出納を掌った職。**—やく**[御納戸役](名)江戸時代の職名。將軍や諸侯の衣服・調度の出納を掌った職。

おに[鬼](名)❶死人の魂。亡魂。亡靈。❷人に祟をする亡靈。もののけ。❸想像上の生物。人身にして頭角あり、口横にさけて鋭き牙を有し、裸體にして腰に虎の皮の褌をしめ、相貌に穿鑿て怪力がある。地獄にゐる獄卒。ちせつ。やしゃ。❹恐ろしい人。勇猛な人。殘忍な人。❺借金取り。債鬼。❻鬼っこで人を捕へる役となるもの。❼食物の番鬼。**—が出るか佛が出るか**(句)前途の運命のはかり難いことにいふ。**—が笑ふ**(句)人生の無常なるを知らずして、將來の事を豫測するの愚なるにいふ。**—とも組みさう**(句)❶強さうに見えること。❷無惨悲に見えること。**—に金棒**(句)たださへ勇猛なる鬼に金棒を持たせる意から、強い上にも強いことの意となる。**—の霍亂**(句)平生極めて壯健な人の病に罹る壓。**—の首を取ったやう**(句)無上の功名を立てたやうに、自分一人で喜ぶこと。**—の痴話**(句)氣味わるいことの譬。**—の念佛**(句)無惨悲な者が、がらにもない殊勝な振舞をすることの譬。**—の目にも涙**(句)無慚悲なるものにも、時には惨悲の涙があることの譬。**—の目にも見殘し**(句)緻密な觀察をする人にも、時として見落しあることの譬。**—の居ぬ間に洗濯**(句)憚る人の居ない間に、思ふ存分樂をするにいふ。**—一口**(句)鬼の一口で嚙まれるやうな危險なこと。又、事の容易な譬。**—も十八番茶も出花**(句)鬼でも年頃になれば美しく見え、番茶も出でなはかがりがよい。まして年頃の女は美しいわけである。**—を欺く**(句)力强く、又、容貌醜く鬼かと思はれる。**—を酢にして食ふ**(句)恐ろしい者が何とも思はぬ。「ばす語。

おに[鬼](接頭)勇猛・無惨悲・異形などの意をあらはす。**おにあさ**[鬼麻](名)【植】いらくさ(刺草)。**おにあざみ**[鬼薊](名)【植】おにごと(鬼事)。[薊]。**おにあそび**[鬼遊](名)【植】おにごと(鬼事)。[野。**おにあわ**(あは)[鬼粟](名)【植】おおあわ(大粟)。**おにいた**[鬼板](名)家の棟の兩端の鬼瓦のかはりにつけて飾とする板。多くは銅板で包む。

おにうち[鬼打](名)(おにやらい)。**—き**[鬼打木](名)江戸時代に、正月十四日の年越に、疫鬼を打擲ふ爲に末に葉を殘した蔵の無い木を門に寄せかけておいたもの。**—ま**[鬼打豆](名)鬼やらひの折に、鬼を追ふ爲に打投げる炒った大豆。


〔たいにお〕

おにおどし[鬼威](名)鬼やらひの時、鬼を威す爲に設ける飾物。長い竿の先に笊をつけ、それに柊(ひいらぎ)又は桔(きち)の葉などをつけたもの。

おにおどり[鬼踊](名)❶鬼の踊。❷鬼のいてたちして踊ること。鬼の面をかぶって踊る踊。

おにおにしし(しし)[鬼鬼し](形・二)鬼のやうである。無惨悲である。あらあらしい。恐ろしい。

おにが・しま[鬼島](名)❶傳説、鬼の住んだといふ想像上の島。❷地伊豆國八丈島の南方八〇粁にある青ヶ島の別稱。

おにが・しょう・さん(しょうさん)[鬼城山](名)【地】京都府の和知川と上林(かんばやし)川との北方にある山。高さ五一五米。古來要害の地として知られる。

おにがしら[鬼頭](名)竿頭に馬尾などをつけた旗。おはがしら。

おにがみ[鬼神](名)荒く恐しい神。きじん。

おにがわら(がは)[鬼瓦](名)屋根棟の兩端の飾に莽く大きな瓦。鬼の面などに似せて製する。惡魔辟伏の爲だといふ。**—も化粧**(句)醜い姿の者も、化粧次第で美しくなる。

おにき[鬼木](名)おにうちぎ(鬼打木)。

おにき・り[鬼切](名)源家累代の名劍の一。多田滿仲が戸隠山で、鬼を斬るに用ひたことから名を得た。

おにくい(くひ)[鬼喰](名)飲食の番鬼。

おにけし[鬼罌粟・鬼芥子](名)【植】罌粟科の多年生草本。高さ約九〇糎。葉は粗毛があり、葉は分裂狀をなして鋸齒がある。五月頃、深紅色の大きな花を開く。

おにこ[鬼子](名)❶親に肖ぬ子。❷鬼に似た子。

おにごっこ[鬼心](名)鬼のやうなむごい心。

おにごっこ[鬼ごっこ](名)子供の遊戯で、一人が鬼となって他を追ひ廻し、捕へられた者が次の鬼となる遊戯。おにこっこ。つかまへ。おにあそび。

おにころし[鬼殺](名)おにごと。

おにころし[鬼殺](名)❶アルコール分の强烈な惡酒。❷氣の强い下等な煙草。

おにさくさ[鬼作左](名)【人】性質が頑固だったからいふ。徳川家康の臣、本多作左衛門重次の綽名。

おにし[御西](名)【佛】西本願寺(本派本願寺)及び其の宗派の寺の敬稱。

おにし[鬼し](形・二)おにおにし。

おにしだ(しだ)[鬼歯朶](名)【植】水龍骨(ひりょうこつ)科の歯朶。葉は鼓鐵に似て厚闊で光澤がある。主として瀬海の地に生じ、北海道から臺灣まで廣く分布する。おにやぶそてつ。『綻染の一種。

おにしぼり[鬼絞](名)大きく括りよせて絞った所の宗源の寺の敬稱。

おにすぎはらがみ[鬼杉原紙](名)判の廣い

播磨國から産する杉原紙。ほんすぎはら。

おに・たて〔鬼蓼〕(名)【植】おおばたで。

おに・と〔鬼斗〕(名)【建】隅肘木などの上にあるますがた(斗形)。

おに・どの〔鬼殿〕(名)㊀妖怪の住んでゐる家。㊁平安時代に、京都三條の南、西洞院の東にあった邸宅。藤原朝成(あさなり)が、藤原伊尹(これただ)と碁語を爭ひ、又、大納言たちんとして納れられなかったので、憤死して、死霊となった處。

おに・のこ〔鬼子〕(名)【動】(枕草子に)蟇蟲いとあはれなり。鬼の生みければ、親に似て、これもおそろしき心地ぞあらんとて…とあるに基づく)みのむし(蓑蟲)。

おに・のさら〔鬼皿〕(名)㊀おにこっこ。㊁鬼の皿幾皿皿七皿八皿と唱へ、左右の手をよせて數へる子供の遊戯。

おに・のしこぐさ〔鬼醜草〕(名)【植】(しおん)。

おに・のま〔鬼間〕(名)清涼殿の母屋の西南の角、殿上の間の北の一室。壁に白澤王が鬼を斬る畫がある。「軍鬼。

おに・ば〔鬼齒〕(名)外方(恰も牙のやうに出た八重歯。池澤に生ずる。全體に刺を有する。葉は圓い楕形で縁がある。蕊面は赤色又は紫色。長柄を有する。直徑三〇—一〇〇糎。夏日、花梗を抽き、四瓣の紫色花を開き、後、漿果を結ぶ。地下莖、種子は食用となり、又、種子は藥用となる。いばらす。みづぶき。

〔すびにお〕

おに・ばば〔鬼婆〕(名)奸婦又は無慈悲な老婆。

おに・ばす〔鬼漣・芡〕(名)【植】睡蓮(ひつじ)科の一年生水草。

おに・び〔鬼火〕(名)湯地に小雨降る夜など燃え出でて、空中に浮遊する圓形の青火。燐化水素の燃焼であるとの説があるが、確かでない。陰火。いうれいび。りんくわ。きつねび。

おに・ほし〔鬼星〕(名)きしゅく(鬼宿)。

おに・みそ〔鬼味噌〕(名)㊀鹽氣多くして、味のかちい燒味噌。㊁外見は強くして其の實弱い。よわみそ。

おに・むしゃ〔鬼武者〕(名)きはめて勇猛な武者。「あらむしゃ。

おに・もじ〔鬼綟・鬼縫〕(名)荒くしぼったもちぢ形で、綿撚絲或は麻絲の太いので紡織にした布。

おに・もの〔鬼物〕(名)能樂で鬼形の者が仕手(主役)となるものの稱。「黒塚「紅葉狩」の類。

おに・やらい……ゃ〔鬼遣・追儺〕(名)古昔、禁中に行はれた年中行事の一。十二月晦日の夜、人を疫病の鬼に扮裝させて、これを驅り、疫癘をはらひ除く意の儀式。後世は、民間で節分の夜、大豆を炒ってれを撒くこととなった。

おに・ゆり〔鬼百合・卷丹〕(名)【植】百合科の多年生草本。高さ一米餘。莖は紫黑で白毛茸がある。葉は狹長にして互生し、葉腋に珠芽を生ずる。秋、六瓣(帶黄赤色)で、暗紫色の斑點を有する花を開く。鱗莖は食用に又、花は觀賞用に供せられる。

〔りゆにお〕

おに・わらわ……ゃ〔鬼童〕(名)鬼の姿をした童。

お・ぬし〔御主〕(代)同輩以下に用ひる對稱代名詞。おまへ。そなた。

お・ねを〔尾根〕(名)(お〈を〉)。(古語)

お・ねじをねじ〔雄螺旋〕(名)螺旋の條(ねじ)が高くなってゐて、雌れちの凹みにはめるやうに作ったもの。(雌螺旋の對)

オネスト〔Honest〕(英、形)正直な。忠實な。

お・ねつを……〔惡熱〕(名)惡寒の後に發する熱。

お・ねば〔御粘〕(名)㊀にぬき(煮抜)。(婦人語)㊁飯の煮えた時、釜の外に溢れ出る汁。(婦人語)

お・ねり〔御練〕(名)㊀ゆるゆる歩むことの敬語。㊁(佛)寺院で行ふ行道(ぎょうどう)の儀式。

おの(名)おもて(表)。(古語)

おのをの〔斧〕(名)まさかりの小さいもので、木を伐るに用ひる。よき。**—はじめ**〔斧始〕(名)(ちょうなはじめ)手斧始。**—の柄朽つ**(句)暫時の間と思って他郷に留ってゐたが、實はそれは長年月であった。述異記に「晉の王質が木を伐りに山に行ってゐる童子の圍碁を見てゐた。童子は王質に棗の核に似たものを與へたので食った。然るに一局の碁が終らぬ中に斧の柄が朽ちてゐるのに驚いて、居村へ歸ると、知ってゐた人は皆死んで一人もゐなかった。」とある故事に基づく)。

おの〔小野〕(名)㊀(地)京都市東山區山科(やましな)町の大字。㊁山城國愛宕郡八瀬・大原村の地にあった郷。小野朝臣の領邑。

おの〔己〕(名)おのれ。**—がいろいろ**〔己色色〕(副)おもひおもひに心心にそれぞれに。**—がさまざま**〔己樣樣〕(副)おのがいろいろ。**—がじし**〔己自〕(副)めいめいに。おのおのの。めいめいの心まかせに。**—がしな**〔己品〕(副)おのがしなじな。各自さまざま。おのがじし。**—がしなじな**〔己品品〕(副)おのがいろいろ。**—がちりじり**……ぢり〔己散散〕(副)めいめいちりちりに。「ばどち〔己同志〕(名)わが同志。自分たちの仲間。**—がむきむき**〔己向向〕(副)めいめいの心のままに。**—がよよ**〔己世世〕(副)夫婦離別して、各自に世を渡ること。(古語)**—さん**〔己樣〕(代)對稱。あなた。おまへ。**—さん**〔己樣〕(代)「おのさま」に同じ。**—ぞま**〔己妻〕(名)自分の妻。(古語)**—ほれ**〔己惚〕(名)うぬぼれ。(古語)**—ら**〔己等〕(代)おのれら。われら。

おの・えをの〔尾上〕(名)(峰(を)の上(へ)の意)山の高所。いただき。山の峯。

おの・えきぐごろうをのえきぐごろう〔尾上菊五郎〕(名)【人】俳優。京都の人。女形屋上左門の弟子。初は若衆方、後に立役となり、湯に立役となり、後に女形に轉じ、明治の菊五郎を稱し、三都の劇場に名聲を博した。家名音羽屋。俳號梅幸。天明三年(一七八三)江戸に歿。年六十七。

おの・おの〔各〕(名・副)めいめい。それぞれ。みなひとびと。ひとりびとり。

おの・おの〔各〕(代)同輩以下の多人數に用ひる對稱代名詞。きみたち。おのおのがた。かたがた。**—がた**〔各方〕(名)前條に同じ。

お・ごをのこ〔男子〕(名)㊀をとこ。男子。㊁召使の男。下部。郎黨。**—ご**〔男子子子〕(名)男の子。むすこ。**—やもめ**〔男鰥〕(名)ひとりものの男。をとこやもめ。

おのころ・じま〔磯馭廬島〕(名)【神】おのづから凝って成った島の意)神代に伊弉諾・伊弉冊二神が天浮橋に立って、沒海を探って引上げられた時、矛先から滴れ落ちる潮の凝って成った島で、やがて二尊は天降ってまづこの島を經營なさって大八洲國を生み給うたところ。今の淡路島の西南又は西北の小島と傳へられる。

おのし〔御主〕(代)「おぬし」の轉。

おのずからおのづから〔自〕(副)㊀そのままに。あったままに。自然に。㊁もしも。偶然。

おのずとおのづから〔自〕(副)おのづから。

おのでら・じゅうない……〔小野寺十內〕(名)【人】赤穂四十七士の一人。名は秀和。遠野長短に仕へて留守役となる。伊藤仁齋に經書を學び、又、和歌をよくした。元祿十六年(一七〇三)歿。年六十一。

おのの・いもこ……〔小野妹子〕(名)【人】天帝國滋賀郡小野に居り、小野氏を稱す。推古天皇の十五年遣隋使となって隋に赴く。後、剃髮して專務と號した。その室を池の坊と稱し、池坊立花の祖となったといふ。

おのの・おつう……〔小野阿通〕(名)【人】織田信長の侍女。父は信長の臣小野正秀。豐臣秀次の臣蠶川志摩の妻。淨瑠璃十二段草子をつくったと傳へられる。延寶七年(一六七九)歿したといふ。

おのの・くをのく〔おのきく〕(自動、カ四)ふるふ。わななく。

おのの-こうたいごう（小野皇太后）（名）【人】藤原敦子（こ）。後冷泉天皇の皇后。関白頼通の女の娘で宮中に入るに及んで、怒って宮を出で、兄静円の小野の山房に寓して佛に歸し、小野皇太后と稱す。康和四年（一七六二）崩。御年八十二。

おのの-こまち（小野小町）（名）【人】女流歌人。六歌仙の一人。出羽郡司の女とも、出羽守小野良真（篁の子）の女ともいふ。絶世の美人で和歌をよくした。仁明・文徳の両朝の後宮に仕へ、清和天皇の貞観八・九年の頃、任を辭したにも傳へられる。

おのの-たかみち（小野篁）（名）【人】小野臣。學者。參議宰守の子。承和の初、遣唐副使となり、大使藤原常嗣と爭って乘船せず、遂に隠岐に流された。後、召還されて左大辨に進んだ。博學にして詩文に長じた。仁壽二年（一八五二）薨。年五十一。清原夏野等と令義解を撰。世に野相公の稱がある。

おのの-とうふう（小野道風）（名）【人】朝臣。書家。葛絃の子。好古の弟。篁の孫。隷・飛白・朱雀・村上の三朝に歴仕し、正四位下・内藏權頭に至る。書を善くし、藤原佐理・藤原行成と共に三蹟と稱ぜられる。康保三年（一六二六）卒。年七十一。

おのの-みや（小野宮）（名）【人】（これたかしんのう）惟喬親王。

お-のぼり（御上）（名）❶上京の敬語。❷地方から京都に行くこと。❸地方から東京に行くこと。—**さん**（御上様）（名）京都見物に來る田舎者。又、都會見物に來る田舎者を卑しめていふ語。

おのみちし（尾道市）（名）【地】廣島縣の東南部、瀬戸内海沿岸の都市。室町時代から貿易港として知られた。現在は山陽道の一要驛を有し、備後表・泗人造肥料等を集散する。

おのも・**おのも**（各）（名・副）おのおの。（古語）

おのれ（己）（名）❶その人自身。自身。❷おのおのみづから。自働。—**おい**（己生）（名）自然に生じ出ること。自生。—**がお**（己顔）（名）われはがほ。—**さき**（己咲）（名）自然に野に咲き出た花。（古語）—**と**（己と）（副）ひとりで。おのづから。（古語）—**達せんと欲して人を達せしむ**（句）（論語雍也篇の句）仁者はわが事をなし遂げようと思へば、先づ人を助けて目的を遂げさせるの意で、仁者には自他の區別なきをいふ。—**に克ち禮に復る**（句）（論語顔淵篇の句）私欲をおさへて、禮にもどりぬやうにする。—**に如かざる者を友とするなかれ**（句）（論語學而篇・子罕篇の句）自分より劣った友は善を責め道を輔ける友ではないから劣ってはならぬ。—**の欲せざる所は人に施すなかれ**（句）（論語顔淵篇・衛靈公篇の句）自分が欲せぬことは人も欲せぬから、他人にしむけてはならぬ。—**を枉ぐ**（句）（孟子萬章上篇の句）自分の心を枉げる、我が守る所を棄てる。—**を虛しうす**（句）（漢書五行志の句）私情を全く棄てる。

おのれ（己）（代）❶自稱代名詞。われ。❷同輩以下の人を卑しめいふ時の對稱代名詞。なんぢ。きさま。うぬ。—**ら**（己等）（代）❶われわれ。われら。❷うぬら。きさまら。

おのれ（己）（感）物事に激して自ら勵ます時に發する聲。—**やれ**（己やれ）（感）他人が自分に殘念なことをしたる時に發する聲。

オノンがわ（—河）（名）【地】Onon. R.蒙古の大河。黑龍江の一支流。鐵木眞（テムジン）即ち成吉思汗が推されて初代の大汗の位に卽いた所として史上に名高い。

おは（尾羽）（名）鳥の尾と羽と。—**打枯らす**（句）尾と羽もない意から、おちぶれて、みすぼらしく姿となること。零落する。

おば（小母）（名）❶父又は母の姉（伯母）。❷父又は母の妹（叔母）。❸他人の母、又は他家の大人の女。—**むこ**（小母婿）（名）❶父方のをばの夫（姑夫）。❷母方のをばの夫（姨夫）。

おば（祖母）（名）（「おほば」の略）❶父母の母。そぼ。（古語）❷老いた女老婆。—**おとど**（祖母おとど）（名）おばさま。おばさん。（古語）—**きたのかた**（祖母北方）（名）或人には祖母に當り、他の人には北の方に當る人。（古語）

オパール（Opal）（名）【鑛】たんぱくせき（蛋白石）。

おはぐろ（御歯黒）（名）❶婦人の歯を黑く染めること。かねつけ。❷歯を染めるに用ひる褐色・惡臭の液で、鐵片を茶の汁に浸したもの。これにふしのこなつけて歯につける。はぐろ・かね（鐵漿）。—**おや**（御歯黒親）（名）昔、男女の初めて歯黑めをする親・德の女子。—**つぼ**（御歯黑壺）（名）おはぐろを容れる壺。

おはげ（御化）（名）へんげ（變化）。ばけもの。妖怪。—**がいん**・—**こよみ**（御化目）（名）【動】やどかり（寄居蟲）。—**こよみ**（御化暦）（名）伊勢神宮司廳から發行する正式の暦の外に、民間で祕密に發行する私製の暦。

おはこ（名）❶得意の藝。得手。十八番。❷寵。

おはこ（祖母子）（名）婦人の髮の結び方。左右に小さい輪をつくり、笄を横に貫くもの。

おはこ-ぶし（大葉子節・老婆子節）（名）民謡。羽前・羽後地方に起こった性異の調曲をもつ俚謡。

おはじき（御彈）（名）貝殻か石又はガラス製・樣粉製等のものを出し合って席上に撒布し、指さきではじき當てたものの二箇のうちの一つづつを取って、所得の多いことを競ふ少女の遊戯。

おはした（御半下）（名）（おすそ）。ちんかん。（古語）

おはした（欄）（名）（おすそ）。（古語）

おはしら（男柱）（名）❶（おと・ばしら）。❷柳の歯の左右兩端の太いところ。（古語）

おはすけ（御葉漬）（名）なづけ（茶漬）。（婦人語）

おはすて-やま（姨捨山）（名）【地】長野縣更科郡八幡村字姨捨にある山の名。月の名所。更科に住む男が、親代りの姨を捨ってゐたが、男の妻はこをきらって、男に勧めて山中深く背負って行ってすてさせた。男は姨を山頂に置いて帰ったが、折からの明月に後悔に堪へず「我が心慰めかねつ更科や姨捨山に照る月を見て」と口誦んで、翌朝行って姨を連れ歸ったとの傳說の遺跡が、篠井線姨捨驛下の後にある。この類の傳說を廢老窒死型の傳說といふ。姥捨山。

お-はせ（男莖）（名）陰莖。（古語）—**がた**（男莖形）（名）陰莖の形に擬へて造ったもの。

おはた-かげのり（小幡景憲）（名）【人】軍學者。通稱は勘兵衛。武田氏、後、德川氏の臣となって秀忠に仕へた。諸州を遊歴して兵法の奥儀を極め、甲州流軍學の祖と稱せられる。寛文三年（一六三三）歿。年九十二。

おはち（御鉢）（名）めしびつ。おひつ。—**が廻る**（句）順番が來る。

おはつ（御初）（名）「はつ（初）の敬重語。初物。

おはな（—花）（名）❶植）すすきの花穂。はなすすき。❷異（ばさ）の色目。表は白、裏は薄緑。—**あしげ**（尾花葦毛）（名）馬の毛色の一。葦毛のまじりあるもの。—**がゆ**（尾花粥）（名）昔、禁中で、疫癘を除く爲に用ひられた粥。薄の穂を黑焼にして交へたものの。江戸時代には早稲の黑焼・黑胡麻を用ひたなどなのゆ。—**ずり**（尾花摺）（名）野をあるく時、衣が尾花と摺れあふこと。

おはなし（御放）（名）江戸時代に流行した富籤の一種。—**うり**（御放賣）（名）御放を賣りあるいた人。

おはなばたけ（御花畑）（名）【地】高山上で高山植物が密生して畑の如くなり、夏季一時に花を開いて美觀を呈する處。

おはまり（名）はまり・こむこと。執着すること。心を捕へられること。

おはむき（御歯向）（名）へつらふことをいふ。

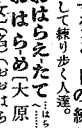
おはもじ（御は文字）（名）（「はじ（はぢ）の略。「もじ」は接尾語）はづかしいこと。（婦人語）—**さま**（御は文字樣）（名）前條に同じ。

おはよう（御早う）（感）（「おはやく」の音便）❶早朝挨拶の詞。❷會合の際、先著の人にいふ挨拶。

おはらい〔御拂〕(名) 拂ふことの敬語。

おはらひ〔御祓〕(名) ㊀毎年六月晦日、神社で行はれる大祓の神事。㊁神璽を書いた厄除けのおふだ。**—ばこ**〔御祓箱〕(名) ㊀祓の御符を入れておく箱。㊁御祓の盒をいひかけて語)雇人を解雇すること。**—の練祭**(句) 御祓の神事の時、行列して練り歩く人達。

おはらえたて〔御祓立〕(名) 兜の眉庇に御



〔めらはお〕

おはらえたて〔御祓立〕(名) 挿花の流名。大正時代に關西に起つた盛花・投入花の一流派。小原流國風盛花ともいふ。

おはらりゅう〔小原流〕(名) 挿花の流名。大正時代に關西に起つた盛花・投入花の一流派。小原流國風盛花ともいふ。

おはらめ〔大原女〕(名)(おはらめ)大原女。

おはり〔針〕(名) ㊀雇はれて針しごとをする女。㊁はりしごと。裁縫。(婦人語)

おはりだのみや〔小治田宮・小墾田宮〕(名)【歴】推古天皇のおはした宮殿。位置は大和國高市郡小治田。

おび〔帶〕(名) ㊀着物を身にまとふ時、腰にまとひ結ぶもの。㊁帶の形をしたもの。㊂【數】二つの球を二つの平行した平面で切つた時、その間にある球面の部分。**—に短し襷に長し**(句) 物事のちぐはなことは、役に立たぬ譬。**—紐解く**(句) ㊀警戒を要しないで安心すること。㊁男女のうちとけて同衾するにいふ。**—を繰くす**(句) 安心して起臥するにいふ。

おびあげ〔帶揚〕(名) 女が帶の結目などをさがらぬやうにする爲に結ぶ帛。せおひあげ。

おひいさま〔御姫様〕(名) おひめさまの音便。

おびいわい〔帶祝〕(名) 姙娠五箇月目に岩田帶をする時の祝。

おひえ〔御冷〕(名) よざ(夜着)。(婦人語)

おびえ〔怯〕(名) おびえること。恐怖。**—どき**〔怯閑・怯鯨波〕(名) おびえながら鬨の聲をあげること。

おびえる〔えええる・えるる〕(自動、ヤ下一)〔怯える〕(自動、ヤ下一)「おびゆ」の口語。

おひかけ〔帶掛〕(名) おびどめ。

おびがね〔帶金〕(名) 刀劍の鞘に附けた環で、これに鎖を通して腰に佩びる爲のもの。

おびがみ〔帶紙〕(名) ㊀物に卷いて引締める爲の細い紙。㊁たい(帶紙)。

おびかわ〔帶革〕(名) ㊀革で製した帶。バンド。かはおび。㊁器械用の調革(しらべ)。

おびかわ〔帶側〕(名) 女の帶の片側の織地。

オビがわ〔一河〕(名)【地】シベリヤの大河。本流三二〇〇粁。アルタイ山脈に發源し、オビ灣に入る。上流地方は農業・鑛業に利用される。下流は一年の過半凍結し、舟運の便は少い。心づけの金錢。祝儀。

おびきいだす〔誘き出す〕(他動、サ四) 欺いてさそひ出す。

おびきいる〔誘き入る〕(他動、ラ下一)だましてさそひいれる。

おびきずり〔御引摺〕(名) ㊀着物の裾長くして歩む時にひきずること。又、その仕立の衣服。㊁婦人の働くに不精なこと。㊂ひきずりもち。

おびきよす〔誘き寄す〕(他動、サ下二) 欺いてひきよせる。

おびく〔帶際〕(名) 帶の結びぎは。

おびぎわ〔誘く〕(他動、カ四) 欺き誘ふ。

おびくい〔帶食〕(名)(口に帶をふくませることに基づく)支那古代の制で鎧の胸につけた鬼面の形。雅樂の太平樂などの裝束に用ひる。

おびくらげ〔帶水母〕(名)【動】水母の一種。帶狀で透明。體長一米位に達し海面に浮遊する。

おびげ〔御髭〕(名) ㊀「ひげ」の敬稱。㊁「ひげ」をはやした人。**—の塵を拂ふ**(句)(宋史寇準傳に、宋の丁謂が、宰相寇準の髭についた塵をはらひおとした故事に基づく)權威ある人に媚びへつらふこと。

おひさま〔御日様〕(名) 太陽。(婦人語・兒童語)

おひざもと〔御膝下〕(名) ㊀貴人のお側。㊁宮城のある都の地。帝都。

おびさん〔帶棧〕(名) 戸の横にとりつけた横桟。

おびじ〔帶地〕(名) 帶に仕立てるべき布帛。

おびした〔帶下〕(名) ㊀帶を締める腰の邊。㊁帶から足までの距離。

おびしばり〔帶縛〕(名) 腰・腹の左右の肉の少い帶の上に締める巾。

おびしめ〔帶締〕(名) 婦人が帶の解けぬやうに、帶の上に締める巾。

おびしらはだか〔帶代裸〕(名) 婦人の細帶を卷

おびそえのたち〔帶添太刀〕(名) こだち(小太刀)。

おびただし〔くくくくしくくしたし〕(形、シク)〔夥し〕(形、シク)〔夥しい〕(形) ㊀甚だ多い。㊁甚だしい。**—い**〔けけけけしけけけし〕〔夥しい〕(形) 「おびただしい」の口語。

おひつ〔御櫃〕(名) めしびつ(飯櫃)。おはち。

おひと〔御人〕(名) ㊀客人の敬稱。來客。㊁おつかひ(御使)。

おひと〔夫〕(名) おっと。(古語)

おひと〔首〕(名)(大人(おとど)の意) 上古のかばね(姓)の一。おうと。おぶと。(古語)

おひど〔帶戸〕(名) 帶襷のある戸。おびさんど。

おひとき〔帶解〕(名) ㊀帶を解いたままでゐること。㊁子供の始めて帶を用ひる祝の儀式。男兒は五歳乃至九歳、女兒は七歳の十一月の吉日を選んで、附紐を廢し、始めて帶を用ひる時の祝の儀式。**—すがた**〔帶解姿〕(名) 帶を解いただらしのない姿。

おひとけ〔帶解披〕(名) おびしろはだか。

おひとけ〔帶留〕(名) 婦人の帶の上をおさへ結ぶ平打紐で、兩端に金具があつて掛け合はせる。

おひとよし〔御人好〕(名) 性質おとなしく、人のいふとほりになる人物。好人物。

おびとり〔帶取〕(名)(おびとりがわ)。**—がわ**〔帶取革〕(名) 太刀を腰に帶びる爲に足紐に結びつける革の緒。

おひな〔御雛〕(名) 雛人形の敬稱。

おびなおし〔帶直〕(名) おびとき(帶解)。

おひなおし〔御畫成る〕(自動、ラ四) おひなる(御畫成る)。(古語)

おひねり〔御捻〕(名) 錢を紙に包んでひねつたもの。かみびねり。

おびのこ〔帶鋸〕(名) 機械鋸の一種。刃薄く長く鞆狀をなし、廻轉して木材を挽き切るもの。

おびばさみ〔帶挟〕(名) ㊀男の角帶の解けぬやうにする爲、帶を挾む具。㊁根附。

おびひき〔帶引〕(名) ㊀昔行はれた遊戯の一。多人數集まつて席で、各自の帶の端に紙よりを結びつけ、その紙の端をひき試み、引當てた時は互に其の帶を取換へたこと。㊁二人で帶の端をひきあつて力の優劣を競ふ遊戯。

おびひろし〔帶廣市〕(名)【地】北海道十勝中部の市。河西支廳の所在地。釧路本線・十勝鐵道の會點で、十勝平野の農産物を集散する。

おびふう〔帶封〕(名) 郵便物などを帶紙で卷くこと。

おびふくろ〔佩袋〕(名) 麻糸(おび)などを入れて腰につけるやうにつくつた袋。

おひも〔雄紐〕(名) 先端を結玉にし、雌紐の輪に通して結びあはす紐。

おひも〔小紐〕(名) したひも。

おびもの〔佩物〕(名) ㊀身におびるもの。腰にさげる裝飾品。㊁昔、禮服に用ひた裝飾。玉を組紐に貫き、乳の下から垂れて沓の先に至り、歩く時鳴るやうにしたもの。ざくもの。(古語)

おひや〔御冷〕(名) 水。主として飲用の水。

おひやかす〔脅す〕(他動、サ四) ㊀おそれさせる。おどす。おどろかす。威力を示す。㊁おどして財物を奪ふ。おどして心に從はせる。

おひやくど〔御百度〕(名)(ひやくどまいり)。**—を踏む**(句) ㊀ひやくどまゐりをする。㊁幾度も訪問する。

おひやかす〔おおおおす〕(他動、サ四) ひやかす。

おひやる〔ららりるる〕(他動、ラ四) ㊀もてあそぶ。ひやかす。㊁へつらふ。おもねる。

おびゆ〔ゆゆゆえる〕(自動、ヤ下二) ㊀おそれおどろく。こはがる。㊁怯ゆ。おちる。

おひる〔御平〕(名) ひらわん。**—の長芋**(句)

容貌ののっぺりして愚かな人の譬。

お・ひらき〔御開〕(名) ❶おちのびろ。❷祝事などの祝宴の終ること。

お・ひる〔おひれる〕(自動、ラ四) おひんなる。(古語)

お・びる〔おびれる〕(自動、ラ下二) ❶あどけない。❷ぼんやりする。(以上古語)

お・ひれを……〔尾鰭〕(名) 魚の尾と鰭と。

お・びれを……〔尾鰭〕(名) 魚類などの尾の鰭。

お・ひろい〔御拾〕(名) 貴人の歩行の敬稱。

お・ひんなる〔おひれる〕(自動、ラ四) 「御衰(おひろ)になる」の音便)おめさめになる。目覚めて お起きになる。おひなる。(古語)(およんなるの對)

お・ふを……〔麻生〕(名) 麻の生えてゐる地。(古語)

お・ふ〔帶ぶ〕(他動、バ四) ❶腰につける。腰にさげる。❷引受ける。携帶する。❸含む。保つ。❹めぐらす。

お・ふ〔帶ぶ〕(他動、バ上二) 前後に同 「じ。

オフィサー〔Officer〕(名) 將校。武官。士官。官吏。

オフィス〔Office〕(名) 職務。事務。役所。事務所。**—アワー**〔Office hour〕(名) 執務時間。營業時間。**—ガール**〔Office girl〕(名) 女事務員。**—デスク**〔Office desk〕(名) 事務用テーブル。**—ボーイ**〔Office boy〕(名) 給仕。**—ワイフ**〔Office wife〕(名) 事務所で、重役などの萬端の面倒を見る女事務員。

おぶう(名) 湯。(嬰人語・兒童語)

おぶう〔おぶふ〕(名) 負ふ(他動、ハ四) せおふ。おふ。**おぶはうといへば抱かれよう**(句) 人の愛に狃れてつけあがる。

お・ふく〔御服〕(名) 貴人の小袖。

お・ふく〔阿福〕(名) おたふく。おかめ。

お・ふく〔御福〕(名) 頂戴物などの敬稱。**—わけ**〔御福分〕(名) 頂戴物などを他にわけ與へること。

お・ふく〔御佛供〕(名) 佛への供物。おぶつぐ。

お・ふくろ〔御袋〕(名) 母。

お・ふくろ〔尾袋〕(名) 馬又は騾の尾を包む袋。

お・ふさを……(名) 虹。

お・ふさを……〔緒總・綬〕(名) 玉佩(ぎょくはい)の下に垂れる紐。馬のは尾筒ともいふ。「尾。

おふさを……〔尾房〕(名) 房のやうに旁がった島の

オブザーヴァ〔Observer〕(名) ❶觀察員。❷〔法〕國際會議で、一國の全權以外の人で、傍聽しながら、意見は述べるが、議決權のない人。

オブザーヴェーション〔Observation〕(名) 觀察。注意。意見。**—カー**〔Observation car〕(名) 展望車。

お・ふさ・る〔おふす・る〕(自動、ラ四) ❶せおはれる。おはれる。❷依頼する。たよる。

オブジェクト・とりひき〔—取引〕(名)【經】定期取引の一種で、買方又は賣方の一方が、相場の激變から起こる危險の負擔を欲せぬ爲、一定の打歩を相手方に仕拂へば解約し得る特權を獨約する取引。

オフセット〔Offset〕(名) 印刷版の一種。紙に印刷する前に、ゴム布(ゴムプランケット)に印刷し、そのインキの乾かぬ間に紙面に轉寫して印刷するもので、その版面は、亞鉛平版又はアルミニウム平版を用ひる。

お・ふだ〔御札〕(名) 神佛の護符。

お・ぶち〔小斑〕(名) ぶち。

お・ぶち〔尾駁〕(名)【地】陸奥國上北郡にある地名。ここに尾駁沼がある。歌枕の一。「の。

おぶつ〔汚物〕(名) きたないもの。よごれも

おぶつみょう〔御佛名〕(名)【佛】❶阿彌陀佛・釋迦牟尼佛等の御名。❷梵唄(ばいし)の一。❸昔、宮中で、毎年十二月十九日から二十一日まで三日間行はれた法事で、導師が佛名を稱へたもの。

お・ふだ・さき〔御筆先〕(名)【宗】大本教などで教主の書いた文書の敬稱。神が教主によって草せられたものだといふ。

お・ふとを……〔緒太〕(名) ❶太い鼻緒。❷蒲で編んだ緒の太い裏をつけない草履。❸いこんごう〔金剛〕。

お・ふねを……〔小舟・小船〕(名) こぶね。

お・ふみ〔御文〕(名) ❶手紙の敬稱。❷〔佛〕蓮如上人が眞宗の要義を平易に認めて、門徒に與へた八〇通の手紙を集錄したもの。御文章。おふみさま。

オブラート〔Oblate〕(名) 澱粉とゴム粉末で製した薄い無臭透明なもので、飲みにくい散藥を包むに用ひるもの。

オブリゲーション〔Obligation〕(名) 義務。本分。責任。負擔。債務。

お・ふれ〔御觸〕(名) 主の調令示達の稱。たっしがき。

お・べっか(名) へつらってものをいふこと。

お・へや〔御部屋〕(名) ❶へやの敬稱。❷宮中の御服掛・御膳掛・雜仕などの稱。❸貴人の妾。**—しゅう**〔御部屋衆〕(名) 室町幕府の職名。將軍の寢所に宿直するもの。

オペラ〔Opera〕(名) 劇詩と音樂とを用ひ、歌ひながら演ずる洋劇。樂劇。歌劇。**—グラス**〔Opera-glass〕(名) 主に觀劇に用ひる小型の雙眼鏡。**—コミック**〔Opera comique〕(名) 喜歌劇。**—バッグ**〔Opera-bag〕(名) 觀劇用の手提袋。婦人用の小型手提袋。

オベリスク〔Obelisk〕(名) 太古エジプトで、神殿の門前に一對づつ建立した方形石柱で、上方は尖形をなし、下部に至るに從って其の太さを增し、臺上に安置せられ、柱面には寄進者の姓名又は功績などを彫りつけたもの。方尖塔。

〔クスリ・ベオ〕

オペレーション〔Operation〕(名) 動作。工事。作業。作戰。效果。運轉。運用。

オペレーター〔Operator〕(名) ❶工作者。❷電信技手。電話交換手。運轉手。

オペレッタ〔伊 Operetta〕(名) 歌劇中に散文的な科白を交へたもの。喜歌劇。小歌劇。オペレット。

お・べんちゃら(名) 口さきばかり巧みにいって賛意のないこと。又、その人。

おぼえ〔覺〕(名) ❶おぼえること。❷見聞したことを忘れぬこと。記憶。❸技術上の手腕についての自信。❹寵愛せられること。信用せられること。**—がき**〔覺書〕(名) ❶記憶の爲に書いて置く文書。❷條約に帶して其の解釋・補足を定め、除外例を設け、又、自國の希望・意見を陳述する等に用ひる外交文書。**—ちょう**〔覺帳〕(名) 手控・備忘錄。

おぼえあか・す〔おぼえあかす〕(他動、サ四) 考へながら夜をあかす。「しか。❷偶然。

おぼえ・ず〔覺えず〕(副) ❶覺えること。❷しらずしらずに。いつの間にか。おぼえぬこと。

おぼえる〔覺える〕(他動、ヤ下二) ❶思はれる。(古語)「おぼゆ」の口語。

おぼお・し〔おぼしくしたし〕(形、二) あいまいであること。おぼほし。

おぼお・す〔おぼしめす〕(他動、サ四) おぼしめす。おもほす。(古語)

おぼお・ぼ〔おぼしくしたし〕(名・副) ❶おぼろげ。❷不明。**—し**〔おぼしくしたし〕(形、二) ❶分明でない。おぼつかない。❷うっとうしい。(以上古語)

おぼこ(名) ❶まだ世事になれぬこと。又、その娘。男に接しないこと。又、其の女。處女。❷〔動蠶〕(名)の子。**—むすこ**〔おぼこ息子〕(名) 子供氣の失せぬむすこ。**—むすめ**〔おぼこ娘〕(名) 子供氣の失せぬ娘。處女。未通女。

おぼし〔おぼしくしたし〕〔思し・覺し〕(形、二) ❶思はれる。(古語) ❷思ふこと。❸敬語。

おぼし・めし〔思召〕(名) おぼしめすこと。「考」の

おぼし・めす〔おぼしめす〕〔思召す〕(他動、サ四)「思ふ」の敬語。(古語)「の約」「思ふ」の敬語。

おぼす〔おぼす〕〔思す〕(他動、サ四)(「おもほす」の約)

おぼそ〔御細〕(名) ❶おび〔帶〕。(婦人語) ❷〔動蠶〕(名)のいわし〔鰯〕。(婦人語)

お・ぼたき〔御火焚〕(名) 諸國の神社で、毎年十一月中に日を定めて篝火を焚く儀式。【(古語)

おぼつか〔覺束〕(名) おぼつかな(覺束無)の略。

おぼつかな〔覺束無〕(副)(「おぼつかなし」の

おぼつかない〔おぼつかない〕〔覺束無い〕〔形「おぼつかなし」の口語。

おぼつかなが・る〔おぼつかなが・る〕〔覺束無がる〕〔他動ラ四〕おぼつかなく思ふ。あやふく思ふ。

おぼつかなし〔おぼつかなし〕〔覺束無し〕〔形、一〕㊀判然せぬ。たしかでない。㊁心もとない。心細い。待ちどほい。

おぼつかなつかし〔おぼつかなつかし〕〔覺束懷し〕〔形、二〕物案じせられながらもなつかしい。不安ながらなつかしい。

おぼね〔おぼね〕〔名〕〔尾骨〕〔名〕馬の尾の骨。

おぼほ・ゆ〔おぼほゆ〕〔思ほゆ〕〔他動、ヤ下二〕おもほゆ。〔古語〕

おぼほ・る〔おぼほる〕〔溺ほる〕〔自動、ラ下二〕㊀おぼれる。溺る。〔古語〕㊁本心を失ふ。耽る。おぼほしくなる。〔古語〕

おぼめかし〔おぼめかし〕〔形、二〕おぼろげである。〔古語〕

おぼめかす〔おぼめかす〕〔他動、サ四〕ほのめかせる。「だしかでない。ほのめく。〔古語〕

おぼめく〔おぼめく〕〔自動、カ四〕はっきりしない。

おぼゆ〔おぼゆ〕〔覺ゆ〕〔他動、ヤ下二〕㊀心にまとる。㊁似る。おもはれる。㊂記憶する。㊃教へられて知る。㊄似る。〔古語〕㊅話す。語る。〔古語〕

おぼらす〔おぼらす〕〔溺らす〕〔他動、サ四〕㊀溺れさせる。㊁ふけらせる。おちこませる。

おぼる〔おぼる〕〔溺る〕〔自動、ラ下二〕㊀水中に沈んで浮かれない。㊁水中に落ちこんで死ぬ。「語」

おぼ・る〔おぼれる〕〔自動、ラ下二〕おいぼる。〔古語〕㊁おぼろになる。かすみかかる。

おぼれ・じに〔おぼれじに〕〔溺死〕〔名〕水中に陷って死ぬこと。

おぼれる〔おぼれる〕〔溺れる〕〔自動、ラ下一〕「おぼる」の口語。

おぼろ〔朧〕〔名〕㊀はっきりしないことぼんやり。ほんのり。深く霧るさま。㊁海老・鯛・比目魚などの肉をすりつぶし味をつけて蒸た食品。㊂おぼろこぶ。おぼろとろろこぶの略。**—おぼろ**〔朧朧〕〔名・副〕一面におぼろなさま。**—おかげ**〔朧影〕〔名〕幽靈の乘てゐる駕籠。**—かご**〔朧駕籠〕〔名〕ほんのりうつるかげ。**—ぎん**〔朧銀〕〔名〕銀の器物の表面を梨子地にして光澤を消したもの。**—げ**〔朧げ〕〔名〕㊀たしかならぬこと。ぼんやり。㊁おぼろ。ひととほりの。〔古語〕㊂ひととほりならぬさま。〔古語〕**—こぶ**〔朧昆布〕〔名〕昆布を薄く削ったもの。**—ずき**〔朧月〕〔名〕ほのかにかすんだ春の夜の月。**—ずきよ**〔朧月夜〕〔名〕おぼろ月の夜。かすんだ空の月夜。**—ずく**〔朧月夜〕〔名〕おぼろづくよ。**—ぞめ**〔朧染〕〔名〕寛文の頃、京都の紺屋新右衛門の創始した染色。**—どうふ**〔朧豆腐〕〔名〕椀の中で凝りかたまらせた豆腐。**—の・しみず**〔朧清水〕〔名〕京都所愛宕郡大原の寂光院の東南の泉。**—ぶね**〔朧船〕〔名〕うち捨てて水に浸って朽ち果てた船。**—まんじゅう**〔朧饅頭〕〔名〕上皮をぬいた饅頭。**—よ**〔朧夜〕〔名〕〔おぼろすきよ。

おま〔牡馬〕〔名〕【動】をうま（牡馬）。〔牝馬〕〔の對〕

おま〔馬〕〔名〕【動】「馬」の轉訛。

おまえ……〔御前〕〔名〕神佛又は貴人の前の敬稱。おほまへ。おんまへ。**—まち**〔御前町〕〔名〕社寺などの前にある町。門前町。

おまえ……〔御前〕〔代〕對稱代名詞。もとは敬稱であるが、今は同輩又は目下に用ひる。**—さま**〔御前樣〕〔代〕㊀同輩又は目下に用ひる稱。敬稱の對稱代名詞。㊁下層社會の妻が其の良人を呼ぶ稱。

おまき……〔紡錘〕〔名〕〔緒卷〕〔名〕㊀ちまき（千切）。㊁つむ

おまし〔御座〕〔名〕天皇の御座所。〔古語〕**—ど**〔御座所〕〔名〕おまし。〔古語〕**—ます**〔御座す〕〔自動、サ四〕おはします。〔古語〕

おます〔御座す〕〔自動、サ四〕「在り」「居りの敬稱。

おまち〔御町〕〔名〕色町。遊女町。遊女。**—しゅ**〔御町衆〕〔名〕㊀前條の複數。㊁町内の人達、特に年寄五人組。〔の對〕

おまつ……〔雄松〕〔名〕【植】くろまつ。〔女の松〕

おまつり〔御祭〕〔名〕祭禮の敬稱。**—さわぎ**〔御祭騷〕〔名〕㊀祭禮の時の騷がしさ。㊁わけもなくむやみに騷ぐこと。

おまなはじめ〔御學始〕〔名〕主上・皇族・貴人の學問をお始めになること。〔古語〕

おまむきさま〔御眞向樣〕〔名〕〔常に裏正面になってゐるからいふ〕佛像又は佛畫。

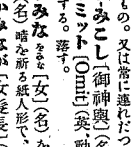
おまもり〔御守〕〔名〕まもりふだ・守札の敬稱。

おまる〔御虎子〕〔名〕便器。おかは。

おまわり〔御廻〕〔名〕㊀「まはる」ことの敬語。㊁飯の菜。おめぐり。㊂犬に命じてくるくるまはらせること。

おまわり〔御巡〕〔名〕巡查の敬稱。**—さん**〔御巡樣〕〔名〕巡查の敬稱。

おまんがあめ〔阿萬飴〕〔名〕江戸幕末に江戸市中に流行した飴賣で、女裝して、女の聲色をつかって呼賣をしたもの。


〔めあがんまお〕

おまんま〔御飯〕〔名〕めし。

おみ〔臣〕〔名〕〔大身臣の略〕の一。㊀もと大臣・大連・大伴・物部・蘇我・巨勢・紀・葛城・平群・阿倍・中臣・藤原

十九日(今は四月十九日)に白い絹で拭ふ行事。

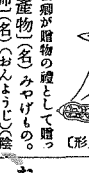
おみね(御峰)(名)みね(峯)。(古語)

おみのこ〔臣子〕(名)「おみ」のかばねの人。

おみみ〔御耳〕(名)❶耳の敬稱。❷聞くことの敬稱。―**拝借**(句)お聞き下さいの意。

おみや〔御土産〕(名)おみやげ。(婦人語・兒童語)

おみやげ〔御土産〕(名)❶「みやげ」の鄭重語。❷遊女買して花柳病に感染すること。❸新たに娶られた妻や、前夫又は情夫の胤を宿してゐること。―**あん**〔御土産案〕(名)代議士が自分の地方の利益となる議案を議會に提出し、之を議決せしめて己の選擧區への土産とすること。―**にんぎょう**〔形人産土御〕(名)代議士が自分の地方の利益となる議案を議會に提出し、之を議決せしめて己の選擧區への土産とすること。―**にんぎょう**〔形人産土御〕(名)銀の木屑を糊で固め、幼童の形につくり、種種美麗せしめた人形で、江戸時代に幕府の役人や諸侯の家士が、京都に行って帰る時、公卿が贈物の禮として贈ったもの。―**もの**〔御土産物〕(名)みやげもの。


〔形人産土御〕

おみょうじ〔陰陽師〕(名)(おんようじ)(陰陽師)。(古語)

おむ〔面〕(名)おも(面)。(古語)―**ひてり**(名)

おむ〔ばかなこと〕〔慮む〕(自動、マ下二)氣おくれする。怖れる。躊する。

おむかい〔峰向〕(名)峰と峰との向ひあってゐる。

おむかえぼうず〔御迎坊主〕(名)葬式に際し、菩提寺から出棺の迎に來る僧。迎へ僧。

おむかし〔形、二〕(面白い)(古語)

おむかしむ〔自動、マ四〕面白いと思ふ。喜ぶ。(古語)

おむかしむ〔自動、マ四〕面白いと思ふ。喜ぶ。(古語)

おむし(名)みそ(味噌)。(婦人語)

おむしやる〔自動、ラ四〕(「おもしろる」の轉)おっしゃる。

オムスク〔Omsk〕(名)【地】ソヴエト聯邦西部領シベリヤの都市。オビ河の上流イルチシ河と支流オム河との合流點に位す。シベリヤ鐵道の要驛。農産物・畜産物の集散多く、定期市が盛んである。

おむつ〔御襁褓〕(名)(「むつき」の鄭重語。

おむつかしながら〔副〕御面倒ながら。御手數ながら。

おむな〔嫗〕(名)(「おみな」の轉)老婆。(古語)

おむら〔御紫〕(名)【動】江戸時代の奥女中の語)いわし(鰯)。

オムレツ〔Omelet,Omelette〕(名)西洋料理の名。鳥又は牛肉を細末にし、牛乳・玉葱などに交ぜ、鹽・胡椒などで味をつけ、脂で焼いた卵の皮で包んだもの。オムレット。

おむろ〔御室〕(名)【地】京都市右京區の町名。こゝに仁和寺がある。―**まいり**〔御室參〕(名)昔、京都で三月二十一日に仁和寺に參詣したこと。―**やき**〔御室燒〕(名)京都の仁和寺邊から焼いて出す陶器。もと仁和寺燒、後に仁清(にせい)の焼き始めたもので、京燒の元祖と稱せられる。仁和寺燒。

おめ〔御目〕(名)❶目の敬稱。❷見ることの敬稱。―**に入る**(句)お氣にいる。―**にかかる**(句)お逢ひ申す。對面する。―**にかく**(句)御覽に入れる。進呈する。―**にとまる**(句)御覽になって お氣に召する。―**にかける**(句)御覽になって お氣に召する。

おめいく〔汚名〕(名)けがれた名。わるい評判。

おめいく〔御影供〕(名)(大御影供(おみえく)の約)陰暦十月十三日の日蓮上人の忌日。

おめいこう〔御命講〕(名)【佛】❶みえいく(御影供)。❷おめいく。ゑしき。

おめおめ(副)恥を知らずして平然としてゐるさま。のめのめ。(古語)

おめし〔御召〕(名)❶「召す」の敬稱。❷「着る」の敬稱。❸「着る」の敬稱。❹「着る」の敬稱。❺「着る」の敬稱。❻「着る」の敬稱。❼「着る」の敬稱。❽「着る」の敬稱。❾「着る」の敬稱。❿「着る」の敬稱。⓫「着る」の敬稱。⓬「着る」の敬稱。⓭「着る」の敬稱。⓮「着る」の敬稱。⓯「着る」の敬稱。⓰「着る」の敬稱。⓱「着る」の敬稱。⓲「着る」の敬稱。⓳「着る」の敬稱。⓴「着る」の敬稱。㉑「着る」の敬稱。㉒「着る」の敬稱。㉓「着る」の敬稱。㉔「着る」の敬稱。㉕「着る」の敬稱。㉖「着る」の敬稱。㉗「着る」の敬稱。㉘「着る」の敬稱。㉙「着る」の敬稱。㉚「着る」の敬稱。㉛「着る」の敬稱。㉜「着る」の敬稱。㉝「着る」の敬稱。㉞「着る」の敬稱。㉟「着る」の敬稱。㊱「着る」の敬稱。㊲「着る」の敬稱。㊳「着る」の敬稱。㊴「着る」の敬稱。㊵「着る」の敬稱。㊶「着る」の敬稱。㊷「着る」の敬稱。㊸「着る」の敬稱。㊹「着る」の敬稱。㊺「着る」の敬稱。㊻「着る」の敬稱。㊼「着る」の敬稱。㊽「着る」の敬稱。㊾「着る」の敬稱。㊿「着る」の敬稱。(1)「着る」の敬稱。(2)「着る」の敬稱。(3)「着る」の敬稱。(4)「着る」の敬稱。(5)「着る」の敬稱。(6)「着る」の敬稱。(7)「着る」の敬稱。(8)「着る」の敬稱。(9)「着る」の敬稱。(10)「着る」の敬稱。(11)「着る」の敬稱。(12)「着る」の敬稱。(13)「着る」の敬稱。(14)「着る」の敬稱。(15)「着る」の敬稱。(16)「着る」の敬稱。(17)「着る」の敬稱。(18)「着る」の敬稱。(19)「着る」の敬稱。(20)「着る」の敬稱。(21)「着る」の敬稱。(22)「着る」の敬稱。(23)「着る」の敬稱。(24)「着る」の敬稱。(25)「着る」の敬稱。(26)「着る」の敬稱。(27)「着る」の敬稱。(28)「着る」の敬稱。(29)「着る」の敬稱。(30)「着る」の敬稱。(31)「着る」の敬稱。(32)「着る」の敬稱。(33)「着る」の敬稱。(34)「着る」の敬稱。(35)「着る」の敬稱。(36)「着る」の敬稱。(37)「着る」の敬稱。(38)「着る」の敬稱。(39)「着る」の敬稱。(40)「着る」の敬稱。(41)「着る」の敬稱。(42)「着る」の敬稱。(43)「着る」の敬稱。(44)「着る」の敬稱。(45)「着る」の敬稱。(46)「着る」の敬稱。(47)「着る」の敬稱。(48)「着る」の敬稱。(49)「着る」の敬稱。(50)「着る」の敬稱。(51)「着る」の敬稱。(52)「着る」の敬稱。(53)「着る」の敬稱。(54)「着る」の敬稱。(55)「着る」の敬稱。(56)「着る」の敬稱。(57)「着る」の敬稱。(58)「着る」の敬稱。(59)「着る」の敬稱。(60)「着る」の敬稱。(61)「着る」の敬稱。(62)「着る」の敬稱。(63)「着る」の敬稱。(64)「着る」の敬稱。(65)「着る」の敬稱。(66)「着る」の敬稱。(67)「着る」の敬稱。(68)「着る」の敬稱。(69)「着る」の敬稱。(70)「着る」の敬稱。(71)「着る」の敬稱。(72)「着る」の敬稱。(73)「着る」の敬稱。(74)「着る」の敬稱。(75)「着る」の敬稱。(76)「着る」の敬稱。(77)「着る」の敬稱。(78)「着る」の敬稱。(79)「着る」の敬稱。(80)「着る」の敬稱。(81)「着る」の敬稱。(82)「着る」の敬稱。(83)「着る」の敬稱。(84)「着る」の敬稱。(85)「着る」の敬稱。(86)「着る」の敬稱。(87)「着る」の敬稱。(88)「着る」の敬稱。(89)「着る」の敬稱。(90)「着る」の敬稱。(91)「着る」の敬稱。(92)「着る」の敬稱。(93)「着る」の敬稱。(94)「着る」の敬稱。(95)「着る」の敬稱。(96)「着る」の敬稱。(97)「着る」の敬稱。(98)「着る」の敬稱。(99)「着る」の敬稱。(100)「着る」の敬稱。(101)「着る」の敬稱。(102)「着る」の敬稱。(103)「着る」の敬稱。(104)「着る」の敬稱。(105)「着る」の敬稱。(106)「着る」の敬稱。(107)「着る」の敬稱。(108)「着る」の敬稱。(109)「着る」の敬稱。(110)「着る」の敬稱。(111)「着る」の敬稱。(112)「着る」の敬稱。(113)「着る」の敬稱。(114)「着る」の敬稱。(115)「着る」の敬稱。(116)「着る」の敬稱。(117)「着る」の敬稱。(118)「着る」の敬稱。(119)「着る」の敬稱。(120)「着る」の敬稱。(121)「着る」の敬稱。(122)「着る」の敬稱。(123)「着る」の敬稱。(124)「着る」の敬稱。(125)「着る」の敬稱。(126)「着る」の敬稱。(127)「着る」の敬稱。(128)「着る」の敬稱。(129)「着る」の敬稱。(130)「着る」の敬稱。(131)「着る」の敬稱。(132)「着る」の敬稱。(133)「着る」の敬稱。(134)「着る」の敬稱。(135)「着る」の敬稱。(136)「着る」の敬稱。(137)「着る」の敬稱。(138)「着る」の敬稱。(139)「着る」の敬稱。(140)「着る」の敬稱。(141)「着る」の敬稱。(142)「着る」の敬稱。(143)「着る」の敬稱。(144)「着る」の敬稱。(145)「着る」の敬稱。(146)「着る」の敬稱。(147)「着る」の敬稱。(148)「着る」の敬稱。(149)「着る」の敬稱。(150)「着る」の敬稱。(151)「着る」の敬稱。(152)「着る」の敬稱。(153)「着る」の敬稱。(154)「着る」の敬稱。(155)「着る」の敬稱。(156)「着る」の敬稱。(157)「着る」の敬稱。(158)「着る」の敬稱。(159)「着る」の敬稱。(160)「着る」の敬稱。(161)「着る」の敬稱。(162)「着る」の敬稱。(163)「着る」の敬稱。(164)「着る」の敬稱。(165)「着る」の敬稱。(166)「着る」の敬稱。(167)「着る」の敬稱。(168)「着る」の敬稱。(169)「着る」の敬稱。(170)「着る」の敬稱。(171)「着る」の敬稱。(172)「着る」の敬稱。(173)「着る」の敬稱。(174)「着る」の敬稱。(175)「着る」の敬稱。(176)「着る」の敬稱。(177)「着る」の敬稱。(178)「着る」の敬稱。(179)「着る」の敬稱。(180)「着る」の敬稱。(181)「着る」の敬稱。(182)「着る」の敬稱。(183)「着る」の敬稱。(184)「着る」の敬稱。(185)「着る」の敬稱。(186)「着る」の敬稱。(187)「着る」の敬稱。(188)「着る」の敬稱。(189)「着る」の敬稱。(190)「着る」の敬稱。(191)「着る」の敬稱。(192)「着る」の敬稱。(193)「着る」の敬稱。(194)「着る」の敬稱。(195)「着る」の敬稱。(196)「着る」の敬稱。(197)「着る」の敬稱。(198)「着る」の敬稱。(199)「着る」の敬稱。(200)「着る」の敬稱。(201)「着る」の敬稱。(202)「着る」の敬稱。(203)「着る」の敬稱。(204)「着る」の敬稱。(205)「着る」の敬稱。(206)「着る」の敬稱。(207)「着る」の敬稱。(208)「着る」の敬稱。(209)「着る」の敬稱。(210)「着る」の敬稱。(211)「着る」の敬稱。(212)「着る」の敬稱。(213)「着る」の敬稱。(214)「着る」の敬稱。(215)「着る」の敬稱。(216)「着る」の敬稱。(217)「着る」の敬稱。(218)「着る」の敬稱。(219)「着る」の敬稱。(220)「着る」の敬稱。(221)「着る」の敬稱。(222)「着る」の敬稱。(223)「着る」の敬稱。(224)「着る」の敬稱。(225)「着る」の敬稱。(226)「着る」の敬稱。(227)「着る」の敬稱。(228)「着る」の敬稱。(229)「着る」の敬稱。(230)「着る」の敬稱。(231)「着る」の敬稱。(232)「着る」の敬稱。(233)「着る」の敬稱。(234)「着る」の敬稱。(235)「着る」の敬稱。(236)「着る」の敬稱。(237)「着る」の敬稱。(238)「着る」の敬稱。(239)「着る」の敬稱。(240)「着る」の敬稱。(241)「着る」の敬稱。(242)「着る」の敬稱。(243)「着る」の敬稱。(244)「着る」の敬稱。(245)「着る」の敬稱。(246)「着る」の敬稱。(247)「着る」の敬稱。(248)「着る」の敬稱。(249)「着る」の敬稱。(250)「着る」の敬稱。(251)「着る」の敬稱。(252)「着る」の敬稱。(253)「着る」の敬稱。(254)「着る」の敬稱。(255)「着る」の敬稱。(256)「着る」の敬稱。(257)「着る」の敬稱。(258)「着る」の敬稱。(259)「着る」の敬稱。(260)「着る」の敬稱。(261)「着る」の敬稱。(262)「着る」の敬稱。(263)「着る」の敬稱。(264)「着る」の敬稱。(265)「着る」の敬稱。(266)「着る」の敬稱。(267)「着る」の敬稱。(268)「着る」の敬稱。(269)「着る」の敬稱。(270)「着る」の敬稱。(271)「着る」の敬稱。(272)「着る」の敬稱。(273)「着る」の敬稱。(274)「着る」の敬稱。(275)「着る」の敬稱。(276)「着る」の敬稱。(277)「着る」の敬稱。(278)「着る」の敬稱。(279)「着る」の敬稱。(280)「着る」の敬稱。(281)「着る」の敬稱。(282)「着る」の敬稱。(283)「着る」の敬稱。(284)「着る」の敬稱。(285)「着る」の敬稱。(286)「着る」の敬稱。(287)「着る」の敬稱。(288)「着る」の敬稱。(289)「着る」の敬稱。(290)「着る」の敬稱。(291)「着る」の敬稱。(292)「着る」の敬稱。(293)「着る」の敬稱。(294)「着る」の敬稱。(295)「着る」の敬稱。(296)「着る」の敬稱。(297)「着る」の敬稱。(298)「着る」の敬稱。(299)「着る」の敬稱。(300)「着る」の敬稱。(301)「着る」の敬稱。(302)「着る」の敬稱。(303)「着る」の敬稱。(304)「着る」の敬稱。(305)「着る」の敬稱。(306)「着る」の敬稱。(307)「着る」の敬稱。(308)「着る」の敬稱。(309)「着る」の敬稱。(310)「着る」の敬稱。(311)「着る」の敬稱。(312)「着る」の敬稱。(313)「着る」の敬稱。(314)「着る」の敬稱。(315)「着る」の敬稱。(316)「着る」の敬稱。(317)「着る」の敬稱。(318)「着る」の敬稱。(319)「着る」の敬稱。(320)「着る」の敬稱。(321)「着る」の敬稱。(322)「着る」の敬稱。(323)「着る」の敬稱。(324)「着る」の敬稱。(325)「着る」の敬稱。(326)「着る」の敬稱。(327)「着る」の敬稱。(328)「着る」の敬稱。(329)「着る」の敬稱。(330)「着る」の敬稱。(331)「着る」の敬稱。(332)「着る」の敬稱。(333)「着る」の敬稱。(334)「着る」の敬稱。(335)「着る」の敬稱。(336)「着る」の敬稱。(337)「着る」の敬稱。(338)「着る」の敬稱。(339)「着る」の敬稱。(340)「着る」の敬稱。(341)「着る」の敬稱。(342)「着る」の敬稱。(343)「着る」の敬稱。(344)「着る」の敬稱。(345)「着る」の敬稱。(346)「着る」の敬稱。(347)「着る」の敬稱。(348)「着る」の敬稱。(349)「着る」の敬稱。(350)「着る」の敬稱。(351)「着る」の敬稱。(352)「着る」の敬稱。(353)「着る」の敬稱。(354)「着る」の敬稱。(355)「着る」の敬稱。(356)「着る」の敬稱。(357)「着る」の敬稱。(358)「着る」の敬稱。(359)「着る」の敬稱。(360)「着る」の敬稱。(361)「着る」の敬稱。(362)「着る」の敬稱。(363)「着る」の敬稱。(364)「着る」の敬稱。(365)「着る」の敬稱。(366)「着る」の敬稱。(367)「着る」の敬稱。(368)「着る」の敬稱。(369)「着る」の敬稱。(370)「着る」の敬稱。(371)「着る」の敬稱。(372)「着る」の敬稱。(373)「着る」の敬稱。(374)「着る」の敬稱。(375)「着る」の敬稱。(376)「着る」の敬稱。(377)「着る」の敬稱。(378)「着る」の敬稱。(379)「着る」の敬稱。(380)「着る」の敬稱。(381)「着る」の敬稱。(382)「着る」の敬稱。(383)「着る」の敬稱。(384)「着る」の敬稱。(385)「着る」の敬稱。(386)「着る」の敬稱。(387)「着る」の敬稱。(388)「着る」の敬稱。(389)「着る」の敬稱。(390)「着る」の敬稱。(391)「着る」の敬稱。(392)「着る」の敬稱。(393)「着る」の敬稱。(394)「着る」の敬稱。(395)「着る」の敬稱。(396)「着る」の敬稱。(397)「着る」の敬稱。(398)「着る」の敬稱。(399)「着る」の敬稱。(400)「着る」の敬稱。(401)「着る」の敬稱。(402)「着る」の敬稱。(403)「着る」の敬稱。(404)「着る」の敬稱。(405)「着る」の敬稱。(406)「着る」の敬稱。(407)「着る」の敬稱。(408)「着る」の敬稱。(409)「着る」の敬稱。(410)「着る」の敬稱。(411)「着る」の敬稱。(412)「着る」の敬稱。(413)「着る」の敬稱。(414)「着る」の敬稱。(415)「着る」の敬稱。(416)「着る」の敬稱。(417)「着る」の敬稱。(418)「着る」の敬稱。(419)「着る」の敬稱。(420)「着る」の敬稱。(421)「着る」の敬稱。(422)「着る」の敬稱。(423)「着る」の敬稱。(424)「着る」の敬稱。(425)「着る」の敬稱。(426)「着る」の敬稱。(427)「着る」の敬稱。(428)「着る」の敬稱。(429)「着る」の敬稱。(430)「着る」の敬稱。(431)「着る」の敬稱。(432)「着る」の敬稱。(433)「着る」の敬稱。(434)「着る」の敬稱。(435)「着る」の敬稱。(436)「着る」の敬稱。(437)「着る」の敬稱。(438)「着る」の敬稱。(439)「着る」の敬稱。(440)「着る」の敬稱。(441)「着る」の敬稱。(442)「着る」の敬稱。(443)「着る」の敬稱。(444)「着る」の敬稱。(445)「着る」の敬稱。(446)「着る」の敬稱。(447)「着る」の敬稱。(448)「着る」の敬稱。(449)「着る」の敬稱。(450)「着る」の敬稱。(451)「着る」の敬稱。(452)「着る」の敬稱。(453)「着る」の敬稱。(454)「着る」の敬稱。(455)「着る」の敬稱。(456)「着る」の敬稱。(457)「着る」の敬稱。(458)「着る」の敬稱。(459)「着る」の敬稱。(460)「着る」の敬稱。(461)「着る」の敬稱。(462)「着る」の敬稱。(463)「着る」の敬稱。(464)「着る」の敬稱。(465)「着る」の敬稱。(466)「着る」の敬稱。(467)「着る」の敬稱。(468)「着る」の敬稱。(469)「着る」の敬稱。(470)「着る」の敬稱。(471)「着る」の敬稱。(472)「着る」の敬稱。(473)「着る」の敬稱。(474)「着る」の敬稱。(475)「着る」の敬稱。(476)「着る」の敬稱。(477)「着る」の敬稱。(478)「着る」の敬稱。(479)「着る」の敬稱。(480)「着る」の敬稱。(481)「着る」の敬稱。(482)「着る」の敬稱。(483)「着る」の敬稱。(484)「着る」の敬稱。(485)「着る」の敬稱。(486)「着る」の敬稱。(487)「着る」の敬稱。(488)「着る」の敬稱。(489)「着る」の敬稱。(490)「着る」の敬稱。(491)「着る」の敬稱。(492)「着る」の敬稱。(493)「着る」の敬稱。(494)「着る」の敬稱。(495)「着る」の敬稱。(496)「着る」の敬稱。(497)「着る」の敬稱。(498)「着る」の敬稱。(499)「着る」の敬稱。(500)「着る」の敬稱。(501)「着る」の敬稱。(502)「着る」の敬稱。(503)「着る」の敬稱。(504)「着る」の敬稱。(505)「着る」の敬稱。(506)「着る」の敬稱。(507)「着る」の敬稱。(508)「着る」の敬稱。(509)「着る」の敬稱。(510)「着る」の敬稱。(511)「着る」の敬稱。(512)「着る」の敬稱。(513)「着る」の敬稱。(514)「着る」の敬稱。(515)「着る」の敬稱。(516)「着る」の敬稱。(517)「着る」の敬稱。(518)「着る」の敬稱。(519)「着る」の敬稱。(520)「着る」の敬稱。(521)「着る」の敬稱。(522)「着る」の敬稱。(523)「着る」の敬稱。(524)「着る」の敬稱。(525)「着る」の敬稱。(526)「着る」の敬稱。(527)「着る」の敬稱。(528)「着る」の敬稱。(529)「着る」の敬稱。(530)「着る」の敬稱。(531)「着る」の敬稱。(532)「着る」の敬稱。(533)「着る」の敬稱。(534)「着る」の敬稱。(535)「着る」の敬稱。(536)「着る」の敬稱。(537)「着る」の敬稱。(538)「着る」の敬稱。(539)「着る」の敬稱。(540)「着る」の敬稱。(541)「着る」の敬稱。(542)「着る」の敬稱。(543)「着る」の敬稱。(544)「着る」の敬稱。(545)「着る」の敬稱。(546)「着る」の敬稱。(547)「着る」の敬稱。(548)「着る」の敬稱。(549)「着る」の敬稱。(550)「着る」の敬稱。(551)「着る」の敬稱。(552)「着る」の敬稱。(553)「着る」の敬稱。(554)「着る」の敬稱。(555)「着る」の敬稱。(556)「着る」の敬稱。(557)「着る」の敬稱。(558)「着る」の敬稱。(559)「着る」の敬稱。(560)「着る」の敬稱。(561)「着る」の敬稱。(562)「着る」の敬稱。(563)「着る」の敬稱。(564)「着る」の敬稱。(565)「着る」の敬稱。(566)「着る」の敬稱。(567)「着る」の敬稱。(568)「着る」の敬稱。(569)「着る」の敬稱。(570)「着る」の敬稱。(571)「着る」の敬稱。(572)「着る」の敬稱。(573)「着る」の敬稱。(574)「着る」の敬稱。(575)「着る」の敬稱。(576)「着る」の敬稱。(577)「着る」の敬稱。(578)「着る」の敬稱。(579)「着る」の敬稱。(580)「着る」の敬稱。(581)「着る」の敬稱。(582)「着る」の敬稱。(583)「着る」の敬稱。(584)「着る」の敬稱。(585)「着る」の敬稱。(586)「着る」の敬稱。(587)「着る」の敬稱。(588)「着る」の敬稱。(589)「着る」の敬稱。(590)「着る」の敬稱。(591)「着る」の敬稱。(592)「着る」の敬稱。(593)「着る」の敬稱。(594)「着る」の敬稱。(595)「着る」の敬稱。(596)「着る」の敬稱。(597)「着る」の敬稱。(598)「着る」の敬稱。(599)「着る」の敬稱。(600)「着る」の敬稱。(601)「着る」の敬稱。(602)「着る」の敬稱。(603)「着る」の敬稱。(604)「着る」の敬稱。(605)「着る」の敬稱。(606)「着る」の敬稱。(607)「着る」の敬稱。(608)「着る」の敬稱。(609)「着る」の敬稱。(610)「着る」の敬稱。(611)「着る」の敬稱。(612)「着る」の敬稱。(613)「着る」の敬稱。(614)「着る」の敬稱。(615)「着る」の敬稱。(616)「着る」の敬稱。(617)「着る」の敬稱。(618)「着る」の敬稱。(619)「着る」の敬稱。(620)「着る」の敬稱。(621)「着る」の敬稱。(622)「着る」の敬稱。(623)「着る」の敬稱。(624)「着る」の敬稱。(625)「着る」の敬稱。(626)「着る」の敬稱。(627)「着る」の敬稱。(628)「着る」の敬稱。(629)「着る」の敬稱。(630)「着る」の敬稱。(631)「着る」の敬稱。(632)「着る」の敬稱。(633)「着る」の敬稱。(634)「着る」の敬稱。(635)「着る」の敬稱。(636)「着る」の敬稱。(637)「着る」の敬稱。(638)「着る」の敬稱。(639)「着る」の敬稱。(640)「着る」の敬稱。(641)「着る」の敬稱。(642)「着る」の敬稱。(643)「着る」の敬稱。(644)「着る」の敬稱。(645)「着る」の敬稱。(646)「着る」の敬稱。(647)「着る」の敬稱。(648)「着る」の敬稱。(649)「着る」の敬稱。(650)「着る」の敬稱。(651)「着る」の敬稱。(652)「着る」の敬稱。(653)「着る」の敬稱。(654)「着る」の敬稱。(655)「着る」の敬稱。(656)「着る」の敬稱。(657)「着る」の敬稱。(658)「着る」の敬稱。(659)「着る」の敬稱。(660)「着る」の敬稱。(661)「着る」の敬稱。(662)「着る」の敬稱。(663)「着る」の敬稱。(664)「着る」の敬稱。(665)「着る」の敬稱。(666)「着る」の敬稱。(667)「着る」の敬稱。(668)「着る」の敬稱。(669)「着る」の敬稱。(670)「着る」の敬稱。(671)「着る」の敬稱。(672)「着る」の敬稱。(673)「着る」の敬稱。(674)「着る」の敬稱。(675)「着る」の敬稱。(676)「着る」の敬稱。(677)「着る」の敬稱。(678)「着る」の敬稱。(679)「着る」の敬稱。(680)「着る」の敬稱。(681)「着る」の敬稱。(682)「着る」の敬稱。(683)「着る」の敬稱。(684)「着る」の敬稱。(685)「着る」の敬稱。(686)「着る」の敬稱。(687)「着る」の敬稱。(688)「着る」の敬稱。(689)「着る」の敬稱。(690)「着る」の敬稱。(691)「着る」の敬稱。(692)「着る」の敬稱。(693)「着る」の敬稱。(694)「着る」の敬稱。(695)「着る」の敬稱。(696)「着る」の敬稱。(697)「着る」の敬稱。(698)「着る」の敬稱。(699)「着る」の敬稱。(700)「着る」の敬稱。(701)「着る」の敬稱。(702)「着る」の敬稱。(703)「着る」の敬稱。(704)「着る」の敬稱。(705)「着る」の敬稱。(706)「着る」の敬稱。(707)「着る」の敬稱。(708)「着る」の敬稱。(709)「着る」の敬稱。(710)「着る」の敬稱。(711)「着る」の敬稱。(712)「着る」の敬稱。(713)「着る」の敬稱。(714)「着る」の敬稱。(715)「着る」の敬稱。(716)「着る」の敬稱。(717)「着る」の敬稱。(718)「着る」の敬稱。(719)「着る」の敬稱。(720)「着る」の敬稱。(721)「着る」の敬稱。(722)「着る」の敬稱。(723)「着る」の敬稱。(724)「着る」の敬稱。(725)「着る」の敬稱。(726)「着る」の敬稱。(727)「着る」の敬稱。(728)「着る」の敬稱。(729)「着る」の敬稱。(730)「着る」の敬稱。(731)「着る」の敬稱。(732)「着る」の敬稱。(733)「着る」の敬稱。(734)「着る」の敬稱。(735)「着る」の敬稱。(736)「着る」の敬稱。(737)「着る」の敬稱。(738)「着る」の敬稱。(739)「着る」の敬稱。(740)「着る」の敬稱。(741)「着る」の敬稱。(742)「着る」の敬稱。(743)「着る」の敬稱。(744)「着る」の敬稱。(745)「着る」の敬稱。(746)「着る」の敬稱。(747)「着る」の敬稱。(748)「着る」の敬稱。(749)「着る」の敬稱。(750)「着る」の敬稱。(751)「着る」の敬稱。(752)「着る」の敬稱。(753)「着る」の敬稱。(754)「着る」の敬稱。(755)「着る」の敬稱。(756)「着る」の敬稱。(757)「着る」の敬稱。(758)「着る」の敬稱。(759)「着る」の敬稱。(760)「着る」の敬稱。(761)「着る」の敬稱。(762)「着る」の敬稱。(763)「着る」の敬稱。(764)「着る」の敬稱。(765)「着る」の敬稱。(766)「着る」の敬稱。(767)「着る」の敬稱。(768)「着る」の敬稱。(769)「着る」の敬稱。(770)「着る」の敬稱。(771)「着る」の敬稱。(772)「着る」の敬稱。(773)「着る」の敬稱。(774)「着る」の敬稱。(775)「着る」の敬稱。(776)「着る」の敬稱。(777)「着る」の敬稱。(778)「着る」の敬稱。(779)「着る」の敬稱。(780)「着る」の敬稱。(781)「着る」の敬稱。(782)「着る」の敬稱。(783)「着る」の敬稱。(784)「着る」の敬稱。(785)「着る」の敬稱。(786)「着る」の敬稱。(787)「着る」の敬稱。(788)「着る」の敬稱。(789)「着る」の敬稱。(790)「着る」の敬稱。(791)「着る」の敬稱。(792)「着る」の敬稱。(793)「着る」の敬稱。(794)「着る」の敬稱。(795)「着る」の敬稱。(796)「着る」の敬稱。(797)「着る」の敬稱。(798)「着る」の敬稱。(799)「着る」の敬稱。(800)「着る」の敬稱。(801)「着る」の敬稱。(802)「着る」の敬稱。(803)「着る」の敬稱。(804)「着る」の敬稱。(805)「着る」の敬稱。(806)「着る」の敬稱。(807)「着る」の敬稱。(808)「着る」の敬稱。(809)「着る」の敬稱。(810)「着る」の敬稱。(811)「着る」の敬稱。(812)「着る」の敬稱。(813)「着る」の敬稱。(814)「着る」の敬稱。(815)「着る」の敬稱。(816)「着る」の敬稱。(817)「着る」の敬稱。(818)「着る」の敬稱。(819)「着る」の敬稱。(820)「着る」の敬稱。(821)「着る」の敬稱。(822)「着る」の敬稱。(823)「着る」の敬稱。(824)「着る」の敬稱。(825)「着る」の敬稱。(826)「着る」の敬稱。(827)「着る」の敬稱。(828)「着る」の敬稱。(829)「着る」の敬稱。(830)「着る」の敬稱。(831)「着る」の敬稱。(832)「着る」の敬稱。(833)「着る」の敬稱。(834)「着る」の敬稱。(835)「着る」の敬稱。(836)「着る」の敬稱。(837)「着る」の敬稱。(838)「着る」の敬稱。(839)「着る」の敬稱。(840)「着る」の敬稱。(841)「着る」の敬稱。(842)「着る」の敬稱。(843)「着る」の敬稱。(844)「着る」の敬稱。(845)「着る」の敬稱。(846)「着る」の敬稱。(847)「着る」の敬稱。(848)「着る」の敬稱。(849)「着る」の敬稱。(850)「着る」の敬稱。(851)「着る」の敬稱。(852)「着る」の敬稱。(853)「着る」の敬稱。(854)「着る」の敬稱。(855)「着る」の敬稱。(856)「着る」の敬稱。(857)「着る」の敬稱。(858)「着る」の敬稱。(859)「着る」の敬稱。(860)「着る」の敬稱。(861)「着る」の敬稱。(862)「着る」の敬稱。(863)「着る」の敬稱。(864)「着る」の敬稱。(865)「着る」の敬稱。(866)「着る」の敬稱。(867)「着る」の敬稱。(868)「着る」の敬稱。(869)「着る」の敬稱。(870)「着る」の敬稱。(871)「着る」の敬稱。(872)「着る」の敬稱。(873)「着る」の敬稱。(874)「着る」の敬稱。(875)「着る」の敬稱。(876)「着る」の敬稱。(877)「着る」の敬稱。(878)「着る」の敬稱。(879)「着る」の敬稱。(880)「着る」の敬稱。(881)「着る」の敬稱。(882)「着る」の敬稱。(883)「着る」の敬稱。(884)「着る」の敬稱。(885)「着る」の敬稱。(886)「着る」の敬稱。(887)「着る」の敬稱。(888)「着る」の敬稱。(889)「着る」の敬稱。(890)「着る」の敬稱。(891)「着る」の敬稱。(892)「着る」の敬稱。(893)「着る」の敬稱。(894)「着る」の敬稱。(895)「着る」の敬稱。(896)「着る」の敬稱。(897)「着る」の敬稱。(898)「着る」の敬稱。(899)「着る」の敬稱。(900)「着る」の敬稱。(901)「着る」の敬稱。(902)「着る」の敬稱。(903)「着る」の敬稱。(904)「着る」の敬稱。(905)「着る」の敬稱。(906)「着る」の敬稱。(907)「着る」の敬稱。(908)「着る」の敬稱。(909)「着る」の敬稱。(910)「着る」の敬稱。(911)「着る」の敬稱。(912)「着る」の敬稱。(913)「着る」の敬稱。(914)「着る」の敬稱。(915)「着る」の敬稱。(916)「着る」の敬稱。(917)「着る」の敬稱。(918)「着る」の敬稱。(919)「着る」の敬稱。(920)「着る」の敬稱。(921)「着る」の敬稱。(922)「着る」の敬稱。(923)「着る」の敬稱。(924)「着る」の敬稱。(925)「着る」の敬稱。(926)「着る」の敬稱。(927)「着る」の敬稱。(928)「着る」の敬稱。(929)「着る」の敬稱。(930)「着る」の敬稱。(931)「着る」の敬稱。(932)「着る」の敬稱。(933)「着る」の敬稱。(934)「着る」の敬稱。(935)「着る」の敬稱。(936)「着る」の敬稱。(937)「着る」の敬稱。(938)「着る」の敬稱。(939)「着る」の敬稱。(940)「着る」の敬稱。(941)「着る」の敬稱。(942)「着る」の敬稱。(943)「着る」の敬稱。(944)「着る」の敬稱。(945)「着る」の敬稱。(946)「着る」の敬稱。(947)「着る」の敬稱。(948)「着る」の敬稱。(949)「着る」の敬稱。(950)「着る」の敬稱。(951)「着る」の敬稱。(952)「着る」の敬稱。(953)「着る」の敬稱。(954)「着る」の敬稱。(955)「着る」の敬稱。(956)「着る」の敬稱。(957)「着る」の敬稱。(958)「着る」の敬稱。(959)「着る」の敬稱。(960)「着る」の敬稱。(961)「着る」の敬稱。(962)「着る」の敬稱。(963)「着る」の敬稱。(964)「着る」の敬稱。(965)「着る」の敬稱。(966)「着る」の敬稱。(967)「着る」の敬稱。(968)「着る」の敬稱。(969)「着る」の敬稱。(970)「着る」の敬稱。(971)「着る」の敬稱。(972)「着る」の敬稱。(973)「着る」の敬稱。(974)「着る」の敬稱。(975)「着る」の敬稱。(976)「着る」の敬稱。(977)「着る」の敬稱。(978)「着る」の敬稱。(979)「着る」の敬稱。(980)「着る」の敬稱。(981)「着る」の敬稱。(982)「着る」の敬稱。(983)「着る」の敬稱。(984)「着る」の敬稱。(985)「着る」の敬稱。(986)「着る」の敬稱。(987)「着る」の敬稱。(988)「着る」の敬稱。(989)「着る」の敬稱。(990)「着る」の敬稱。(991)「着る」の敬稱。(992)「着る」の敬稱。(993)「着る」の敬稱。(994)「着る」の敬稱。(995)「着る」の敬稱。(996)「着る」の敬稱。(997)「着る」の敬稱。(998)「着る」の敬稱。(999)「着る」の敬稱。(1000)「着る」の敬稱。

おめくり〔御回〕(名)❶供御の御菜。❷飯のさけぶ。

おめし〔御召〕(名)❶「呼ぶ」「乗る」「着る」の敬稱。❷他人の衣服の敬稱。❸おめしちりめん。―**かえ**〔御召替〕(名)❶乗替の敬稱。―**かん**〔御召艦〕(名)天皇陛下の御乗になる軍艦。―**だし**〔御召出〕(名)❶めしだすこと。❷室町・江戸時代に主人又は貴人の寝席に召出されること。―**ちりめん**〔御召縮緬〕(名)(昔、貴人が著用したからいふ)縮緬の一種。縮緬は生絲を材料とするが、これは練絲を材料とし、微温湯に入れてこねぼって立てたもの。―**なんど**〔御召納戸〕(名)御召縮緬に御納戸風の染色をかけたもの。

おめだま〔御目玉〕(名)しかられること。

おめでたい〔形、二〕❶「めでたい」の鄭重語。❷おびとよしてゐること。

おめでとう〔御目出糖〕(名)菓子の名。いり種にざらめ糖を入れてばらばらに炒り、紅色を加へ、甘納豆をまじへて、赤飯に擬し、赤飯の代用として祝儀に配るもの。

おめみえ〔御目見〕(名)❶「めみえ」の敬稱。❷貴人に

思ひなやむ。（古語）

おもいあつむ【思ひ集む】（他動・マ下二）さまざまに考へる。種種工夫する。（古語）

おもいあて【思ひ當】（名）こころあて。（古語）

おもいあてる【思ひ當てる】（他動・ダ下一）（おもいあつるの）の口語。

おもいあまる【思ひ餘る】（自動・ラ四）堪へがたい程思ふ思ひ煩つて考がつかぬ。

おもいあり・く【思ひありく】（自動・カ四）深く思つて過ごす。思ひつづける。（古語）

おもいあわす【思ひ合はす】（他動・サ下二）あれこれと思ひくらべて考へる。思ひつく。

おもいあわせる【思ひ合はせる】（他動・サ下一）（おもいあわすの口語。

おもい・いこう【思ひ息ふ】（自動・ハ四）なほ一通りに思ふ。おもひやむ。（古語）

おもい・いず【思ひ出づ】（他動・ダ下二）おもひいだす。

おもい・だす【思ひ出す】（自動・サ四）㊀思ひうかべる。㊁思ひつく。

おもい・たずく【思ひ労く】（自動・カ四）心配する。氣苦勞する。（古語）

おもい・たる【思ひ至る】（自動・ラ四）心がゆきわたる。考へ及ぶ。（古語）

おもい・となむ【思ひ營む】（他動・マ四）心にかけて世話する。慇懃に心にかけて仕事に從ふ。（古語）

おもい・ならる【思ひ苛らる】（自動・ラ下二）いらいらして思ふ。（古語）

おもい・ぬ【思入ぬ】（名）思ひこむこと。執心。

おもい・ぬ・る【思ひ入る】（自動・ラ四）思ひこむ。深く思ふ。考へこむ。

おもい・ぬる【思ひ入る】（自動・ラ下二）前條に同じ。

おもい・れ【思入れ】（名）㊀思ひ入れること。心を込めること。㊁芝居で、俳優が無言で意味ありげに見詰めてゐるしぐさ。

おもい・れ【思入れ】（副）思ふさま。十分に。滿足する程。存分に。思ひきり。

おもい・う【思ひ得】（他動・ア下二）心のあてがつく。思ひ出すことができる。

おもい・うかる【思ひ浮かる】（自動・ラ下二）浮かれ心になる。心がそわそわに浮き立つ。

おもい・うた【思歌】（名）思ふ事を詠べた歌。

おもい・うつる【思ひ移る】（自動・ラ四）心がはりする。（古語）

おもい・らが・る【思ひ裏枯る】（自動・ラ下二）さびしく思ふ。心細く思ふ。（古語）

おもい・らら・ぶる【思ひうらぶる】（自動・ラ下二）心ぐるしく思ふ。わびしく思ふ。（古語）

おもい・あう【思ひ合ふ】（自動・ハ四）㊀互に懇び慕ふ。㊁互に考が一致する。

おもい・おきつ【思ひ掟つ】（他動・タ下二）心にきめる。決心する。

おもい・おく【思ひ置く】（他動・カ四）㊀心に定めておく。㊁思ひ殘す。

おもい・おくる【思ひ後る】（自動・ラ下二）心劣る。（古語）

おもい・おこす【思ひ起こす】（他動・サ四）㊀心をはげます。心をふり起こす。思ひ立つ。㊁おもひだす。

おもい・おこす【思ひ遣す】（他動・サ下二）あちらからこちらへ思ひやる。（古語）

おもい・おこたる【思ひ怠る】（自動・ラ四）忘れる。（古語）

おもい・おとす【思ひ落す】（他動・サ四）劣つたものに思ふ。（古語）

おもい・おもいに【思思に】（副）めいめい思ふとほりに。心心に。心配したしるし。

おもい・がい【思甲斐】（名）おもつたしるし。

おもい・かえ・す【思ひ返す】（他動・サ四）考へなほす。非と知つて改める。

おもい・かえる【思ひ返る】（自動・ラ四）考がもとにかへる。（古語）

おもい・かかる【思ひ掛かる】（自動・ラ四）心を寄せる。（古語）

おもい・かく【思ひ掛く】（他動・カ下二）㊀心にかける。㊁ゆかしく思ふ。慕ふ。

おもい・がけず【不思掛】（副）思ひもよらず。豫期しなかつたのに。

おもい・がけない【思掛無い】（形）（おもいがけなしの口語。

おもい・がけなし【思掛無し】（形・一）豫期しない。意外である。

おもい・かける【思ひ掛ける】（他動・カ下一）（おもいかくの口語。

おもい・ぬしずく【思ひ傳く】（他動・カ四）大切に思つて附添ひ護る。（古語）

おもい・かたむ【思ひ固む】（他動・マ下二）心にきめる。決心する。覺悟する。

おもい・かためる【思ひ固める】（他動・マ下一）（おもいかたむの口語。

おもい・かぬ【思ひ兼ぬ】（他動・ナ下二）堪へがたく思ふ。思ひあまる。分別がつかぬ。思ひ兼る。

おもいかねのかみ【思金神・思兼神】（名）『神』高皇産靈神の御子。天照大神が天岩戸にお隱れになつた時、謀を設けて誘ひ出された智慮のある神。

おもい・かねる【思ひ兼ねる】（他動・ナ下一）（おもいかぬの口語。

おもい・かま・える【思ひ構へる】（他動・ハ下一）（おもいかまう）の口語。

おもい・かまう【思ひ構ふ】（他動・ハ下二）おもひかまへる。くはだてする。

おもい・がわ【思川】（名）思の絶えず、又、深きことを川に譬へていふ語。

おもい・かわす【思ひ交す】（自動・サ四）相思ふ。互に戀しく思ふ。

おもい・き・える【思ひ消える】（自動・ヤ下一）（おもいきゆの）の口語。

おもい・きって【思ひ切つて】（副）かたく心を定めて。おしまつて。斷然。

おもい・きゃ【思ひさや】（句）思ひがけず。

おもい・きゆ【思ひ消ゆ】（自動・ヤ下二）深く思沈む。心も消え入る許り思ふ。

おもい・きる【思ひ切る】（他動・ラ四）㊀おもひとまる。あきらめる。㊁決心する。

おもい・ぐさ【思種】（名）物思ひのたね。心配のたね。

おもい・くす【思ひ屈す】（自動・サ變）おもひくさる。（古語）

おもい・くずおる【思ひ崩ほる】（自動・ラ下二）思ひよわる。元氣がなくなる。（古語）

おもい・くだく【思ひ碎く】（自動・カ四）さまざまに考へる。さまざまに氣を揉む。

おもい・くたす【思ひ腐す】（他動・サ四）心の中でくさる。心の中でけなす。あしく思ふ。（古語）

おもい・くつ【思ひ朽つ】（自動・ダ上二）思ひ果てさびして朽ち果てる。（古語）

おもい・くつす【思ひ屈す】（自動・サ變）心晴れず。心がよわる。思ひむすぼる。

おもい・ぐま【思隈】（名）同情。心のゆきわたること。（古語）—なし【思隈無し】（形・一）思ひやりがない。考が行きとどかぬ。（古語）

おもい・くらす【思ひ暮す】（他動・サ四）物思ひに日を暮す。（思ひ明かすの對）

おもい-くる【思ひ暮る】(自動・ラ下二)思ひつつ日が暮れる。(古語)

おもい-くるし【思ひ苦し】(形・シク)心苦しい。(古語)

おもい-くれる【思ひ暮れる】(自動・ラ下一)(おもいくるる)の口語。

おもい-くんず【思ひ屈んず】(自動・サ変)(おもいくうず)。(古語)

おもい-けが-す【思ひ穢す】(他動・サ四)さげすむ。

おもい-けす【思ひ消す】(他動・サ四)強ひて思ひ切る。強ひて忘れる。

おもい-けつ【思ひ消つ】(他動・タ四)おもひけす。(古語)

おもい-こ【思子】(名)かはゆい子。

おもい-こ-す【思ひ越す】(他動・サ四)とりこして先の事を考へる。前途を考へる。

おもい-こな-す【思ひこなす】(他動・サ四)あなどる。

おもい-こぼ-る【思ひ零る】(自動・ラ下二)心配が動作にまでもはれる。

おもい-こ-む【思ひ込む】(他動・マ四)❶深く心に思ふ。❷固く決心する。

おもい-こ-む【思ひ籠む】(他動・マ下二)思ひ心中に包む。(古語)

おもい-ざし【思差】(名)その人に思ふ心があって酒をさす盃。

おもい-さだ-む【思ひ定む】(他動・マ下二)心にしかとときめる。決心する。

おもい-さだ-める【思ひ定める】(他動・マ下一)(おもいさだむ)の口語。

おもい-さめ【思覺】(名)❶心に思ふことがあって目の覚めること。❷思ひつづけて冷静にかへること。

おもい-し-おる【思ひ萎る】(自動・ラ下二)思ひ沈んでよわる。(古語)

おもい-しず-む【思ひ沈む】(自動・マ四)深く考へ込む。思ひわづらふ。(古語)

おもい-しず-む【思ひ鎭む】(他動・マ下二)心をおちつかせる。(古語)

おもい-しな-ゆ【思ひ萎ゆ】(自動・ヤ下二)考へしれる。おもしろれる。

おもい-じに【思死】(名)物事を心にかけながら死ぬこと。

おもい-し-ぬ【思ひ死ぬ】(自動・ナ変)思ひつめて死ぬ。

おもい-し-の-ぶ【思ひ忍ぶ】(自動・バ四)心中にこらへる。

おもい-し-む【思ひ染む】(自動・マ四)❶心にしみこむ。❷深く思ひこむ。(古語)

おもい-し-む【思ひ染む】(他動・マ下二)深く心に染みこます。(古語)

おもい-し-める【思ひ濕める】(自動・ラ四)考へしづむ。憂にしづむ。

おもい-し-る【思ひ知る】(他動・ラ四)さとり知る。なるほどと思ふ。思ひあたる。

おもい-すぐし【思過】(名)(おもいすごし)。

おもい-すぐ-す【思ひ過す】(他動・サ四)(おもいすごす)。

おもい-すごし【思過】(名)おもひすごすこと。

おもい-すごす【思ひ過す】(他動・サ四)少しの事を餘りにすぎて深く考へる。取越苦勞をする。餘計なことまで考へる。

おもい-す-つ【思ひ捨つ】(他動・タ下二)心にかけぬ。思ひきる。見捨てる。心を離す。

おもい-す-てる【思ひ捨てる】(他動・タ下一)(おもいすつ)の口語。

おもい-ずま【思夫】(名)愛する夫。大切に思ふ夫。(古語)

おもい-ずま【思妻】(名)愛する妻。大切に思ふ妻。(古語)

おもい-すま-す【思ひ澄ます】(自動・サ四)心を落ちつけて考へる。心をすます。思ひ定めて迷はぬ。

おもい-そ-む【思ひ初む】(他動・マ下二)❶おもひはじめる。❷戀がはじめる。

おもい-そ-める【思ひ初める】(他動・マ下一)(おもいそむ)の口語。

おもい-たけ-ぶ【思ひ哮ぶ】(自動・バ四)たけく思ふ。いきほひこむ。(古語)

おもい-ただ-よう【思ひ漂ふ】(自動・ハ四)心が落ちつかぬ。考が定まらぬ。(古語)

おもい-たち【思立】(名)❶思ひたつこと。決心。❷おもひつき。くはだて。

おもい-たつ【思ひ立つ】(他動・タ四)或事をしようと考をきめる。企てる。

一日が吉日(句)事を思ひ立ったら、すぐに著手するがよい。

おもい-たつ【思ひ斷つ】(他動・タ四)おもひきる。あきらめる。

おもい-たど-る【思ひ辿る】(自動・ラ四)それからそれへと考へて行く。事を追うて考へる。(古語)

おもい-たゆ【思ひ絕ゆ】(他動・ヤ下二)思ひ切る。

おもい-たゆと-う【思ひたゆたふ】(自動・ハ四)心が定まらぬ。思案に暮れる。おもひわづらふ。(古語)

おもい-たゆ-ふ【思ひ弛む】(自動・マ四)心がゆるもの。油斷する。(古語)

おもい-たら-わ-す【思ひ足らはす】(他動・サ四)思を滿足させる。(古語)

おもい-たら-わ-む【思ひ撓む】(自動・マ四)思ひしれる。(古語)

おもい-つき【思附】(名)考。工夫。心に浮カ四)❶考が心に浮かぶ。考が起こる。❷忘れたことを思ひ出す。❸戀ふる心が生ずる。

おもい-つ-く【思ひ附く】(他動・カ下二)前條に同じ。

おもい-つ-ず-く【思ひ附く】(他動・カ四)❶一つ事を絕えず思ふ。❷いろいろと思ふ。

おもい-つ-ず-ける【思ひ續ける】(他動・カ下一)(おもいつずく)の口語。

おもい-つ-む【思ひ積む】(自動・マ四)幾重にも思ふ。思ひかさねる。(古語)

おもい-つ-む【思ひ詰む】(他動・マ下二)一圖に思ふ。おもひこめる。思ひつめて決心する。

おもい-つ-める【思ひ詰める】(他動・マ下一)(おもいつむ)の古語。

おもい-つ-もり【思積】(名)積みかさなる思。

おもい-つ-よ-る【思ひ强る】(自動・ラ四)思がまさる。思ふことが强くなる。(思ひ弱るの對)(古語)

おもい-つら-ぬ【思ひ連ぬ】(他動・ナ下二)さまざまの事を並べて考へる。

おもい-つら-ねる【思ひ連ねる】(他動・ナ下一)(おもいつらぬ)の口語。

おもい-で【思出】(名)❶前にあった事を思ひ出して心を慰めること。❷心のとどくこと。願のかなふこと。**—の-き**【思出の記】(名)【文】德富蘆花の著作した自敍傳的小說。明治三十四年發刊。

おもい-ど【思所】(名)思ふところ。こればと考を變する點。心にあるところ。短所。缺點。(古語)

おもい-と-おす【思ひ通す】(他動・サ四)いつまでも思ふ。

おもい-と-く【思ひ解く】(他動・カ四)考へて疑を解く。了解する。

おもい-と-じ-む【思ひ綴む】(他動・マ下二)思ひとどまる。思ひ斷つ。(古語)

おもい-ど-ち【思どち】(名)思ひあうたものどうし。思ふどち。(古語)

おもい-と-どこ-お-る【思ひ滯る】(他動・ラ四)決心してする事ができない。(古語)

おもい-と-ど-む【思ひ止む】(他動・マ下二)おもひやむ。

おもいどり【思取】(名) 思ふ所があって、さされた盃を受取ること。思ふ心のある人から盃を受取ること。(思差の對)(古語)

おもいとる【思ひ取る】(他動、ラ四)それと氣づく。さとる。

おもいなおし【思直】(名) 思ひ直すこと。

おもいなおす【思ひ直す】(他動、サ四)考へなほす。思ひ改める。

おもいなおる【思ひ直る】(自動、ラ四)心が改まる。(古語)

おもいながす【思ひ流す】(他動、サ四)㊀思ひつづける。(古語)㊁心にとめない。斷念する。

おもいなぐさむ【思ひ慰む】(他動、マ下二)かうもなるだらうと慰める。

おもいなし【思做】(名) 思ひなすこと。

おもいなす【思ひ做す】(他動、サ四)推察してそれときめる。

おもいなずらう【思ひ準ふ】(自動、ハ下二)くらべあはせて考へる。(古語)

おもいなだむ【思ひ宥む】(他動、ハ下二)心の和ぐやうに思ひかへす。

おもいなだらむ【思ひ宥らむ】(他動、マ下二)おもひなだめる。(古語)

おもいなびく【思ひ靡く】(自動、カ四)心からなびく。

おもいなやむ【思ひ惱む】(他動、マ四)心になやむ。思ひわづらふ。心苦しきまで思ふ。

おもいなる【思ひ成る】(自動、ラ四)その心になる。(古語)

おもいにくしる【思ひ憎しる】(自動、ラ下二)常に思ふ。(古語)

おもいならう【思ひ習ふ】(自動、ハ四)㊀了解する。さとる。(古語)㊁思ひなれる。「こと。

おもいね【思寢】(名) 深く心にかけて寢

おもいねんず【思ひ念ず】(他動、サ變)心に祈る。㊁がまんする。【佛】(おもひの「ひ」を「火」にかけていふ)煩惱の絆ちがたい此の世。火宅。

おもいのいえ【思の家】(名)【佛】(おもひの「ひ」を「火」にかけていふ)煩惱の絆ちがたい此の世。火宅。

おもいのいろ【思の色】(名)(おもひの「ひ」を「火」にかけていふ)㊀くれなゐの色。(古語)㊁深く思ふ樣子。

おもいのかすみ【思の霞】(名) 思のはれやらぬことを空をおほふ霞にかけていふ。

おもいのけむり【思の烟】(名)(おもひの「ひ」を「火」にかけていふ)烈しい思を立ちのぼる烟に譬へていふ。

おもいのこし【思殘】(名) みれん。ざんれん。

おもいのこす【思ひ殘す】(他動、サ四)心を殘す。ざんねんがる。未練が殘る。おもひおく。

おもいのそこ【思の底】(名) 思の深いところ。心底。

おもいのたけ【思の丈】(名) 思ひのありたけ。思ひの限り。

おもいのたね【思の種】(名) 心配のもと。

おもいのたま【念の珠】(名)ねんず。すず。

おもいのつな【思の綱】(名) 情實にひかされて思ふままにならぬこと。心のきづな。

おもいのつゆ【思の露】(名)㊀涙。㊁物思ひのしげきを露に譬へた語。(以上古語)

おもいのどむ【思ひ和む】(他動、マ下二)思ひなだめる。(古語)

おもいのひ【思の火】(名)もえたつ思。心火。

おもいのふち【思の淵】(名) 積る思を淵の深いのに譬へていふ。深き思。

おもいのほか【思の外】(名) 意外。案外。

おもいのほる【思ひ上る】(自動、ラ四)おもひあがる。(古語)

おもいのまま【思の儘】(名・副) 心に思ふ

おもいのみち【思の道】(名) 思ひ入ること。「に譬へていふ語。

おもいのやま【思の山】(名) 積れる思を山との深いのを道に譬へた語。

おもいのやみ【思の闇】(名) 心の闇。物思ひに心のくらむこと。

おもいぼ【思羽】(名)(いちようば×銀杏羽)。

おもいつつみ【思羽包】(名) 拜領した香木又は香燻などを入れておく包。

おもいね【思羽根】(名)(おもいぼ)。

おもいはぐくむ【思ひ育む】(他動、マ四)大切に思ってそだてる。(古語)

おもいはつ【思ひ果つ】(他動、タ下二)おもひきる。(古語)

おもいはなつ【思ひ放つ】(他動、タ四)おもひきる。おもひすてる。(古語)

おもいはなる【思ひ離る】(自動、ラ下二)思はぬやうになる。

おもいはばかる【思ひ憚る】(他動、ラ四)心にはばかる。憚り思ふ。

おもいはらす【思ひ散らす】(他動、サ四)思に心を亂す。(古語)

おもいはらから【思同胞】(名) むつまじ

おもいはるく【思ひ晴く】(他動、カ下二)思ひをはらす。(古語)「こひびと。

おもいひと【思人】思ひをかけた人。愛人。

おもいひらく【思ひ開く】(自動、カ下二)思ひが なくなる。心がのどかになる。(思結ぼるの對)

おもいふす【思ひ伏す】(他動、サ下二)倩する。思ひこむ。(古語)

おもいふす【思ひ臥す】(自動、サ四)思ひつつ寢る。

おもいぶり【思振】(名) 思なさぬやうな樣子。

おもいふる【思ひ舊る】(自動、ラ上二)思ひつつ年月を經て久しくなる。(古語)

おもいへだつ【思ひ隔つ】(他動、タ下二)隔てを設けて親しくしない。

おもいほく【思ひ惚く】(自動、カ下二)思ひのあまりにぼんやりとする。(古語)

おもいほこる【思ひ誇る】(自動、ラ四)心がたかぶる。ひそかに自慢する。

おもいほる【思ひ惚る】(自動、ラ下二)思ひ餘りに心がぼんやりする。戀しく思ふ。おもひほく。(古語)

おもいまこう【思ひ紛ふ】(自動、ハ下二)まぎらはしく思ふ。思ひたがへる。(古語)

おもいまじる【思ひ雜る】(自動、ラ四)同時にさまざまの事を思って、思が入りまじる。(古語)

おもいます【思ひ增す】(他動、サ四)思ひがつのる。(古語)

おもいまつわす【思ひ纏はす】(他動、サ四)絕えず心にかける。(古語)

おもいまどう【思ひ惑ふ】(自動、ハ四)心がまようて定らぬ。

おもいまよう【思ひ迷ふ】(自動、ハ四)おもひまどふ。

おもいまわす【思ひ廻す】(他動、サ四)㊀さまざまに思ふ。思ひめぐらす。㊁往事を追想する。

おもいみだる【思ひ亂る】(自動、ラ下二)どうしようかとさまざまに思ふ。思ひ苦しむ。

おもいみる【思ひ見る】(他動、マ上一)かんがへ みる。もんみる。

おもいむすぼほる【思ひ結ぼほる】(他動、ラ下二)おもひむすぼる。(古語)

おもいむすぼる【思ひ結ぼる】(自動、ラ下二)思が胸にふさがる。(古語)

おもいむせぶ【思ひ咽ぶ】(自動、バ四)物思ひに胸がふさがる。(古語)

おもいむつぶ【思ひ睦ぶ】(自動、バ上二)互に親しく思ひあふ。

おもいめぐらす【思ひ運らす】(他動・サ四)さまざまに考へる。おもひまはす。

おもいもうく【思ひ設く】(他動・カ下二)あらかじめ考へておく。豫期する。

おもいもの【思者】(名)㊀戀人。情人。㊁愛妾。

おもいやす・む【思ひ息む】(自動・マ四)なみだをとどめに思ふ。(古語)

おもいやすろう【思ひ休らふ】(自動・ハ四)心が決しないのためらふ。(古語)

おもいや・む【思ひ病む】(自動・マ四)人が憂慮して病気になる。「同情。推量。

おもいやり【思遣】(名)おもひやること。

おもいや・る【思ひ遣る】(自動・ラ四)㊀心配をはらす。㊁同情する。㊂推量する。

おもいゆずる【思ひ譲る】(自動・ラ四)情愛がうすらぐ。(古語)

おもいゆる・す【思ひ許す】(他動・サ四)心中に許す。

おもいよ・す【思ひ寄す】(他動・サ下二)思ひをかける。くらべて思ふ。聯想する。

おもいよ・せる【思ひ寄せる】(他動・サ下一)(おもいよす)の口語。

おもいよそう【思ひ準ふ】(他動・ハ下二)(おもいなずろう)。(古語)

おもいよらず【不思寄・思ひよらず】(副)思ひがけず。不意に。案外に。「まかせ。

おもいより【思寄】(名)㊀思ひつき。㊁心

おもいよ・る【思ひ寄る】(自動・ラ四)思ひあたる。考へつく。

おもいよわる【思ひ弱る】(自動・ラ四)心弱る。落胆する。(思ひつよるの對)(古語)

おもいれ【思入】(名)おもひいれ。**—さんじゅう**【思入三重】(名)俳優が思入なする時の三味線の撥子。**—し**【思入師】(名)おもわくし(思惑師)。

おもいれ【思入】(名・副)(おもいいれ。

おもいわかる【思ひ分かる】(自動・ラ下二)分別がつく。わかる。(古語)

おもいわ・く【思ひ分く】(他動・カ四)分別する。考へなきめる。(古語)

おもいわける【思ひ分ける】(他動・カ下一)(おもいわくの口語。

おもいわ・ず【思ひ忘る】(他動・ラ下二)わすれる。

おもいわすれる【思ひ忘れる】(他動・ラ下一)(おもいわするの口語。

おもい・わずろう【思ひ煩ふ】(他動・ハ四)思ひ苦しむ。思ひなやむ。

おもい・わたす【思ひ渡す】(他動・サ四)おもひおほせ。おもひやる。(古語)

おもい・わたる【思ひ渡る】(自動・ラ四)思ひつつ月日を送る。感ひつつ過ごす。(古語)

おもい・わ・ぶ【思ひ侘ぶ】(他動・バ上二)苦しく思ふ。いとはしく思ふ。

おもう【思・想・ふ・懐ふ・憶ふ・惟ふ】(他動・ハ四)㊀考へる。㊁推量する。㊂想像する。㊃ねがふ。㊄思ひ出ぬ。記する。㊅あはれむ。㊆忘れぬ。㊇恋ふ。愛する。㊈同願する。思ひめぐらす。追想する。㊉想ふ。㊊思ひ思ひめぐらす。考へはかる。㊋想にありさまを心に点がいてみる。思ひやる。㊌懐はおもひを胸にいだく。㊍憶は考へうかべる。思ひ出す。㊎惟はひとすぢに考へる。㊏「念」は始終心にある。記憶してゐる。**—さま**【思様】(名・副)思ふとほり。**—つぼ**【思壺】(名)豫期した計畫。**—ぶに**【思ふに・惟ふに・願ふに】(副)考へみるに。おもひめぐらしてみるに。**—ひ**【思日】(名)(七き人を思ふ日の意)忌日。命日。**—まま**【思儘】(名・副)存分に。心の思ふとほり。**—ようす**【思様】(名・副)思ふとほり。思ふさま。**思ひあへず**(句)おもひがけず。(古語)㊀思ふに堪へず。(古語)**思ひ思はる**(句)互に思ひあふ。**—念力岩をも通す**(句)心力をこめてすれば成就せぬことのない意。**—門**(句)戀しい人の家の門。

おもうし【御申・御饗應】(名)おもてなし。

おもえらく【謂へらく・思へらく・以爲へらく】(副)考へるのに。思ふのに。

おもおし【思ほし】(形シク)(おもわし)。(古語)

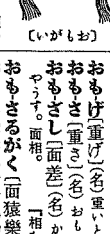
おもおしめす【思ほし召す】(他動・サ四)おぼしめす。(古語)

おもおす【思ほす】(他動・サ四)「思ふ」の敬語。おぼす。おぼしめす。(古語)

おもおもし【思ほしたりし】(形シク)(おもわもし)の口語。

おもおもし【重重し】(形シク)㊀最重である。おごそかである。㊁おちついてゐる。

おもかい【面繋】(名)馬具の一。馬の頭からつのにかけて飾とする組紐。おもがき。


〔いがもお〕

おもがくし【面隠】(名)㊀恥ずかしくて顔をおほふこと。㊁正面に顔を向けられぬこと。(古語)㊂表面をおほふこと。

おもかげ【面影・俤】(名)㊀かほつき。おもざし。顔かたち。㊁様子。姿。㊂幻影。**—いで**【面影草】(名)【枕】おまぶさ。**—やま**【面影山】(名)【枕】因幡國にあるといふ山。

おもかげ【文明治二十二年に發表された飛騨外等の組織した新聲社同人の譯詩集。獨詩・英詩の邦譯並に漢譯と、平家物語中の鬼界島の漢譯等十七篇を含む。

おもかじ【面舵】(名)㊀船のへさきを右へ向ける時の舵のとりかた。(取舵の對)㊁右舷。

おもかた【面形】(名)顔の形。顔つき。おもざし。(古語)

おもかつ【「對して」恥ちず又は怖れないこと。(古語)

おもがつ【面勝つ】(自動・タ四)人に

おもがろし【面輕し】(形シク)おとなしい。(古語)

おもがわり【面變】(名)おもざしのかはる「こと。

おもぎらい【面嫌】(名)幼見の見知らぬ人を見てきらひ泣くこと。人みしり。

おもくさ【面瘡】(名)顔面にできるかさ。にきびの類。そばかす。(古語)

おもくす【重くす】(他動・サ變)おもたげに見える。ふくれて重苦しくさうである。

おもくる【重くる】(自動・ラ下二)へつけられるやうである。㊀輕快でない。**—げ**【重苦しげ】(名)おもくるしいさま。

おもくるし【重苦しい】(形シク)「おもくるし」の口語。

おもくろし【面黒し】(形シク)(くしろ)の裏を戯れていふ語)おしろい。

おもげ【重げ】(名)重いと思はれるさま。おもさう。

おもさ【重さ】(名)おもいこと。おもい程度。

おもさし【面差】(名)かほだち。かほつき。顔のやうす。面相。

おもさるがく【面猿樂】(名)種種のなかしい面相をして人を笑はせること。

おもし【重石】(名)㊀物をおさへつける石用ひるもの。おし。おもり。㊁人を制しつめる勢力べかんめ。かんろく(貫禄)。

おもし【重し】(形シク)㊀目方が多い。輕くない。㊁貴い。大切である。重要である。㊂貴だいい。㊃おちついてゐる。㊄ふさいでゐる。さわやかでない。

おもしゃ・る(自動・ラ四)おっしゃる。仰見知る。(古語)

おもしる【面知る】(自動・ラ四)顔を

おもしろ【面白】(名)おもしろいこと。**—い**【面白い】(形)「おもしろし」の口語。**—おかしろ**【面白可笑し】(形シク)心が浮立つて興が多い。**—おかし・い**【面白可笑しい】(形)(おもしろおかしの口語。

—がる〔面白がる〕(他動、ラ四)面白いと思ふ。**—げ**〔面白げ〕(名)おもしろさうな。**—し**〔面白し〕(形、ク)心が浮立つやうである。興が多い。**—ずく**〔面白尽く〕(自動、カ四)面白さに飽きてること。**—み**〔面白味〕(名)面白いこと。興味。

おもずく〔面就く〕(自動、カ四)目『皮膚がただれる。

おもがい〔面絡〕(名)おもがい。**—ひげ**〔面絡髭〕(名)ほほひげ。

おもぞる〔面反る〕(自動、ラ下二)

おもだか〔澤瀉・澤潟・面高〕(名)㊀〔植〕澤瀉科の多年生草本。水田・池澤に自生する。地下茎の御枝から球茎を生ずる。葉は慈姑(くわい)に似て小さく、箭形又は鼓形をなし、長き葉柄を有する。葉面に高く模様があるから、「おもだか」といふ。夏、葉間に長い花茎を出して圃錐花序の三瓣白色の花を開く。㊁紋所の名。おもだかの葉と花とを配合したもの。㊂おもだかの形をした鎌(やり)の一。㊃源氏の鎧の一。札(さね)は黒漆、總萌黄の絲で、澤瀉縅にし、耳縅は白を用ひる。**—おどし**〔澤瀉縅〕(名)二種を用ひ、一を地色とし、一は上狹く下廣く、おもだかの葉の形にし、神・草苅に縅したもの。**—くわい**〔澤瀉慈姑〕(名)〔植〕おもだかの球茎。**—ずり**〔澤瀉摺〕(名)布におもだかの形を摺つて模様としたもの。

おもたげ〔重げ〕(名)おもげ。

おもたさ〔重さ〕(名)おもさ。

おもたし〔重し〕(形、ク)おもし。

おもたせ〔御持〕(名)おもたせもの。**—もの**〔御持物〕(名)人の手づから持つて來た贈物の敬稱。

おもただし〔面正し〕(形、シク)面目がある。おもてを起こすことである。(古語)「さし。

おもだち〔面立〕(名)かほつき。かほだち。おもて。

おもだつ〔重立つ〕(自動、タ四)主となる。かしらだつ。

おもだて〔面立〕(名)おもだち(面立)。

おもたる〔面足る〕(自動、ラ四)顏がうるはしくととのつてゐる。(古語)

おもたちずつ〔御持砲・御持筒〕(名)江戸幕府の職名。將軍の鐵砲を預り、職時には、與力・同心を率ゐて、旗本を警衛した職。

おもちちゃ〔母父〕(名)母と父。兩親。(古語)

おもちゃ〔玩具〕(名)玩具を賣り又は製造する家。又は其の人。**—にする**(句)相手をなぐさみものにする。

おもちゆみ〔御持弓〕(名)江戸幕府の職名。將軍の弓を預り、職時には、與力・同心を率ゐて、旗本を警衛した職。

おもて〔面〕(名)㊀顏。顏面。おもわ。㊁めん。假面。㊂めんぼく。體面。(古語)**—うた**〔面歌〕(名)人に褒められて面目ある歌。(古語)**—おこし**〔面起〕(名)ほまれを擧げ、面目を起こすこと。(古語)**—おもて**〔面面〕(名)各。めいめい。(古語)**—だて**〔面立〕(名)おもておこし。(古語)**—どうぐ**〔面道具〕(名)㊀顏の造作。目・鼻・口・眉などの總稱。㊁儀式用の時に身につける道具。**—はずかし**〔面羞かし〕(形、シク)顏を合はせることがはづかしい。面目ない。(古語)**—ふせ**〔面伏〕(名)面目なくて顏を伏せること。おもぶせ。(古語)**—まけ**〔面負〕(名)人に對面して強い言動をし得ないこと。面目でおもれりへつらふこと。**—つれなし**(句)平氣で薄情である。**—に負く**(句)相手に長れて臆病になる。**—ほてる**(句)顏が赤くなる。赤面する。**—も振らず**(句)一所懸命で、脇見もしない。**—を冒す**(句)不機嫌を憚らず諫める。**—を起こす**(句)㊀あふむく。㊁擧を得る。**—を曝す**(句)㊀顏を衆人の前にあらはす。㊁恥辱を受ける。**—を伏す**(句)㊀うつむく。㊁面目を失ふ。

おもて〔表〕(名)㊀外側。外部。表面。(裏の對)㊁そと。屋外。㊂道路に沿うた方。㊃ところ。もと。㊄はれ。おほやけ。㊅たたみおもて。㊆船首に近い所。㊇幕府又は諸侯の政治を行ふ所。(奥・大奥の對)㊈家の中で客に接する所。㊉正式の流儀。(略式の對)㊊むき。方角。**—がえ**〔表替〕(名)疊の表を新らしいものにとりかへること。**—がまえ**〔表構〕(名)表の構造。**—がわ**〔表革〕(名)地色を紫に染め出した革。**—がわ**〔表側〕(名)㊀道路に面した方。㊁物の表の方。(以上裏側の對)**—かんばん**〔表看板〕(名)㊀劇場などの正面に掲げる看板。㊁世間に對して標榜する得意の名目。**—ぐち**〔表口〕(名)㊀表側の出入口。㊁裏口の對)㊂まちぐち。**—とうけ**〔表高家〕(名)江戸幕府の職名。高家の子弟で、職任なく、式目にだけ登營するもの。**—どしょう**〔表小姓〕(名)表向きの勤めをする小姓。(奥小姓の對)**—どてん**〔表御殿〕(名)公の政務又は儀式を行ふ正殿。**—さし**〔表差〕(名)銷卷・脇差などにさす笄(かうがい)を裏差といふに對する稱。**—さき**〔表座敷〕(名)客に對面する座敷。(奥座敷の對)**—さた**〔表沙汰〕(名)㊀おほやけざた。おもてむき。㊁訴。くじ。**—ずかい**〔表使〕(名)江戸幕府の大奥の職名。表への用件を辨じ、諸役人と應對する奥女中。**—せんけ**〔表千家〕(名)(せんけ)おもてりゅう。(裏千家の對)**—だか**〔表高〕(名)公稱せられた祿高。**—つき**〔表附〕(名)疊表のついた下駄。市街の大道路。(裏道の對)**—にほん**〔表日本〕(名)〔地〕我が國本州の中央山脈から、東南西へ凸形なれば、太平洋に臨む一帶の地。**—はっく**〔表八句〕(名)百韻の時、懷紙の第一紙に記す八句。(連歌・俳諧の語)**—はんじょう**〔表半疊〕(名)劇場で、外向の雜用を務めるもの。**—ほうず**〔表坊主〕(名)江戸幕府の表向の雜用に從事する坊主。(奥坊主の對)**—むき**〔表向〕(名)㊀おもて。㊁そとがわ。公然たること。公然たること。㊂そのすぢ。官邊。㊃うはべ。あらはし。**—もん**〔表門〕(名)家の表口にある門。(裏門の對)**—もん**〔表紋〕(名)(じょうもん)〔定紋〕。(裏紋の對)**—ゆうひつ**〔表右筆〕(名)江戸幕府の職名。若年寄の管下で、日記・公文・書簡等の事を掌つたもの。

おもて〔重創・重傷〕(名)重い手傷。ふかで。

おもてだい〔重手代〕(名)重い地位の手代。かしらだつた手代。

おもてる〔面照る〕(自動、ラ四)㊀顏が赤くなる。(古語)㊁はづかしくて、顏が赤くなる。

おもと〔萬年青〕(名)〔植〕百合科の多年生草本。陰地に生ずる。葉は根葉から叢生し、披針形で三〇糎に及び、革質常綠。夏日、葉間より花莖を抽き、穗狀花序をなし、綠黃色の細花を帶ぶ。花後、赤色又は白色のほほづきに似た漿果を結ぶ。變種が多い。

おもと〔御許〕(名)㊀御座所。おそば。(古語)㊁宮女を親しんでいふ語。**—びと**〔御許人・侍者〕(名)貴人の側近く仕へる人。侍從。侍女。(古語)**—びとまちぎみ**〔侍從〕(名)侍從。(古語)**—びとめうちぎみ**〔侍從局〕(名)侍從局。(古語)

おもと〔御許〕(代)姉人の對稱代名詞。

おもとと〔母刀自〕(名)母の敬稱。ははとと。(古語)

おもな〔面〕(名)面目なく。(古語)

おもなが〔面長〕(名)顏の稍・長いこと。

おもなげ〔面無げ〕(名)面目なげ。はづかしげ。

おもなし〔面無し〕(形、ク)㊀面目ない。人にあはせる顏向けがない。(古語)㊁おもはゆし。(おもはりの對)(古語)㊂恥とも思はぬ。あつかましい。(古語)

おもなる〔面馴る〕(自動、ラ下二)㊀見馴れる。(古語)㊁馴れてあつかましくなる。(古語)

おもなれ〔面馴〕(名)おもなること。(古語)

おもに〔重荷〕(名)㊀目方の重い荷物。㊁船荷を

重量によって計算するもの。㊁重過ぎる負擔。—に小附(こづけ)(句)あるが上に負擔の加はること。—を卸す(句)責任を果して、重い負擔を免かれる。

おもに【主に】(副)主として。專ら。「ことの聲。

おもにくし【面憎し】(形、一)つらにくい。腹立たしい。

おもねる【阿る】(自動、ラ四)人の意を迎へる。へつらふ。こびる。つゐしょうなする。

おもの【佩物】(名)身におびるもの。おんもの。

おもの【御物】(名)㊀主上の供御。めしあがりもの。(古語)㊁貴人の衣冠・刀劍の總稱。—し【御物師】(名)裁縫師。したてや。—ずくり【御物作】(名)將軍の用ひる刀劍として作つたもの。—だな【御物棚】(名)供御の御膳を載せる棚。御膳棚。—ちゃし【御物茶師】(名)宮中及び將軍飲料の茶を擧つた宇治の茶師。—ぶぎょう【御物奉行】(名)室町時代の職名。將軍の參内又は外出の際、衣冠・刀劍等を容れた唐櫃を預り、つき添つた職。おものながもちぶぎょう。—やどり【御物宿】(名)昔、紫宸殿の西廂にあつて、おものを納め置いた所。(古語)—やどりの-とじ【御物宿刀自】(名)御物宿を擧る女官。(古語)

おもばしら【主柱】(名)主となる大柱。本柱。(袖柱の對)

おもはゆ【面映】(名)はづかしいこと。—い【面映い】(形「おもはゆし」の口語。—げ【面映げ】(名)はづかしさう。—し【面映し】(形、一)はづかしい。おもぶせである。

おもばる【顔腫る】(自動、ラ下二)顔が腫れる。

おもぶせ【面伏】(名)面目ないこと。恥づかしいこと。おもてぶせ。

おもほえず【思ほえず】(副)おぼえずの(古語)

おもほし【思ほし】(形、二)(おもわし)。(古語)

おもほしめす【思ほし召す】(他動、サ四)おぼしめす。(古語)「の敬語。(古語)

おもほす【思ほす】(他動、サ四)「思ふ」

おもほてり【面熱】(名)おもほてること。

おもほてる【面熱る】(自動、ラ四)㊀顔が赤くなる。㊁怒氣が顔にあらはれる。

おもほゆ【思はゆ】(自動、ヤ下二)おもはれる。おぼえる。(古語)

おもほゆらく【思はゆらく】(名)思はれること。(古語)

おもほる【溺はる】(自動、ラ下二)「おぼほる」(溺ほる)。(古語)

おもみ【重味】(名)重いこと。重い程度。(かるみの對)

おもむき【趣】(名)㊀ことわけ。趣意。㊁けはひ。

おもむく【趣く・赴く】(自動、カ四)(面向おもむくの意)㊀向かふ。向くこと。㊁進んで行くこと。歸す。(古語)

おもむく【趣く・赴く】(他動、カ下二)むかはせる。ゆかせる。從はせる。

おもむけ【趣け】(名)しむけ。(古語)

おもむろ【徐ら】(名)しづか。おだやか。ゆるやかなこと。おもむろ。

おもむろ【面持】(名)かほいろ。かほつき。おもかげ。

おもや【母屋】(名)㊀家の中央の部分。もや。廊下・庇などの對)㊁住居に用ひる建物。ほんや。おほや。(物置・長屋などの對)

おもや【面や】(名)おもて(面輪)。(古語)

おもやく【重役】(名)責任の重い役目。その役目の人。じゅうやく。

おもやぎ【面柳】(名)蘇芳の色目。表は濃青、裏は薄青。

おもやる【思やる】(他動、ラ四)思ひなさる。

おもゆ【重湯】(名)極めてうすい粥。飯を煮た汁。

おもよう【面様】(名)かほつき。おもざし。

おもらか【重らか】(名)おもいさまに見えること。おもやか。

おもり【錘】(名)㊀輕い物の重さを知る爲に附け加へるもの。㊁秤の一方にかけて、物の目方をはかる具。㊂一方の重さに對抗させる爲に、反對の側に用ひる物質。—すぎん【錘頭巾】(名)左右の端におもりをつけて垂れるやうにした頭巾。

おもり【御守】(名)守ること。守る人の敬稱。こもり(子守)の敬稱。

おもりか【重りか】(名)おもらか。(古語)

おもりる【重りる】(重る)(自動、ラ四)㊀目方が重くなる。㊁病が重くなる。

おもわ【面輪】(名)おも。おもて。(古語)

おもわく【思惑】(名)㊀思ふこと。考。おもひ。—ちがい【思違】(名)思ふこと。考へちがひ。思ひちがひ。

おもわく【思惑】(名)㊀思ふ所。考。㊁他人の其の人に對する氣ぶり。㊂情緒。㊃【經】相場で、なりゆきを考へて、他日の勝負を豫想すること。—がい【思惑買】(名)【經】勝負を豫期して投機的に買込むこと。—し【思惑師】(名)【經】おもはく買をする相場師。—すじ【思惑筋】(名)【經】(おもわくし)。—ばなし【思惑話】(名)思ふ所があつてする話。

おもわし【思はし】(形、二)㊀推量だされる。思はれる。㊁好ましく思はれる。おもしろく考へられる。氣にいる。

おもわず【不思】(副)おもひがけなく。意外に。—がお【不思顔】(名)意外と思ふ顔つき。—げ【不思げ】(名)意外なさま。—しら-ず【不思不知】(副)しらずしらず。思ひがけなく。

おもわする【面忘る】(自動、ラ下二)他人の顔を見忘れる。他人の顔をみそれる。(古語)

おもわせ【面忘】(名)おもわすること。(語)

おもわせ-ぶり【思はせ人】(名)人に思はれる人。人に慕はれる人。

おもわせ-びと【思はせ振】(名)それとなしに言葉や擧動でさとらせること。

おもわ-ゆ【思はゆ】(自動、ヤ下二)おもはれる。おぼゆる。(古語)

おもん-ず【重んず】(他動、サ變)(重みず)の音便)㊀たふとぶ。㊁大切にする。

おもんばかり【慮】(名)㊀思慮。考。㊁處置。はからひ。㊂はかりごと。

おもんばか-る【慮る】(他動、ラ四)(「おもひはかる」の音便)㊀考へはかる。㊁思ひめぐらす。㊂謀策を立てる。㊃物事を審かに處置する。

おもんみる【惟る】(他動、マ上二)(「おもひみる」の音便)つらつら考へてみる。おもひめぐらす。

おや【親】(名)㊀自分を生んだ人。父母。㊁祖先の人人。㊂自分を子として養ふ人。養父母。㊃子のある人。㊄物の生ずるもと。㊅頭につもの。なさ。㊆大小相對するものの、うちの大なるもの。—ならぬ類。—に跡を遺る(句)子が親に先だつて死ぬ。—に似ぬ子は鬼子(句)親に似ぬ子は人の子ではない。子は必ず親に似るものであるの意。—の因果が子に報ゆ(句)親の行ない來て、禍となる。—の心子知らず(名)親の切なる心を知らずして、子が勝手な振舞をすること。—の脛噛り(句)子が獨立生活を營むことが出來ないで、親のお世話で生活すること。—の脛噛る息子の齒の白さ(句)親の脛かじる子が却て身なりをこぎれいにすること。—の光は七光(句)親の餘光の恩にあやかりなることがありがたいこと。—の欲目(句)親は愛情に曇られて、子を實際以上にいい目に見ること。—はなくとも子は育つ(句)親が早く死んでも、遺った子はどうにか成長して行くものであるから、世の中の事はさう心配する程の事でもない。

おや(感)意外の事に出遇った時などに發する聲。

おや【小屋】(名)小さい家。

おや【親芋】(名)芋の根塊の中央にある最も大きいもの。いもがしら。(子芋の對)

おや-おもい【親思】(名)親を大切にいたはること。又、その人。親孝行。

おや-おや(感)「おや」の重語。「してのきめ。

おや-がい【親甲斐】(名)親としての働。親と

おやかお[親顔](名)親らしく威張る顔つき。

おやがかり[親掛](名)子の大きくなって、尚、親に養はれてゐるもの。へやすみ。

おやかする[親方する](他動・サ四)陰茎を勃起させる。

おやかた[親方](名)㊀意義をうけ、親のやうに頼み仰ぐべき人。㊁主人。㊂職人などの頭。おやぶん。㊃役者の敬稱。㊄昔、琉球で按司(あんじ)の次位の官。

—ぶん[親方分](名)親方の身分の人。㊀親方に なるべき人。**—もち**[親方持](名)主人もち。**—思の主倒し**(句)主人の爲に闘るといって、対して不都合な働くこと。

おやかぶ[親株](名)銀行・會社等の創株。

おやかましゅう[御喧しう](感)㊀訪問して別れを告げる時の挨拶の語。㊁藝妓などが演技を始め、又は終つたる時の挨拶の語。

おやがみ[祖神](名)先祖の神。氏神。

おやがる[親がる](自動・ラ四)親らしく振舞ふ。

おやぎ[親木](名)接木(つぎき)の臺木。

おやぎんこう[親銀行](名)【総中央銀行以外の銀行で、小銀行に對して資金の融通・手形の再割引等種種の便宜を與へる大銀行。

おやく[御役](名)㊀役目の敬稱。㊁つきやく。月賦引等の略。

おやけ[官](名)㊀親らしい樣子。(古語)

おやこ[親子](名)㊀親と子。父子。母子。㊁雛肉と雛卵。㊂そうまめと ふんどう豆と。㊃おやこどんぶり。**—が き**[親子垣](名)建仁寺垣の一種。堅の竹を大小交へて結だもの。**—すき**[親子月](名)陰暦十二月の異稱。(古語)**—どんぶり**[親子丼](名)丼に温かい飯を入れ、其の上に雛卵と雛肉とを合はせ煮たものをかけた食品。おやこめし。おやこ。**—なべ**[親子鍋](名)鍋の中で雛肉と雛卵とを共に煮た食品。**—なんばん**[親子南蠻](名)雛肉と雛卵と葱とを入れた汁蕎麥。**—まめ**[親子豆](名)そら豆とふんどう豆をあはせ炊たもの。**—は一世**(名)親子の關係は、この世だけに限られること。(夫婦は二世・主従は三世の對)

おやご[親御](名)他人の父母の敬稱。

おやごころ[親心](名)子を思ふ親の慈悲心。

おやごぜ[親御前](名)おやこ・親御。

おやざと[親里](名)嫁した女又は婿養子・奉公人などの親の家卸ち實家。おやもと。さと。「語」

おやざまに[親樣に](副)かりに親として。(古語)

おやじ[親父・親仁](名)(おやぢ)の約)㊀親父。父。㊁老人。老爺。翁。㊂親方。親分。**—**(古語)

おやじ[親父・親仁][同じ](形・二)おなじ(同じ)。

おやさま[親父樣](名)他人の父の敬稱。

おやしお[親潮](名)【地カムチャツカ半島の沿海から千島列島の東海岸に沿ひ、北海道の南東から南に下つて金華山沖に流れる寒流。千島海流。

おやしき[親屋敷](名)大きい實屋に對して、小さい實屋が資金融通の爲に提供する實物。

おやじ[代代傳へ來たこと。又、その物。

おやじゃひと[親者人](名)親である人。おやびと。おや。

おやじゅうだい[親重代](名)先祖から代代傳へ來たこと。又、その物。

おやしらず[親不知](名)㊀幼兒の時から他人に養はれて、又は孤兒となつて、生みの親の顔を知らぬこと。㊁波が荒くて、親は子を、子は親を顧みる暇もない程の危險な海岸。㊂おやしらず。げ。㊃【地新潟縣西頸城郡市振村と歌外波(なかなみ)村との間、約一粁の海岸の險路。冬季の吹雪と初春の雪崩とで名高く、昔は波の穏かな時を選んで辛うして通過したものであるが、今では崖上に新道が開け、鐵道道にて車窓から往時を偲び得るに過ぎない。**—は**[親不知歯](名)人間の三十二枚の齒の中、最もおそく生える四枚の奥齒。智齒。

おやしろ[親代](名)(他動・サ四)おやかす。

おやすす[親月](名)親の墓に詣つる月、即ち盂蘭盆の月。陰暦七月の異稱。

おやすみ[御休](名)㊀寢ることの鄭重語。㊁休暇の鄭重語。

おやだいだい[親代代](名)(おやじゅうだい)(親重代)。

おやだから[親寶](名)おや(親)の尊稱。(子寶しくある。(古語)

おやだつ[親立つ](自動・タ四)親らしくある。(古語)

おやだま[親玉](名)㊀數珠の中心となる大玉。㊁頭だつ人。かしら。なさ。㊂遊藝などの巧みな人を賞讃していふ語。

おやだんな[親旦那](名)父親たる旦那。(若旦那の對)

おやつ[御八](名)昔の八つ時、即ち今の午後二時頃の間食。

おやとり・ことり[親取・子取](名)子供の遊戯の名。親一人、鬼一人、他を子とし、子は親の後に從つて、順次に前者の帶を執る。鬼は最後の子を捕へようとし、親は手を擴げて之を防ぎ、子等は鬼を避けるやうに行動するもの。

おやとろ・ことろ[親取子取](名)おやとりことり。

おやなし[親無](名)みなしこ。孤兒。**—ご**[親無子](名)前條に同じ。

おやばか[親馬鹿](名)子の愛に溺れて、我が子の愚劣や缺點に氣づかぬ親。

おやばしら[親柱](名)欄干などの端にある太い柱。

おやばち[親罰](名)親不孝の爲に受ける天罰。

おやはん[親判](名)親がたちあつて證文などに押す印。

おやぶね[親船](名)㊀多數の漁艇を積み込んだ帆船又は汽船。もとぶね。㊁解(ほど)で陸地又は他船と交通する大船。

おやぶん[親分](名)㊀かりに親ときめた人。かりおや。㊁親のやうに萬事を依託する頭領。

おやぼね[親骨](名)扇の左右の最も太い骨。

おやま[小山](名)㊀山。㊁(おんながた)。㊂遊女。**—え**[小山絵](名)遊女の像をえがいた繪。**—がた**[小山形](名)(おんながた)。**—ぐるい**[小山狂](名)遊女に惑ひ狂ふこと。**—にんぎょう**[小山人形](名)㊀少女の形に造つた人形。㊁承應の頃、小山次郎三郎が江戸の淨瑠璃芝居で巧みに使つた少女の人形。

おやまご[親孫](名)親のあとつぎとして恥ない立派な子孫。

おやまさり[親優](名)親よりもすぐれた子。

おやみ[小止](名)なやむこと。少し止むこと。

おやむ[小止む][小止む](自動・マ四)少し止む。しばし止む。なだたる。

おやめく[親めく](自動・カ四)親顔に振舞ふ。親らしくする。(古語)

おやもじ[親文字](名)㊀辭書で、檢出する語が熟語である時、頭に書き出した文字。㊁歐文の冒頭文字。又は固有名詞の書き始めの大文字。㊂活字の字母。

おやもと[親許](名)おやざと。**—みうけ**[親許身請](名)藝妓等の身請を親許からすること。

おやゆずり[親譲](名)親から譲り受けたこと。又、その物。

おやゆび[親指](名)㊀手足の指の、端にあつて最も太いもの。おほゆび。㊁一家の亭主。主人公。

おゆ[親椀](名)大きな飯椀。

おゆ[老ゆ](自動・ヤ上二)㊀齢重なる。年寄る。㊁年よつて衰弱する。㊂時候が末となる。

老いて如門(句)㊀和漢朗詠集の「不老門前日月遲」の句に基づく皇居の門を祝つていふ語。㊁長壽を祝つていふ語。**老いたる馬は路を忘れず**(句)諸代の恩義を深くた者は、いつまでももとの主人を忘れない。(大智度論九十九に「女人之體、老則從子」とあるに基づく)年老いて後は、何事も子に任せて之に從へとの意。**老いては益壯なるべし**(句)(後漢書、馬援傳に「丈夫爲志、窮當益堅、老當益壯」とあるに基づく)年老いても元氣少しも衰へず、益ますかんなるがよいの意。

おゆ[御湯](名)湯の鄭重語。**—どの**[御湯殿](名)㊀清涼殿の西庇の一室。呑湯・沐浴の湯をわかした所。お ゆどのの。う。㊁湯殿の鄭重語。又、そこに給仕する女。**—どのの・うえ**[御湯殿の上](名)

殿上」(名) おゆどの㊀。**—どのの・にょかん**……(御湯殿女官)(名) 御湯殿に奉仕し、御殿所の御用を勤めた女官。

おゆび[指](名) および。ゆび。

おゆみの・しんじ[御弓神事](名) 正月に諸方の神社で五色の的をかけ、柳を立て、注連を引き、白木の弓で射る儀式。

おゆみはじめ・ぶぎょう……(御弓始奉行)(名) 鎌倉・室町両幕府の職名。毎年正月の初に幕府で行はれた弓始の儀式を奉行した職。

おゆらく[老ゆらく](名) 老いること。(古語)

おゆぎ[泳・游](名) およぐこと。およぐ術。

およぐ[泳ぐ・游ぐ]……(自動・ガ四) ㊀水中で肢体を働かして浮かび行く。㊁うまく世を渡る。處世術に巧みなこと。

およし[老](名) 老いた人。(古語)

およすく[およけくる]……[自動・カ下二] 年齢に比して早く智慧づく。老ういたように見える。ませる。早熟する。いろけづく。(古語)

およすけ(名) およすくこと。又、その人。(古語)

およずれ[およず・妖](名) あやしい言。人を惑はすことば。およづれこと。(古語) **—ごと**[妖言](名) 他をまどはす言。いつはりごと。(古語) **—びと**[妖人](名) 妖言で人を惑はす人。(古語)

およそ[凡](副) ㊀おほかたは。たいがいは。㊁一般に。おしなべて。

およそ[凡](名) 物事の概要。概略。大略。

およな[嫗](名) おうな(嫗)。(古語)

およなが[御夜長](名) ㊀禁中で大床子(だいしょう)の御膳のおろしを、女中の夜食に賜ふこと。㊁夜食。他をまどはす言。いつはりごと。(古語)

およばずながら[乍不及](副) 行きとどかぬながら。不十分ながら。

および[指](名) ゆび。(古語)

および[及](名) およぶこと。達すること。**—ごし**[及腰](名) 立ちながら體を屈め手を延ばして、隔たてぬる物を取らうとする態度。

および[及](接続) また。ならびに。かつ。

およびかかる[及び掛かる](自動・ラ四) 近づきかかる。(古語)『およびにくい。(古語)

およびぐるし[及び苦し](形・二) ゆきつく。とどく。達する。

およびつく[及び著く](自動・カ四) ㊀到る。とどく。達する。㊁必要である。㊂なる。成就する。㊃くらべる。㊄遂にその事になる。㊅手を延ばしてとどかす。㊆叶ふ。できる。

およぶ[及ぶ](自動・バ四) ㊀到る。とどく。達する。㊁おびかける。おびつく。㊂なる。成就する。㊃くらべる。㊄遂にその事になる。㊅手を延ばしてとどかす。㊆叶ふ。できる。

およぼす[及ぼす](他動・サ四) およぶこと。

およぼうず[御寄坊主](名)【佛】浄土真宗でいふ御寄講の坊主。(御寄講)は在家で行ふ簡単な法事。又、御報月・御取越。

およる[御寝る](自動・ラ四) 「寝(ぬ)」の敬稱。おやすみになる。およんなる。(古語)

およんなる[御寝んなる](自動・ラ四) およる。に同じ。

おらが・はる[おらが春](名)【文】俳書。小林一茶が、五十七歳の春、即ち文政二年に筆を起こし、雑感・俳句を大體日記體にかき連れ、その十二月に筆を留め、擱筆なした書。一卷。

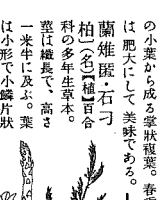
オラトリオ[伊 Oratorio](名)【音】神曲。神事劇。聖歌劇。キリスト教的の楽劇で、音楽と共に宗教劇を演ずる。主として聖書から樂材を採り、宗教的の荘厳をあらはすオペラ作の一種。ヘンデル作の、ハンガリーのハイドン作の「天地創造曲」などが有名。(語)

おらぶ[叫ぶ](自動・バ四) さけぶ。(古語)

オランダ[Holland; Netherlands](名)【地】西ヨーロッパの一王國。ライン河口附近の低地を占め、東はドイツ、南はベルギーと境を接し、西及び北は北海に臨し、遙かにイギリスに對する。面積約三萬四千方粁で、我が臺灣より稍小。人口密度は二二九人で、ベルギーに次ぐ世界第二の人口稠密國である。首府は「ヘーグ。㊀わけのわからぬ物事。ふしぎな事。㊁江戸時代の語。㊂茶道で、古渡の和蘭製陶器。㊃海外。又、海外の奇開を知ってゐるもの。㊄船來品。㊅洋品。

—いちご[和蘭苺](名)【植】蓊薔薇科の多年生草本。莖は地を匍ひ、三箇の小葉から成る掌狀複葉。春季に白花を開く。果實は肥大にして美味である。

—きじかくし[和蘭雉匿・石弓柏](名)【植】百合科の多年生草本。莖は纖長で、高さ一米半に及ぶ。葉は小形で小鱗片狀をなす。夏、枝脈に淡黄色の細花を開き、球狀紅色の漿果を結ぶ。雌雄異株。もやしの若芽を食用とする。アスパラガス。


〔しくかじきダンラオ〕

—きょうばいほう……[和蘭競賣法](名)【經】賣手から最高價を呼びあげ、買手の出るまで漸次に其の價格を遞減して行く競賣法。

—げん[和蘭蓮華](名)【植】蓮科の多年生草本。莖は纏長で個個に、葉は三箇の小葉より成る掌狀複葉。夏、頭狀に集まった白色の蝶形花を開く。牧草又は綠肥に供せられる。グローヴァー。

—ずみ[和蘭墨](名)【植】石竹科の多年生草本。ヨーロッパ南部の原産。莖の高さ三〇—九〇糎。葉は線狀で粉白色、五行辰。夏日、芳香ある紅・白種種の大きな美くしい花を開く。アンジャベル。カーネーション。

—ぜり[和蘭芹](名)【植】繖形科の二年生草本。普通の芹よりも莖は高く葉の刻みが細かい。夏秋の候、莖と枝との先端に白色を呈する多數の小花を生じ、複繖形花序をなす。果實は卵形。洋食の飾菜とする。パスレイ。

〔りゼダンラオ〕

—みつば[和蘭三葉](名)【植】繖形科の二年生草本。葉は羽狀複葉。小葉は三中裂し、緣邊に缺刻狀鋸歯を有し、夏秋の頃、複繖形花序に白色の細花をつける。全體強い香氣がある。嫩葉と根とは食用に供せられる。セロリー。

—やき[和蘭燒・紅毛燒](名) 魚類の白肉に鹽をふって乾かし、雞卵の霜燒な張りつけて炙った食品。

おり[織](名) 織ること。又、その物。

おり[檻](名) 狂人・罪人・猛獣などを入れておく圍ひの室。「ら金をしぼりとる役人。

おり[折](名) 汚吏(あくり)。㊀よくこしらえた役人。㊁人民が會。場合。㊂料理屋などを入れる「へぎ」で造った箱。折詰。㊃菓子・雛形などを進物用とする時の箱。折箱。

—あい[折合](名) ㊀和合。なりあふこと。㊁妥協。相互間のなさまり。

—あう[折合ふ](自動・ハ四) (助動・ハ四)(副) 時機わろく。不幸にもひやうしわるく。

—あし[折合し](副) 時機わろく。不幸にもひやうしわるく。

—いって[折入って](副) ひたすら。切に。ぜひ。

—らず[折樋](名) (おりびつ。

—えいえいそう……[折詠草](名) 横に長く二つに折った紙に歌を記した詠草。

—えぼし……[折烏帽子](名) 頂を折った烏帽子。風折烏帽子・侍烏帽子の併稱。

—えり[折襟](名) 洋服の襟又はカラの、外へ折りかへすやうに仕立てたもの。

—おう[折合ふ](自動・ハ四) 和合する。妥協する。

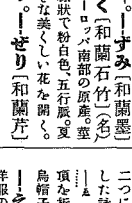
—おき[折置](名)【建】柱の上に直に梁を架け、その上に軒桁を置いた小屋掛建築の構造。

—おり[折折](名・副) ときどき。たまさか。

—かえし[折返](名) ㊀ねりかへすこと。又、その折目。㊁書狀を見てすぐ返事すること。

—かえして[折返して](副) ㊀間合せなどに直ぐ返事すること。㊁狀度もくりかへして。

—かえす[折返す](他動・サ四) ㊀折返し(て)。(副) ㊁間合せなどに直ぐ返事すること。㊂狀度もくりかへして。


〔子帽烏折〕

[折返す] (他動、サ四) ❶折った方向とは反對の方向に折る。❷重ね折る。❸ひっかへす。❹ひさかへす。

—かがみ [折屈] (名) ❶折ってまげること。❷禮儀作法。

—かく [折掛く] [折掛く] (他動、カ下二) ❶折ってひっかける。折返して寄せかけなる。❷折取ることを中途でやめる。

—かけ [折掛] (名) なりかけること。

—かけがき [折掛垣] (名) 竹・柴などを折曲げてつくった垣。

—かけ [折掛] (名) 竹を折りかけてつくった盆燈籠。

どうろう [折掛燈籠] (名) 竹を折りかけてつくった盆燈籠。

—かける [折掛ける] [折掛ける] (他動、カ下一) [おりかくるの口語。

—かさなる [折重なる] [自動、ラ四) 多くの物が上へ上へと重なりあふ。

—かさぬ [折重ぬ] [折重ぬ] (他動、ナ下二) ただかさねる。折って重ねる。

—かさねる [折重ねる] [折重ねる] (他動、ナ下一) おりかさぬの口語。

—がし [折詰子] (名) 折詰にした菓子。

—がた [折形] (名) ❶飾物又は贈物を紙で包む時に、その紙を折る方式。時代・流儀等によって、種類が多い。❷赤飯などを贈る時、胡麻鹽などを包む折紙。❸見女の紙を種種の形に折整むこと。

—カバン [折鞄] (名) 書類等を入れて携へるに用ひる折りたたみやうにつくったカバン。

—がみ [折紙] (名) ❶二つに折った紙。❷奉書・鳥子・檀紙などを横に二つに折ったもので、公式の文書・進物の目錄・鑑定書などに用ひるもの。❸書畫・刀劍・器物などの鑑定書。❹國家試驗・學校卒業・試藝及び水泳衛などの免許によって得た一定の資格。

—がみ-たち [折紙太刀] (名) 折紙附の太刀。

—がみ-つき [折紙附] (名) ❶鑑定保證の折紙のついてあるもの。❷國家試驗・學校卒業によって一定の資格を得たもの。

がみ-どうぐ [折紙道具] (名) 折紙附の道具。

—から [折柄] (副) ちやうどその時。折しも。

—きど [折木戸] (名) 折りたたんだやうに造った木戸。

—く [折句] (名) 【文】短歌の隱題の一種。題の假名を一字づつ毎句の首又は尾に置いたもの。

—くぎ [折釘] (名) 頭を折曲げた釘で、桂などにうちつけ物をかけるに用ひる。をれくぎ。

—けい [折罫] (名) 紙に折目をつけること。

—ごと [折琴] (名) 折整み得るやうにした琴。

—こみ [折込] (名) なりこむこと。又、その物。折込んだ廣告。

—こむ [折込む] [折込む] (他動、マ四) 中に向って折る。新聞紙などを折ると き、廣告用のビラをはさむ。

—こむ [折込む] [折込む] (他動、マ下二) 前條に同じ。

—しき [折敷] (名) 右足を尻の下に、左膝を立ててする射撃の身構の舊稱。ひざうち。

—しも [折しも] (副) ちやうど其の時に。折柄。

—しもあれ [折しもあれ] (副) (おりしも)。

—しりがお [折知顔] (名) 時節を知ってゐるやうなほつき顔。

—すえ [折据] (名) 紙を折っていろいろの形に疊んだもの。

—すきん [折頭巾] (名) 武家のしもべ。

—すけ [折助] (名) 骨惜しみして自分の仕事を他にぬりつけようとする根性。

—ずめ [折詰] (名) 食品を折に詰めること。又、その詰めたもの。

—する [折鶴] (名) 紙を折って鶴の形にしたもの。

—せつ [折節] (副) ❶折から。❷折節。たまさか。

—たたみき [折疊機] (名) 【機】(Folder, Folding machine) レターペーパーを三折にする機械で、一時間に五千通を折る能力を有する。

—たた-む [折疊む] [折疊む] (他動、マ四) 折って重ねる。

—て [折手] (名) ❶折取る人。❷折疊む人。

—で-ぼん [折手本] (名) 折本仕立の手本。

—ど [折戸] (名) 蝶番でとめて中が折れるやうにした戸。

—のし [折熨斗] (名) 熨斗包の形にした紙。代用する物。

—は [折羽] (名) 昔の遊戯。雙方十二箇の駒を用ひ、二箇の采を竹筒に入れ、振って出た采の目の數をとりちって、多く取ったものを勝とするもの。

—はえ [折延] (名) 長くひきつづくこと。(古語)

—ばこ [折箱] (名) 「ぎ」又は「ボール紙などを折曲げて手輕に造った箱。

—びつ [折櫃] (名) 檜などの「ぎ」を折曲げて造った櫃。今の菓子折はこの道制。

—ふし [折節] (名・副) ❶ちやうど其の時。季節。❷たまさか。たまに。

—ほう [折延ぶ] [自動、ハ下二) 時を長くのばす。長く引く。(古語)

—ほん [折本] (名) 續いた紙を折り重ねた本で、綴ちないもの。

—まつ [折松] (名) 篝火などの燃料とする爲に折った松。

—みぐさ [折見草] (名) 「心」の異稱。(古語)

—みまい [折見舞] (名) 寒暑の見舞。時候見舞。

—め [折目] (名) ❶折疊んだ境目。❷行儀作法。❸物事のきまり。

—めた [折目高] (名) ❶目立つ程に高くあらはれてゐること。❷行儀正しく、起居振舞の固苦しいこと。

—めたたし [折目正し] (形、二) 物事のきまりを守って正しい。

—もあろうに [折もあらうに] (副) 他に然るべき時もあらうに、折もあらうに。

—もおりとて [折もおりとて] (副) ちやうどその時。

—やなぎ [折柳] (名) 元禄の頃、若衆の間に行はれた男の髷の結び方。

おり を [折] [接尾] ❶物を詰めた折箱を數へる語。❷折重ねたものを數へるに用ひる語。

おり を [居り] [自動、ラ變] ゐる。住む。そこにある。

—どころ [居所] (名) ゐどころ。

おり [澱] (名) 流動體の底に沈んだ滓。沈澱物。をどみ。

おり-あがり [織上] (名) 織って仕上がること。又、その出來工合。

おり-あがり [下上] (名) おりることとあがること。

おり-あが-る [織上がる] (自動、ラ四) 布帛を織終る。織って仕上がる。

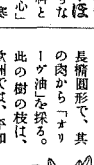
おり-あさぎ [織淺黄] (名) 織色の淺黄のもの。

おり-い [下居] (名) おりゐること。(古語)

—の-みかど [下居帝] (名) 御位をお退きになった天皇。太上天皇。上皇。(古語)

—の-みや [下居宮] (名) 上皇の御所。仙洞御所。(古語)

オリーヴ (Olive) [阿列布油] (名) 【植】木犀科の常綠喬木。幹高三米以上。枝條繁茂し大木となる。葉は對生、長楕圓形で全緣、表面は深綠、下面は灰白色。夏秋の間、小白花を複總狀花序に著く。果實は長楕圓形で、其の肉から「オリーヴ油」を採る。此の樹の枝は、歐洲では、平和と充實の象徴として用ひられる。


〔オリーヴ〕

—いろ [阿列布色] (名) オリーヴの實のやうに黃味を帶びた綠色。

—ゆ [阿列布油] (名) オリーヴの果實から採取した油で、食用・藥用とし、又、石鹼の材料とする。微橄油。阿列布油。

おり-いず [織出づ] [織出づ] (他動、ダ下二) おりいだす。

おり-いだ-す [織出す] (他動、サ四) ❶織って作りだす。❷織ってあらはし出す。❸織り始める。

おり-いと [織絲] (名) 織物の材料に用ひる絲。

おり-いる [下居る] (自動、ワ上一) ❶下へおりてゐる。さがってゐる。(古語) ❷天皇が位をお退きになる。(古語)

おり-いろ [織色] (名) ❶絲を染めて織った織物の色。(染色の對) ❷たて絲とよこ絲との色をかへて織った色合。女郎花・紅梅の類。❸濃い淺黃色。

おり-えび [織葡萄] (名) 紫と赤との絲で織出したえび色。

オリエンタリズム (Orientalism) (名) 東洋の精神文化主義。(西洋の物質文化主義の對)

オリエンタル (Oriental) (英・形) 東洋の。東の。

オリエント (Orient) (名) 東洋。亞細亞。東方。東亞。

おり-おう [織襖] (名) 織物の襖。裏地には白「い生絹を用ひる。

オリオン (Orion) (名) ❶【天】赤道の兩側に跨がった星座の名。俗には三つ星と呼ぶのは、この中にある。❷【神】希臘神話中の神。美貌と強力とを有し、狩獵にも長じた巨神。

—せいうん [—星雲] (名) 【天】

(Orion nebula)オリオン星座に圓形に擴がった星雲。

おり・かえ・す……ぶ【織返す】(他動、サ四)織り改める。おり直す。「織って ひきわれす。

おり・かく(ばけくくる)【織懸く】(他動、カ下二)

おり・きん【織金】(名)きんらん(金襴)。

おり・こ【織子】(名)はたを織る女工。

おり・こ・む(ばかめ)【織込む】(他動、マ四)金銀糸や模様などを織り入れる。

おり・こん【織紺】(名)たて・よこ共に木綿の紺糸で織った織物。めくらじま。青じま。

オリザニン【Oryzanin】(名)【薬】糠精。米の銀皮から採取した榮養素。ヴィタミンB即ち抗脚氣ヴィタミンを多量に含む。脚氣の藥として用ひる。鈴木梅太郎博士の發見。

おり・じ……ぢ【織地】(名)織物の地合。「意。創造。

オリジナリティー【Originality】(名)獨創。創

オリジナル【Original】(英、形)獨創的。本原的。

おり・じり【織尻】(名)織物の最後の部分。おりどめ。

おり・しりがい【織鞦】(名)絲を編んでつくったしりがい。

おり・すじ【織筋】(名)横筋を太く織出した織物。

おり・ずまり……ま【織詰】(名)おりあがった布帛の「長さが經(たて)絲の長さよりつまったこと。

おり・ぞこ【織底】(名)細い經(たて)絲と太い緯(よこ)絲とを用ひて、刺子のやうに丈夫に製した木綿織で、足袋の底に用ひる。いしぞこ。

おりたくしばのきを……【折焚く柴の記】(名)【文】新井白石の自敍傳。將軍德川家宣の五回忌に當る享保五年に筆を起し、父祖の事から始めて自己の生立・經歴に及び、家宣薨去後、停職の事に筆を擱く。平易・雄勁な和漢混淆文である。題名は後鳥羽院の「思ひいづる柴の夕けぶりむせぶらむ」の御製によったのである。

おり・だ・す(ばしまし)【織出す】(他動、サ四)「おりいだす」の口語。

おり・たつ(たちたつ)【下立つ】(自動、タ四)❶おりて行って立つ。❷親しく其の事に關係する。

おり・つけ【織附】(名)織り出した最初の部分。織物の「尻の對」

おり・て【織手】(名)はたを織る人。

おり・どめ【織尻】(名)おりつけ。

おり・な【下名】(名)昔、四位以下に敍位・任官せられる人名を記して、式部・兵部二省の丞に下附せられたもの。

おり・ない(形)無い。(「狂言」に多く用ひられる)。

おり・なし【織成】(名)❶おりなすこと。❷くみたて。つくり。

おり・な・す(ばしまし)【織成す】(他動、サ四)❶織って つくる。❷くみたてる。

おり・な・ず【織延】(名)おりのべぬ。

おり・ぬ【織延絹】(名)北國から織出した一種の絹織物で、普通のものより尺の長いもの。**—ごろも**【織延衣】(名)織延絹でつくった衣。

おり・のぼり【下上】(名)❶おりるとのぼること。❷街道を往復すること。

おり・のり【下乘】(名)❶おりると乘ること。のりおり。❷身のふりかた。身體のやりぐ。

おり・は【下際】(名)おりる折。おりるはずみ。

おりひとえ……【織一重】(名)紅・蘇芳(すおう)女耶花などの色に織出した單衣。(古語)

おり・ひめ【織姫】(名)❶はたを織る姫。❷たなばたひめ。**—ぼし**【織姫星】(名)たなばたひめ。織女星。

おり・べ【織部】(名)❶英産で色なし織物。❷おりべ。❸おりべやき。**—がた**【織部形】(名)石燈籠の型。古田織部正重然(しげなり)の墓にあったもの形で、茶人の好むもの。**—さかずき**(ずき)【織部盃】(名)天正の頃、古田織部正重然の作り出した型の盃。**—のかみ**【織部正】(名)おりべのつかさの長官。**—のつかさ**【織部司】(名)昔、大藏省に屬した、綾・錦等の織物・染物の工を掌った役所。**—ぼん**【織部本】(名)天保年中に、親世織部の章句をつけて印行した諸本。**—や・き**【織部燒】(名)古田織部正重然が點茶を好み、尾張國瀬戸村の赤津の陶工に意匠を授けて燒かせたので、多く草畫を描き、黑褐色又は綠色の釉藥を施してある。青綠色で、白く一菊花を染め抜いたものを青織部と稱する。**—りゅう**(りう)【織部流】(名)古田織部正重然を祖とする茶道の一派。

おり・ま・ず(ばしまし)【織交ず】(他動、サ下二)模樣などを交ぜて織りいれる。

おり・みだ・す(ばしまし)【織亂す】(他動、サ四)こ「りみだす。(古語)

おり・みだ・る(らりたる)【織亂る】(他動、ラ四)おいみだす。(古語)織出す。

おり・め【織女】(名)織地の絲と絲との間。

おり・め【織目】(名)織地の絲と絲との間。

おり・もの【織物】(名)❶織った物の總稱。❷綾織った絹布の總稱。**—しょうひぜい**……ぜう【織物消費稅】(名)【法】絹織物・毛織物の價格に應じて賦課する消費稅。稅率は從價の一割。

おり・もの【下物】(名)❶月經。❷あとさん。❸子宮病のため局部から出る粘液。こしげ(腰氣)。

おり・もよう……【織模樣】(名)地色とちがった色絲を用ひて織出した模樣。厚板・綸子・金襴など「の類。

おり・もん【織紋】(名)布帛に織出した紋。

おり・や【織屋】(名)機織を業とする家。

おり・や・る(らりたる)【自動、ラ四】(おいりあるの約)❶いらっしゃる。居らる。おはす。❷お出かけになる。お出でになる。

おりゅう……【汚隆】(名)衰へることとさかんなこと。盛衰。隆替。

おりゅう……【御寮】(名)ぴくにに比丘尼。

オリンピック・きょうぎ……きゃう【競技】(名)(Olympic games)❶古代ギリシャ人がオリンピヤ神殿の前庭で、ゼウス神の爲に、四年毎の大祭に催した大競技。❷國際的競技大會。一八九八年に第一回をギリシャのアテネに開催し、以後四年目毎に行はれることとなった。

オリンピヤ・さい【一祭】(名)古代ギリシャのエリス州なるオリンピヤ(Olympia)で、四年毎に、初夏の五日間行ったゼウス神の大祭。餘興として諸種の競技を催した。西曆三九四年にテオドシウス大帝之を廢し、一八五八年復活せられた。

おる(らりたる)【織る】(他動、ラ四)❶たて絲・よこ絲を組合はせて布帛をつくる。❷筋を組合はせて筵をつくる。❸交へつくる。組立てる。❹高い處から低い處へつくる。くだる。さがる。❺退出する。❻位を讓る。❼露・霜などがおく。

おる(らりたる)【折る】(他動、ラ四)❶まげたわめる。まげがめる。❷曲げて切る。❸矯めて行ふ。❹扇子・鳥帽子などをつくる。

おる(れれたる)【折る】(自動、ラ下二)❶折れ返るやうに搖れ動く。❷まがりかがむ。❸曲って切れる。❹曲って行く。❺くじくる。衰へる。「語。

おる(れれたる)【居る】(自動、ラ四)(おりの口なる。(古語)

おる(れれたる)【癡る】(自動、ラ下二)おろかになる。(古語)

オルガナイザー【Organizer】(名)【社】未組織大衆の間に飛び込んで、組合や無產政黨を組織する人。組織者。組織部員。

オルガニズム【Organism】(名)組織。有機體。

オルガニゼーション【Organization】(名)組織。造。機關。

オルガン【Organ】(名)❶有機體の具有する器官。❷音(ね)鍵盤樂器の一。現今用ひられるものに二種ある。即ち管(パイプ)に風を送って音を出すものと、簧(リード)に風を送って音を出すものとで、前者を管(パイプ)オルガン、後者を簧(リード)オルガンといふ。我が國では普通後者を用ひてゐる。簧(リード)オルガンは內部に金屬製の笛をしかけ、踏板をふんで、ふいごを動かして氣流を通じ、鍵盤を手指で押して音を發せさせる。パイプオルガンは大きいのは高さ一五米幅二〇米音管一萬本以上のものがあり、風は電氣ポンプで送るやうになってゐる。ふうきん(風琴)。オーガン。

オルガン・ペーパー【Organ paper】(名)機關紙。機關新聞。機關雜誌。

オルケストラ【Orchestra】(名)オーケストラ。

オルソドックス【Orthodox】(名)正統派と譯する。❶宗教上では、教義を無上に信じて、聖書を「ゐると認められる宗派。❷學問上では、其の學的系統

を正しく機承し護守するもの。オーソドックス。

オルチル [Orchil] (名) 地衣かから得た赤紫色の染料。

オルトラマリン [Ultramarine] (名) ウルトラマリン。

オルレアン [Orleans] (名)【地】フランスの一市。ロアール河の右岸。パリの南西約一二〇粁にある。百年戦争の際、西暦一四二八年イギリス軍の爲に重圍に陥り、オルレアンの少女ジャンヌ・ダークの出現によって包圍軍を撃退し得た。一五六三年、宗教戦争の際は新教徒の根據地となり、一八七〇年、普佛戦争の際は、ドイツ軍に占領された。現在はロアーレ縣の首都。

おれ [己] (代) (おのれの略) ❶自稱代名詞。われ。おのれ。おいら。おち。❷對稱の卑稱代名詞。なんぢ。きさま。

おれ [折] (名) 折れること。折れたもの。**―かえる**[折返る] (自動・ラ四) ❶屈折れまがる。❷舞ふ時に、身體や袖などが曲りひろがへる。**―かがみ**[折屈] (名) ❶折れて風むこと。❷身體の關節。**―がむ**[拜む] (自動・マ四) 折れ屈むの略。なろがむ。ながむ。(古語)**―き**[折木] (名) 折れた木。**―くぎ**[折釘] (名) ❶おりくぎ。❷折れ碎けた釘。**―くち**[折口] (名) ❶折れて取れた口。をれめ。❷知人の死。**―こだる**[折こだる] (自動・ラ下二) 折れ傾く。(古語)**―こます**[折こます] (他動・サ四) 懶姫させる。**―こむ**[折込む] (自動・マ四) ❶折れて内部にはらむ。❷はらむ。懶姫する。**―め**[折目] (名) 折れたきは。折れた境目。

おれい [御禮] (名) 恩恵又は贈物を受けたのに對して、感謝の意をあらはすこと。又、その金錢或は品物。**―まいり**[御禮參] (名) 神佛に對してかけた願の成就した禮に參詣すること。

オレートリー [Oratory] (名) ❶私設の小禮拜堂。❷雄辯術。

オレーフ [阿列布] (名)【植】オリーブ。**―ゆ**[阿列布油] (名) オリーブ油。

おれ・おれし [癡癡し] (形・二) 甚だ愚かのやうに見える。(古語)

オレオレジン [Oleo-resin] (名)【化】樹脂と揮發油との混合物質。テレビン・バルサムの二種となる。

おれ・それ (名) あれやこれや。❷あれ、これの作法。❸情あるあしらひ。

おれる [折れる] (自動・ラ下一) (おる)「折る」の日語。(古語)

オレンジ [Orange] (名) ❶【植】くれんぼ。だいだい。❷赤と黄とをまぜた繪具及び染料。

おろ [尾ろ] (名) 尾。(古語)**―の・かがみ**[尾ろの鏡] (名) 山鳥の尾の影が水にうつること。(古語)

おろ [峰ろ] (名) (おの)(峰)。(古語)

おろ [緒ろ] (名) (お)(緒)。(古語)

おろ [惡靈] (名)【醫】出産の時陰及び子宮から

おろ (接頭) 或語に冠して「いはしからぬ」「儘む・聊か」などの意をあらはす語。「―おぼえ」「―睡る」。

―い・ゆ [おろおろ] (自動・ヤ下二) 病・傷などが少しなほる。**―おぼえ**[おろ覺] (名) はっきりせぬ記憶。うろおぼえ。ぼんやりした記憶。

おろ・おろ (副) ❶あちあち。不十分。さっと。まばらに。(古語) ❷涙もろく泣く聲。**―こえ**[おろ聲] (名) おろおろと泣く聲。**―なみだ**[おろおろ涙] (名) おろおろと泣いて流す涙。

おろか [愚] (名) 智能・理解力の乏しいこと。ばか。あほう。**―し**[愚かし] (形・二) おろかである。鈍い。**―めく**[愚かめく] (自動・カ四) おろかに見える。(古語)**―もの**[愚か者] (名) ばかもの。くしれ。

おろか [疎] (名) 十分なりなさま。劣れるさま。お

おろかぼ [穂穂] (名) 刈った後に再び生えた稲。ひつち。(古語)

おろが・む [拜む] (自動・マ四) (おれがむ。(古語)

おろく・ぐし [阿六櫛] (名) 本曾街道藪原驛の阿六といふ婦人のつくり物のすき櫛。同街道塩嶺の阿六といふ婦人の始めたもの。

おろし [卸] (名) おろすこと。おろしうり。**―うり**[卸賣] (名) 生産者・輸入者・問屋から大量の商品を仕入れて小賣商人に賣渡す商業。**―うりしじょう**[卸賣市場] 卸賣の取引市場。**―なみ**[卸並] (名) 小賣商品の賣價を、卸値と同じにして販賣すること。**―ね**[卸値] (名) 卸賣の値段。**―ねたん**[卸値段] (名) おろしね。

おろし [下] (名) ❶おろすこと。❷すりくずすこと。又、そのもの。❸大根おろし。❹さばおろし。❺美しい品物の用ひはじめ。❻貴人の衣服・食物のさがりもの。❼神佛の供物をとりさげたもの。❽山おろし。**―え**[下枝] (名) 切りおろした枝。(古語)**―がね**[下印] (名) 飼育地のあんか牧場の馬の腹に烙印する場合の印。**―ぐすり**[下藥] (名) 姙婦にのませて墮胎させる藥。**―こ**[下子] (名) 墮胎。**―こ・む**[下籠む] (他動・マ下二) 格子などを全部おろす。**―ごめ**[下米] (名) 神佛貴人の前に供へた後、おろしさげた米。**―だ**[下大根] (名) 大根をおろしがれてすり碎いたもの。

おろし [嵐] (名) 高い處から吹き出おろす風。

おろす [下す] (他動・サ四) ❶高所から低所へ移す。❷きげる。❸陸から水に浮かべる。❹神おろしをする。❺新らしい品を使ひ始める。❻あしくいひなす。いひくさす。❼官位をさげる。❽墮胎させる。❾おろしてすりくづす。❿すりへらす。⓫投げくだす。⓬吹きおろす。⓭切り裁つ。⓮はげづり去る。⓯神佛の供物を引きさげる。貴人の食物・衣服の不用物を下人に賜はる。

「をする。

おろす [卸す] (他動・サ四) おろしうり

おろせ (名) 貴、親籠かきの「重ぐし枝」と歌ひつつ昇いたのに基づく。❶かごかきを親籠昇。❷(おろせかご)。**―かご**[おろせ駕籠] (名) 客を乗せて昇く親籠。**―やど**[おろせ宿] (名) 江戸時代に、かごかきをとめておいた宿。

おろそか [疎] (名) なほざり。ゆるかせ。不十分。粗略。不注意。てぬかり。

おろち [大蛇] (名)【動】極めて大きな蛇。うばばみ。だいじゃ。

おろぬく [疎抜く] (他動・カ四) 多く の中から、間を隔てて抜取る。まびく。うろぬく。

おろねぶる [疎睡る] (自動・ラ四) すこしねむる。かりそめに眠る。(古語)

おわい [汚穢] (名) ❶汚れてゐること。汚れてゐるもの。❷糞尿。おあい。**―や**[汚穢屋] (名) (そうじや)(掃除屋)。「おまいどころ。(古語)

おわいどころ [御座所] (名) 貴人の居所。

おわしましどころ [御座所] (名) (おわしどころ)。

おわしましよし [御座善し] (形・二) おはしますのに都合がよい。(古語)

おわします [御座ます] (自動・サ四)「おはす」の敬重語。

おわしまそう [御座しまさふ] (自動・ハ四)「おはします」の延。(古語)

おわす [御座す・在す] (自動・サ變) ❶「在り」「居り」「來る」「行く」の敬語。❷動詞に添へて助動詞のやうに用ひ、敬意をあらはす語。たまふ。おはします。

おわす [御座す・在す] (自動・サ四) 前條に同じ。

おわそう [御座さふ] (自動・ハ四)

おわそうず [御座さうず] (自動・サ變) (おわします)。(古語)

おわり [終] (名) ❶終ること。終る處。終る時。はて。しまい。終末。❷死ぬこと。終焉。末期。

―はつもの[終初物] (名) 時期の末になって成熟する果物の、初物と同樣に珍重がられるもの。

おわりだいこん [尾張大根] (名)【植】みやしげだいこん(宮重大根)。

おわりとる [終取る] (自動・ラ四) 「死ぬ。

おわる [終る] (自動・ラ四) ❶限となる。果てる。すむ。つきる。❷死ぬ。くたばる。❸「卒」はは(てる。三位以下五位以上の者の死。❹

「了」はすむ。かたづく。㊁「擧」ほつっきる。㊂「記」ははてる。つきる。㊃「終」は始まったものがしまひになる。できあがる。㊄「竟」はつくすとしまひになる。

おん【恩】(名) めぐみ。あはれみ。いつくしみ。なさけ。**—に受く**(句) 恩を受けたのみありがたく思ふ。**—に掛く**(句) 恩を施したことを自らほこる。**—に着す**(句) 恩に掛く。**—に着る**(句) 恩に受く。**—の主より情の主**(句) 恩人よりも情人のしてくれることを好しく思ふ。**—を仇**(句) 恩に報いるに仇を以てすること。

おん【音】(名) ㊀聲・音響の振動によって起こる聽官の感覺。音聲。㊁人の音聲の一氣に出づるもの。清音・濁音の類。㊂韻(ひびき)の調子。れいろ。㊃こゑ。㊄漢字の字音。(訓の對)

「と。㊅かげ。おかげ。

おん【陰】(名) ㊀父祖の功によって位階を賜はること。蔭位。(「おほんい」の略、「おみ」の音便)或語に冠して尊敬の意をあらはす語。おほみ。おみ。お。**—ぼき**【御母儀】(名) ㊀貴族の母君。㊁大名の母の敬稱。**—もみじやま**【御紅葉山】(名) 江戸城内の地名。元和・寛永の頃は、ここに東照宮廟があった。**—の字の客**(句) 敬すべき人。よいお客。

おん【雄】(名) ㊀なかの。なかで。(「めんの」の對)**—どり**【雄鳥】(名) ㊀なかの鳥。たどり。(「めんどり」の對)

おんあい【恩愛】(名) ㊀めぐみ。いつくしみ。なさけをかけること。㊁【佛】恩にひかれて愛著すること。

おんあんぼう【温暖法】(名)【醫】温湯又は硼酸水等の温湯に浸した布片を用ひる療法で、局所の發發亢進、神經痛や痙攣の療養に效がある。(冷暖法の對)

おんい……ふ【恩威】(名) 恩惠と威光。なさけといかめしさ。

おんい……ふ【蔭位】(名) 父祖の功によって子孫に賜はる位階。

おんいき(ゐき)【音域】(名) 人又は樂器の發し得べき音の限界又は限度。

おんいん(ゐん)【音韻】(名) ㊀漢字の音と韻。㊁言語を構成する音聲。

おんがく【音韻學】(名) 音韻を研究する學問。

おんえき(ゑき)【瘟疫】(名) はやりやまひ。

おんえん(ゑん)【恩怨】(名) なさけとうらみと。

おんおん(ゐん)【温温】(名・副) ㊀性質のおだやかなさま。㊁暖いさま。

「しとやか。おだやか。

おんが(ゐん)【温雅】(名) おとなしく上品なこと。

おんかい(ゐん)【音階】(名)【理・音】原音とそのオクタヴとの間に異なる樂音を高低の順序に排列したもので、樂曲を組織する基礎として用ひる。音の階段的排列。西洋音樂では長音階・短音階が代表的であり、其の順次は、Do,Re,Mi,Fa,So,La,Si,Do.である。日本音樂には數種の日本音階がある。

おんがい(ゐん)【怨害】(名) ㊀うらんであだをすること。㊁怨靈の危害。

おんがえし(ゐん)【恩返】(名) 受けた恩に報いること。

おんがく(ゐん)【温覺】(名)【心】觸覺の一。温又は冷の感覺。

おんがく【音樂】(名)【音】音響を美的に調和・結合させて、美感を喚起させるもの。樂器によるものを器樂といひ、肉聲によるものを聲樂といふ。**—か**【音樂家】(名) 音樂を專門の職業とする人。又、音樂に巧みな人。**—かい**【音樂會】(名) 音樂を演奏して多數の人に聽かせる會。**—がっこう**【音樂學校】(名)【歐】音樂の學理・技術を教授する學校。**—こうしん**【音樂行進】(名) 音樂を演奏しながらする行進。**—コンクール**【佛 Concours】(名) 音樂を戰ふて競ひること。又、その會。**—たい**【音樂隊】(名) 樂隊。**—どうがく**【音樂堂】(名) 音樂演奏の爲に設けた堂。**—びがく**【音樂美學】(名)【美】音樂上の美を研究する美學。

おんがく【音學】(名) ㊀音韻學。㊁音響學。

おんかた【御方】(名) ㊀貴人の敬稱。㊁貴人の居所。**—ごしょ**【御方御所】(名) 將軍又は大臣の長男で、家督を繼がぬもの。おかたごしょ。おかたすまひ。

「を施して誇り顔をする。恩に着せる。

おんがん【恩簡】(名) 他人から送られた書簡の敬稱。

おんかん(ゐん)【温官】(名) 役得のある官職。饂の如く、外界の温度に關係なく、體温が常に殆と一定不變に保續せられる動物。(冷血動物の對)

おんかん(ゐん)【穏健】(名) ㊀文章・言論の穩當で、しっかりしてゐること。㊁思慮深く意志强く輕率でない。

おんげん(ゐん)【温言】(名) おだやかな言。やさしいこと。ひきたて。あはれみ。

おんこ(ゐん)【恩顧】(名) 情をかけること。めぐみ。ひきたて。あはれみ。

おんこ(ゐん)【温故】(名) ふるいことをたづねること。昔の事を究めること。**—ちしんし**【温故知新】(名)(論語爲政篇の語)ふるい物事を究めて、新しい知識や見解を開くこと。

おんこ(ゐん)【温平】(名・副) おだやかなさま。おとなしいさま。

おんこう(ゐん)【恩降】(名) 貴賤慶賀・祥瑞・疾疫・災異等の際、特別の恩惠で、死刑を一等減刑せられたこと。

おんこう(ゐん)【恩狎】(名) したしみなれること。

おんこう(ゐん)【恩光】(名) ㊀萬物を生育する天日の光。㊁君主のめぐみ。

おんこう(ゐん)【温厚】(名) 優しくして篤實なこと。

おんこう(ゐん)【温度】(名) 温熱の程度。

おんこく(ゐん)【温酷】(名・副) ㊀性質のおだやかなさま。㊁暖いさま。

「しとやか。おだやか。

おんこん(ゐん)【温恨】(名・副) ㊀性質のおだやかなさま。㊁暖いさま。

「しとやか。おだやか。

おんさ【音叉】(名)【理・音】原音とその オクタヴとの間に異なる樂音を高低の順序に排列したもので、樂曲を組織する基礎として用ひる。音の階段的排列。西洋音樂では長音階・短音階が代表的であり、其の順次は、Do,Re,Mi,Fa,So,La,Si,Do.である。日本音樂には數種の日本音階がある。

おんさい(ゐん)【怨害】(名) ㊀うらんであだをすること。㊁怨靈の危害。

おんがえし(ゐん)【恩返】(名) 受けた恩に報いること。

おんがく(ゐん)【温覺】(名)【心】觸覺の一。温又は冷の感覺。

おんがく【音樂】(名)【音】音響を美的に調和・結合させて、美感を喚起させるもの。樂器によるものを器樂といひ、肉聲によるものを聲樂といふ。**—か**【音樂家】(名) 音樂を專門の職業とする人。又、音樂に巧みな人。**—かい**【音樂會】(名) 音樂を演奏して多數の人に聽かせる會。**—がっこう**【音樂學校】(名)【歐】音樂の學理・技術を教授する學校。**—こうしん**【音樂行進】(名) 音樂を演奏しながらする行進。**—コンクール**【佛 Concours】(名) 音樂を競ふて競ひること。又、その會。**—たい**【音樂隊】(名) 樂隊。**—どうがく**【音樂堂】(名) 音樂演奏の爲に設けた堂。**—びがく**【音樂美學】(名)【美】音樂上の美を研究する美學。

おんがく【音學】(名) ㊀音韻學。㊁音響學。

おんかた【御方】(名) ㊀貴人の敬稱。㊁貴人の居所。**—ごしょ**【御方御所】(名) 將軍又は大臣の長男で、家督を繼がぬもの。おかたごしょ。おかたすまひ。

「を施して誇り顔をする。恩に着せる。

おんがん【恩簡】(名) 他人から送られた書簡の敬稱。

おんかん(ゐん)【温官】(名) 役得のある官職。饂の如く、外界の温度に關係なく、體温が常に殆と一定不變に保續せられる動物。(冷血動物の對)

おんがん(ゐん)【恩顔】(名) なさけぶかい顔附。

おんがん(ゐん)【温顔】(名) やさしい顔つき。

おんき(ゐん)【温氣】(名) あたたかみ。暖氣。

おんき(ゐん)【温鬼】(名)(やくびょうがみ)×疫病神。

おんき(ゐん)【遠忌】(名) 三年忌以上の正忌。

おんぎ【音義】(名) めぐみ。あはれみ。

おんぎ【恩誼・恩義】(名) ㊀字音と意義。㊁一音毎に有する意義。**—せつ**【音義說】(名) 國語の聲音に、一つ毎に固有の意義があるとふ說。一音一義說。

おんきゅう【恩給】(名) ㊀恩賞として賜ふこと。㊁【法】多年勤續し、失格原因なくして、職務を去った文・武官等に對して、政府から終身給與する一定の金額。**—きょく**【恩給局】(名)【法】內閣に屬し、恩給・扶助料を受くる者の資格・權利の審査・裁決及び其の支給に關する一切を掌る所。**—しょう**【恩給證書】(名)【法】恩給を受ける權利あることを證明した證書で、恩給局長から資格者に交付するもの。

おんきゅう【温灸】(名) 柄のついた金屬製の筒の、底の尖った小の中にもぐさを入れ、酒精に浸して點火し、筒の尖端を以て患部をおすこと。又、電氣を用ひて温めるのもある。

おんきょう【音響】(名) 音。ひびき。**—がく**【音響學】(名)【理】音の性質・現象を研究する學問。**—き**【音響器】(名) 電信の受信用に使用する器械。**—しんごう**【音響信號】(名) 海上の衝突を防ぐ爲に、船舶が汽笛・汽角・號鐘・發砲等で音響を發してなす信號。

おんきょう【温恭】(名) おだやかでうやうや

おんきょう【隱形】(名) 呪術によって、我が身體をかくしくらます。おんしんしょう。

おんぎょう【隱形鬼】(名) 形を隱して種種の禍をする鬼。

—やく【隱形藥】(名) 全身に塗れば我が身體を隱すといふ印度の仙人が使用した奇藥。えいしんやく(醫身藥)。

おんきょく【音曲】(名) ㊀琴・三味線・胡弓などの鳴物に合はせてうたふ語物。㊁音樂の演奏。**—ばなし**【音曲話】(名) 音曲を挿んで演ずる落語。

おんきん【恩金】(名) ㊀恩賜として賜し與へられた金。

「と。厚遇。優遇。

おんぐう【恩遇】(名) なさけをかけて待遇すること。

おんくん【音訓】(名) ㊀字音と字義と。㊁漢字の音を我が國語にあてた讀み方。「魚類を燻製する。

おんくん(ゐん)【温燻】(名) 高温度を用ひて、甘鹽

おんけい【恩惠】(名) めぐみ。なさけ。**—きじつ**【恩惠期日】(名)【法】債務の履行に、特典として規定の期日以外に與へる猶豫期限。**—びにち**【恩惠日】(名)【法】手形の支拂について、支拂期日以外に與へられた三日の猶豫日數。

おんけつ(ゐん)【温血動物】(名)【動】哺乳動物・鳥類の如

おんこ【穏】(名) 穏やかな血。**—どうぶつ**(ゐん)【温血動物】(名)【動】哺乳動物・鳥類の如

おんこ(ゐん)【温】(名・副) ㊀文章・言論の穩當で、しっかりしてゐること。㊁思慮深く意志强く輕率でない。

「い言。情の籠った言。

おんげん(ゐん)【恩顧】(名) 情をかけること。めぐみ。ひきたて。あはれみ。

おんこ(ゐん)【温故】(名) ふるいことをたづねること。昔の事を究めること。**—ちしんし**【温故知新】(名)(論語爲政篇の語)ふるい物事を究めて、新しい知識や見解を開くこと。

おんこ(ゐん)【温平】(名・副) おだやかなさま。おとなしいさま。

おんこう(ゐん)【恩降】(名) 貴賤慶賀・祥瑞・疾疫・災異等の際、特別の恩惠で、死刑を一等減刑せられたこと。

おんこう(ゐん)【恩狎】(名) したしみなれること。

おんこう(ゐん)【恩光】(名) ㊀萬物を生育する天日の光。㊁君主のめぐみ。

おんこう(ゐん)【温厚】(名) 優しくして篤實なこと。

おん・こく（名）〔温克〕（名）穏かでよく其の身を持すること。

おん・こく（名）〔遠國〕（名）ゑんごく。とほいくに。奈良・堺・伏見・函館等の如き江戸から遠い土地に置いた奉行。ゑんこくぶぎやう。

おん・こと（名）〔御事〕（名）㊀「事」の敬稱。㊁貴人の死去の敬稱。大事。㊂人のしたこと。又、その人の敬稱。

おん・こと（名）〔御事〕（代）對稱代名詞の敬稱。きみ。あなた。そなた。

おん・さ（音叉）（名）【理】發音體の振動數を計る用具。鋼鐵製のU字形をなすものに柄をつけ、木箱の上に裝置したもの。打てば一定の振動數の音を發する。

〔さんおん〕

おん・さ（名）〔穩座〕（名）大饗などの時、正式の勸杯などが終った後、うちくつろいで談笑し盛興する席。宴座の對。**—の初物**（句）（おわりはつもの。

おん・さ（名）〔温座〕（名）あんざ（安座）。じっと坐ってゐること。

おん・さき（名）〔御先〕（名）貴人の先に立つ從者。おさき。

おんさくの・かむり（名）〔御幘冠〕（名）天皇の神事に於いて用ひる無紋の冠で、平櫻（ひらざくら）を後から子也（このな）の上を引越し、前で上へ折返して白組で結ぶ。

オン・ザ・マーク（On the mark）（句）競走に於いて出發に際し、スターターが競走者にかける號令。「各自出發點に就け」の意。

おん・し（陰子）（名）陛位を受けける子。五位以上の

おん・し（恩賜）（名）君主などからめぐみ賜はること。又、その物。**—ざいだんさいせいかい**……（恩賜財團濟生會）（名）施藥・救療の資として、明治天皇から御下賜になった金員及び其の利子で設立せられた財團法人。

おん・し（恩師）（名）恩義を受けた師匠。

おん・し（音字）（名）音語を記載するに、音の記號としてのみ用ひる文字。音節文字（假名・梵字）と單音文字（ローマ字・ギリシャ字）とにわかつ。表音文字。音標文字。（意字の對）

「する時の稱。

おん・じき（遠志）（名）（漢字の呉音）のみもの。

おんじき（飲食）（名）ひめはじき（姫榛）を藥用としたもの。いんしょく。（古語）

おん・しつ（温室）（名）㊀温い裝置をした室。㊁寒季又は寒地で、暖地又は暖季の植物を培養する目的で、内部の温度を高めるやうに設備した建物。㊂【佛】浴室。

おん・しつ（温疾）（名）えやみ。はやりやみ。

おん・しゃ（温藉醞藉）（名）㊀心廣く包容力の大きいこと。㊁おっとりとしてしとやかなこと。

おん・しゃ（恩赦）（名）天子のおめぐみによって罪を赦し又は刑の執行を減免せられること。**—けん**〔恩赦權〕（名）【法】天皇の恩赦を行ひ給ふ憲法上の大權。

おん・しゃく（恩借）（名）なさけで借り受けること。

おん・しゃく（温石）（名）㊀焼いた輕石を布などに包んで、冬日又は病氣の際に身體を温めるもの。又、鹽を固めて焼き、瓦などに鹽をまぶして焼いたものをも用ひる。㊁おんしゃくいし。㊂温石は懷中する時、ぼろで包んだからいふ揺襁を着た人をあざけっていふ。**—いし**〔温石石〕（名）【動】長野縣高遠の山中から産する温石に適するからいふ石。

おん・しゅ（隱首）（名）戸籍帳に名の記されてない人が、自ら其の由を申し出ること。（古語）

おん・しゅ（恩主）（名）恩を受けた主人。

おん・じゅう（飲酒）（名）【佛】酒を飲むこと。いんしゅ。**—かい**〔飲酒戒〕（名）【佛】五戒の一。酒を禁ずること。不飲酒戒。

おん・しゅう（恩讐）（名）なさけとうらみと。

おん・しゅう（恐讐）（名）うらみ。かたき。あだ。ゑんしゅう。

おん・しゅう（温習）（名）繰返して習ふこと。なほなこと。復習。

おん・しゅう（温柔）（名）㊀ものやはらかなこと。**—きょう**〔温柔鄉〕（名）㊀飛燕外傳の語）れや。閨房。㊁遊里。色里。**—とんこう**〔温柔敦厚〕（名）㊀やさしくしてれんごろなこと。㊁奇婚又は露骨ならず、篤實な情趣のあること。昔、支那では之を詩の本領とした。

おん・じゅつ（恩恤）（名）めぐみあはれむこと。

おん・じゅん（温順）（名）すなほ。おとなしく。

おん・じゅん（恩賞）（名）功をほめて物を惠み賜ふこと。**—ち**……（恩賞地）（名）世襲の所領の外に、功勞によって加增せられた領地。**—ぶぎょう**……（恩賞奉行）（名）室町幕府の職名。將士の勳功を評し、恩賞を議した職。

おん・じょう（恩奬）（名）恩賞を賜ふて奬勵せられること。なさけをかけてひきたてること。

おん・じょう（恩詔）（名）なさけあるみことのり。ありがたいみことのり。

おん・じょう（温床）（名）【園】人工的に温熱を加へて、速成栽培をなす苗床。フレーム。

おん・じょう（音聲）（名）㊀人の發する聲。おんせい。ねいおん。㊁雅樂に於ける音絃の音。**—がく**〔音聲樂〕（名）【音】雅樂に於ける音絃樂。

おん・じょう（恩情）（名）いつくしみ。なさけ

おん・じょう（温情）（名）やさしい心。情深い心。**—しゅぎ**〔温情主義〕（名）【經】資本家と勞働者とが、互に温情に基づいて親和し、相互間の紛爭を解決しようとする主義。勞資協調主義。

おん・じょうじ（園城寺）（名）【佛】滋賀縣大津市にある天台宗寺門派の總本山。これを三井寺といふのは、天智・天武・持統三天皇の御產湯の水を汲んだ井戸があったからである。天武天皇の朱鳥元年、弘文天皇の皇子大友の與多王の創建。一に寺門又は寺といふ。

おん・しょく（音色）（名）【理】一つの音響が他の音響と區別せられる特質。れいろう。樂器の種類により、又、各個人・男女・老少により、音調は同じでも互に獨特の音色ある類。

おん・しょく（温職）（名）役得ある官職。温官。

おん・しょく（慍色）（名）むっとした顏色。立腹した顏つき。

おん・しょく（温色）（名）㊀おだやかな顏色。㊁温暖の感覺を與へる色で、赤及び赤に近い色。（寒色の對）

おんしらず（恩不知）（名）恩を受けても報いることを知らぬこと。又、その人。おんぬすびと。

おん・しん（音信）（名）おとづれ。たより。いんしん。

おん・しん（音信）（接尾）電報の語數の單位。和文電報では、片假名又は數字・句讀點・括弧等の記號十五を一音信とし、以上五を加へる毎に一音信を增すものとし、濁音は二字に計算する。「と。

おん・しん（恩信）（名）なさけあり、まことあること。

おん・しん（温神）（名）【生】皮膚の神經の温度の變化を感知する機能。

おんじん（恩人）（名）恩義をかけてくれた人。

オンス（Ounce）（名）【理】（英）英米兩國の目方の單位で、金量の時はポンドの十二分の一。我が八匁二分九厘四毛。重量の時はポンドの十六分の一。我が七匁五分六厘。英・米商術目の單位でガロンの百六十分の一。我が一勺半强。

おん・せい（音聲）（名）人の口から發する聲。おんじゃう。**—がく**〔音聲學〕（名）（Phonetics）音語の音聲を研究する學問。發音學。聲音學。音韻學。

おん・せい（温清）（名）㊀あたたかさとすずしさと。㊁禮記曲禮篇の語。父母に仕へて冬は温く夏は涼しくすること。子が父母に仕へる禮。

おんせつ・もじ（音節文字）（名）音節の一。我が國の假名の如く、一音節一字で、其以上に分割することのできぬ文字。

おん・せん（温泉）（名）㊀地地熱の爲に熱せられて湧き出る地下水で、鑛物の氣を含み、浴する時は、種種の病を治ずる。いでゆ。㊁おんせんば。**—やど**〔温泉場〕（名）温泉のある場所。渴治場。**—**〔温泉宿〕（名）温泉場の宿屋。

おんぜん（名）〔温然〕（名）（名・副）おだやかなさま。お

ちついたさま。

おんそ【御衣】(名) ❶衣服の敬稱。〔古語〕❷よそ。

おんぞう【怨憎】(名) うらみにくむこと。ゑんぞう。—**え**【怨憎會】(名)【佛】怨み憎む者に會ふこと。—**えく**【怨憎會苦】(名)【佛】八苦の一。怨み憎む者に會ふ苦しみ。

おんぞう【音聲】(名) おんじゃう(音聲)の訛。

おんぞうし【御曹司】(名) ❶堂上家のへやずみの子。❷武家の嫡流のへやずみの子。

おんたい【御大】(名)御大將の略。

おんたい【温帶】(名)【地】地球上の寒帶と熱帶との間の氣候温和な地帶。—**りん**【温帶林】(名)【植】温帶に固有な樹種の森林。「ぶな」かしは等の如き闊葉樹ともみ」「とが」等の如き針葉樹の森林。

おんたく【恩澤】(名) めぐみ。なさけ。うるほひ。—**ぶぎょう**【恩澤奉行】(名) 鎌倉幕府の職名。御家人の勳功を勘へ、恩賞・領地を議し、之を交付すること掌つた職。勳功奉行。

おんたけきょう【御嶽教】(名)【宗】(みたけきょう)御嶽教。

おんたけさん【御嶽山】(名)【地】長野・岐阜の兩縣に跨がる山。日本北アルプスの南端、高さ三〇六三米餘。山上には四時雪がある。頂上に御嶽神社(祭神大己貴命)があって、夏季登山參拜者多い。

おんたらし【御弓・御執】(名)(「たらし」は「とらし」の轉)弓の敬稱。また、射る弓なりふ。みたらし。—**のそう**【御弓奏】(名) 昔、正月七日、白馬節會(あをうまのせちゑ)に、十六日の射禮の料の御弓を兵部省から奉つたことを內辨の開奏したこと。〔古語〕

オンタリオ・こ【一湖】(Ontario)(名)【地】アメリカ合衆國の北部にある、五大湖中の一。面積約二萬八千方粁。ナイヤガラ瀑布の水を受け、セントローレンス河を出す。冬季の結氷は湖岸だけにとどまり、交通に利便多く、湖岸に工業都市が多い。

おんだん【温暖】(名) あたたかなこと。—**が い**【温暖飼】(名) 火氣で蠶室內をあたためて蠶兒の發育を早からしめる飼育法。

おんち【恩地】(名) 鎌倉時代に、恩賞として賜はつた土地。

おんち【隱地】(名) 隱蔽して年貢を納めぬ土地。

おんちゅう【隱忠】(名) ないつう。うらぎり。

おんちょう【恩寵】(名) ❶めぐみ。いつくしみ。恩過。寵愛。❷(「ち」。❸キリスト教に於ける上帝のめぐみ。

おんちょう【音調】(名)【音】❶音の高低の調。❷五十音圖の同列又は同行に於ける音の轉換。「のく」を「どく」、「ありりく」を「ありるく」とする類。❸漢字に於ける同一字音の通用。「罹」を「悟」に通じ用ひる類。

おんてい【音程】(名)【音】二つの樂音の振動數の比、即ち高低の差。

おんてき【怨敵】(名) あだたき。怨ある敵。—**たいさん**【怨敵退散】(名) 降伏(ごうぶく)の祈願。「みな」を施すこと。

おんてん【恩典】(名) ❶めぐみの御沙汰。❷めぐみなどにいふ語。

おんてん【隱田】(名) 官府に隱蔽して租稅を上納せぬ田地。おんち。かくしだ。—**びゃくしょう**【隱田百姓】(名) ❶隱田を作りとりにする百姓。❷勢せすして、利益を自己に取込む者の譬。

おんでん【恩田】(名)【佛】福田の一。父母や師長の恩に報ずること。

おんと【音吐】(名) 聲の出し方。こわね。—**朗**(名) 音聲のさわやかなこと。

おんど【音頭】(名) ❶雅樂で、管絃を奏する時、先に吹き始める人。❷多人數で謠ふ時、先に謠ひ始める人。❸多人數が唄につれて踊ふこと。—**とり**【音頭取】(名)❶多人數で歌ふ時、先に發聲して調子を示す人。❷物事の首唱者。—**を取る**(句) 音頭取となる。

おんど【温度】(名) ❶温冷の差。温冷の程度。❷【理】寒暖計の温かさの度數。

おんど【穩當】(名) 穩當なこと。—**ぶ**【穩當】(名) 穩當なこと。

おんとう【温湯】(名) ❶適度の温度の湯。❷めぐみ。なさけ。

おんとく【恩德】(名) 恩恵。

おんとく【音讀】(名) ❶聲を出して讀むこと。❷漢字を字音で讀むこと。〔訓讀の對〕

おんどこ【温床】(名)(おんしょう)温床。

おんどじま【音戸島】(名)【地】廣島縣倉橋島の別稱。

おんとなぶら御殿油(名)(おおとなぶら)(大殿油)。

おんどの御殿籠る(他動、ラ四)(おおとのごもる)(大殿籠る)。〔古語〕

おんどの-せと【音戸瀬戸】(名)【地】廣島縣倉橋島(音戸島)と同縣安芸郡警固屋(けご)村との間にある海峽で、長さ約八〇〇米、幅八〇米。潮流急激で、船行に危險である。平清盛の開鑿した所と傳へられる。

おんどる【温突】(名)(温突の字の朝鮮音)朝鮮・滿洲地方に行はれる一種の煙突裝置で、床下に仕切を設けて火坑をつくり、火氣を通じて室を暖めるもの。その室の面積は一間(ぢ)即ち方二米四〇〇糎。

おんな【女】(名)(「をみな」の音便)〔古語〕

おんな【女】(名)(「をみな」の音便)❶女性の人。女子。婦人。なんこ。❷かくし女。情婦。—**あるじ**【女主】(名) 女で一家の主人たるもの。—**いまがわ**【一川】(名)【文】澤田の著。今川狀に擬して、女の訓戒となる事を假名文で記した書。元祿十三年刊行。女子の習字用として行はれた。(今川狀は、今川了俊が子息に訓戒した家範。)—**え**【一繪】(名) 美人の繪。—**おや**【女親】(名) 母。母親。(男親の對)—**がく**【女樂】(名) 女の奏する樂。—**がた**【女方】(名) 男と女とに組を分けた場合の女の方。—**がた**【女形】(名) 芝居で專ら女にやたつ役者。をやま。—**かみゆい**【女髮結】(名) 婦人の髮を結ふを業とする婦人。—**き**【女氣】(名) なんこ。なんなこころ。婦人。—**ぎだ**【女義太】(名)(おんなぎだゆう)。なんなこころ。—**ぎだゆう**【女義太夫】(名)❶女の語る義太夫節。❷義太夫節を語る女。—**ぎみ**【女君】(名) ❶貴族のむすめ。❷男君の對。❸身分のあるひと。(男君の對)—**きらい**【女嫌】(名) 男の女を好まぬこと。又、その男。—**きんたち**【女君達】(名) 貴族のむすめ。(男君達の對)—**くさ**【女草】(名)【植】せんきゅう(川芎)。—**ぐさ**【女臭】(形、一)❶女の著物などに、女特有の臭氣のあること。❷乘の女らしいこと。—**ぐるま**【女車】(名) 女の乘る樣子。—**げ**【女げ】(名) 女のけはひ。女のゐる樣子。—**げい**【女藝者】(名) 藝妓。(男藝者の對)—**ご**【女子】(名)❶むすめ。女兒。❷女。—**こうぶり**【女冠】(名) 女の敍位。(古語)(男冠の對)—**ごこち**【女心地】(名) 女心。—**ごころ**【女心】(名) 女のやさしい心。(男心の對)—**ごと**【女事】(名) 女のする事。—**ごども**【女子供】(名) ❶女と子供。❷女のわらは。—**ごろし**【女殺】(名) ❶女を殺すこと。❷女を迷はす程のみめのよい男。—**ごろし**【女殺油地獄】(名)【文】近松門左衛門作の淨瑠璃。大阪天滿町の油商河內屋與衛門が放蕩して借銀に苦しめられ、豐島屋(てや)七左衛門の妻お吉に無心をいひかけ、聽かれぬ怒つて、遂に之を殺害するに至つたことを題色したもの。—**ざか**【女坂】(名) 神社・佛閣に通ずる二つの坂の中の勾配のゆるやかな方の坂。—**ざかり**【女盛】(名) 女の容貌の最も美しい年頃。—**さむらい**【女侍】(名) 女に似て俠骨の沙汰の多い侍。めめしい侍。—**さんまい**【女三昧】(名) 女色に溺れること。—**し**【一形、二】(女らしい)。—**しし**【女四書】(名) ❶「文」清の王晉升の纂輯した女誡(後漢の曹大家(ちゃ)の著)・女論語(唐の宋若昭の著)・內訓(明の成祖の皇后徐氏の著)・女範(清の王晉升の母劉氏の著)。❷以上の四書より「女範」を除き、唐の陳邈の妻鄭氏の女孝經を加へたもの。❸前條の四書を假名文に譯した書。明廢刊年の刊行。—**ししょう**【女師匠】(名) 藝道などの師匠たる女。—

じょうるり[—ヒャク]〔女浄瑠璃〕(名) ❶女の語る浄瑠璃。❷女を座主とする浄瑠璃。—じょうたい

かい[—カイ]〔女世帯〕(名) 女のみで家を構へること。—ず

かい[—カイ]〔女使〕(名) 昔、加茂祭・春日祭に勅使として遣はされた内侍。—すがた〔女姿〕(名) ❶女の姿。❷男で、女に似た姿。—ずき〔女好〕(名) ❶女のすき好むこと。❷男が女を好むこと。—

だいがく〔女大学〕(名)【文】女子修身の要義。齊家の心得を假名文で記したる書。江戸時代に女子一般の修身書として行はれた。貝原益軒の著と傳へられるが、後人が、益軒の筆子訓から抄出したものの。—

たいこ〔女太鼓〕(名) 女の、たいこもち。—

だて〔女達〕(名) 女で、男だての行をする者。女侠。—だてらに〔女だてらに〕(副) 女にも似合はず、勲墓に。—だゆう[—ユウ]〔女太夫〕(名) 興行物の浪曲を職業とする女。—つき〔女附〕(名) 女ぶり。—て〔女手〕(名) ❶ひらがな。女がな。(男手の對)❷女わざ。—てがた〔女手形〕(名) 江戸時代に、女の用ひた關所のとほりてがた。—てんか〔女天下〕(名) 一家内などで、女が權力を振ふこと。—とうか[—カ]〔女蹈歌〕(名) 女のする蹈歌。—どころ〔女所〕(名) 禁中で、女官のる所。—のいっしょう[—ショウ]〔女の一生〕(名)【文】(Une vie) モパッサンの代表作。一八八三年刊。生涯を通じて幻滅の悲哀を味はつた一婦人ジャンヌの物語。—のこ〔女子〕(名) 若い女。—

ばら〔女腹〕(名) 女児の多く生れる腹。—ひで

り〔女旱〕(名) 意に適する程の女の少いこと。—

ぶ〔女ぶ[ぶぶぶぶぶぶ]〕(自動・バ上二) 女らしくなる。—ぶり〔女振〕(名) ❶女の顔形。—べや〔女部屋〕(名) ❶女中部屋。❷女のゐる部屋。—ま

かせ〔女任〕(名) ❶物事を女に任せておくこと。❷女中などに物事を任せておくこと。—みこ〔女御子〕(名) 女の御子。❷女の御子。女みや。—みこ〔女御〕(名) 皇女。ひめみや。—

や〔女宮〕(名) 皇女。ひめみや。—め〔姿〕(名) そばめ。めかけ。てかけ。—もじ〔女文字〕(名) ひらがな。—やく〔女役〕(名) ❶女のする役。❷女形。—やくしゃ女役者(名) 女優。—らし[—らしらし]〔女らし〕(形シク) ❶女の態度のもとやかなこと。❷男で性質・容姿が女に似てゐること。—らしい[—らしらしい]〔女らしい〕(形)(おんならしの口語)。—ろくしゃく〔女六尺・女陸尺〕(名) 昔、貴人に仕へて、その乘物を奥から玄關に昇いて行つた女中。—わざ〔女業〕(名) 女の仕事。—わらべ〔女童〕(名) ❶女のわらは。—わらわ[—ワラワ]〔女童・女孺〕(名) めのわらは。—よしゅ。—賢[ケン]しく

て牛車り損ふ(句) 女のさかしいのは、大局に適ぜぬ爲、事を仕損ずる。—三人寄れば姦[カシ]ましい(句) 女はおしやべりが多くて、三人も寄りあへばやかましい。—になる(句) 女の年頃になつて月經の始まるにいふ。—の足駄にて這ひる

笛には秋の鹿寄る(句) 女の色香には、男は迷ひ易い形容。—の一念岩をも通す(句) 女は迷弱いやうだが執念深い。—の髪の毛には大象も繋がる(句)(大威德阿羅尼經卷十九)男の女に迷ひ易い譬。—の腐ったやう(句) 柔弱では、きりしない男を罵っていふ語。—の智慧は後へ廻る(句) 女の智慧の敏捷ならぬにいふ。—やめめに花が咲くやう(句) 女やめは男に持てはやされる。—をこしらへる(句) 情人として女を持つ。

おんな[—ナ]〔恩愛〕(名)「おんあいの音便。「もの。

おんねんすびと[—ネン—ビト]〔恩盜人〕(名) 恩を受けて報いぬ者。—ねつ[—ネツ]〔温熱〕(名) あたたかさ。暖氣。

おんねんつ[—ネン—ツ]〔怨念〕(名) うらみのおもひ。遺恨。

おんのさ[—ノサ]〔穩座〕(名)(おんざ)。

おんのじ[—ノジ]〔御字〕(名)よい客。よい物。「のと。

おんば[—バ]〔乳母〕(名) 女やめは男に持てはやされる。—をこしらへる(句) 情人として女を持つ。

おんば[—バ]〔穩婆〕(名) さんば。とりあげばば。

おんば[—バ]〔恩波〕(名) 君恩の遍く行きわたるを波に譬へていふ語。めぐみの及ぶこと。

おんば[音波](名)【理】發音體に接してゐる空氣其の他の媒體が、發音體の振動を受けて生ずる波動で、之が耳に入り鼓膜に觸れる時に音の感覺が生ずる。

おんはかせ[音博士](名) 昔の大學寮の博士の一。漢音・臭音等を研究しかれて素讀を諸生に授けることを掌どれもの。

おんばこ[車前](名)【植】おほばこの音便。

オン・パレード[On parade](名) 總出撫。大行進。勢ぞろひ。

おんびき[音引](名) 漢字の字音中、漢字の音便。「引くやうに編纂したもの。

おんびょうもじ[—ビョウ—ジ]〔音標文字〕(名) 音学。【文】法語調の便宜上、其の音をなだらかに呼びなす一定の音格で、發音學上からいへば、原音中の或音の脱落である。而しては音便・音便・促音便・撥音便の四種がある。

おんびん[—ビン]〔穩便〕(名) おだやかなこと。かどだたぬこと。

おんぶ[負](名) ❶背に負ふこと。❷人を他人に

おんぶ[音符](名)【音】語表中の位置によつて音の高低を示し、且その形によつて音の長短を示す記號。

おんぶ[音譜](名) ❶【音】音樂の譜。樂譜。❷蓄音器のレコード。

おんぶ[音部](名)【音】洋樂譜の五線の各線の左端に記する記號で、高音部と低音部と或は中音部とを提示するもの。

おんぶつ[恩物](名)【教】幼兒にめぐまれたものの義。幼稚園で、感官の錬磨卽ち精神遊戯の手段に供する具で、積木・豆細工・板ならべ・粘土細工・縫ひとり・紙織・紙盤等に用ひる材料及び其の製作物。

おんぺい[御幣](名) こんへい御幣。「げること。

おんぽ[陰補](名) 父祖の官位によつて、官位を受

おんぽ[恩補](名) 恩賞として職に補すること。

おんぽう[陰坊隱亡](名) ❶墓を守るもの。❷火葬の時、死骸を焼くら職とする人。ぬのこ。

おんぽう[—ホウ]〔蘊袍〕(名) わたいれ。

おんまわす[—ハス—ス]〔追廻す〕(他動・サ四) おひまはす。

おんみ[御身](代) 稍、敬意ある對稱名詞。おもとさま。卿。

おんみつ[隱密](名) ❶江戸時代の探偵。かくしめつけ。❷ひそかに事をなすこと。

おんみょうじ[—ミョウ—ジ]〔陰陽師〕(名)(おんようじ)の音便。

おんむん[諺文](名)(李の朝鮮音 Onmun) 朝鮮の國字。子音・母音二十八字からなる音字。其の中の三字は今は傳はらない。現今は二十五字を用ふ。梵字に模して數箇の文字を作り、之を基礎として聲音相互の關係を考察して組立てたもの。李朝第四世の王世宗の二十八年(一四四六)訓民正音の名で國字として公布せられた。おんもん。「おほせ。

おんもん[恩免](名) なさけによつて許されること。

おんもん[恩命](名) 情あるおほせ。ありがたいなさけあるおたづね。

おんもと[御許](名) おもと(御許)。「と。恩敎。

おんもの[佩物](名) おびもの(佩物)。(古語)

おんもん[諺文](名) おんむん(諺文)。

おんもん[恩問](名) 他人の訪問を敬っていふ語。

おんもん[音問](名) 音信で安否を問ふこと。おとづれ。たより。消息。

おんやく[音譯](名) 漢字の音又は訓を借りて、外國語の音をあらはすこと。菩薩(梵語)有平糖(葡萄牙語)の類。

オン・ユーア・マーク[On your mark](句) オンユーア[—ヤー]〔陰陽〕(名) ❶(いんよう)(陰陽)。❷(おんようどう)。—け〔陰陽家〕(名) ❶(いんようか)。❷(おんようじ)。—じ〔陰陽師〕(名) 昔、陰陽寮に屬し、卜筮・相地等の事を掌つた官人。

—どう[—ヨウ]〔陰陽道〕(名) 天文・曆數・卜筮・相地等に關する學問。—のかみ〔陰陽頭〕(名)(おんようのつかさの長官)。—のつかさ〔陰陽寮〕(名) 昔、中務省に屬し、天文・曆數などに關することを掌つた役所。—りょう[—リョウ]〔陰陽寮〕(名) 陰寮に屬し、天文・曆數・卜筮の事を學生に教授したもの。

おんよう[音容](名)【聲】聲と形。聲と顔つき。やうす。

おんよく[名]〔温浴〕(名) 温湯又は温泉に浴すること。**—りょうほう**[名]〔温浴療法〕(名) 温浴によって病を治療する法。

おんよる〔御寝〕(名) おやすみになること。寝たまふこと。およること。(古語)

おんらい〔恩頼〕(名) 恩恵を受けること。

おんらい〔恩賚〕(名) めぐみ深いたまもの。

おんりょ〔厭離〕(名)〔佛〕えんり。**—えど**[名]〔厭離穢土〕(名)〔佛〕(えんりえど)

おんりつ〔音律〕(名)〔音吉の調子。聖の調子。音楽の調子。

「音の分量。

おんりょう[名]〔音量〕(名)〔音〕人聲又は樂器の

おんりょう[名]〔怨靈〕(名) 怨を抱いてゐる死者の靈。

おんりょう〔温良〕(名) おだやかですなほなこと。**—きょうけんじょう**〔温良恭儉讓〕(名)〔論語學而篇の語〕温良にして、うやうやしくつつましく人を推して己を後にすること、卽ち聖賢が人に接する狀態。

おんるる[名]〔遠流〕(名) 最も重い流罪で、安房・常陸・佐渡・隠岐・土佐などに流したもの。しまながし。

おんろく〔恩祿〕(名) 主君の恩恵によっていただく祿米。

おんわ[名]〔温和〕(名) ㊀暖かく和いだ氣候。暖和。㊁おとなしくおちついてゐること。すなほでおとなしいこと。

おんわ[名]〔穏和〕(名) おとなしいこと。おだや

か　が

か ㊀五十音圖「か行」の第一音。㊁舌の後部を軟口蓋に接し破裂させる喉音「く」と母音「あ」との綴音。㊂「加」の草體。

か〔香〕(名) ㊀にほひ。㊁かをり。㊂物事に餘情あ

か〔蚊〕(名)〔動〕雙翅類の昆蟲。體は黑褐色。複眼を有し、胸部に三對の長い脚があり、一對の透明な膜質の翅を具へ、口吻は吸收に適し、雌のは著しく長く、夏日群集して、人畜を刺し其の血を吸ふ。其の卵子の孵化せるもの卽ち幼蟲を子子孫孫といふ。**—の食ふ程にも思はず**(句) 少しの痛痒をも感じない。**—の聲**(句) 蚊の羽音にも比すべきかすかな聲。**—の臑**(句) 蚊の脚のやうに細いすね。**—の涙**(句) 極めて微少なものの譬。(古語)

か〔鹿〕(名)〔動〕しか(鹿)。(古語)

か〔架〕(名) 物を載せる棚。書架。畫架。

か〔加〕(名) ㊀くはへること。ますこと。㊁〔數〕かさん。よせざん。

か〔歌〕(名) ㊀うた。㊁漢詩の一體。もと樂府が「ち起こり、後に古詩となった。

か〔佳〕(名) よいこと。すぐれたこと。うつくしいこと。

か〔可〕(名) 一とほりよいこと。㊁ゆるすこと。

—もなく不可もなし(句) ㊀よくもわるくもない。言行の普通であること。㊁定見のないこと。

か〔夏〕(名)〔歴〕支那の國號の一。禹の興した國。第十七代桀に至つて亡びた。その間四三九年。

か〔笳〕(名) ㊀支那西域の樂器。蘆の葉笛。㊁胡人の笛。

か〔河〕(名) ㊀かは。㊁〔地〕支那の黄河の稱。㊂あ

か〔果〕(名) ㊀あな孔。㊁す(巣)。㊂蜂の巣に象どった模樣又は紋。木瓜を輪切にした形を描いたものともいふ。

か〔火〕(名) ㊀燃える火。炭火。㊁ともしび。㊂火事。㊃徹夜する心。㊄昔の兵制で、兵卒十人から成る一組。㊅五行の一。第二に位し、時季では夏、方位では南、十干では丙丁に當る。

か〔科〕(名) ㊀品等。とな。たぐひ。㊁きまり。すぢ。さだめ。條目。區別。㊂程度又は制限。㊃おきて。とが。㊄あな。うつろ。くぼみ。㊅動植物學上で、分類の名目。屬を概括したもの。**—に盈ちて後進む**(句)(孟子離婁下篇の句)水の流れる時、少しでも凹んだ處があれば、まづそこに溜つた上で、先へ流れ行くの意から、人の學問をするにも漸を以て進むべきにいふ。

か〔化〕(名) ㊀天地の運用・變化の法則。生滅。進歩。變遷。㊁變化。㊂敎化。敎。さとし。感化。㊃風俗又は習慣。㊄化學の略。

か〔靴〕(名) ㊀くつ。

か〔寡〕(名) ㊀數の少いこと。㊁やもめ。㊂臣下がその君侯を謙遜していふ語。**—は衆に敵せず**(句) 少數の者は多勢に抵抗して遂に負ける。

か〔課〕(名) ㊀試驗。考科。㊁ほど。ついて。次序。㊂租稅。負擔。わりあて。かかり。㊃事務の小區分。部又は局の下にあるもの。

か〔華〕(名) ㊀花。花びら。㊁いろ。つや。いろどり。㊂さいく。かざり。㊃はな。さかえ。㊄はでやか。はなやか。㊅ほまれ。きこえ。㊆虛飾。文物。

—を去り實に就く(句)(戊申詔書の御句)虛飾を去り內容を充實する。

か〔彼〕(代) かれ。(古語)

か〔畝・乎・哉・耶・邪〕(助詞) ㊀疑ふ意。㊁問ひかける意。㊂反語の意。㊃感歎の意。

か〔接頭〕語調を整へる爲に動詞・形容詞等に冠する語。「黑さ髮等の類。

か〔處〕(接尾) 場所の意をあらはす語。「住み一」等。

か〔家〕(接尾) 或語の下に添へて、其の道の人の意をあらはす語。「聲樂一」等。

か〔日〕(接尾) 主に數詞の下に添へて、日數をあらはす語。「はす語。

か〔箇・個・ケ・ケ〕(接尾) 數詞の下に添へて、物事を數へるに用ひる語。

か〔荷〕(接尾) 數詞の下に添へて荷物を數へるに用ひる語。

か〔過〕(接頭) 或化合物を表す語に冠して、其の成分の割合の多き意を表す語。「一燐酸」等。

か〔顆〕(接尾) 主として數詞の下に添へて、玉石又は果實などの箇數を數へるに用ひる語。

が〔が〕の濁音。舌の後部を軟口蓋に接して破裂させる喉音で、聲帶の振動の伴なふ音。

が〔賀〕(名) 祝ふこと。祝。ことぶき。祝賀。年賀。

が〔駕〕(名) ㊀のりもの。㊁馬のひく乘車。**—を枉ぐ**(句) 貴人が、尊殿のけがされるのを省みず、わざわざ來訪する。こと。轉じて來訪の敬語。

が〔鵝・鵞〕(名)〔動〕(がちょう)(鵝鳥)。

が〔我〕(名) ㊀思ふ所をいひはって、人の言に從はぬこと。我意。きまま。㊁私利を計ること。私慾。㊂〔佛〕自己の假合なることを知らず、一實體なりと固執すること。㊃主觀的の心的狀態。自我。**—になる**(句) わがままになる。**—を出す**(句) わが本性をあらはす。我欲を示す。**—を立つ**(句) 意地を立てとほす。**—を張る**(句) わが思ふ所をいひ張る。**—を折る**(句) 我が思ふ所をまげて他の意見に從ふ。

が〔雅〕(名) ㊀正しく善いこと。㊁あでやか。みやびやか。㊂正しい言語。㊃趣味の多いこと。㊄漢詩の六義の一。正しい音樂の歌の意で、大雅は人君のものの。㊅純正な音樂・歌謡。(俗の對)

が〔蛾〕(名)〔動〕鱗翅類の昆蟲。形は蝶に類するが、蝶は晝間出て飛翔し、靜息の際、左右の翅を合はせて直立し、觸角の先端が棍棒狀をなす。蛾は多くは夜間出て、靜止の際、翅を左右或は後方に重れて表面を上に出して疊む。且觸角は先端程細くなり、又、櫛齒狀になつてゐるものもある。小蛾類・尺蠖蛾類・夜蛾類等に分ける。

が〔牙〕(名) ㊀きば。㊁牙旗。牙營。

がら〔壹〕(名) 繪。繪畫。

が〔助詞〕㊀主格を表はす語。㊁所有又は關係を表はす語。㊂「ふふ」の意を表はす語。㊃「しかしながら」の意を表はす語。㊄「なり」「も」。

が〔接尾〕「であるが」「だが」の意を表はす語。

が〔感〕希ふ意を表はす語。「な」「も」。

が〔Car〕(名) 車。汽車。客車。貨車。電車。乘合自動車。鐵道馬車。

カーヴ〔Curve〕(名) ㊀曲線。彎曲。㊁〔野球用語〕打聲を封する爲に投げる曲球。聲球。

カーキー〔Khaki〕(名)(もと印度語で、泥土の意)黃色に淡い茶色のまじつた色。枯草色。

ガーゼ〔獨Gaze〕(名) ㊀消毒した極めて粗く軟か